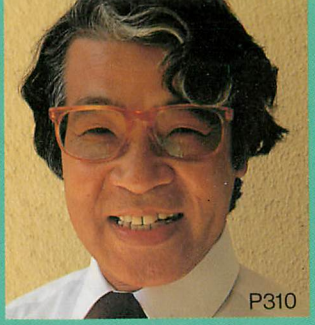
# 光よあれ

私たちは主のもの 67人の証し シリーズ第5集



















光よあれ

私たちは主のもの 67人の証し シリーズ第5集

吉祥寺キリスト集会編

この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

（Ⅰコリント　1・21）

# 光よあれ

私たちは主のもの　67人の証しシリーズ第5集

吉祥寺キリスト集会　編

# はじめに

ゴットホルド・ベック

「光よあれ」は、なぜ第五集以下のシリーズも発行されるようになったのでしょうか。世界が今最も必要としているのは、主イエスを証しする人々だからです。主イエスとの出会いによって新しく生まれ変わった人々を通して、主イエスは今も呼びかけておられます。「わたしのところに来なさい。わたしはあなたの人生を全く新しく作り変えることができる」と。

「光よあれ」第一、二集は、おもに社会人のために発行されました。多くの人々、特に男性は、全力をあげて努力しさえすればあらゆる問題を解決することができると考えています。しかしこれは、悲劇的な間違いだと言わざるをえません。どんなに遅くとも、死ぬまでに主イエスの憐れみと罪の赦しを受け入れることができなければ、人間は希望のない永遠の世界に向かわなければならないのです。

また、いわゆる社会人の多くは、仕事が自分の人生の目的となっています。しかし、仕事の成功によってもたらされる名誉も権力もお金も、人間の心の飢え渇きを満たすことはできないのです。「光よあれ」第一、二集を通して、多くの人々が主イエスに導かれ、次のように告白するようになりました。「私は主に信頼します。主に信頼することによって、私は精神的に解放されるようになりました。私は大いに報われました」と。

「光よあれ」第三集のテーマは、家族の救いでした。この第三集を発行するまでには、第一、二集に比べて随分時間がかかりました。第一、二集には、それぞれ二十五人ずつの証しが収録さ

れたのに対して、第三集には四十二人の証しが収録されたことも一つの原因だったでしょう。しかし、今振り返ると、主イエスの敵である悪魔が第三集の発行を妨げたことがもっと大きな原因であったようです。

悪魔にとって、信者に連なる家族が救われることは実におもしろくないことだからです。多くの信者は次のように考えています。「自分は日曜日には教会に行っている。十分の一を献金している。いろいろな奉仕もしている。それで十分ではないか」。残念ながら、多くの牧師もそうした信者に満足しています。しかし、主イエスだったら決して満足なさらないでしょう。主イエスのみこころは、いつも全家族の救いにあるからです。もし、主イエスが教会の入口に立ったならば、教会に来た信者に対して次のように尋ねられることでしょう。「あなたはなぜ一人で来たのですか。あなたの夫はどこですか」。あるいは「あなたの妻はどこですか。あなたの子供は、親戚の人たちは、会社の同僚は、友達は、どこにいるのですか」と。

「光よあれ」第三集を通して多くの人々が救われたばかりでなく、救われた人々が全家族の救いのために真剣に祈るようになったのです。そして多くの信者は次のように告白するようになりました。「主は私の祈りを聞き届けてくださいました。私の家族や友人たちも心の平安を持つようになりました。私の親戚も喜びと希望に満たされています」と。

「光よあれ」第四集では、「目に見えるところによらず、信仰によって歩む」ということが強調されています。世の中の多くの新興宗教は、「あなたの信仰が正しければ（つまりたくさん献金すれば）、あなたの病気は癒されます」と説きます。そして、多くの人々がそうした教えに耳

を傾けるのです。なぜなら、だれも自分の死について考えたくはないからです。

もし教会が同じように「あなたの信仰が正しければ、あなたの病気は癒される」と言うならば、それは異端であると言わざるをえません。主イエスによって永遠のいのちを得た信者が、なぜ、「どうしても癒されたい」という気持ちに支配されなければならないのでしょうか。「どうしても癒されたい」と言う信者は、無意識のうちに次のように言っているのです。「私は天国に行きたくない。主のみもとに行きたくない」と。そしてそのような信者は、祈りを通して、天地万物を創造された方に対して「自分を癒すべきである」と提案したり命令したりしているのです。これはこの上なく失礼なことであり、主に対する畏れがまったくない証拠です。主イエスは今日もあらゆる人々のあらゆる病を癒すことがおできになります。もし、病を癒すことがその人にとって、あるいは周りの人にとって最善であるならば、主は癒してくださいます。しかし多くの場合、病を癒すことは最善ではありません。なぜならば人間は悩み、苦しみ、絶望を知らなければ、心の底から主に対して助けを叫び求めようとしないからです。

主は、六十六人の証しを収録したこの「光よあれ」第四集をも豊かに用いてくださいました。そして多くの人々がこの本を通して導かれ救われたのです。四国に住むある方は、一人で千冊も買い求め、ご自分の伝道活動の一助としてくださいました。

今回発行される「光よあれ」第五集と、続いて発行される第六集のテーマは、地方伝道です。私たちの心からの願いは、全国の人々に主イエスを知っていただくことです。なぜなら、主イエスだけが、罪の赦し、生きる望み、絶えざる喜びを与えてくださるからです。この第五、六集の

中で、北海道から沖縄までの多くの方々が主イエスを証ししてくださいました。この二冊の本を通しても、多くの方々が「主に頼ろう」と決心してくださることを切に祈っています。

最後に、だれも絶望する必要はない、主イエスはわずかな時間の中でどんなにすばらしいことをあなたにしてくださる方であるかを、次の実例によってお話しましょう。

数カ月前、高知で修養会（バイブルキャンプ）がありました。私は坂出のある入院中のアルコール依存症の患者を修養会に案内したいと考えていました。その患者さんの状態からすると、外泊許可を得ることは難しい状態でしたが、奥さんが主治医と相談した結果、修養会に出られるようになりました。主が道を開いてくださったのです。彼は運転する体力もなかったので、三時間以上の道のりを奥さんが運転しました。この夫婦が修養会に着いたとき、私はちょうど玄関に立っていました。彼はそのとき初めて私に会ったにもかかわらず、涙ながらに「もうおしまいです。助けてください」と頼んだのです。私たちはそれからゆっくり話し合いました。彼はそのとき何も隠さずに、自分の過去の生活を明らかにしました。彼は自分自身を弁解したり、言い訳したりすることはありませんでした。彼の傲慢は砕かれたのです。

このような希望を失った人々に主を伝えることは、最高の特権です。主は呼びかけておられます。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます（マタイ11・28）」と。すなわち主は「教会に来なさい」とおっしゃらずに、ありのままの姿で「わたしのところに来なさい」とおっしゃっているのです。

主のもとに行くとは、幼子のように主に向かって祈ることです。このアルコール依存症の方は、

主イエスが自分のためにも救いの代価を払ってくださったことに対して心から感謝の祈りを捧げることができたのです。そのとき、彼の重荷は下ろされました。彼は生き生きとした希望と喜びに満たされるようになったのです。

次の朝は洗礼式でした。彼と奥さんは、自分たちの信仰を証しするために、他の方々とともに洗礼を受けました。その日の午後、精神病院に戻るとき、彼は自分で車を運転することができました。そして二、三日あとで彼を診た主治医は、彼の退院を許可したのです。

もし心の渇きが満たされれば、自分の債務が赦されたことを知れば、自分はひとりぼっちではない、主は私のためにも心配しておられると確信することができれば、世界はまったく違って見えるようになることでしょう。そして、これまで大切なものとして心を支配していたものが、どうでもよい、ささいなものに見えるようになることでしょう。

主はこうした奇跡をあなたの生活の中で行なうことを望んでおられます。そしてあなたを通して、あなたに連なる多くの人々の中でも行ないたいと考えておられます。

目次(1)

はじめに……ゴットホルド・ベック　7

光よあれ　私たちは主のもの　67人の証し　第5集

1　平安と喜びをいただいて……小林幸子　17
2　その栄光は地に満ちわたれ……吉屋和子　25
3　主とともに歩む……村上　誠　43
　キリストにはかえられません……村上房美　65
4　イエスさまが私を愛していてくださる……上野鮎子　83
5　苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした……田中順治　103
　数えてみよ、主の恵み……田中節子　123
6　主は与え、主は取られる……檜垣　烈　136
　かえれや、と主は呼びたもう……檜垣智津子　150

7　平安を与えられて……加藤正光　185
　主がついていれば……加藤育穂　194
　ただ主を……加藤和彦　201
　幸いなことよ……加藤宏子　209
8　今日まで灯し続けた信仰の灯……大城紀美子　222
9　恩寵のもとで……江草清子　235
10　喜びをもって主に仕えよ……神澤圭子　250
　天地創造の神様に出会って……神澤毅　274
11　主はすべてをご存じです……田中和子　284
12　主のあわれみによって救われ、今喜びにあふれる……平良孝七　310

続く

目次(2)

## 48人の証し（カラーページ）……161


- み力の大空で…佐藤鳩士／命の道を知らされて…佐藤和子
- 神と出会って…園浦勁造／家族が救われて…園浦慶子
- 国籍は天にあり…故 園浦良春／イエスは主です…園浦洋二／み手の中で…園浦貴子
- 信じる者は永遠に…黒津泰宏／イエス様に出会えて…黒津君子
- みことばに支えられて…黒津郷美／心の扉を開ける…黒津暁美
- 変わらない安らぎ…室田勝美／イエス様にある新しい喜び…室田恵子
- 主の導きにゆだねて…宮崎敏雄／生ける救い主イエス様…宮崎瞳
- 理性を超えて…青木清／孤独から解放されて…青木夏野
- 真の神との出会い…須崎隆則／日々を主にゆだねる…須崎和子
- 私の耳は開かれました…吉田浩／主を賛美して…吉田和子
- 主を恐れる者として…藤井保夫／よい牧場に導かれ…藤井槇子
- わが救い主なるイエス様…安藤正和／神様、見つけた…安藤貴美子
- 新しい人生…内田厚純／主は生きておられる…内田美津子
- 主と共にいる喜び…小ノ澤初男／イエス様と共にある平安…小ノ澤美根子
- 主にある喜び…鈴木克男／わたしのところに来る者を決して捨てません…鈴木三枝子

・解放、平安そして感謝…清水紀雅／ことばは神とともに…清水偕子
・神様の家族にしてもらって…山科一雄／やみから光へ…山科理永子
・神からの賜物…岩崎洋二／イエス様のすばらしさを知って…岩崎直美
・新しい命を…森下茂／すべてを主に委ねたとき…森下ちゑ
・み国をめざして…望月元一／主の祝福に感謝して…望月恵子
・神は愛です…武田稔／私ではなくキリスト…武田和子
・私は幸せな羊…長見有時　・主よ、どうしたらよいのですか…綾公子
・天のみ国を思い見て…尾関ふさ・私の宝キリスト…湧川博文
・わが思いを越えて…宮城昭代

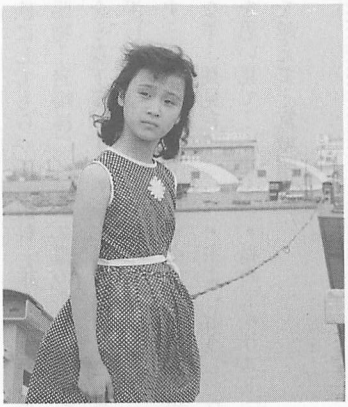
あとがき……ゴットホルド・ベック　341

基礎的なみことば……363

「実を結ぶ命」のおすすめ…365　「光よあれ」のおすすめ…366
「神の愛」(上)(下)のおすすめ…369
全国のキリスト集会のご案内…370



▲青山の幸子さんの事務所にて。左から姉・静江さん、幸子さん、吉祥寺キリスト集会の古田稔さん。



▲小学校の裏の浜(日和山)で。



▲10歳の頃の幸子さん。新潟のご自宅で。

▼軽井沢バイブルキャンプで全国から集まった集会のみなさんと。





▲姉・塩崎静江さん(右)と幸子さん。

# 平安と喜びをいただいて

## 小林幸子

新潟市に生まれる。麹町女子学園卒。古賀政男氏の教えを受け一九六四年「ウソツキ鴎」でデビュー。一九七九年「おもいで酒」で大ヒット。全国日本有線大賞グランプリ、日本レコード大賞その他受賞。以後「とまり木」「もしかして」「雪椿」「福寿草」「故郷(ふるさと)」などを連続ヒットさせ日本を代表する演歌歌手となる。NHK紅白歌合戦連続出場。日本歌謡大賞、TBS演歌大賞など主要な賞のすべてを受賞。一九八三年アメリカ、ブラジル、カナダなど海外公演。家族は父喜代照さん、母イツさん、姉塩崎静江さん、神野照子さん、猫のチコ、マオ。

ある日突然、舞台の上で、思うように歌えなくなりました。いつも歌っている、「おもいで酒」の最後の小ぶしの部分だけ、どうしても歌えなくなってしまったのです。二カ月、いいえ三カ月、その状態が続きました。どうしよう。私は苦しみました。思うように歌えないということは、歌手にとっては致命傷です。何千回、いえ、何万回歌ってきたその歌を歌えない。思うような小ぶしが出てこない……私はあせりました。歌手として終わりだ！　毎日、悩み続けました。

私は、三人姉妹の末っ子として生まれました。父は、今度こそ念願の男の子をと内心期待していたようですが、生まれてみると女の子の私だったのでがっかりし、顔も見ずにやけ酒を飲みに行ってしまったのだそうです。そこで母は、「あらまあ、この子はかわいそうに」と思い、お産婆さんと相談してつけてくれたのが「幸せになるように」という願いをこめた「幸子」という名前でした。新潟という所は、雪、港、酒と、三題話のように演歌が似合う条件がそろった所で、私が演歌歌手になったのも、そういう所に育ったことと決して無縁ではないような気がします。

小学校四年生までの私は、歌手になろうなどとは考えたこともありませんでした。そんな頃のある日、父が突然「幸子、東京見物につれてってやるぞ」と言い出しました。私は生まれて初めて東京に行けるのが嬉しくて、東京タワーとか二重橋を夢に描きながら胸をはずませてその日の来るのを指折り数えて待っていました。

いよいよ東京！　しかし父が連れて行ってくれた所は、東京タワーでも二重橋でもなく、テレ

ビ局という所でした。実は父は、ＴＢＳの「歌まね読本」という番組の予選に出場申し込みをしていたのです。私はその予選オーディションの会場で、言われるままに「出世街道」という歌を歌ったのを覚えています。

父も、別に私を歌手にしようなどとは夢にも考えていなかったと思います。三人姉妹の中で、一番おチビさんで、歌が好きで、人様よりはちょっぴり歌がうまいらしい私をテレビに出して、まわりの人に自慢したかっただけだったのでしょう。ところが、あれよあれよという間に勝ち抜いて、気がついてみると歌手への道をどんどん走り出しているのでした。「歌まね読本」に出演したことがきっかけとなって、私はその翌年の一九六四年、東京オリンピックの年に古賀政男先生の弟子としてデビューすることになったのです。それから延々と続く長い長い芸能生活のきっかけはこのようにあっけないもので、そしてとても「安い」ものでした。すべては父が出した五円の葉書から。たった五円の私の出発点でした。

しかし、こういう風にものごとが進んでみると、両親にとって自分の子供を歌手にするかどうかは大問題でした。「幸子は心底歌が好き。子供の好きなことを心おきなくやらせてやるのが親のつとめだ」という父。「とんでもない、夢みたいなことを。幸子はまだ九つ、小さな子供が芸能界などという所に入ったら、苦労するに決っています。女は結婚して、子供を生んで育てるという普通の生活が一番の幸せです」と譲らない母。まっ向から対立してしまいました。結局、両親は私がどう思うかを聞きました。

「幸子、お前はどう思う？　お前は歌手になりたいか？」

「歌手になりたい！」

この一言で、私のそれからの人生が決ってしまったわけです。どうして歌手になりたいなんて答えたのか、実は私にも本当の所はよく分からないのです。でもきっとその時、イエス様が、「幸子、歌手になりなさい」と教えてくださったような、きっとそうだったような気が、今ではしています。

さて、十歳で、「美空ひばりの再来」とか「天才少女歌手」などともてはやされ、鳴り物入りで華々しくデビューした私でしたが、芸能界、そして人生、そんなに甘い所であるはずはありません。一曲目はヒットしたものの、それからは歌手としてヒット曲のない十五年間を過ごすことになりました。それはほんとに、今考えても苦しい十五年間で、ぐれてしまっていても不思議はない、暗く悲しい日々の連続でした。

その苦しさと辛さの後で、私はやっと十五年目に「おもいで酒」というヒット曲を出す幸いに恵まれました。それからのことは、皆さまがご存知の通りでございます。私は、あの十五年の日々を思うと、もう二度と不遇の時代はいやだと思い、一曲一曲にありったけの力を出しきって、多くの録音を、舞台を、務めてまいりました。

やがて私は、独立して「幸子プロモーション」という会社を作り、社長を兼ねることになりました。私のために、会社のために、骨身を惜しまず昼も夜も働いていてくれる多くのスタッフの人たち。私はありがたさと同時に責任の重さをひしひしと感じていました。独立のためには多額のお金が必要で、その上借金も沢山抱えていました。私が倒れてしまったらみんなに迷惑がかか

る。しっかりしなければ。自分で自分にむち打って、次から次へと仕事を消化せざるをえなかったのです。

そしてとうとう、初めに書きましたように、舞台の上で思うように歌えなくなってしまったのです。私は思い悩んだ末、姉に電話で助けを求めました。

「お姉ちゃん、助けて……どうしよう、どうしたらいいの……」

「私にも、どうしたらいいのか分からない……でも、ひとつだけ、方法があるわ。神様よ。神様にその問題をおまかせして、祈ることなの」

「私にはまだ神様は必要ない。この声さえ何とか出るようになりさえすればいいんだから」

しかし姉は、なおも次のようなことを心をこめて言ってくれたのです。

「あなたの人生にはこれからもいろいろな予期しないできごとが起きると思うわ。今、声の問題だけを解決したとしても、別の問題が起こった時、またあなたは苦しむでしょう？　だから今、あなたがしなければならないことはただ一つ。イエス様を信じて、この苦しみをすべて委ねることよ。それがすべてのことの、完全な解決方法だと思うわ」

このようなやりとりがあって、数日後のことでした。苦しみながらも舞台を務めている時、ふと、どこからかささやき声が聞こえてくるような気がしました。「あなたは、何か勘ちがいをしてはいないか？　何か間違っているのではないか？」。私ははっとしました。そして思いあたることがあるのに気がつきました。「そうだ、私は一番大切なことをなおざりにしていた。『歌を歌

わせていただく』『歌を聞いていただく』という姿勢をいつしか忘れて、『歌を聞かせてあげる』『小林幸子の歌を聞かせてあげる』という傲慢な心を抱いて舞台に立っていた……」。

自分の心の傲慢さに気付かされた私は、姉のすすめに素直に従って、姉といっしょにベックさんとお会いすることにしました。ベックさんは暖かく私を迎えてくださり、イエス様のことを私にお話してくださいました。それは、次のようなことでした。

- イエス様は私を心から愛してくださっていること。
- 神様から遠く離れて、自己中心的に生きていることは罪であること。
- イエス様は私の罪のために、身代りになって死んでくださったこと。
- そして三日後に、よみがえられたこと。
- イエス様を信じ、受け入れた者は、罪が赦され、永遠のいのちの中に移されるということ。
- 今、私が苦しみに会っているのは、神様が私に呼びかけていらっしゃるそのお声が、よく聞こえるためであること。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

「わたし（イエス様）は、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。」（ヨハネ　14・27）

私はイエス様に今までの自分の罪を告白し、イエス様を私の救い主として受け入れました。すると、次の日から、どうでしょう！　あれほど苦しくて歌えなかった所が、嘘のように、うまく歌えるのです。しかも以前とはまったく違った歌い方で。私は、「ああイエス様、感謝します」と、心の中で叫んでいました。イエス様はこのようにして、私を暖かい救いのみ手の中に抱きとってくださったのです。そしてそれは、新しくすばらしい人生の、ほんの始まりでした。

イエス様を信じ、新しくされた私。毎日が嬉しくて、嬉しくてしかたがありません。それは、まさに聖書に書いてある通りなのです。私の心に響いてきたみことばを、思いつくままに書いてみます。

あなたは私のために、嘆きを踊りに変えてくださいました。あなたは私の荒布を解き、喜びを私に着せてくださいました。
（詩篇　30・11）

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。
（Ⅱコリント　5・17）

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。
（イザヤ　55・6）

今ふり返ってみますと、あの不遇の年月は、イエス様が私や私の家族を訓練してくださった、

貴重な年月だったように思われるのです。私も、私の家族も、あの十五年という歳月の中で、イエス様のみもとにたどり着く用意が整えられていたんだと思います。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）

今やっと、私はイエス様のみもとに来ることができました。考えてみますと、声一つでも神様からのいただきものです。そのことを分からせてくださったイエス様、ありがとう。そして新しい幸せな人生に導き入れてくださったイエス様、ありがとう。これからはいつもイエス様について、歩いていきたいと思います。そしてイエス様が喜んでくださる歌手として、これからの人生を送りたいと思います。イエス様とともに歩む人生は、何ものにも代えがたい宝です。

ハレルヤ。私のたましいよ。主をほめたたえよ。私は生きているかぎり、主をほめたたえよう。いのちのあるかぎり、私の神に、ほめ歌を歌おう。

（詩篇　146・1、2）



▲吉屋さん宅の家庭集会での楽しいひととき。

# その栄光は地に満ちわたれ

## 吉屋和子

一九二七年横浜市に生まれる。西戸部小、鶴見高女、横浜市教員養成所卒業。市内の小学校の教諭として三十五年間勤務。退職後リマ・クッキングアカデミーにて学び、自宅で自然食料理教室を開く。家族は夫真二さん、長男隆さん。

・家庭集会　毎月第一または第二金曜夜七時・住所　横浜市旭区笹野台一九三―四〒二四一・電　〇四五―三六二―〇四一二

ハワイ、マキキ教会のみなさんと。母・吉屋サキさん（左から3人目）、
▼和子さん、（2人おいて）姉・山本孝子さん、孝子さんの長女・近森いづみさん。



とこしえに、ほむべきかな。その栄光の御名。その栄光は地に満ちわたれ。アーメン。アーメン。

（詩篇　72・19）

## 旅先で「クリスチャン」になって帰ってきた私

受洗する一年ほど前からのことであったのか、または三年、五年も前からのことであったのか、私にはどうしても思い出せないのですが、「私には何かが足りない。何かが欠けている。いったいそれは何だろうか……」という思いがいつもありました。主人も健康でまじめに働いておりますし、一人息子も健康に恵まれ、鍵っ子であったにもかかわらず素直に育ちました。そして何よりも私自身が「これこそ私に与えられた生涯の仕事」と思っていた、楽しい楽しい小学校の教師という仕事があったのです。私は毎日忙しいけれども、幸せ一杯に過ごしていたのです。が、その「何か」は、いつも私を考え込ませるのでした。

一九八一年の春休み、母が七十七歳の喜寿を迎えた記念に、私は母と一緒に旅行に行きたいと思い立ちました。主人に話しますと、主人も快く許してくれました。私は、この二週間の休みに妹達のいるヨーロッパへ行きたいと思いました。母もだんだん年をとってきましたから、母が七十代のうちに一緒に行きたいと思ったのです。てっきり母も娘達に会えるので喜ぶことと思い、話してみました。

ところが母は、

「ヨーロッパは娘達がいるからいつでも行けるでしょう。だから今回はハワイへ行きたいのよ。

去年、アメリカの帰りにハワイのマキキ教会という所へ寄って、とても素晴らしい方々にお会いしたから、ぜひまた会いに行きたい。帰る時に、『また来ますからね』と言って帰ってきたの。だからハワイにしましょう」

と言うではありませんか。私はがっかりしましたが、母の気持ちを汲んでやむなく方向転換してハワイ行きとなりました。

ワイキキのホテルに着くと、母は真っ先にマキキ教会の土屋牧師に電話していました。土屋牧師は「家庭集会へお連れしますから」と言って、迎えに来てくださいました。私はただ土屋牧師と母について、初めて耳にする「家庭集会」という所へ行きました。大勢の方々が待っていてくださり、テーブルの上には、お寿司とかアボカドのお刺身などがたくさん並べられていました。

皆さんは大喜びで私達を迎えてくださり、母との再会を喜ばれました。その様子を見て私は、母がここへ来たいと言った理由が初めて納得できたのでした。その方々は驚くほど上品で明るく、室内には何とも言えない清らかで暖かいムードがみなぎっているように思われました。「この方達の世界は、私のいる世界とはどこかが違う」とその時思いました。

母が昨年来た時に証しをしたというビデオを映してくださり、私はそれを見て、娘の私が今まで一度も見たことのない輝いた顔で話をしている母の姿に驚かされたのでした。この方達のお仲間になるとあのように顔が輝くのかしら、と不思議に思ってビデオに見入りました。

夜、ホテルに戻ると、母が言いました。

「和子、マキキ教会の人達はこのワイキキビーチで洗礼を受けるのよ。今まで日本から来た人

も二人受けたんですって。あなたも受けて行ったら？　3人目よ。お母さんなんか教会のタライの中で受けたのよ。ここは太平洋よ、素晴らしいじゃないの」

私は当時キリスト教には無知で、外国の宗教だと思っていましたし、日本に神話があるように、聖書も外国の神話だと思っている程度の者でしたから、「まさか私が洗礼を受けるなんて」と一笑に付してしまいました。しかし、母は「洗礼を受けなさい」と毎晩すすめるのです。その中で「あなたは3人目よ」と必ず言います。

私は夜、ベッドに入ってからその「3人目よ」に心がとらえられました。実はそのころの私は、「3」という数字がラッキーナンバー、幸運の数字だと思いこんでいたのです。もう生まれないかも…と思っていた息子が生まれたのが、昭和三十九年三月三十一日午後一時三十一分であったことがきっかけでした。ですから、「3」にこだわって、二人目は絶対いや、四人目もいや、「3」人目なら、と思いました。それに「あなたはどちらで洗礼をお受けになりましたか」と聞かれた時に、「はい、私はワイキキビーチでございます」なんて言うのもかっこいいじゃない…と、ふと思いました。そして、うっかり「じゃあ私、3人目で受けて行こうかしら」と独り言のように言ってしまいました。母は耳ざとくそれを聞いて跳び上がるほど喜び、嬉しい、よかった、と言って翌朝土屋牧師に電話をしてしまいました。

その夜、また家庭集会があるということで土屋牧師が迎えに来られました。集会にはこの間の輝く顔の方々が集まっておられました。「この方達は何て素晴らしい方達なのでしょう。この方達のお仲間に入れていただきたい。でもそうなるにはどうしてもイエス様という方を信じなくて

はならないのかしら……」。私の心は揺れ動くのでした。

土屋牧師が皆さんに、私が洗礼を受ける決心をしたという事を報告してしまわれました。皆さんは「よかった、よかった」「ハレルヤ」と言って喜んでくださっています。でも、そう言えば私はまだ聖書を知らないのでした。慌てました。聖書を知らない人が洗礼を受けるのは間違っている。神様はそれを赦されるはずがないと思いました。断るのは今です。勇気を奮い起こして、

「先生、私はまだ聖書を知らないのです。だから洗礼を受けることはできません。これから横浜へ帰って、一年間近所の教会で聖書を勉強してきますから、一年延ばしてください。来年の春休みにまたここへ来ますから」

と必死で言いました。先生は驚いた顔もなさらず、

「それで良いのです。ここにこのように書いてあるから読んでみましょう」

と聖書を開いてどこやらを読んでくださいましたが、私にはさっぱりわかりません。皆さんの「そうです、そうです」「ハレルヤ」の声の中で、私は背中を力強く両手で押されているような不思議な大きな力を感じ、「もう後へは退けない、前進するのみ」と洗礼を決断せざるを得ない所に来ているのを感じたのでした。先生は、「皆さん、明後日朝七時に浜へ集まってください」と言われました。けれども帰り際になってから急に、「さっき七時と申し上げましたが、遠くから来てくださる方も多いので七時半にします」と訂正されました。

当日は七時頃雨でしたが、洗礼の時刻が近づくにつれて雨が上がり、陽がさしてきました。浜

辺の、傘のような形の木の下にテーブルがしつらえられ、聖餐式の用意が調えられました。先生と、もう一人の方に両腕をとっていただき、海の中へだんだんと入っていき、胸の深さで止まりました。そのとき、浜で待っていてくださる方達の大きな声がしたのです。

「虹が出たぞー！」

私は横浜生まれの横浜育ちですから、虹というのはいつも山の彼方の空遠くに出るものとばかり思っていました。しかしここの虹は、私の左手の海面から七色の美しい虹が立ち上がっており、私の頭上で大きく弧を描き、右手の海面に落ちているのでした。私はちょうど虹のアーチの真下にいるのでした。「まあ、絵のように美しいわ」。洗礼のことも忘れて私が空を見上げていますと、また浜の方から大声がします。

「ダブル・レインボーだぞー！」

「ええっ？」

また左手の海面を見ますと、さっきの虹の立ち上がっている所の外側に、もう一つの虹が立ち上がり、更に大きく弧を描き、右手の海面へと落ちているではありませんか。私はただ感心して「これがダブル・レインボーというのか…」と空を見上げていると、先生が「これはすごい洗礼式だ」とおっしゃいました。私はそのダブル・レインボーのアーチの真下で洗礼を受けたのです。

終わって浜へ戻る途中、後ろを振り返って虹を見ますと、後から出た方の虹はもう右側の肩のあたりから消えはじめていました。私の洗礼の時だけ完全な形のダブル・レインボーだったのです。先生がはじめにおっしゃったように、七時開始だったら虹には出会わなかったのです。私に

は、とても不思議な出来事のように思われました。

浜に着くと皆さんは大喜びでした。一人の年配のご婦人が、

「私は四十年もここに住んでいますが、あのように完全な形のダブル・レインボーを見たのは初めてです」

とおっしゃいました。たいてい虹のどこかが欠けているのだそうです。

私の片腕を取ってくださった方は、

「吉屋さん、横浜へ帰ったらぜひ創世記のノアの箱舟の所を読んでごらんなさい。虹は神と人の契約のしるしであり、今日の洗礼を神様はとても祝福してくださったのですよ」

とおっしゃいました。聖書を知らない私には何が何だかわかりませんでした。ただ皆さんが喜んでくださったのがとても嬉しかったのでした。

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」（ヨハネ　15・16）

「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。」（ヨハネ　6・44）

こうして私は、聖書を知らない受洗者として家へ帰ってきました。すぐにも近くの教会へ行きたかったのですが、仕事を持つ身、日曜日にも出られません。その頃私はあと一年で退職する予

定でおりましたので、退職して時間ができたらゆっくり教会へ行こうと思っていました。

## 「神なき教育」に気付かされた私

翌年三月末に退職した私は、四月からはきちんと教会へ行くようになりました。私は教会へ行くようになって、このように神のことばを宣べ伝える素晴らしい所があることに驚いたのでした。そこは確かに神がご臨在になり、聖い所で、私の心をとらえたのでした。

五月の半ばにその教会の近くで、私が在職中所属していた研究会が私のために送別会をしてくださることになり、出かけました。大分早く着いてしまったので、駅前の本屋でも見ようかと思って歩き出しました。しかしどうしたことでしょうか。ハッと気がついた時、私は教会の門の前に立っていたのでした。「あら、どうしてここまで来てしまったのかしら。でも夕方の教会って一体どうなっているのかしら」。玄関が開いていたので入ってみました。正面が幼稚園の先生の職員室でした。私が入っていくと、先生が、

「あら吉屋さん、どうぞどうぞ、お茶でも」

と言ってくださり、ご一緒にお茶をいただきました。先生方は今日一日の反省をしていらしたのでした。

「じゃあ、もう今日は終わりにしましょう」

と言って、一人の若い先生がお祈りを始められました。

その若い先生は、きょう一日の神様の守りと導きを感謝して、一人一人の園児の名前をあげて

祈っておられます。終わりにはその子どもさん達の家族の上にも神様のご祝福がありますようにと祈っていらっしゃるのでした。この幼稚園の子ども達は、先生方の朝に夕にの祈りによって神様と共に育てられているのだ。なんと幸せなのでしょう。それに引き比べて、私は今まで一度だってまことの神に自分の教えている子ども達のことを祈ったことがあったでしょうか。

私は今までの教職生活の中で、「私は精一杯やってきた。子ども達も慕ってくれたし、父兄の方々もよく協力してくださった。よい校長先生にも巡り合えたし、研究発表もたくさんさせていただいた。もう思い残すことは何もない。充実した三十五年間だった」と心おきなく辞めたつもりでいたのでした。

あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

（黙示　3・17）

私は、日の下で行なわれたすべてのわざを見たが、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。

（伝道者　1・14）

神を知らなかった私は、本当に盲目で、裸の者だったのです。そして風を追うようなむなしい人生を歩んでいた者だったのです。

「ああ、私もこの先生達のように祈りながら、神様と共に子ども達を育てていきたかった」

大きな大きな悔いが私の心の中に鉛の塊のように重く沈み込んでしまいました。

私がしていたのは、最も根本的な大切なものが欠落した教育であった。つまり「神なき教育」「祈りなき教育」であったということに気付かされたのでした。親や兄弟がすでにクリスチャンであった私は、いつでも神の方を向こうとさえ思えば向ける環境にあったにもかかわらず、「神は別になくても生きていける」と思い、必要性を感じず、神の方を向こうともしなかったのでした。けれども今、そのことは大きな誤りであったことを知らされました。その幼稚園のまだ二十歳そこそこの女の先生が、私には巨人のように大きく感じられ、神を知らない自分が虫けらのように小さくみすぼらしい、哀れな者に見えました。

私は、四月からは一日二十四時間が全部自分のために使える、これからはバラ色の楽しい人生が待っている、と喜んでいたのでしたが、この時その夢はガラガラと崩れ去り、鉛色の苦しい人生に変ってしまったのでした。私は一生この鉛の塊を胸に抱きながら苦しい人生を過ごすことになるのでしょうか……。神様の方を向こうとせず、「神なき教育」をしてきた私への当然のむくいとして、この罰を受けようと思いました。けれども私はいいとして、あのかつて教えた可愛い子ども達に、私はどのようにしてこの大きな罪をつぐなったらよいのでしょうか。私は、できることなら今までのすべての教え子達を学校の運動場の朝礼台の前に集合させて、このことを謝りたいとさえ思いました。

退職した直後にこんな大事なことに気付かされるなんて……。せめてもう一年早く神様を知って教会に行っていれば、最後の一年間だけでもそれができたのに。本当に残念で残念でたまりま

せんでした。しかし、もう時計の針を戻すことはできないのです。「私はどうしたらよいのですか。神様助けてください。教えてください」。苦しくて心の中で叫ぶのみでした。

## 共に祈る時を与えられた喜び

苦しい思いの中で一年が過ぎました。私は夜の祈祷会で青年達と親しくなりました。

ある日、私の勤務していた学校の卒業生と、もう一人の青年を夕食に招きました。夕食を共にしながら私はハッと思いつきました。「この青年達の中に、私がかつて『神なき教育』をしたあの子ども達を入れてもらったら。そうすれば賛美もできるし、みことばを伝えることもできるではないか」。私がそのことを話すと、彼らは喜んで承諾してくれました。

私は早速かつての教え子達に夕食会への誘いの手紙を出しました。当日には牧師先生の聖書のお話もあることを書き添えました。今は社会人となり、大学生となっているあの子達…。何人来るかわかりません。でも、一人でも二人でもよいと私は思いました。「神なき教育」をしてきたこの私です。一人にでも二人にでもみことばが伝えられることを願いました。

当日になりました。なんと驚くべきことでしょうか、続々とかつての子ども達がやって来たのです。まるで同窓会のように久しぶりに友達に会って、彼らは大喜びでした。教会の青年達と合わせて三十数人が集まってくれました。

ハレルヤ。私は心を尽くして主に感謝しよう。直ぐな人のつどいと集会において。主のみわざは偉大で、みわざを喜ぶすべての人々に尋ね求められる。そのみわざは尊厳と威光。

その義は永遠に堅く立つ。主は、その奇しいわざを記念とされた。（詩篇　111・1～4）

私は「ハレルヤ」と叫びました。自由に話をする時間もたっぷりあって、共に賛美し、みことばも聞くことができました。そしてこの日、主は、かつて子ども達のために一度も祈ることをしなかったこの私に、彼らと共に祈る時さえもお与えくださったのでした。何という喜びでしょうか。皆が帰った後、そのことに気付いた私は思わずひざまずき、あふれる涙と共に心から主に感謝の祈りをお捧げしました。

主はこの時、私のかたわらにいてくださり、確かに次のようなことを私に語りかけてくださいました。

「わたし（主）は天地万物を創造し、それを支配している者です。そればかりでなく、わたしは一人一人の人生の歴史をも造り支配している者です。あなたの人生にも長い長い計画をもってのぞんでいます。あなたに『神なき教育』への恐れの心を起こさせ、そして今日、その子ども達と共に祈る時を与えたのもこのわたしなのです。今日あなたが私の名によって呼び集めた子ども達は、あなたの今までの全部の教え子の代表です。あなたは今日、かつて『神なき教育』をしてきた教え子に聖書の言葉を伝え、わたしを称えて共に祈りました。あなたは『神なき教育』をしてきたことを深く悔いていましたが、それはもう、すべて赦されています」

私はこの時初めて、私の信じている神様はこんなにも偉大なお方であったのか……と知ることができたのでした。そして心から偉大なる主を賛美し、私は生涯このお方にお従いして生きてい

こうと決心したのでした。

胸につかえていた鉛の塊は、サッと溶けてなくなりました。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。……主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。

「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ。——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」（イザヤ　55・6〜9）

## 再びワイキキの浜に立つ

受洗してちょうど五年目の三月、私は姪のいづみとアメリカを旅した帰り、今度は自分の意志でワイキキを訪れました。受洗記念日の三月三十日、その年はその日がイースターでした。私といづみと、ロスで合流した息子の隆と三人で、パンチボールで行なわれるハワイ在住の各国のクリスチャンが集まる早朝のイースター礼拝に出ることができて、素晴らしい感動を味わうことができました。

その帰り、懐かしいマキキ教会へ行き、イースター礼拝をお捧げし、皆さんと愛餐会で再びお会いすることができました。「虹の洗礼の方ですね」と覚えていてくださる方もいらして、五年の歳月の空白は感じませんでした。

帰り道、私だけ車から降りて、一人ワイキキの浜辺の、傘の形の木の下にたたずみました。海

も空もあの時と同じです。私は天のお父様に心から呼びかけ、感謝の祈りをお捧げしたのでした。

「この空も海も、すべてのものを造られた懐かしい天のお父様。私は今とても幸せです。五年前の今日、あなた様はただただ一方的な憐れみによって、何のいさおしもないこの私を、みもとへと導いてくださいました。あの時あなた様は、私の思いに反して水のあるこの場所へ私を旅させてくださり、母を通して『3』という数字にこだわらせてくださり、マキキ教会の輝くお顔の方々の群れの中へ私を入れてくださり、目の前のこの海の水で洗礼を受けるようにと、不思議なみわざをもって私をお導きくださいました。しかもダブル・レインボーのアーチの下で洗礼を受けさせてくださったのです。天のお父様。私はただただあなた様のみ前にひれ伏して礼拝をお捧げするのみです。『神なき人生』のむなしさから、『神と共に歩む』祝福された人生へとお導きくださいましたことを心から感謝申し上げます」

主よ。あなたの造られたすべてのものは、あなたに感謝し、あなたの聖徒はあなたをほめたたえます。彼らはあなたの王国の栄光を告げ、あなたの大能のわざを、語るでしょう。こうして人の子らに、主の大能のわざと、主の王国の輝かしい栄光を、知らせましょう。あなたの王国は、永遠にわたる王国。あなたの統治は、代々限りなく続きます。

（詩篇　145・10～13）

## 「捧げる礼拝」を求めて

創造主なる神の偉大さを知らされるにつれて、私はますます教会に惹きつけられていくのを感

じました。牧師先生は非常に勉強家で、私達信徒をお導きくださっておられました。

先生はある時、「礼拝とは捧げるものです」と教えられました。私はその言葉にハッとさせられたのです。自分の礼拝は「捧げる礼拝」になっているだろうか、と思いました。私はいつも礼拝堂の椅子に座って「参加」し、メッセージを聞いて「受け取る」という受け身の礼拝しかしていないことに気付いたのでした。「捧げる礼拝」とはもっと前向きのものであるはずだと思いました。どのようにしたら「捧げる礼拝」ができるのでしょうか。私はこのことをずっと求め続けました。信仰生活の中で、礼拝は最も大切なものと思っていましたから、これだけは妥協するわけにはいきませんでした。

ある日、母の家で親族が集まって会食がありました。私はすでにクリスチャンである姉にそのことを話してみました。姉は事もなげに、

「あら、吉祥寺キリスト集会の人は皆礼拝を捧げていますよ」

と言って、次のみことばを示してくれました。

「真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」（ヨハネ　4・23、24）

霊とまことによって、という所が重要であると思われました。が、さてどのようにしたらよい

かがわかりません。そして一度吉祥寺キリスト集会の礼拝を経験してみたいと思い、行ってみました。

私はその礼拝で大きな感動を覚えました。

聖書に導かれて祈る皆様方の祈り。天まで届くかと思われるほどの素晴らしい賛美の響き——。その中にあって主イエス様のご栄光が光り輝いているのでした。集会の中には聖霊が満ちみちているのでした。ふと気がつくと、私は皆さんの祈りに合わせて、声は出さないけれども共に祈りを捧げているではありませんか。心の底から「アーメン」と湧き出てくるではありませんか。「これこそ捧げる礼拝。やっと捧げる礼拝ができた。嬉しい」。私の心は、霊の喜びに満ち溢れ、心から主を賛美いたしました。

私はその時、ひとつの事を思い出しました。ある時、重田さんに、

「吉祥寺キリスト集会では、クリスマス特別礼拝とか受難週とかイースターとかの行事は、なさらないのですか」

と、うかがったことがありました。重田さんは、

「吉祥寺キリスト集会では毎日がクリスマスであり、受難週であり、イースターなのです。だから特別にそのような行事はしないのです」

とおっしゃいました。私はどうしてもそれをすなおに受けとることができませんでした。そして「母の日」のことを思いだしていました。私は教師をしている間、毎年のように、「皆さん、今日だけが母の日ではないのですよ。毎日毎日が母の日と思ってお母さんに感謝しましょう」と言

い続けてきたものです。身近かな母の日ですらこのようなことを言わなければならないような状態です。まして信仰の世界において、そのようなことができるのでしょうか。できるとしたらそれは最高に理想的な教会であり、神の喜ばれる教会だと思いました。けれども人間にはそれができないから、思いを新たにするために特別の行事を組むのではないかと思っていたのです。そのような教会があったとしたら、それは幻の教会ではないか、と思いました。

けれども、吉祥寺キリスト集会での礼拝で皆さん方が捧げられる祈りには、主への感謝と賛美のすべてが含まれていたのです。この集会の方々は、日々思いを新たにして、これらのことを祈っているのだと知ることができました。

私はそれらの一連のことがわかった時、ぜひこの集会へ来て礼拝をお捧げしたいと心から願い、祈りました。

「主イエス様、長いこと求めていた『捧げる礼拝』へと導いてくださって感謝いたします。私はこの集会で礼拝をお捧げしとうございます。み心でしたら、この集会へ私を導いてくださいますように」

そう祈りながら、私は苦しみました。私は、私を主と出会わせてくださった今の教会をどうして去ることができましょうか。苦しい中にあって、私は私を血潮をもって贖ってくださった主イエス様のみ心のみを求めて祈り続けました。

二年間にわたる祈りの後、主は不思議なみわざをもって、私を吉祥寺キリスト集会へとお導き

くださったのでした。

あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

（箴言　3・6）

吉祥寺キリスト集会へ来て気付いたのですが、ここには会員制度がありません。今までは会員制度という柵の中で、私は安閑と暮らしていました。「どこそこの教会の会員」ということだけで何か安心してしまっていたのです。けれども吉祥寺キリスト集会では守ってもらえる柵が取り払われているのでした。保護してくださるのは、主イエス様だけです。主にしっかりとつながっていなければ、私は迷子になってしまいます。これは大変なことです。主と私は一対一でしっかりとつながっていなければなりません。主のみを見上げて迷子にならないように、そして主と私とのパイプをしっかりしたものにするために、私は日々の信仰を成長させなければなりません。

集会は私に信仰の厳しさを教えてくださっています。そして多くの皆さん方の中にそれを見ることができますので感謝です。

主が私のような者を、この集会にお導きくださったことを心から喜び、み名をほめたたえます。

主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。

（ミカ　6・8）



▲1987年元旦。礼拝のあと、ご家族で。

# 主とともに歩む

村上　誠

一九四五年名古屋に生まれる。名古屋市立中川小、市立東港中、愛知県立熱田高、東京商船大学商船学部航海科卒業。新和海運㈱（航海士）、千代田石油㈱（スタンドマン）、㈲東林（運転手）、志学舎経営（塾講師）などを経て司法試験合格。現在村上・鶴田法律事務所弁護士。家族は妻房美さん、長男元茂さん、長女真由さん。趣味は水泳、読書。



◀洗礼を受けた日、集会で証しする誠さん。1984年12月。

## 1

アメリカの宇宙物理学者ホーキング博士が来日した時のことですが、彼は「ホーキング博士宇宙を語る・ビッグバンからブラックホールまで」というテレビ番組の中で、宇宙の起源について神の存在がいかに論理的に必要であったかを論じています。

宇宙に関するホーキング博士の説明がどのようなものであれ、自分自身の生命については、それが自分はもちろんのこと、だれか他の人間によってでもなく、人間以外の何かによって創られたものであることはだれも否定できません。

問題は、生命を創った何ものかは、人格的な存在かどうか、ということです。創造者が人格的存在だとすれば、自分を創るのにその意思が働き、一定の目的があったことは明らかです。では、その目的は何なのか。

今、私は創造者である神がおられ、神の子イエスが自分のために死なれたこと、そのことによって創造者を知ることができ、イエスに従って歩むことこそ、神のご計画であること、そして日々の歩みが喜び、平安に満たされていることを知ることができました。

この喜びを知った動機について、また決意をして変えられた生活などについて、振り返ってみたいと思います。

## 2

1　私は一九四五年、名古屋に生まれました。小さい頃、神社の夏祭りの映画で練習帆船の遠洋航海を見ました。それ以来、自然と闘う若者のりりしい姿に心を打たれ、どうしても海に出たいと思うようになりました。また近くの名古屋港から聞こえてくる外航船の汽笛にも胸を躍らせていました。そして一九六四年、ついに憧れの東京商船大学航海科に入学しました。

2　ところで、私の家族は八人。六人兄弟の下から二番目に生まれました。父親は木材業の二代目のいわゆるお坊ちゃんで、徴兵検査の時甲種合格したことが自慢で、よく働く、人に好かれる人物でした。しかし、経済の動きについていくことは苦手で、人の保証人になったりしたことなどから、家計はだんだん苦しくなっていきました。

一九六一年の伊勢湾台風は、我が家に壊滅的な打撃を与えました。その結果、高校時代から奨学資金をもらい、お金のありがたさを覚えました。今思えば経済的には貧しかったことが、自分にとって本当によかったといえます。貧しくても何とかやっていけるので、かえってこだわりがなくなり、人の思いやりのありがたさが身に沁みてわかるからです。

一方で、心の豊かさ、あるいは気概というものの大切さを覚えました。父が陸軍の将校だったので、武士道のようなものも、日頃の父の言動の中に少しはうかがい知ることができました。朝鮮戦争で、米軍が名古屋港に上陸した時のことです。米軍の兵士たちが大型の軍用車から子供達にチョコレートを投げていました。まるで犬に餌を投げ与えるような光景です。それを知って父

はひどく怒り、私に決して近づくなと言いました。今、弁護士という職業について、正に「さむらい＝士」でありたいと思うのは、父の影響大なるものがあります。

3　憧れの東京商船大学に入り、初めて親元を離れました。

全寮制で男子ばかりの寮生活。そして練習船実習。楽しい青春時代でした。

学生運動の盛んな時代で、「前衛」、「世界」、「エコノミスト」、「経済原論」、「資本論」など沢山の書物を読み、今まで全く知らなかった世界が開けました。

大学二年生の時、北海道で恵庭事件という事件が起こりました。自衛隊の演習に反対する社会党員が、自衛隊の施設を破壊したというので自衛隊法違反で起訴された事件です。この事件の弁護団長の演説会を寮で聞きました。そのとき生まれて初めて、弁護士という職業を知りました。

この頃、家は事実上倒産し、執行官によって雨戸に板を打たれ、住みなれた家から追い出されました。このとき東京から帰り、父母の引越し先を探し、みじめな悔しい思いをしました。

なぜまじめに働いているのに、こんなことになるのか、生きていくのは大変なことだ、自分が弁護士にでもなればこうはさせないのではないか、と考えました。

4　ところで大学の一年生の時、妻房美と長崎で出会いました。

練習船銀河丸が長崎に入港した時のことでした。

その後九州地方へは何度も航海し、あちこちの港、三池や博多で会い、とうとう二人は一緒に

なりました。

博多港で、冬、雪の降りしきる岸壁に、妻が一人で会いに来たけれど、出港準備作業に追われ、さよならを言っただけのことなど忘れられない思い出です。

その頃は、とにかく一緒に生活したい、という思いでいっぱいでした。

5　そして、少年時代に夢見た帆船海王丸による遠洋航海に出ました。初めて、太平洋のど真中を帆走するのです。アホウドリやイルカ、鯨、マンボウに出会いました。そして、レンガ色の夕日、降るような星、時には真っ暗な時化の夜……。自然の素晴らしさ、美しさ、すごさを体全体で体験しました。

荒天でロイヤルヤードのセールをたたみ、マストを駆け登る時の緊張、片手は船のため、片手は自分のためと教えられ、叩きつける風雨と必死で闘ったことは忘れられません。

帆船は、ただただ自然に逆らわず、自然に完全に合わせて帆走します。何か人間の人生を思わされているような感じです。

創造主の意思を知り、それに従っていくのが最も幸せである、と言い得るように、自然の懐に抱かれた弱い帆船は、自然に逆らわず、自然の意のままに航海を続けます。

この体験は、素直に主イエス・キリストを受け入れる素地となりました。

6　さて、遠洋航海を終え、新和海運株式会社の航海士として海に出ました。

遠洋航海の日に神戸港から出港する際、房美が見送りに来、初めて私の両親や妹と会う機会がありました。

当時二人は若く、前後のことも考えず、とにかく一緒にいたいという気持ちでいっぱいでした。自分が置かれている状況とか、房美が自分の出港後どんな生活をするのかというようなことについても全く配慮せず、ただただ一緒になりたい、一緒にいたいという一途な思いだけで強引に結婚することにしました。当時はそれがいいことだと思っていたし、そのこと自体は今でもよかったと思っています。

しかし、彼女は、被爆者であって、父を戦争でなくし、母親から離れて、年老いた祖父母に育てられていた環境にあったので、いろいろな問題が生じました。

当然のことながら私と結婚し、名古屋に住むことになれば、長崎の育ての親を置いてこなくてはならない……。

それがどんなに重大なことかが分かったのは、結婚した最初の航海で、アメリカに向かう時でした。

洋上から自宅に電話し、妻の打ちひしがれた声を聞いた時に、そのことにはっと気づかされました。心の奥深いところではすでに気づいてはいても、考えたくない、考えないようにしよう、何とかなるだろうというのが正直な気持ちでした。

しかし、取りあえずどうすることもできません。新しい仕事に一所懸命打ち込みました。しかし、いつも悲しい思いをし、不安の日々でした。

7　その頃、社船いわゆる鋼船の大型貨物船でも太平洋の真ん中で時化られると、どうすることもできない、ただただ時化のおさまるのを待つ以外ないということを体験させられました。

水面上から三〇～五〇メートルもある船橋に、しぶきというよりも海そのものが打ち込んできて、エンジンが空転し、舳先が海に突っ込んだまま、そのまま起き上がってこないようなこともたびたびありました。

最近でも、大型船が太平洋上で突然行方不明になっています。当時、「ぼりびあ丸」、「かりふぉるにあ丸」の沈没が続きました。

一方、南方を走ると、本当に鏡のような静かなきれいな海を見ることもできます。航海当直中の四時間、じっと静かにエンジンの音だけ聞きながらムーン・リバーを口ずさんだりしました。人間が作ったものでなく、創造主が造られたものの素晴らしさは、筆舌に尽くし難いものです。

8　そうこうしているうちに、二人が離れて生活するのはよくない、自分の夢であった海での生活は楽しいが、やはり、いつも一緒にいることの方が大切だと考え、憧れの中国航路を最後に、新和海運株式会社を退社しました。

しかしそのことは、妻に全く相談せず、今までの自分のやり方通り一人で勝手に決めて船を降りました。

当時妻は、子供がいなかったので、明治生命の名古屋支社に勤めていました。

私の新しい就職先は、彼女の昼休みに二人で新聞広告を見ながら探しました。そして、石油販

売会社に勤めることになりました。私はガソリンスタンドマンをやり、妻は明治生命の職員として勤めるという、いわゆる共働きの生活が始まりました。仕事が面白くて、クタクタになるまで働き、日曜日は二人で楽しむという生活がしばらく続きました。

9　ところがやがて、自分が船を降りて以来、このまま今の生活を続けていていいのだろうか、と思うようになりました。

この頃から司法試験について真剣に考えるようになり、とりあえず参考書を手に入れ、仕事の合間に勉強するという生活を始めました。

しかし、人並みに働いてその後勉強するというのはとても不可能なことで、悩みました。

一方、その後、受験のための日曜日の答案練習会にも参加するようになり、いよいよ夫婦そろっての楽しい生活は終わりとなりました。

そして、勉強ができる環境を探すため職業を転々と変え、ついには、妻の収入に頼る、いわゆるヒモみたいな生活もしました。

その生活は屈辱的でした。大の大人が朝から家でぶらぶらしているからです。しかし、自分には試験があるのだと言い聞かせつつ、机に向かいました。

ところで司法試験は、一年に一度しか受けるチャンスがなく、最初の短答試験が三時間の○×方式、それに受かれば論文式試験が四日間ほど行なわれ、それに合格して口述試験というふうに、ホップ・ステップ・ジャンプの三段階になっています。

ところが、その最初の○×方式は暗記やテクニックを要することが多くてなかなか通りにくい試験でした。

その発表がある度に煮え湯を飲まされて苦い思いをしましたが、妻は歯痒い思いをしたと思います。妻にとって私の試験は、私が好き勝手をやっていることと思われたにちがいありません。突然船を降りて、わけの分からない、見通しのない受験生活を相談もなく始めたのだから当然でしょう。そして、何度も試験に失敗していくうちに、徐々に二人の関係は、冷めていきました。

妻は、会社では仕事に明け暮れ、そのことが二人の間をますます引き離すようになりました。自分としては、司法試験に合格さえすれば、二人が結婚してよかったといえるようになる、離れて生活する船乗り生活よりもよくなる、という思いがありました。

勉強に集中したいのですが、心の底で、妻を引き止めておきたい矛盾にいらだつばかりでした。まさに、一所懸命、試験に心を奪われているうちは妻のことなど考える余裕はないし、考えてもどうすることもできない苦しい時期でした。

そして、一九七八年、ついに合格することができました。

司法試験を始めて二年目の時、この試験には必ず合格できるという確信を持ちました。しかし終わってみると、ぞっとする試験だと分かりました。総力で闘わなければならないし、陽気で、楽天的な人間でないと続けられない。そして終わってもそれほどの感動もなく、ある種の空しさと謙虚さを覚えさせられた、そんな試験でした。

10　やっと司法試験に合格した年、まだ発表のない段階で長男元茂が生まれました。長男の誕生は長いこと望んでいたのですが、忘れた頃に突然生まれました。うれしくて本当に、天から授かったものだと思いました。

そして、司法試験合格の翌年から、東京で司法研修所の司法修習生としての二年間の生活が始まりました。

研修所の二年の間に、実務修習で名古屋に戻った時もありましたけれども、慌ただしくて、落ち着きのない生活でした。

11　そして、東京の弁護士事務所で居候弁護士としての生活がスタートしました。

当初、大岡昇平の「事件」に出てくるような刑事弁護士として、人生の谷間に陥った人を助けたい、あるいは悩める人を助けたいと思っていました。しかし、いつの間にか海事専門の事務所に就職しました。

当初予想していたのとは全く違った方向に、どんどん進んでいきました。その間にも自分自身の事件として数多くの刑事事件をこなし、少しは目標であった貧しい人々のための小さな事件を手掛けることもできました。

そして、それを通して「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい（ローマ12・15）」とか「濡れた心を持て」といった言葉の大切さを実感しました。と同時に、人々の赤裸々な姿を、特に醜い部分をかいま見る機会もしばしばありました。

一方、勤務事務所での仕事は大きな海事事件ばかり、特に衝突事件で死亡した漁民の遺族側の代理人がほとんどでした。そして漁業者の生活実態と、遺族の悲惨さを知るようになりました。

そして、居候弁護士を四年半でやめ独立しました。いつの間にか、自分が乗っていた船の経験を生かす、海事弁護士になっていました。

12　ところで、その間に長女の真由が誕生しました。妻は三十八歳の高齢出産で、不整脈で心臓が止まったり、髪が抜けたりしました。私は当時信仰は持っていませんでしたけれども、何者かにすべてを委ねるしかない、自分の手の及ばない何かが、新しい生命を造り、妻の健康をも心配してくれる、と思いました。横浜市にある日赤病院で、分娩する妻とその直前に別れた時の状況は忘れられません。

そして家族四人となり、慌ただしい仕事と日々の生活に追われてどんどん時間が過ぎていきました。

13　その頃、やっとこれまで二人で歩んできたことについて、妻の心の中を知ることができるようになりました。

落ち着いてそれまでのことを話すうちに、自分自身にとって最も気になっていた、妻の育ての親が次々に亡くなったけれど何もできなかったこと、帰りたがっていた長崎に、十年も帰さないままにしてここまできてしまったこと、自分との結婚について本当に幸せだと思ったことが一日

もなかったことなどをはっきり言われ、その言葉が私の心の底に重く沈殿するようになりました。

そしてその原因は、戦争孤児のような妻を長崎から遠く離れた名古屋へ連れてきてしまったことと司法試験の二つにあったといえますが、それ以上に、私の自分の思うように何でもやる性格にあるということもはっきりしました。

もう二人の心の溝は埋め難い状況になっていました。しかしここで弁解すれば、自分が一所懸命で真面目に努力してやってきたのも、その目的はと言えば、それによって妻に喜んでもらうことにあったのです。

しかし、結果は全然違ってしまいました。

妻と出会った時の喜び、あのときめきをいつも思い出し、いつもそうした喜びに満たされたいという気持ち、妻が喜んでいる様子を見たいという思いがいつもありました。しかし、現実の生活の中ではそうはいきません。妻が疲れ果て、涙を流すのを見た時、自分としてはどうすることもできないむなしさを感じました。

14　そんな時、突然妻が、軽井沢に行こうと誘いました。そもそも妻は自分の方から積極的に、あれが欲しい、これが欲しい、どこそこに連れて行ってほしいなどとは言いません。しかし、なぜか急に軽井沢にだけは熱心に連れて行ってほしいと言いだしたのです。

軽井沢でどうなるかは、いつもの通り深く考えず、とにかく久し振りに一緒に行ける、しかもそれを妻が喜んでいるというそれだけで、行くことにしました。

軽井沢でのバイブル・キャンプ。

全く知らない人達が聖書のことを一所懸命話し、楽しそうにしている。いわゆるこの世では全く利害関係のない人達が、ただただコーヒーを飲みながら、楽しくいつまでもいつまでも話をする。今までに経験したことのない豊かな時を過ごしました。

そしてゴットホルド・ベックさんから神様の話を聞かされました。

どうもピンときませんでしたけれども、ベックさんがともに祈ろうと言われ、ベックさんについて祈りました。その祈りの対象はよくは分からないが、小さな自分の頭では想像もつかない、何か具体的なイメージとしてつくることのできない大きなもの、目に見えない何かでした。

そしてキャンプ場に戻った時、人々がすごく喜んでくれ、妻が大粒の涙を流していました。その涙はそれまでと違った喜びの涙でした。その後も、自分としては何が何だかよく分からないけれども、とにかく妻の喜ぶことであれば、その通り素直に従おうという気持ちでいっぱいでした。

イエス・キリストが、自分の罪のために死なれたこと、そして復活されたこと、再臨があること、いずれも真実であると飲み込み、信じようと決心しました。どうせ、考えたところで分かるはずのないこと、人間の世のことですら十分に理解できないのに、創造主のこと、いのちのことなどは分かるはずがないからです。

そして、私の信仰生活が始まりました。

# 3

1　吉祥寺キリスト集会について。

信仰をもち、日曜日ごとの礼拝、福音集会に通うようになりました。家族四人の絶対的な約束ごとであり、かつ、楽しい時です。ここには自由があります。いわゆる社会的拘束、会員制度や献金制度など全くない、主との直接の交わりがあります。

私の事務所、千代田区二番町の窓から見える女子学院は、校則を持たない学校として有名です。聖書があるから校則はいらないのです（三浦綾子著「われ弱ければ」矢嶋揖子の生涯参照）。ましてや、主そのものと交わるため、主のつくられる教会に、人間のつくる規則など要るはずはありません。

だからこそ、日曜日に喜んで、霊的満たしを得るために集うのです。本当に疲れを癒すのは、霊的な満たしであると断言できます。その実は平安であり、喜びなのです。

2　信仰について。

前述した通り、私は聖書にあるイエス・キリストの復活を飲み込みました。これは小さな頭で考えても分かるはずのないことだからであり、信じるかどうかで全てが決まるものだからです。この復活については、パウロが聖書の中で次のように証明をしています。

……キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬ら

れたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。（Ⅰコリント　15・3～5）

しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。（Ⅰコリント　15・20～22）

私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。（Ⅰコリント　15・49）

……朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。（Ⅰコリント　15・54～57）

そして、私の知り得る歴史上の数々の人物や現実に生きておられる信仰にある人、特に死を目

前にして輝いている人々を見ることにより、主の存在は確信となりました。

そして、その確信が日々の生活を全く変えました。すなわち、自己の内面において、コペルニクス的転換が起こりました。

常に主を意識する。主の意思を尋ねる祈りをする。主との交信の中ですべての物事を考える。そうなると、日常の生活の中で予想だにしない事態が生じても、少しも動揺することなどなくなるのです。なぜなら、宇宙、万物の創造主はすべてをご存じだから、私達は直面した事態に対し直ちに、先ず「主よ、どういうことですか」と尋ねられるからです。

そして、主のなさることに対しては、主が信頼がおけるお方であり、安心していてよいから何が起っても驚かないのです。

3　職業と信仰について。

以上述べた通り、私にとって信仰とは、自分の中に、また自分の生活に主を迎え入れ、自分の意思ではなく、先ず、主の意思を尋ねながら歩くことです。従って、日々の仕事は、自分の意思ではなく主の意思の実現を目標とすることになります。

あるいは、仕事に励む中で一歩一歩主に近づいていく…仕事は主をよりよく知る材料、機会といってもよいと思います。仕事は仕える事と書きますが、人々に仕えることが即、主に仕えることといえます。

「『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えら

れた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渇いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』

すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渇いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』

すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』」

（マタイ　25・34～40）

多くの方々が、信仰を持ちながら偉大な仕事を成しとげてきました。大平元首相、藤森最高裁判所長官、新渡戸稲造……数えあげればきりがありません。そして現実に、私の周囲にもこの世の仕事を精一杯やりながらしっかりと主の光の中を歩んでおられる先達が沢山おられます。その人たちが与えられた能力を発揮することが、主の栄光を現わす結果となっています。

「天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。

彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。…さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」（マタイ　25・14～21）

一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。

（ローマ　12・4～8）

ところで刑事事件や離婚事件、相続争いなどが根本的な真の解決に至るには、それぞれが自己

中心的な生き方こそ問題であると気づき、聖書のいう罪の問題を解決する以外にはありえないと確信します。人はだれもが自分中心であって、紛争は結局、自己主張、欲望のぶつかりあいなのです。そして法律紛争解決機構としての法制度は、それらの調整を国家権力で行なうものです。

しかし、自己中心であることこそが解決されるべき根底の問題であり、その解決は「だれでもわたし（主イエス）について来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい（ルカ9・23）」というみことばを受け入れる以外にはないのです。そして実際、素直にそのみことばに従い、心の喜びを知り、真の解決に至った事例をこれまでに多く見ることができました。そして、ますます主の実在を確信するようになりました。

また、聖書は人間の本当の姿を赤裸々に描き出し、私達人間は神の目から見たら一人として立派な、良い人間はいない、本当はみじめで哀れな存在であると断言しています。全く希望の持てない、醜い存在だと言っています。

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。

（ローマ　3・10～12）

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

（ローマ　7・24）

人々の争いごとばかり扱っていると、まさにその通りだと言わざるを得ません。依頼者は我がままであり、無理難題を持ち込みます。相手方は、一歩も譲ろうとしません。

そんな時こそ、主の助けが必要です。なぜなら、私自身でなく、主が寛大で本当の優しさを発揮してくださるからです。どうしても私の中に主イエス・キリストが住んでおられることが必要なのです。

キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。

（コロサイ　3・15、16）

4　死の問題について。

遺言をする人が増えています。土地の値上がりによるのでしょう。死を目前に控えた人々は、遺言をして安心します。しかし、それでも遺言者にとって最も重大で避けがたい「死」の問題には、手の打ちようがないのです。

そんな時私は、「心から主を呼び求めてほしい。天国がある。これまで神を無視してきたことを悔い改めさえすれば天国に行ける」、このことが最も大切で、何よりも伝えなければならないことだという場面にしばしば出会うようになりました。幸い、伝える主を知っているということ

は何と素晴らしいことでしょうか。

日頃、忙しさの中で、死について考えようともせずに過ごすのが普通です。しかし私達は、法律で例えれば死刑判決を受けてただ執行を待っている身と同じなのです。

死刑判決から無罪を勝ち取った人々は、大変な苦労で重苦しい生涯を送りました。しかし、私達の逃れられない死刑判決は、いとも簡単に「無罪を勝ち取れる」のです。そしてその結果は、平安、喜び、慰めです。

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。（ローマ　10・9、10）

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」（ヨハネ　14・27）

5　最後に。

こうして、私の四十五年ばかりの人生を振り返りますと、改めて、主イエスに出会ったことが最も素晴らしいことであり、海に憧れ船に乗ったことも、人々の悩みを扱う弁護士になったことも、これらすべては主に出会うためのものだったことが実感されます。



◀長崎の職場での先輩・嶺登美子さん（左）と房美さん。登美子さんが主を受け入れた日。

これから先の人生を主とともに歩み、主の素晴らしさを語り伝えることができたらと思っています。

房美さんの母・林幸子さんの受洗の喜びを記念して。1989年8月20日、宮崎のバイブルキャンプで。左からベックさん、熊谷千里さん、
▼ベックさんの妻ミンヘンさん、房美さん、幸子さん。



日本丸でハワイへ航海演習に出発する誠さんを家族が見送りに。左から母・房さん、父・
▼正雄さん（故人）、妹・石川和子さん、誠さん。





▲知り合った頃のお二人。誠さんが航海演習で長崎に。右端は田中美智子さん。

# キリストにはかえられません

村上房美

長崎県長崎市に生まれる。西浦上小、西浦上中、長崎商業高校卒。明治生命保険(相)長崎支社勤務。結婚の後名古屋北支社転勤、退社。家族は夫誠さん、長男元茂さん、長女真由さん。水泳と卓球が得意。

## 祖父母に育てられて

私は、主に祖父母の手によって育てられました。戦後の焼跡の木を寄せ集めて造った家で、祖父母の愛情をいっぱいに受けて育ちました。暮らしは貧しかったのですが、他の家と自分の家とを比べたり、自分の境遇を憂えることもなく過ごしました。祖父母に大きな声で叱られた記憶などなく、冬などは、小学二年生頃までたき火の前で祖父のひざの上に乗っかり、昔話を聞いたり、歌を歌ったりしたものでした。そのうち私が寝入ったりすると、祖父が「さあ、暖かくなったら、ちゃんとおふとんでおやすみ」というのが日課でした。

花を栽培していて畑にいる祖父母の後をくっついて歩き、花を摘んだり、ちょうちょを追っかけて遊んだり、いたってのんきに子供時代を過ごしました。

そんな私が、ある夜、ご近所のおじいさんが亡くなったことがきっかけで、死をひどく怖がるようになり、「年をとっている祖父母がいつ……」とか、「自分は死んだら、その先どこへ行くのだろうか」と、考えたりするようになりました。まわりの誰を見ても、死についてそんなに深刻

に考えていそうな人はいないので、そのことも私にとっては不思議で、ずっと疑問に思っていました。この死への恐怖心は、私がイエス様に出会い救われるまで、未解決のまま絶えず頭の中にある問題でした。祖父母が静かに眠っていると、無性に不安になり、胸元に耳を押しつけて、心臓の鼓動を確かめたりすることもしばしばありました。

五年生になって、言うことを聞かなかった罰として「一時間座わっていなさい」ときちんと座らせられたことがありました。祖母が途中で、「あやまりなさい。そうすれば許してもらえるから」と取りなしてくれるのですが、私はなぜか意地になってあやまらず、祖母が泣きそうな顔ですすめてくれるのをよそに、言われた時間座り続けて後味の悪い思いをすることがありました。そういう時には、日頃祖父母のことをとても大切に思っていて絶対に悲しませたくないと思っている私はどこかへいってしまっていました。頑固で意地をはっている、そんな自分を「いやだなあ」と思ったりもしました。

祖父は、いつも読み物をしていて「ちょっと変わった人」で通っていました。祖母は控え目で物静かで無口な人でした。そんな二人に育てられていることに満足している私でした。祖父母を本当の両親のように思い、自然に受け入れていましたから、生みの親のことについて自分からとりたてて聞くといったこともなかったように思います。物心ついた頃、祖母から、私の父親は船に乗って外国へ行き、行方不明になり、戦後の混乱の中で母一人で私を育てることはきびしいのではないかということで、祖父母が私をひきとり、育てるようになったと聞かされました。その頃は物資がなく、大変な時期で、私を育てるのに懸命な祖父母を見ていて、二人の犠牲の上に今

の私があるのだと、子供ながらに思ったりもしました。

中学生の頃は、祖父母を経済的に助けることを考え、高校生になったら昼間働いて夜、学校へ行こうかと迷いました。でもやはり夜間の学校へ行くことに自信がなく、昼間の学校に決め、就職率の高い商業高校を選びました。高校入学と同時に、あれほど祖父母を助けなければと思っていたことを忘れてしまい、すべて自分中心に、いつも自分のやりたいことだけを優先させるような生活をするようになりました。思いやりのあるやさしい人でありたい、そう思う自分と実際の行動がかけ離れていました。

祖父母には金銭的な心配をかけたくなかったので修学旅行へは行かず、そのかわり修学旅行の行先と同じ京都で行なわれる卓球のインター杯出場に全力をそそぎました。インター杯出場の諸費用は自己負担がないと聞いていましたし、祖父母も喜んでくれるからと、祖父母孝行のつもりでした。コーチの先生、諸先輩に恵まれ、試合では実力以上の力を発揮することができ、自分でも不思議なほど勝ち進み、インター杯に出場できることになりました。その喜びとはうらはらに、いつも親しかった友人との勝敗の分け目の試合の後は、何ともいえない複雑な心境、何か割り切れないものが胸に残ったのでした。

卒業後、生命保険会社に就職しました。社会人になってからも、よく卓球の試合に出ていましたし、インター杯出場の経験があるというのでめずらしがられ、ちやほやされて、勝手気ままなOL生活でした。

そんな生活をしているうちに、だんだんと空しくなり、会社生活もつまらなく思えてきて、

「一体私は何をしているのだろう」と思うようになりました。そして、まるで何かにかりたてられるように心の空洞を埋めようと、「学校」「教室」と名のつく所、サークル活動など、手当たり次第に顔を出し、毎日いろいろな予定で手帳のページをうめつくし、その割に何も身につかない日々を過ごしていました。友人との歓談、映画、趣味、スポーツ、食べ歩きや飲み歩き、これらすべてのことはそれなりに楽しくはあっても、一つとして私を完全に満足させてくれるものはありませんでした。「私は一体どうすれば満足することができるのだろうか?」と悶々とする月日が流れていきました。

## 結婚を反対されて

主人との結婚は、そんな思いを一気にかき消してくれるかのように思えました。ところが、結婚をしたいと祖父に話すと、答えはノーでした。「世間知らずの、わがままで、のんびり屋の私が主人の家族の大勢の方々と、しかも離れた土地で、うまくやっていけるはずがない」というのが祖父母の反対の理由でした。一方私としては祖父母とは同居とまではいかなくても、せめて近くで暮らしたいというのが、結婚の条件とすら思っていました。当時船乗りだった主人も、ほぼ私の意見に賛同してくれていましたし、祖父母のことも考えての私の結婚の計画でした。それなのにとうとう肝心の祖父母の了解を得られないまま、「いつまでも無目的にお付き合いをしていても…」と結婚話をすすめてくださった主人の母の配慮によって、私は結婚を決意したのでした。

「幸せにね」沢山の友人に見送られて、主人の実家の名古屋へ向かう列車の中で、私はずっと

泣きっぱなしでした。もういよいよ家を出るという時に祖母が私に言った言葉が頭を離れませんでした。

「今まで房美ちゃんを育ててきて私達は十分に楽しいこともあったし、生きがいにもなった。本当に有難う。幸せになってね」

結婚に絶対反対の祖父を気づかいながらの、祖母の別れのあいさつでした。主人は私がどうして泣いているのか訳がわからないといったようすでした。それでもお構いなしに私はずっと泣いていました。結婚式には親友が一人だけ、はるばる長崎から参加してくれました。原爆ですべて亡くなったので親類は一人もなく、私側からのただ一人の出席者でした。

祖父母には新しい生活での幸せそうな私達を見てもらい、結婚のことはいずれ許してもらおうと、気をとりなおしての結婚生活へのスタートでした。結婚後は、主人が船乗りで家にいることも少なく、知らない土地でしばらくは淋しいだろうからと、上司が転属手続きをとってくださり、私は名古屋で引き続いて勤務することにしました。

しばらくして私の職場に「船を下りた」と主人から電話がありました。それまで何の相談も受けておらず、私にとっては突然の、主人一人の決断でした。理由は司法試験を受けたいからとのことでした。祖父母には結婚以来、折りにふれて手紙を書き、何通に一回かは返事をもらえるようになっていた矢先のことでした。それからは自分達の生活で手一杯になり、祖父母に会いに行くどころではなく、当初の私の計画もすべてご破算になりました。

船乗りをやめた主人はアルバイトをしながら試験勉強の毎日でした。実家へ立ち寄ることが多

くなっていました。一人っ子で甘えん坊の私は、人に慣れておらず、親戚の方が多く大家族の村上の家風には、およそそぐわない者でした。それでも気がつかない嫁と言われないために両親の顔色をうかがいながら、いつも落ち着かず、おどおどびくびく……。仕事からの帰り道の村上の家への訪問は、そんな私にとってとても辛いことの方が多かったように思います。(村上のお母さん、ごめんなさい、今はそうじゃありません)だんだんと貝のように心を閉ざして、用心深く自分の胸の内をほとんど話さなくなっていた私は、両親にとって何と可愛気のない嫁だったことでしょう。自分を守ることだけに必死だったのです。自分の内面を見る時、確固たるものが何もなく、不安定で不自然な姿勢で生きていて、いよいよ追いつめられると最後には居直ってしまう、そのような者でした。

一九七五年祖父が急に亡くなりました。その少し前に結婚後初めて祖父に会うことができ、結婚を許してもらえたと安心し、これからは祖父母にできる限りのことをしようと思っていた矢先のことでした。祖父の死は私にとって、残念に思えてなりませんでした。「何の恩返しもできなかった」という思いでいっぱいでした。

それから一年後、祖母が亡くなりました。祖父母の死を思い出すたびに、「彼らの面倒をみると約束しての結婚ではなかったか」というやり場のない思いがつのり、相変わらず実家に足繁く通う主人を見ては、「祖父母のことも顧みて欲しかった」などと思ううちに、いつからか主人に対する苦々しい思いが積み重なるのでした。

色々なことは試験に合格してから考えようと、アルバイトを転々としながらの生活で、主人の

頭にあるのは司法試験のことだけでした。一方私は「主人も辛かろう」と思う心の余裕はなく、それどころか私自身、祖父母の反対を押し切り自分のわがままを押し通した結婚への当然の報いなのだ、罰を受けているのだと、半ば人生までもあきらめ、やけっぱちになっていました。その頃は主人に何か言う気力さえありませんでした。仕事にも今一つ意欲が湧かず、苦しく思うことがたびたびでした。そんな中で、職場ではいろいろな形で大勢の方々にお世話になり、今も心から感謝をしております。

## イエス様に出会って

一九七八年に、長男が与えられました。子供のことはすっかりあきらめていた折だけに、とまどいながらもいつからか喜びと期待が膨らんでいきました。妊娠中に受けたいろいろな検査はことごとく結果が悪く、出産が間近になるにつれて不安が募る中、無事に長男が生まれました。これまでの私は自分勝手に生きていて、世間の常識や知識にも乏しいことが分かっていましたから自分に自信がなく、「私のような母親に育てられた子供はどのように育つのだろうか」などと不安に思い、いろいろな研究会やセミナーに参加してみたり、本を読みあさったりしました。けれどもそれらの本の中には、著者によって意見が違うものや、ひどい時には全く逆のアドバイスが書いてあることもあり、「一体何が本当なんだろう」と迷うばかりで、何を土台にしたらよいのかわからない、混沌とした毎日でした。

主人がこの年に司法試験に合格し、翌一九七九年には東京へ転居することになったので、私は

退職しました。長男ができて、私は家で子育てに専念することができますし、主人はもう受験生ではないのです。しばらくは、今までとは全く違う、すべてがバラ色にぬり替えられたかのような幸せな生活が続くかに見えました。そんな時、私は、ふと、今の幸せの不安定さに気づきました。「家族みんながいつも元気でいるという保障は何もない。万が一、家族の誰か一人が死ぬようなことがあれば、たちまち今の幸せも、どん底の悲しみに一変してしまうのだから……」そして、子供の頃日曜学校で聞いた「イエス様を信じる人は天国に行きます」という言葉のかすかな記憶がよみがえってきました。ちょうど育児に関しても指針をなくしていた時期でしたから、聖書のことをもっとよく知りたいと思い、友人に連れられて教会の門をくぐりました。教会の中に入った途端、讃美歌が聞こえてきました。なぜか涙がとまりませんでした。

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。（ヨハネ　1・12）

「神様を信じていらっしゃるでしょう。お祈りしましょう」とすすめられるままに牧師さんが先にお祈りしてくださるとおりにお祈りしました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ　1・9）

一九八三年、横浜へ転居し、十月には長女が与えられました。出産までは長男の時と同じよう

に体調が悪く、「今度こそお産で死ぬかもしれない」と思いましたが、不思議に以前のような死への恐怖心はなく、お腹が痛み出して病院へ行く前には、イエス様のことを主人に伝えたいと思い聖書を開いたまま机の上に置き、初めて主人のために祈りました。無事に女児を出産、運ばれる担架の上で思わず出た言葉は「イエス様ありがとうございました」でした。何度もそう言いながら、感謝の気持ちと嬉しさで、涙があふれました。

教会で月々事務的に配られてくる月定献金袋。いつも見慣れている光景なのですが、ある日私の心の中に小さな疑問が起こりました。「捧げたいだけを誰に強いられることもなく神様に捧げるのが献金なのではないだろうか?」何か人間的な押しつけが加えられているような献金制度がすっきりしなく思えてきました。ほかにも色々と気になることが目について、少しずつ教会から足が遠のいていきました。ある時は、ぎこちなく教会の中をのぞき込む私達を、教会の方々は申し訳ないほどの笑顔ともてなしで迎えてくださり、どういう訳か次からよけい行き辛くなってしまうのでした。

主人はいつも教会の前まで私達を送り届けてはくれますが、自分は教会の中へ入ろうとしません。たまたま中まで入った時にも、教会を出たあとで「何と堅苦しい所だ」とひと言、次からは主人と一緒になどとはとても望めそうもなく、家族で喜んで集える所へ導いてくださいと祈りつつ、いろいろな教会を転々といたしました。

一九八四年に、多摩へ転居して間もなくのこと、ご近所のお宅のテーブルの上に置いてあった「光よあれ」が目にとまりました。それが野田さんご夫妻との出会いのきっかけとなり、軽井沢

のバイブルキャンプにお誘いいただき、家族で参加させていただきました。キャンプ場は解放感とさわやかさ、言葉では表現しようのない、今までに味わったことのない不思議な雰囲気に包まれていました。二回目のキャンプにも家族で参加しました。この時、何かと質問をし、議論をしかける主人と、終始お一人お一人が平安そうで物静かで、それでいて決して冷やかでない集会の方々とは全く対象的な光景でした。それを見て、私は思わず「神様早く主人をお救いください」と、祈らずにはいられませんでした。

主人はキャンプ以来何かしら落ち着かず、私が集会のメッセージのテープを聞くことや、集会の話をすることさえ、ひどく嫌うようになっていました。本当に今思うと恥ずかしいのですが、私は、そんな主人に自分でもよく分かっていない聖書のみことばについて、ああ書いてあるとか、ここにはこうも書いてあるとか、それでも一向に耳を貸さない主人のことを「救われにくい、気むずかしい人だから」と口に出して責めてみたり……そのような傲慢な私に、イエス様は聖書を通して教えてくださいました。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1、2）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

主人を救ってくださるのはイエス様のみ心なのだから、私はただ感謝して待っていればよいのだと知りました。

一九八四年十一月のキャンプにも家族で参加しました。ベックさんが個人的に主人と話をする時間をとってくださり、その時主人はイエス様を自分の救い主として受け入れ、救われました。その時から私達の家庭はクリスチャンホームとして、今までとは全く違った日々を過ごすようになりました。

## 一瞬の事故

そんなある日のこと。めったに早く家に帰ることのなかった主人が、めずらしく早く帰り、家族で車で出かけた帰り道でした。脇道から土手の道に上がり、右折しようとした直後のことでした。私が運転している側に、いきなりスポーツカーが激突しました。「相手の方はけがをしていない、大丈夫」主人のこの声と同時に、私はすーっと気が遠くなって倒れました。私達家族は救急車で運ばれ、私が翌朝になってようやく気がつくと、医者の質問と説明がありました。診察の結果、「記憶が断絶している部分があるので多分異常が出ます」といともはっきりと断言されてしまいました。私は、頭のCT（断層写真）を撮るために担架で運ばれていく時、傍らにいた主人に、祈ってほしいと頼みました。「それっきり、どうかなってしまうのでは」という気持ちがありました。それまで人前で祈ったことなどない主人が、私のために祈ってくれました。私はすっかり平安に満たされました。

ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。（Ⅱコリント　1・9）

翌日になって、外傷はないし、いったん自宅に戻って安静にして過ごし、一カ月後にまたＣＴを撮るということで退院することになりました。

再度ＣＴを撮るまでの一カ月ほどの間、異常が出ると言われていたこともあって、私はふとこんなことを考えました。「イエス様はすべてを最善に導いてくださっていると信じています。でも、もし脳に障害がおきて聖書も読めなくなってしまったら、どうやってイエス様のことを人に伝えるのかしら？　何も分からなくなっても、ただにこにこして喜んでいなさいってイエス様は言われるのかしら？　子供達がまだこんなに小さいのだから、もう少し大きくなってからにしてほしかったなあ……」なんて。

聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう。」と言う人たち。あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。（ヤコブ　4・13、14）

いろいろ考えるのはやめよう。そう決心してからは、本当に何も思い煩うことなく過ごせるようになりました。爆弾をかかえたような自宅療養中、子供の世話は野田さんご夫妻がしてくださ

り、近くの集会の皆さんの手料理を毎日運んでいただき、私達夫婦は毎日まるでピクニック気分といった感じでした。沢山のお見舞いや励ましのお便りもいただきました。主にある家族のすばらしさを味わわせていただき、今も心から感謝しております。

幸いなことに、一カ月後の再検査では異常なしと診断され、今日にいたっております。

一応診察の結果は異常なしでしたけれども、それまではスポーツで鍛えて健康、体力面には人一倍自信があった私も、事故以来、健康もすぐれず、体力も急に衰えました。そうなってみて初めて、起き上がれたこと、その日元気であることにさえ本当に感謝できるのだということを体験しました。以前は体力があり、病気らしい病気もしたことがなかったので、病気がちの人に「気持ちの問題じゃない？」、元気がない人に「覇気がないわね」、と冷たく思いやりのない心で接することもあった自分を思い出し、心から悔い改めました。

しばらくして、警察から事故のことで呼び出しがありました。警察官の猛々しい言葉にいつの間にか私も負けずに大きな声を張り上げ、つい抗議をしてしまいました。でも「すべてのことをご存知で、正しくお裁きになる神様にお委ねしよう」と決めた途端、心が平安になりました。間もなく、事故についてはすべて解決しました。

そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩ましたり、これによって多くの人が汚されたりすることのないように……しなさい。

（ヘブル　12・15、16）

その頃、バイブルキャンプへ向かう車の中で、結婚以来これまで主人に抱いていた不満や心のわだかまりを初めて主人に話しました。毎日忙しくて主人とはめったにじっくり長い時間話す機会がない状態でしたし、車の中は電話で話が中断することもないし、主人が聞きたくなくても聞かざるを得ないという格好の場所だと思ったのです。日頃、イエス様が最善の時に最善の方法で解決してくださるようにとお祈りしていましたし、そのせいで与えられた機会だと思いました。主人にとっては、私の話したことは、うすうす気づいていたこともあるけれど、ほとんどは意外だったらしく、ずいぶん驚いたようすでした。日頃の達者な弁舌で反論されるだろうと覚悟していましたのに、なぜか主人はにこにこしているのです。しばらく沈黙が続き、気がつくと二人共新しい喜びと感謝でいっぱいになり、二人してイエス様を賛美しておりました。

私たちも以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快楽の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。

（テトス　3・3～6）

こうしてイエス様に救われたとはいえ、弱い本来の性質によって相変わらず罪を犯し、イエス

様を悲しませることの多い私なのですが、それでもイエス様が忍耐をもって絶えず導いてくださっている事実を信じ、感謝する時に喜びが湧いてきます。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

（Ⅱコリント　3・18）

また自分自身を見つめる時、自分は全く頼りないものなのですが、イエス様がすべてのことに最善をなしてくださると約束してくださいますから希望をもつことができるのです。

それればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。

（ローマ　5・3～5）

子供を育てていく中でも、私自身の愚かさ、弱さなどをすべて知っていてくださるイエス様に祈る時、イエス様が私の足りないところを補ってくださり、子供達にとって最善に導いてくださることを信じつつ、お委ねして歩むことができますから感謝です。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

## 母の救い

私が小さい頃、母は夏になるとおみやげをいっぱい持って、祖父母と暮らしている私のところへ会いに来てくれました。中学生の頃、母が私を連れて再婚するという話を聞き、それ以来私はひどく母を避けるようになり、同じ九州に住んでいてもあまり会うこともなく絶縁状態になっておりました。私が結婚してからは、主人の勧めもあって、私達母娘は時々会うようになりました。でも顔を合わせるとたちまちうまくいかなくなります。あげくの果てに母は「私達はうまくいかないはずよ、私はあなたを育てていないから」などと言い、いつも気まずい思いをするのでした。それでも母が帰る頃には、お互いに無理に気嫌をとりあって別れる、という状態でした。

もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。

（Ⅰテモテ　5・8）

最近になって、私は母とゆっくり話をすることができました。私の胸のうちにあった母への不満や悲しみも正直に話しました。私がイエス様を知らなかったら、あまり会うこともなく、形ばかりの母娘関係で終わってしまったのかもしれないこと、また母は最近「よくしてくれるようになったと感謝をしてる」と言ってくれますが、それは私が自分の努力によってしているのではなく、「年をとったから人間がまるくなった」というのでもなく、イエス様が私にそうしなさいとおっしゃるからこそできるのであること、そして何よりも、イエス様が母のことを心から愛してくださっているのだと母に伝えることができました。真剣に話を聞いていた母は、「分かってい

る」とひと言……。

翌日のバイブルキャンプに母も導かれ、ベックさんとお話する機会が与えられ、母は救われました。一九八九年七月二十二日のことでした。そして八月二十日、えびののバイブルキャンプで、母は洗礼を受けました。今までの母の苦しみを誰よりもよく知っていてくださったイエス様が、母にやさしく語りかけてくださったことでしょう。主人がみことばを読んでいる間、母はずっとふるえて泣いていました。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。（詩篇　103・1～5）

以来母は次のみことばにささえられ、慰められているのだそうです。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

## 私のバプテスマ

私は吉祥寺キリスト集会に集うようになり、メッセージを聞いたり、集会のみなさんとお付き

合いしたりすることによって「救いの確信」が与えられました。そして私は、自分の罪をはっきりと知り、口で告白し、イエス様を救い主として受け入れ救われました。また、このことを私を知ってくださるみなさんにはっきりと態度で表わしたいと思うようになりました。「み心でしたら、バプテスマを受けさせてください」と祈り、お委ねしつつ期待しておりました。そして、初めて参加した四国のバイブルキャンプへ行く途中で洗礼式があることを知り、私もぜひ受けたいとベックさんに申し出て、美しい川でバプテスマを受けることができました。全く予期していないことでした。

「だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」（マルコ　11・24）

このようにして、これまでイエス様は私のあらゆる問題を知っていてくださり、最善の方法で導いてくださいました。これからも導いてくださると信じています。そして何よりも、死の恐怖から解き放ってくださったばかりでなく、家族にも永遠のいのちを約束してくださっています。

主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。（ルカ　1・45）

聖書はこう言っています。「彼（イエス）に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10・11）




▲愛犬マリリンと。

# イエスさまが私を愛していてくださる

上野鮎子

一九六三年東京に生まれる。大田区立地雪小、西宮市立鳴尾北小、札幌市立幌西小、大田区立雪谷小を経て武蔵野市立第五小、玉川学園中学部、玉川学園高等部卒。日本大学芸術学部文芸学科中退。家族は父松夫さん、母和子さん、祖母古川けいさん。趣味は料理。

▼神戸での親戚の結婚式で、いとこの江本美弥子さん(右)と。



# 1

私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりつかまえられました。あなたは、私をさとして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいましょう。天では、あなたのほかに、だれを持つことができましょう。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。この身とこの心とは尽き果てましょう。しかし神はとこしえに私の心の岩、私の分の土地です。（詩篇　73・21～26）

四年前になります。イエスさまのもとに導かれたとき、私は最近よく耳にする「心の病」に苦しんでいました。ちょうど聖書のみことばにあるとおりの、愚かでわきまえのない獣のような状態でした。あのころの自分を「まるで丸太のようだった」とよく思います。ベッドに横になることも、座ることもできず、床に転がっている丸太ん棒。ただ黙って転がっているだけならそれ程じゃまにもならないでしょうが、この丸太は呻き、叫び、片時も目を離すことができません。私自身にとって、また家族にとって、生きることは地獄の苦しみでした。呼吸をするたび、心臓の鼓動を感じるたび、生きていることが苦しく堪えがたくて、一瞬たりとも死を願う心の休まるときはありませんでした。私の心の中には憎しみが渦を巻いて燃え盛っていました。その憎しみは自分自身に向けられていて、おまえのような醜いもの、腐ったものはこの世に存在していてはい

けない、おまえは跡形もなく消えなければならないと叫び続けていました。死刑。だれが何と言ってもどんな理由があっても決して取り消すことのできない判決。それだけが自分にふさわしいものである、他には解決の道がないとかたく信じていました。その一方でつねに愛されたい許されたいという渇望がありました。だれかがありのままの私を見て、私の醜さ愚かさ嫌らしさのすべてを知り、それでもなお許して愛してくれたら私はその愛によって生きられる。「生きていてもいいよ、ここに存在していいんだよ、愛しているからいてほしい」。そんなふうに言ってもらえたら楽になれるのに。自分には自分を愛することができない。自分には自分を許すことができない。だからだれかが現われて、私に代わって「生きていてもいいんだよ」と言ってほしかった。そのとき私は知りませんでした。人にはそんなふうに人を愛することができないことを。人にはできないことができる方がいらっしゃることを。私のすべてを愛することのできるだれか、私のすべてを許すことのできるだれか、今あるままの私を無条件で受け入れてくれるだれかを私は探していました。

## 2

私は夢見がちな子供でした。いつでも心の中でお話をこしらえて楽しんでいました。あまり夢中になり過ぎて、空想の世界のほうが現実よりも生き生きとしているように感じることもしばしばでした。そんなふうでしたから、将来に対する夢も実現可能な枠を越えて広がっていきがちで

した。夢がただの夢のうちはそれでもよかったのです。けれどもやがて夢はそれを実現したいという野心をともなうようになり、しかもその野心は自分自身を飲み込んでしまうほどに膨れ上がっていきました。

もう一つの私の性質の特徴は、何事に対しても完全主義であることでした。あらゆる場合に完全を要求し、自分に妥協することを許しませんでした。完全か無か。それが私の信条でした。その信条を誇りにさえしていました。私は傲慢そのものでした。プライドが高く見栄っ張りでうぬぼれていました。自分自身を磨く。能力を伸ばす。そうすれば私だって何かになれる、なってみせる。もし何にもなれないようなものだったら存在している意味がない。

「もし作家になれないのなら、今死んでしまったって構わない。それくらい真剣に作家になりたいの」。友人たちにそう言った晩のことを忘れることができません。高校二年生のころのことです。いろいろなものに憧れ、いろいろな夢を見ました。その中で作家になることは一番最後まで残った、一番大切な夢でした。完全か無か。作家になるか死ぬか。これが私の完全主義の行き着いた結論でした。

文章を書くことは、私にとって呼吸するのと同じように自然なことでした。ものごころつくとすぐに頭に浮かぶ物語をノートに書き始めました。それは何よりも楽しい作業でした。書いているとき、他のどんな遊びにもない興奮と心の躍る特別な感覚を味わうことができました。最初はおとぎ話のようなものに過ぎませんでしたが、そのうちに小説を書くようになりました。初めて長編小説を書きだした中学二年の夏休みのことは、今もはっきり覚えています。幕末を舞台にし

た時代小説でした。十冊以上の本を読んで時代考証をし、ゆかりの地をたずねたりもしました。頭の中はもう小説のことで一杯でした。何かに憑かれたように、来る日も来る日も一日中机に向かっていても飽きることはありません。後から後から湧いてくるイメージを追って、遅れないで書き留めていく。書く手ののろさがもどかしいほどでした。冷房も扇風機もない部屋で汗がしたたるのにも気づかず、眠っていても夢の中でストーリーを考えていました。

今思えばこの小説を書くという作業だけが、私が悩んだり迷ったり苦しんだりせずにできた唯一のことでした。他のあらゆること、ふつうは人があたりまえのようにやっているいろいろなこと、現実の世界では私は順応できない落ちこぼれでした。いつも自分だけが異端児のような気がして学校に行くのが嫌でした。小学校の高学年のころからそのような自意識過剰は年ごとにひどくなっていきました。私はいつも欠席日数の多い問題のある生徒でした。ちょうど登校拒否という言葉が一般的に使われるようになってきたころでした。

中学生になっても私の悩みは同じでした。この世の中に自分の居場所がないような気がする。だれもが私を拒絶していると感じる。毎晩ベッドの中で夜が明けないように、明日が来ないようにと願いました。どうしても学校に行くのが嫌でずる休みをしてしまったときや、やりはじめたことを最後までやり通せなかったときには、なんだか自分がとてもみじめに思えて情けないと思いました。けれども情けない自分の姿を直視することはとてもできません。だから私は自分自身に言い聞かせたのです。「私だって捨てたもんじゃない。きっといつかいいものになれる。書くことがあるじゃないか。私にはきっと才能があるに違いない」。そう思うことは自尊心が強く人

に弱みを見せたくない私の支えでした。

完全なセンス、完全な才能。私が自分に要求するものはすべて完全なものでした。けれども現実の私には完全なところなどありません。自分に対する失望が深まるにつれて、作家になるという野心が膨らみました。他に何もできなくても小説を書くことができれば、完璧にできれば、まあいいか。私が生きているのは書くためなんだから。一度そう決めてみると、何ごとにも極端に走りがちな私の思いが「作家になるか、死ぬか」というところまで行くのに時間はかかりませんでした。

傲慢と卑屈とは紙一重。私の状態はちょうどそんなふうでした。あるときには有頂天になってうぬぼれ、次の瞬間には絶望のどん底に沈む。絶えず極端から極端へと行ったり来たりして中間ということがありません。自分でも感情のバランスを取ることができず、いい気分にも憂鬱な状態にもただ引きずられていくだけでした。そんな自分を持て余し頭を抱えることもありました。けれどもどんなに悩んでも苦しんでも、誇り高い私には「自分はただの人なのだ」と認めることができませんでした。ただの人。人間は無力で愚かなものなのに、ただの人も特別な人もない、みんな同じであるのに、私だけは違うと思いたかった。自分には他のだれにもない何かが、大切なすばらしい個性があると。精神的に不安定になることがあっても「芸術家気質」だとかたづけました。ジェットコースターに乗っているようにくるくる変わる気分も作家になるための素養の一つと考えました。最後の砦を守るような気持ちで、頑固に自分の才能にこだわりました。

「私はいつかきっと大したものになれる」という頑固なまでの自信（それはいつも劣等感の裏

返しでもあったのですが）がぐらつきだしたのは高校を卒業するころでした。私の通っていた玉川学園は大学まであります。短大でも四年制でも玉川大学に入るつもりであれば受験勉強は必要ありませんでした。でも私はどうしても文芸学科のある大学に行きたかったのです。父の反対を押し切って大学を受験すると頑張りました。予備校に通い、家庭教師につきました。英単語、世界史、古典。暗記しなければならない量は膨大でした。少しずつ神経が苛立つようになりました。心がカサカサに乾いていくような気がして「安らぎがほしい」と思いました。けれども私の中には完全主義の暴君がいて「もっともっと」とつねに全力疾走するように自分をムチ打ちます。安心して休む場所を求めているのに見つけることができず、私の心にだんだんと不健康な考えが芽生えはじめました。集中することができない。本を読んでもさっぱり頭に入らず、同じページを三度も四度も読み直す。レポートを書こうとノートを開くと、頭の中をいろいろな考えが一斉に駆けめぐるような気がする。

私は大好きだった小説を書くことをやめました。確かに資料を調べる時間もありませんでした。けれども今だから認めることですが、たとえ時間があったとしても私にはもう創作するエネルギーも集中力も残っていませんでした。そのかわり、詩ともエッセイともつかないとりとめのない文章を書きつらね、心のはけ口にしました。「優しさに憧れて」。私が自分でわけもない独り言の山、と呼んでいた雑文を文集にしたときの題名です。こんなことを書きました。「風になりたい。無力でもいい。本当は無力であることのほうを望んでいるのかもしれない。生きることは苦しいから。一生懸命になることは心を傷つけるから。風にのまれて消えてしまいたい。人生の傍

観者になって、あてどもなくサラサラと世界を流れていたい。何ものにも束縛されず、どこまでも流れて行きたい」。

疲れているのに正直に疲れていると言えなかった。もう休みたいのに休むことができなかった。あんまりプライドが高くてそんな自分を許せなかった。それで「風になりたい」「人生の傍観者になってあてどもなくサラサラと」などと格好をつけていたのです。人に見られたくない、自分でも見たくない自分の弱さを私はきれいな言葉で飾って上手に隠しました。このまま書けなくなるのではないかと不安になることもありました。でも即座にその気持ちを打ち消して、「スランプなんかじゃない。私にはスランプなんてありえない」と意地になって自分に言い聞かせました。それはぐらつきだした自信を守ろうとする最後の抵抗でした。

もう私には春が来ない。万人の上に春が来ても、私にだけは来ない。そんなふうに思っていた私にもやっぱり春がめぐってきました。受験勉強から解放され、あんなに望んでいた日大芸術学部文芸学科に入学しました。そうなっても、私の創作意欲は戻ってきませんでした。大学生活は私が考えていたようなものではありませんでした。楽しいこともありました。でも、それまでずっと私につきまとってきた悩みは解決しませんでした。だれとも理解し合えない。相変わらず私は自分が異端者だと感じました。仲間がほしかった。どこかにいる、どこかで必ず見つかる。その希望を大学という世界はかなえてはくれませんでした。友人たちと自分とどこが違うのか説明することはできませんでした。わからないまま、仲間意識を持ちたい一心でみんなのやっていることを自分でもやってみました。何をやってみても心の空洞は埋まりませんでした。

もう時間がないという言いわけも使えません。私は書けないという事実に直面しなければならなくなりました。疲れているんだ。ちょっと休めば元気になれる。そう思うことで自分を慰めてもみました。けれども日が経つにつれて、時が解決してくれるという望みも空しく思えてきました。もともと自分に対して愛のない残酷な態度をとっていた私は、このときとばかり自分を責め立てました。「おまえのようなくずは生きている価値もない」。そう言われても、もう私には返す言葉がありませんでした。

どこかに何かがあるかもしれない。大学をやめてアルバイトを始めました。そのとき私の頭にあったのは一本のテレビコマーシャルでした。作家の野坂昭如氏が体験したアルバイトの数々がテロップで流れます。画面は大きなブルドッグで「犬洗い一匹百円」という小さな看板がわきに立っています。それを見て私も、と思ったのです。いろいろな職業を体験し、いろいろな世界を見る。大人の世界を見れば大人の小説が書けるようになる。なにしろかたい頭で「作家になるか死ぬか」と決めていた私です。自分の中で自信が音を立てて崩れていってもなお、夢を捨てることはできませんでした。自分がどのようなものであり、何のために存在しているのか、自分にはわかっていると思いました。自分が何を目指しているのかもはっきり知っているつもりでした。そして知らず知らずのうちに自分で目指しているつもりだった高みではなく、果てしない奈落の底に落ちていく結果になったのです。

いろんなアルバイトをしてみました。昔から本を読むことが大好きでしたから、本屋さんでも働きました。楽しくて何もかもが変わったように思えるときもありました。もうこれで安心、元

気になった。そう思ったのもつかの間、失意と憂鬱はどこまでも追いかけてきました。

自分自身に対する私の態度は横暴で残酷でした。こうしたい、これがほしいという自分の要求に応えられるときはまだよかったのです。けれどもいったん自分の望みどおりに動けなくなり、自分の要求を満たせなくなったとき、私の私に対する判決は容赦ないものでした。自分は生きていてはいけない、生きる資格がないと思いました。だれに何と説得されようと、そういうふうにしか思えなかったのです。自分でもその思いが病的だと知っていました。ただ知っているだけで、捨てたいと望んでもどうしても捨てることができませんでした。もう心も体もまるっきり自分の思うようには動かなくなりました。自分の心は病んでいるのだと思いました。すべてはこの病気のせいだ。書けなくなったこと、生きていてはいけないと感じること、頭ではこうしたほうがいいとわかってもそのとおりに行動できないこと。みんな心を病んでいるからだと思いました。この病気さえ治れば、そうすればすべてよくなる。また笑えるようになる。書くこともできる。元気になって、エネルギーに満ちて。どんなに熱心に願ったことでしょう。「この病気が治れば」と。

わらにもすがる思いであらゆることを試しました。医者、薬、サークル活動、仕事、音楽……。思いつくかぎりの方法を試してみて失敗し、今度こそはと決心してさらに挫折を重ねる。出口のない迷いの道でした。そんな中にあっても決して自分の中で崩れていった夢——私だって何かになれる、きっとなれる。——を捨てることはできませんでした。私だって捨てたもんじゃない。どうしてもそう思いたかった。自分の本当の姿を見るのが怖かった。人一倍感性が豊かだとか、ふつうの人が気づかないことに気づくとか、格好いい言葉で表現して本当の自分を見まいとしま

した。どうしても、もうだめだと認めることができません。認められないゆえになおさら追いつめられて苦しみが増していくというのに。

## 3

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。（エペソ　2・1～3）

あのころ、あの苦しかった日々、私の考えていたことはとりとめもなく矛盾だらけで独りよがりのものでした。今から振り返って思い出すことは難しいことです。ずっとあとになって聖書の中に、罪過と罪との中に死んでいた者ということばを見つけたとき、私のことを言っているようだと思いました。私はこうしたい。私はこうなりたい。私はこれがほしい。私が不幸のどん底におっこちたのは自分の心の思うままを行なった結果でした。かたくなで愚かで、どうしても自分を捨てることができなかった私。とうとう最後には身を起こすこともできなくなって「助けて」と呻き、それでもなお強情を張り続けた私。たとえどんなに苦しくなっても、いつまで苦しみが

続いても、神様が私の心を準備してくださらなかったら、私は自分の本当の姿を直視することができなかったでしょう。なぜなら私が自分のことを「このどうしようもないくず」と言うとき、それはいつも傲慢の裏返しだったからです。だれかがこんな私でも愛していると言って理解を示してくれたなら、そしてこの心の病さえ治ったら、そのときには私は才能豊かな結構いい人間になれる。最後まで自分にさえ隠し通していた本物の本音はこんなところだったのではないか、と今は思います。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――（エペソ　2・4、5）

確かに、反抗的で可愛げのない態度をとり続けていた私を神様は愛していてくださいました。あわれんで助けの手を差し延べてくださいました。それはこういうことです。私の中にある勇気を総動員しても、とてもありのままの自分を見ることはできなかったでしょう。けれどもその自分の姿を見て、知って、認める以外には果てしない悩みの迷路から抜け出す道はありませんでした。とうとう最後に、私は何にもなれない。私はちっぽけなとるにたりない存在だ。私の力では何もできない。そう認めないわけにはいかなくなりました。それは神様の愛にあふれたご計画でした。いつでも見かけの劣等感や謙遜さの陰にあった自尊心が粉々に打ち砕かれ、気取るも格好つけるもなくなりました。ペッチャンコの、木っ端みじんの状態。それが私が抱えてきた悩みの

終点であり、また喜びの出発点でもありました。

「どうせ私なんかだめだ」などと言ってみることはあっても、もう本当にだめだと認めることを私はいつも恐れていました。けれども恐れる必要はありませんでした。「どうしよう、実は私はこんなものだったなんて」。恥ずかしさと悔いと悲しみで胸が一杯になった時、神様はそれこそ私が求めてやまなかった完全な愛をもって「そのままでいいよ」と言ってくださったからです。

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

（詩篇　51・17）

長い長い悩みの日々でした。永遠に続く終わりのないものだとさえ思えました。失意と絶望の繰り返しのあと本当に一番最後になって、とうとう私は「神様助けて」と言うことができました。一九八六年春。大学を中退してから三年後のことです。

唯一まことの神であるイエスさまは、私のちっぽけな想像をはるかに越えたお方でした。「私は救われる価値もない。私なんかたとえ神様だって見捨てたいと思うに決まってる」。私はそう思っていました。それとも神様は「もう少し頑張って、いくらか良くなったら愛してあげよう」と言われるのじゃないかと思っていたのです。イエスさまの答えは違っていました。「そのままでいいよ」と言われたのです。

初めてベックさんからお話をうかがったときの嬉しかったこと。「イエスさまは鮎子が大好きだよ」とベックさんは言われました。驚きました。信じられないと思いました。イエスさまが私

のことを好きだなんて。いつだって私は落ちこぼれだったのに。自分で認めたくないから必死で目をそむけているときも、みんながあたりまえのようにやっていることでも私にとってはあんなにつらく大変に思えたのに。こんなみじめなものを神様が好きと言ってくださるなんて。以前、万人の上に春が来ても私にだけは来ないと思っていた私は、このときも同じ反応をしました。神様が万人を愛しているとしても私だけは愛されない。疑い深く素直に信じられない私に、ベックさんはゆっくりとわかりやすく説明してくださいました。

私が許されない罪と思っていたこと——自分の弱さ、無能さ、根気のなさ、優しさの欠如など——だけが問題ではないこと。一番問題なのは私がしたたくさんの間違いの一つ一つではなく、自分勝手に心の思うままに生きてきた状態だということ。それは、自分を神として生き、まことの神様にそむくことにほかならなかったこと。私は多くのあやまちを犯したと思っていました。死刑に値すると思えたほどです。でも一度も神様にそむいたと思ったことはありませんでした。自分のしたいようにすること、夢を実現しようとすることは私にとって自然で、罪の意識は全然ありませんでした。このときになってはじめて、作家になるか死ぬかと決心したとき神様が決めるべきことを自分で決めていたのだと知りました。また「おまえなんか死んでしまえ」と自分に言っていたとき自分を神としていたことがわかったのです。

ああ、でも神様のご計画は、そむいた私を罰して死刑にすることではありませんでした。そむき続けている私を、そむいているうちにもう愛していてくださり、救いを用意してくださったのです。私は赦されたいと切に願っていました。同時に絶対に赦されないとあきらめていました。

ベックさんは神様が用意してくださったイエスさまの十字架という救いの道について話してくださいました。私のそむきの罪のために、私はもう罰を受けなくてもいい。イエスさまが二千年前に私の罪のために十字架にかかり、私の代わりに罰を受けてくださったから。

しかし、彼（イエスさま）は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。（イザヤ　53・5、6）

そして今、神様は私が「ごめんなさい。私は神様にそむいていました。赦してください」と言うのを待っていらっしゃる。赦したいと思って待っていらっしゃる。それまでこんな嬉しいニュースを聞いたことはありませんでした。「ごめんなさい。赦して」と言うだけで赦される。私は心から喜んで、また感謝してベックさんに悔い改めのお祈りをしていただきました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ　1・9）

## 4

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つ

のも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。（詩篇　139・1～4）

イエスさまは私のすべてを理解してくださいました。私自身よりも深く。

私だけ他の人と違っている。何か変だ。この自意識が私の悩みの根本でした。自分だけ異次元に住んでいるような気がしていました。そしてあるときには自分だけ特に悪いと思い、別のときには自分だけ特にすばらしいと思う。両方の極端な思いの間でバランスを失っていました。他の人には私のことなんか理解できっこない。私の持っている悩みは特殊なんだ。そう思っていました。確かに人にはできないことでした。私は自分に完全を求めたように人にも完全を求めていました。どんなことがあっても見捨てない愛。完全な理解。私自身が完全ではなかったように、私に完全なものを与えられる人はいませんでした。完全な方はただ神様のみです。私は神様に求めるべきでした。理解されたい、愛されたい、赦されたい、受け入れられたい。長いことあんなに必死になって探し求めていたものがすべてここに、イエスさまのもとにありました。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

イエスさまはこの私を呼んで、招いてくださいました。「すべて疲れた人、重荷を負っている

人」とイエスさまが言われたとき、私もそのうちの一人でした。特殊ではなかったのです。

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。

（ローマ　3・10～12）

今では私は自分だけが特別に良いものを持っているわけではないと知っています。同時に自分だけ特別に悪いものを持っているわけでもないと知っています。ただの人。私は感謝して「みんな同じただの人、私も同じ」と言えるようになりました。このとるにたりない、つまらない存在である私を、イエスさまが大好きと言ってくださるから。

幸いなことよ。ヤコブの神を助けとし、その神、主に望みを置く者は。主は天と地と海とその中のいっさいを造った方。とこしえまでも真実を守り、しいたげられる者のためにさばきを行ない、飢えた者にパンを与える方。主は捕われ人を解放される。

（詩篇　146・5～7）

まことに、イエスさまは本当の意味での解放を与えてくださいました。横柄な専制君主である自分自身からの解放です。捕われ人。私はまさに捕われ人でした。「風になりたい。何ものにも束縛されずにどこまでも流れて行きたい」。そうノートに書き綴ったとき、私は知りませんでした。自分をがんじがらめにして、どこにも行けないように縛りつけていたのは自分自身の自我だ

ったことを。ふつう使われる「わがまま」とか「エゴイズム」というのとは少し違うかもしれません。イエスさまがおっしゃる「わがまま」とは、自分は自分のもの、自分の人生は自分で決める、という態度ではないでしょうか。私は自分は自分のものだと思っていました。作家になるか死ぬか。何者にもなれないのなら生きている資格がない。このエゴイズムが私を縛りつけ、苦しめていたのです。

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」（イザヤ　43・1）

私はイエスさまのものです。そのことを知りました。そしてイエスさまのものであることはすばらしい恵みであることを知りました。自分の支配者としての私は、横柄で身勝手な嫌なやつでした。役に立たない、思うようにならないと感じるとすぐに「おまえなんか死んじまえ」と言うのです。私の新しい主人、イエスさまはまるっきり違います。役に立たない、思うようにならない私をも愛をもって赦し、どんなときにも慰めてくださいます。私の才能、私の夢。かつての私にはそれがすべてでした。けれども、そんなものは私を幸せにするのには何の役にも立ちませんでした。苦しいつらい目はもうまっぴらです。私は私の言うことを聞きたいとは思いません。私にとって何が必要か、どうすれば幸せかを知っているのはイエスさまだけです。私の中のあんなに強烈だった思い。「何がなんでも作家になるんだ」。この思いが嘘のように跡形もなく消え去り

ました。自分でもびっくりするほどです。

主よ。私は知っています。人間の道は、その人によるのでなく、歩くことも、その歩みを確かにすることも、人によるのではないことを。（エレミヤ　10・23）

いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何かもらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。（Ⅰコリント　4・7）

私に才能があるかないか私は知りません。イエスさまはご存じです。私が何か持っているとすれば、それを与えたのはイエスさまだからです。私はもう自分がすぐれていると思う必要はありません。かつてはそう思うことが私の慰めであり誇りでした。でも今は違います。才能があるとか何かができるからではなく、何もなくても無条件でイエスさまは私を愛してくださる。これが私の慰めです。

神様の愛は私が思っていたようなはるか彼方、手の届かないところではなく、すぐそばにありました。頑張れたら、良くなったらではなく、今、どうしようもなくだめなまま、受け入れていただける。イエスさまはありのままの私の醜さ愚かさ嫌らしさをすべてご存じで、知っていながらなお、無限の愛をもって私を愛していてくださいました。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（イザヤ　43・4）

イエスさまが私を愛している。愛しているから私の罪を負って代わりに死んでくださった。イエスさまが私を愛していてくださる。自分のいのちを捨てても救いたいと思うほど。

だれかがありのままの私を見て、それでもなお赦して愛してくれたら、その愛によって生きられる。苦しみの日に私はそう思いました。今その愛がここにあります。イエスさまの愛によって私は生きられる。作家になること、何か立派なものになって自分にも人にも「よくやった」と認められること。そんなことはまるで必要ではないのです。今のまま、最高に愛されているから。愛され、満ち足りて最高に幸せだから。

イエスさまが私を愛していてくださる！

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

（ローマ　8・38、39）

▼ベックさんの五女スーシーさん（右）とお正月の記念撮影。





◀西軽井沢の上野さん宅の玄関で。
右から父・松夫さん、松夫さんの妹・たみ子さん、金子和子さん、母・和子さん、鮎子さん、飯守恪太郎さん。

# 苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした

田中順治



▲軽井沢のキャンプ場の庭でご夫妻仲良く。

一九四六年東京都に生まれる。杉並区立第五小、教育大付属駒場中、高、東京大学経済学部卒業。富士銀行、村上誠法律事務所勤務、翻訳業を経て現在はナカ工業（株）勤務。家族は妻節子さん、長女桃子さん、長男遊さん、次男岳さん。趣味は翻訳。

・家庭集会　毎月第二月曜朝十時半・住所　武蔵野市中町三―四―四武蔵野ビューハイツ六〇九〒一八〇・電　〇四二二―五三―八一九〇

## 国際企業戦士の戦死

一九八五年七月、富士銀行に在職していた私は、イタリアのミラノに駐在員事務所を開設する特命を帯びて成田空港から勇躍、「お国のために頑張ってきます」との言葉を親戚一同に残してヨーロッパに旅立ちました。その十年ほど前にスペインに一年間、語学研修生として過ごしたことはあったのですが、海外勤務はまったく初めての経験であり、しかも開設業務ということでそれなりに漠とした不安は常につきまとっていました。でも、それまでの十六年間の銀行員生活を通じて、何度か沈没しそうになりながらも曲がりなりにも何とか凌いでこられたのだから、イタリアでの仕事も何とかなるだろうと極力楽観的に考えようと努めていたわけです。

最初の六カ月間はイタリア語の勉強をしているだけでよかったので、単身赴任に伴う身の回りの不便さを除けば、概ね気楽で優雅な日々を楽しんでいました。ところが年の瀬も近づくころ、駐在員事務所開設のスケジュールがいよいよ具体化するようになってくると、それまで意識下に隠れていた漠とした不安が容赦なく現実となって押し寄せてくるようになりました。イタリアの銀行やオリベッティ、フィアットなどイタリアの大企業、あるいは地場の不動産業者などを訪問し、一時間ほど覚束ないイタリア語と英語のチャンポンで話をし、終わって外へ出ると何の話をしてきたのか皆目わからないという日が毎日のように続きました。日本語を話せないことのもどかしさ。単身赴任の寂しさ。他に同僚のいない孤立無援の疲れ。こうした要因が重なると、人間というものはいとも容易にノイローゼになってしまうものです。

ミラノ郊外のマンションの自室で、毎朝四時ごろまでベッドの上に座って部屋の壁を見つめ、

「俺はもうダメだ。俺にはできない。どうしたらいいのだろう。どうしようもない」と繰り返し同じことばかり考えるようになっていました。六階のベランダから庭を見下ろして、「飛び降りたら楽になるだろうか」とも思うようになりました。

すべてノイローゼの病原菌は自分の将来に対する不安の先取りに外なりません。あれをしくじったら俺はもうみんなの笑い者になってしまう、こんなことができないなんてことがもしあの上司に知られるくらいならいっそ死んだ方がましだ、俺がもしこんなことを言ったら何て言われるだろうか、もし俺が、もし俺が、もし俺が……。果てしなく続くこの「もし俺が」の連鎖の底なし沼に一旦足を取られてしまうと、もうノイローゼの魔の手から逃れることはできません。この不安の先取りによるノイローゼは、長期休暇を取得して当面の難題を回避したり、プレッシャーの少ない楽な職場へ転勤させてもらうか、場合によっては転職などの強硬手段を取ることによって一時的に解消することは可能です。でもそれは、あくまでも一時的な「逃げ」でしかありません。環境が変われば、必ずまた新しい不安の種が芽生えてくるからです。

聖書はノイローゼ患者に対して、次のように語りかけています。

「あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」（マタイ　6・34）

## 平凡なサラリーマンとしての歩み

五人兄弟の末っ子として、戦後日本の復興期と高度成長期を何の不自由もなく育てられてきた

私は、進学、就職、結婚などいろいろな人生の節目を格別たいした問題もなく、まずまず順調にクリアーしてきました。ですから神を求める必要もなく、神がいてもいなくてもそんなことは私にはどうでもよい問題でした。宇宙の始まりはビッグバンで、その後何億分の一、何兆分の一という確率でこの地球が誕生し、自分がここに生を受けて生きているのも所詮は偶然の結果にすぎないというのが、敢えていうなら科学的な教育を受けてきた私の宇宙観であり人生観であったわけです。自分という存在は偶然の所産だと思っているのですから、当然、人生に意味を求めようはずはありませんでした。人生はそもそも無意味であり、この世の事象はすべて虚無である。だからせいぜいやりたいことをやって、束の間の享楽を追求するのが現代人にふさわしい生き方だと思っていました。

就職や結婚についても、こうした無意味な人生の飾り物としてしか考えていなかったのですから、職場生活や家庭生活が自分に犠牲を強いてくるのは理不尽だと思って、始終いらいらしていました。毎朝、眠たいのにネクタイを締め満員電車で靴を踏まれて通勤するのは、いやでした。重箱の隅を虫眼鏡で覗き込むような日中業務や、わけのわからない人間関係にどっぷりつかりながら深夜まで残業するのも、いやでした。寸暇を惜しむようにマージャンで束の間の享楽を味わい、同僚と酒を飲んではその場にいない上司の欠点をあげつらうのですが、これも不毛です。深夜帰宅すると妻と一言の会話も交わさず、朝になると日経新聞を抱えて無愛想きわまりない顔でまた出勤する。いやな職場に行って、おまえたちを食わせてやってるんだという思い上がりがありましたから、家の中では実に冷たい父親でした。ある晩、幼稚園に通っている長女が炊きたて

のご飯をよそったお茶わんに足を突っ込んで泣き叫んだときも、子供の火ぶくれの足を見ながら「うるさい。黙らせろ」と怒鳴るような父親だったのです。父親というよりは、むしろ「生活費を運搬してくる冷血漢」といった方が当たっていたかもしれません。

## キリストとの初めての出会い

ちょうどそのころ、妻が聖書を私の目の前でちらつかせるようになりました。私はその都度、露骨に嫌悪の情を表わしました。いわば科学的虚無主義者を自任していた私ですから、神様なんかチャンチャラおかしくて、まともに妻と信仰の話をする気など一切ありませんでした。

それがどうしたわけか一九八四年十一月、夫婦で軽井沢のバイブル・キャンプに参加してしまいました。「秋の軽井沢、一泊二食で千数百円」という魅力的なキャッチ・フレーズについ気を許してしまったのです。鬼押出しに行くつもりだったのですが、鬼は結局見られずじまいで、神様を遠くから見るはめになりました。礼拝や福音集会にも出席しましたが、当時の私の目には何やらうさんくさげで奇妙な儀式としか映りませんでした。山本孝子さんのお宅でお茶を頂戴しながらも、ともかく一時も早くシャバに戻りたいと、まさに祈るような気持ちで部屋の隅っこで小さくなっていました。

「あんなところに、金輪際、俺を誘ってくれるな」。軽井沢から帰って、私は開口一番、妻にそう申し渡しました。軽井沢の初体験は私にはむしずが走るほどいやなものだったのですが、それでもそこに集っていらした方々の健やかな笑顔だけは、妙に懐かしく記憶に残りました。

しばらくして妻が吉祥寺キリスト集会で洗礼を受けたいと言いだしました。「まだそんなたわけたことを言ってるのか」内心そう思いながら、「できれば洗礼は受けないでもらいたい」と回答しました。食事の前にいちいちお祈りをされたりするのは煩わしいし、妻が「田中マリア節子」なんて名前になるのはけしからんと的はずれなことを考えて憤慨をしていたわけです。でも憲法ではたしか信教の自由が保障されていたような気がするし、そうすると俺は憲法に違反したことになるのだろうかなどと、独りで見当ちがいな悩みに苦しんでいました。そして、これ以上妻を吉祥寺キリスト集会に深入りさせまいとの決断の下に、聖書の一見辻褄の合わない部分を指摘しては妻に釈明を求めたり（当然妻は説明に窮します）、聖書はもともと神の選民たるユダヤ人のための書物であって、われわれ黄色人種はこんなものいくら信じてみたところで、最終的に救われるのはユダヤ人だけで、君も僕も永遠に異邦人のままなのさ、といったようなまったく誤った議論をふっかけては求道中の妻を苦しめていました。

## キリストとの二度目の出会い

一九八五年七月、イタリアへ単身赴任していく私を妻が成田まで見送りにきてくれました。成田空港のロビーで別れを告げながら、私は妻に洗礼を受けることを許したのです。できの悪い亭主かもしれないが、俺がいないと大変だろう。それなら俺の代わりに、イエス様でもキリスト様でも何でも信じて気が休まるならそうさせてやるか。私なりに相当に譲歩して寛大な措置をとったつもりだったのです。

イタリアのミラノでホテルに着いて、スーツケースの中身を整理していると、その中に聖書が一冊入っていました。荷造りのときに妻が入れたのです。「あんちくしょう、やりやがったな」と思ったのですが、妻の手書きのカードがその聖書に添えてありました。そのカードにはこう記されていました。なかなか良い響きの言葉でした。

ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。

（伝道者　4・9、10）

九月に妻は吉祥寺キリスト集会で洗礼を受け、その月末から十月の初めにかけて、陣中見舞いにミラノまできてくれました。一週間ほどの滞在の後、妻が日本に帰ってから、しばらく夫婦の間で手紙のやりとりが続きます。以下、その一部を引用したいと思います。

「節子様

〈独身生活の点描〉土曜日なので九時起床。昨夜遅くまで文庫本を読んでいたので、まだ眠い。ベーコンエッグとインスタントコーヒーで通常通りの朝食。トイレに洗剤をかけて掃除。昨日洗った洗濯物をとり込み、たたんでタンスの引き出しにしまう。ガス台のふき掃除。皿洗い。新聞を買いに外出。帰りにスーパーに寄って、スパゲッティの上にかけるミートソースなど六コ、ビール三本、冷凍ハンバーグ三箱、冷凍イカのリング揚げ一箱、ワイン一本、肉二百グラム、以上合わせて二万六千リラ（約三三〇〇円）払う。昨日やり残した洗濯物を洗濯機につっ

一九八五年十月十二日

込み、物干しにぶら下げる。空のガラス瓶をスーパーの袋に入れてごみ捨て場にぶら下げて外出。銀行あて二通手紙を書く。昼食はあまり腹が減らないので、パンにジャムをつけインスタントコーヒーで軽くすます。夜はスパゲッティと肉とトマトの計画。ワインを飲みながら、テレビの米大リーグ野球の珍プレー好プレーを見る。今、節子さんへの手紙を書いているのが、午後四時十五分。何となく亭主の帰りを待つ主婦の行動パターンのようだね……。

〈洗礼式の時の録音テープについて〉僕らがローマのダヴィンチ空港で別れた日の晩、洗礼の録音テープを聞いた。やや聞き取りにくいベックさんのお説教に、知らず知らずのうちに引き込まれる。『あなたの罪は赦されたのです』という言葉に、背筋がゾクゾクしたのを覚えている。その晩、夢を見た。経緯ははっきりしないけれど、何か恐ろしい罪のために、僕は死刑を執行されることになっていた。自分の足下に、小学校や公園の水飲み場によくあるコンクリートで四角く囲まれた小さな足を洗うための囲いのようなものがあって、そこには水が張ってあって、その中にバラバラになった人間の骨が沈んでいた。よく見ると、自分の骨のような気がした。その後、救われたのか救われなかったのかはわからないけれど、夢はそれで終わった。今ではもうはっきり覚えていないが、骨の前に立ちすくんでいる僕に、誰かが『AかBかのどっちかを選べば、何もこわいことはない』というようなことを話しかけてきたような気がする。いずれにせよ、ベックさんの話がかなり僕にショックを与えたのは確かなようだ。その後も三、四回、夜寝る前にテープを聞いているのだけれど、A面の半ばあたりでいつも眠り込んでしまうので、夢を見たのは初回だけである。……」

冬のミラノは、陰鬱でどんよりとした重苦しい日々が続きます。事務所開設の仕事が具体化しはじめるにつれ、気候だけでなく気分もどんよりと重苦しいものになってきました。ノイローゼが潜伏期間を経て自覚症状が出てくるようになったのです。それと並行して、日本語に対する飢餓感がどうしようもないほど膨らんできました。仕事はもちろんイタリア語です。新聞を買ってもイタリア語、映画を見にいってもイタリア語、気分転換にテレビをつけてもやっぱりイタリア語。日本語のものなら電話帳でも楽しく読めるような気がしてきました。そのころには日本から持ってきた小説の類もすべて繰り返し読んでしまっていたのです。こうした環境にある私に、妻が日本からメッセージや証しの録音テープ、「光よあれ」の各集を送ってきてくれました。日本語のものといえば電話帳でもよかった私ですから、むさぼるようにしてテープを聞き、「光よあれ」を読みました。ノイローゼが進行しつつあった私は、涙が堰を切ったように流れてくるのを止めることができませんでした。その涙はこれまでの恨みや悔しさで味付けられた涙とは、質的にまったくちがう新しい涙でした。そして「光よあれ」も読み終え、テープも擦り切れるほど聞いてしまうと、あとは日本語のものといえば聖書しかなくなってしまったのです。

次の手紙はちょうどそのころ、私が妻に出したものです。

「節子様

一九八六年一月一日

……話は変わって聖書の方の話ですが、最近僕自身、ひところに比べてかなり変化しつつあるように思います。

あの軽井沢の集会の時は、まるで針のむしろに座っているようで、自分でも立居振舞いがぎこちなく、笑ってみても顔がこわばってしまうし、ともかく、一刻も早くこの地獄から抜け出してシャバの空気を吸いたいと思っていました。それはそれとして、あそこに集まっている人たちの眼の輝き、電車の中や銀行ではついぞお目にかかったことのない満ち足りた表情は、強烈な印象として今でも忘れられないことは確かです。「光よあれ」の表紙の皆さんの顔もやはり同じ。よく新興宗教の政治団体に属する議員さんなんかが無理に笑顔を作っているけれど、そうした人の顔と吉祥寺キリスト集会の人たちの顔は全く次元がちがうのは明らか。自分の顔の貧相さにつくづくいやになって、集会の人たちのようなよい顔になってみたいと思い、鏡の前でいろいろ百面相をやってみても、やっぱり作った顔というものは自分で見ても偽物だということは一目瞭然。どこか基本的にちがうみたいだね。

内藤さんという不動産屋さんの証しのテープはこれまで二回聞いたけれど、感激しました。三歳のお嬢さんに『みんなで天国に行きたい』と言われ愕然とした話。あれは他人事でなく、身につまされて大ショックを受けました。

そんなこんなで、ここ数日、聖書をひっくり返しながら日を送っています。

夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たってはいけません。（コロサイ　3・19）

父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。（コロサイ　3・21）

こんな風にはっきりと書かれてみると、『ああ、俺は本当にだめな男だ』と悩んでしまい、いじけてきます。自分でも女房、子供につらく当たりたいわけでは決してないんだけれど、『折角の日曜だから』とか『疲れてるのに』とか、何かのはずみで虫のいどころが悪くなって、言わずもがなのことを言って女房、子供を傷つけたり、また自分自身にも腹を立てたり、かといってあとで謝るのもかっこう悪いしとか、しょっちゅうそんなことばかりやっていた。そういう時は、『あんなこと言わなきゃよかったな』と思っているんだけれど、確かにその一方で『でも、俺にも言い分はあるんだけどね』と自分を正当化するところがあったように思います。自分に甘えてるんだね。そんな傲慢な自分が最近よく見えてきて、本当に悪かったと思っています……。

人間とは不可解なもの。たった三日ぐらい前までは、あなたにこんな聖句を引用した手紙をミラノから出そうとは予想だにしませんでした。でも、まだあまり喜び過ぎないでください。これも独り暮らしからくる一時の気の迷いかもしれないし、それにまだ『受洗してもいい』というほど、完全に方向転換しているわけでもありません。なにせ飽きっぽいのが私の特質ですから、七草がゆを食べるころには、また元の唯物論者に戻っているかもしれません。

それではまた。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）」

## 主は最善の道を用意してくださる

そのころ、東京から欧州出張にきた役員がミラノに立ち寄り、「駐在員事務所の開設準備はどうかね」と聞かれたのですが、小さな声で「あんまり自信がありません」と答えるのがやっとでした。本当はその時、「僕にはできっこありません。助けてください」と、大声で叫びたい心境だったのです。でも大声はどこからも出てきません。大声で叫べるくらいなら、だれもノイローゼにかかるわけがないのです。

「死にたい」。一月から二月にかけてノイローゼのピークを迎えました。「死にたい」。そうしたとき、ふと三人の子供たちの顔が頭をよぎるのです。国際電話で妻に連日のように、「死にたい」と弱音を吐いたのもこのころです。「ベックさんに会いたい」「助けてと神様に祈りたいが、どう祈ったらいいかわからない。祈り方を教えてほしい」。こんなことを電話で妻に告げました。

ノイローゼが最高潮に達したころ、銀行から一時帰国の命令を受けました。銀行は私が重いノイローゼで苦しんでいるとは知りませんでしたから、スチューデント・ビザを就労ビザに書き替えるために私を東京に呼び戻したのです。東京に帰る途中、ロンドン支店に寄って今後の打ち合わせをする手筈になりました。しかしミラノからロンドンに入った私は、ロンドン支店との打ち合わせをすっぽかしてしまったのです。ロンドン支店が手配してくれていたホテルを勝手にキャンセルし、支店に何の連絡も取らないで、別のホテルで一晩まるで逃亡者のように身を隠していました。これ以上、健康者のような顔をしてロンドン支店の人と仕事の話をするのが耐えられなかったからなのです。ノイローゼの症状が頂点に達しつつありました。

二月二十日に東京に戻ってきた私は、翌日ベックさんに会うことができました。ベックさんが語ってくださったことは何もわかりませんでしたが、ただひとつ「順治はイタリアに行かないでいいよ」と、まるで銀行の人事部長のような一言が、なぜか私を楽にしてくれました。ベックさんの許を辞して、私はその足で銀行に行きました。銀行では、「疲れているようだから、まあしばらくは休暇を取って家族で旅行でもしたらどうか。元気になったらまた頑張ってもらえればいいから」と励まされました。しかしノイローゼの患者にとっては、この「頑張れ」という言葉ほど恐ろしいものはありません。いくら頑張ってもダメだったところに、また「頑張れ」と言われると、もう死ぬしか他に道がないような本当に情けない気分になってしまうのです。

翌二十二日、吉祥寺キリスト集会の方々とお会いし、自分がノイローゼになってしまったこと、そしてこれからどうしたらいいかわからないといったようなことを話しました。すると集会の方々は困ったような顔もせず、口々に「そうですか。それはよかったですね。田中さん、あなたはそうして神様と出会うことができたんですよ」と言ってくれました。この「それはよかったですね」というコメントは、ノイローゼの渦中にある私には、いかにも新鮮な驚きでした。こういう反応をする人たちがこの世の中にいるということ、これは信じられないことでした。

私はイタリアにはもう行きたくなかったので、何とか精神科のお医者さんに「強度のノイローゼ」だとの診断をしてもらい、その診断書を銀行に提出すればイタリア行きから外してもらえるはずだと踏んでいました。妻はベックさんに電話をして、私が精神科の医者に診断してもらいたがっているがどうしたものかと相談をしました。ベックさんから紹介された重田さんのお宅に、

その晩早速うかがいました。ところが重田さんは確かに東海大学の医学部の教授ではあるのですが、精神科の専門の先生ではありませんでした。吉祥寺キリスト集会は本当にいいかげんなところだ、そう思いながら、重田さんにこれまでの話を説明しているうちに、驚くべき事実が判明してきました。なんと重田さんは富士銀行の健康管理センターに毎月一回顔を出されているというではありませんか。ここに至って、私は完全に兜を脱ぎました。これはもう偶然ではない。偶然だとしたら出来すぎている。神様が後ろで手を回さないかぎり、こんなことの起こりようはずがない。神様は常に最善の道を用意してくださっているのです。

「神様がいた」。その晩家に帰ると、私は妻に大きな声で喜びの叫びを上げました。

主は絶えず、あなたを導いて、焼けつく土地でも、あなたの思いを満たし、あなたの骨を強くする。あなたは、潤された園のようになり、水のかれない源のようになる。

（イザヤ　58・11）

その後、多くの吉祥寺キリスト集会の皆さんとのおつき合いの場が与えられ、イエス様のこと、父なる神のこと、私たちの罪のこと、私たちの罪の贖いのためにイエス様が十字架にかけられたこと、そして三日後に復活なさったことにより私たちに永遠のいのちが約束されていることなどを、折に触れ学ぶことができました。それでも創世記の記事は、頑迷な無神論者だった私には容易に信じ難いものでした。

初めに、神が天と地を創造した。

（創世記　1・1）

創造主？　いてもいいけれど、でもちょっと待てよ。いるわけないじゃないか。でも、いても別に不都合はないじゃないか。いないって証明したわけじゃないし。いや、待て待て……そんな子供じみた話が信じられるものか。イエス・キリストが神の子だって？　ほんとにもう、なに言ってるんだ。でも、この宇宙を創造したものを、たとえば神と呼ぶとすると？……。

こんなことばかり考えているうちに、仕事のことをあれこれ考える時間がなくなってしまったので、ついにノイローゼはどこかへ消えてしまいました。この間、さまざまな聖書のみことばがノイローゼの発現を抑え、私の心に平安を与えてくれました。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。（箴言　3・5）

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」（ヨハネ　14・27）

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」（マタイ　11・28～30）

## イエス様、一緒に来てください

イタリアで事務所を開設する仕事は、私にはどうしても無理だと思えました。「死にたい」と思った土地へもう一度出向いて、また同じ仕事を始めると、今度は本当に自殺してしまうような気がしたからです。イタリアの仕事から外してもらうためには、銀行の人事部に正式に申し入れをしなければなりません。サラリーマンの方ならおわかりいただけると思いますが、会社に対して「自分はミス・キャストだから勘弁してほしい」と告げるのは、なかなか勇気がいる話なのです。それでも人事部に「私はできません」と言いに行こうと心に決めました。その朝、大手町の喫茶店で神様に心から祈りました。「イエス様。助けてください。これから人事部にイタリアの件の話をしに行きますが、私は一人で行く勇気がありません。怖いのです。どうか私と一緒に来てください。私の手を取って、私を連れていってください。どうか私と一緒に来てください」

この弱い者の願いをイエス様はかなえてくださいました。自分がミス・キャストだということを、自分の口で言うことができたのです。かつての私には、こんな大胆な行為は及びもつかないことでした。

「人にはできないことが、神にはできるのです。」（ルカ　18・27）

私はいつのまにか、あれほど忌み嫌っていたクリスチャンになってしまっていたのです。この私がクリスチャンになるとは、まさに奇蹟としか言いようがありません。

私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きにな

り、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巌の上に置き、私の歩みを確かにされた。主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。多くの者は見、そして恐れ、主に信頼しよう。

（詩篇　40・1～3）

四月六日、私は吉祥寺キリスト集会で洗礼を受けました。

## 信仰の確信

イエス様は最善の道を私に用意してくださいました。私はミラノ事務所開設の任務から外されることになりました。別の方が開設要員としての発令を受け、私はその方のアシスタントとしてミラノで開設業務の手伝いをすることになったからです。一九八六年五月末、再度ミラノに向けて出発し、事務所開設の目鼻がついたその年の十一月末に東京に呼び戻されました。その間のミラノでの六カ月はクリスチャンとのおつき合いがほとんどなく、仕事に追われ、神様に祈ることも次第に忘れてしまうようになっていました。

ですから東京に帰って新しい部署に着任してからも、最初の救われた喜びはいつのまにか色褪せたものになっていました。日曜日の礼拝が煩わしいものに感じられるようになり、家庭集会からも次第に足が遠のくようになりました。ところがイエス様は、信仰の道から逸れかけた私に主の恵みに立ち戻るきっかけをくださいました。職場の同僚の久田さんが重いノイローゼで苦しまれているというのです。救われた喜びを失くしかけていた私ですが、自分が信仰を持つことによ

って、生きる自信と喜びを与えられたという確信だけは忘れていませんでしたから、久田さんになんとか信仰を持ってもらいたい、そうすれば大丈夫なのにと思っていました。

個人的には喜びもなく仕事に疲れていた私は、家庭集会にはあまり顔を出したくなかったものですから、久田さんを家庭集会にお誘いするときも、「今日は行かない」という返事が返ってくるのを密かに期待しながらお誘いしていたような次第です。でもその都度「連れていってほしい」という返事を頂戴しましたので、私もお誘いした手前、やむをえず家庭集会に出席するようになりました。

家庭集会にお連れしているうちに、初めのうちはコチコチにこわばっていてまったく表情というものがなかった久田さんの顔から、数カ月後には笑いが少しこぼれるようになり、次には聖歌に合わせて口が動くようになり、そして集いの輪に少しずつ入ってこられるようにまで元気になられました。信仰の弱りかけていた私に、イエス様は目に見える形で奇蹟をお現わしになったのです。目には見えないけれども、イエス様は本当に生きておられ、私たちひとりひとりのことを心配しておられる。このことを私は確信することができるようになりました。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

（Ⅰペテロ　1・8、9）

イエス様を幼子のように素直に信じることができるようになり、すべてを主に信頼するようになってみると、不思議なことに他人の目がかつてほど気にならなくなりました。一九八八年九月、富士銀行を退職し、集会の村上弁護士の事務所にご厄介になりながら翻訳業を営んだりしていましたが、その後、銀行時代の先輩を通じて新しい仕事が与えられました。

家庭生活についても、かつてのただ「生活費を運搬してくる冷血漢」から、多少は「温かい血の通った亭主、父親」に一大変身を遂げたようです。この変化は自分が努力したからではありません。なぜかは自分でもよくわかりませんが、信仰の結果、私の生きかたが変わってしまったためだとしか考えられません。

私はノイローゼにかかって苦しみました。でもノイローゼにかかったことを決して恥とは思っていません。それどころか自分がノイローゼで苦しんだこと、そしてそのノイローゼを通して真の信仰を得て救われたこと、そのことを胸を張って証しできることを大いに喜んでいます。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

（詩篇　119・71）

いま他人の目に苦しんでいらっしゃる方、そして自分は敵に取り囲まれていると悩んでいらっしゃる方、どうか絶望なさらないでください。あなたのことを、そうです、あなたのことをすべてご存じの方がいらっしゃるのです。死にさえ打ち勝った方が、あなたを、こよなく愛しておられるのです。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）





▲中島仁さん（中央）の受洗を祝福する順治さん（左）、久田博さん（右）。



▲左から次女・柿沼晃子さん、長女・富谷久子さん、三女・節子さんの三姉妹。
久子さんが主を受け入れた日。



◀武蔵野市中町祈り会のみなさんと。
左から2人目が節子さん。



聖書のみことばを聞いて▶
喜ぶ節子さんの母・富谷和子さん。病室で。

# 数えてみよ、主の恵み

田中節子

一九四七年東京都渋谷区に生まれる。立教女学院小学校、中学校、高等学校から、北里大学薬学部卒業。家族は夫順治さん、長女桃子さん、長男遊さん、次男岳さん。



## 母の病気

母が国立精神・神経センター武蔵病院の老人病棟に入院して六年目のことでした。このとき母は私たち娘の顔もまったくわからないし、ほとんど会話もできない状態でした。脳の萎縮も末期に入り、言葉にならない声で一日中叫んでいました。信じられないようなことですが、そんな状態の母と次のような会話を本当に交わすことができたのです。イエス様の奇蹟に感謝しました。

「お母さん、本当にごめんなさいね。長い間私はお母さんにやさしくできなかった。私のわがままを許してね。昔、私が望んだ結婚を反対されたあの時から、ずーっと、ごめんなさいと言いたくても言えなかった」

「……私が悪かった」

「そんなことないのよ。今ではお母さんが心配して反対してくれたことがよくわかるの。本当に悪い子だったね」

「……」

「あのね、私、イエス様を信じたの。神様はずっと昔にしてしまった悪いことを全部赦してくださっているんですって。お母さんもイエス様、知っているでしょ」
「うん」
「イエス様は十字架の上で私たちのかわりに罰を受けて死なれたのよ。だからイエス様を信じて、神様にごめんなさいとあやまると赦してくださるのよ。お母さんもイエス様を信じて一緒に天国に行こう」
「…信じる…行きたい……」
「天国でお母さんに、子供にかえって甘えたい……」
「…せつこ……」
私たちは聖書を開いてお祈りしました。
わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、（ここまで読んできますと、母の口が動きました。「…よかった…」。）あなたのすべての病をいやし、（また母の口が動きました。「うれしい…」。）あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。
（詩篇　103・1～5）

「愛するイエス様、あなたのみ名を心から賛美します。ありがとうございます。あなたがこの傲慢でかたくなな私の中に働いてくださり、母に心からあやまることができました。そのうえ、母もあなたのことを信じたことを心から感謝します。どうして母がこのような病気になったのか、私にはわかりませんが、イエス様が母のことを愛していてくださり、母に最善をなしてくださり、いつもそばにいて慰めてくださることを感謝します」

神様は二十年間の私の重荷を解いてくださいました。

「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。――主の御告げ。――天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」（イザヤ　55・8、9）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ　1・9）

だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにおられ、その人も神のうちにいます。私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。…私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。（Ⅰヨハネ　4・15、16、19）

イエス様が母と私の間を完全に回復してくださったうえ、母のたましいも救ってくださいました。今では、母の病院でともに祈り、賛美し、聖書を読むようになりました。母はじっと耳をかたむけています。

主われを愛す、主は強ければ、われ弱くとも、恐れはあらじ。わが主イエス、わが主イエス、わが主イエス、われを愛す。（讃美歌 461）

聖霊がいつも働いていてくださいます。姉二人もともにイエス様を信じる者となりました。母の病気はとても悲しいことでしたが、その病気を通して私たち姉妹三人が救われたことを感謝しております。

## 神様のまかれた種

私は東京の渋谷で祖父の代から肝油を主に製造する製薬会社の三女として生まれました。工場と自宅は同じ敷地にありましたので、祖母、両親、姉二人と会社の人と大勢の中で、末っ子の私はわがままいっぱいに甘やかされて育ちました。小学校五年のとき胸に影があることがわかり、学校を長期欠席、その後も学校から帰ると毎日注射を打つという病弱でひよわな子供でした。そのときから学校の勉強にはついていけず、勉強、友達関係のすべてに劣等感をもち、いつもおどおどと人の目を気にしていました。

あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とが

めることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。
（ヤコブ　1・5）

主はすべてのことについて、理解する力をあなたに必ず与えてくださいます。
（Ⅱテモテ　2・7）

聖書を読み始めたころ、このみことばを見つけて聖書がとても自分に身近なものに感じました。

そんな私が大学のときある方と出会い、結婚したいと思いましたが、双方の親の反対でかないませんでした。最終的にはみじめなさみしい別れ方となり、そのときから母に対して私は心を閉ざしてしまいました。子供のころから甘やかされて親の言うなりに育ってきた私が、自分の意志で初めて決断したのに、それが親の反対のせいでだめになったのだとばかり思っていたからです。母に対して表面的には普通にしているのですが、心の中には常にこだわりがありました。以前のように甘えたいと思ってもできませんでした。

それから十数年後の一九八四年に母が精神病院に入院しました。そのとき、ああ私はとうとう母にあやまることができなかったと思いました。この八年前の父の急死が引き金となって、母は強度の鬱状態からぼけが始まり、その後、父の会社の倒産、姉の離婚、住んでいた家と土地の処分などが重なり、初老性老人性痴呆症と診断されました。発病はまだ五十代の後半でした。父と母は本当に夫婦仲が良く、母はわがままでしたが父はいつも母を大事にしていました。そんな父

が急死して母は心の支えがなくなってしまったのでしょう。何度も同じ話をする。すぐものを忘れる。おかしいなと気がついたのは、父が亡くなって二、三年してからでしょうか。それから五年間、病気は進行する一方で、片時も目が離せなくなり、とうとう姉の家での看護も限界にきてしまったので入院することになりました。自分の母が精神病院に入院した……。このことは私にとって大きなショックでした。その翌週の火曜日に「光よあれ」の地図をたよりに吉祥寺キリスト集会を探しに行きました。一年ほど前から、娘の幼稚園の友達のお母さまの野田さんから、集会にいらっしゃいと再三おさそいを受けていましたが、そのときには自分が行くような所には思えませんでした。娘の幼稚園はキリスト教に基づいた教育を行なっており、折にふれて園長先生が聖書からお話をしてくださるのですが、ある時、

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。――光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。――

（エペソ　5・8、9）

この聖書のみことばに触れて、小さいころ学校で教わったイエス様のことを思い出しました。本棚の奥の方からかび臭い聖書を取り出し、あんなに断っていた集会に、何かに引っ張られるようにして行きました。

## 神様のいない結婚生活

初めて集会に行ったとき、私の毎日の生活は不満だらけでした。四歳、二歳、十カ月の三人の子供たちの育児に追われ、自分の思うようにならないとすぐ叱っていました。主人は結婚したときから、仕事が性格に合わない様子で、いつもいやいや出勤していました。家の中のことを主人に相談すれば不愉快な顔をされるので、それがいやで次第に自分ひとりで家事、育児をするようになりました。しかし本当は主人にだけ問題があるのではなく、私の高慢さが主人の助けを拒んでいた面もあったのです。

ベックさんにお目にかかったとき、

「私には主人と可愛い三人の子供があり、経済的にも恵まれた生活をしていますが、満足がないのはなぜでしょう。毎日が空しく過ぎていくのです」と言いますと、ベックさんは、

「それは節子の心の中に神様がいないからだよ。神様は節子のことを心から愛しておられるよ」と答えられました。私ははっとしました。

生まれる前から神様が私のことを愛していてくださった、私をご存じの方がいる、私は愛されている、私は神様から愛されている……。

私はミッション・スクールで小、中、高と育ちました。ですから小さいときから毎日の礼拝や宗教の時間などで、神は天地を創造された唯一の方で、イエス様は神のみ子であり、死んで三日目によみがえった方であるということは教えられていました。けれども実際にその神様が私を個人的に愛してくださっていることを、このとき初めて知りました。自分が愛されているということを知ったとき、今まで自分一人でがんばって生きてきたつもりだったけれど、もう神様が一緒

にいてくださるのだから安心だと、本当にうれしく、心の底から感謝することができました。

私は自分が救われたとき、主人にも神様を知ってほしいと思いました。毎日重たい足を引きずって行く会社。家の中でも子供と遊ぶこともしないし、会話のない夫婦生活でした。主人はまったくの無神論者でしたから、神様のことをどのように切り出したらよいのかさっぱりわかりませんでした。それでも、ともかく軽井沢のキャンプへ一緒に行くことだけはできたのです。しかし、

「とんでもない所にさそってくれたね。二度と集会には行かない。もう絶対にさそわないでくれ。自分の前で聖書を読むな。できれば集会へ行くこともやめてほしい」と言われ、私は、

「これだけは続けます」と言うのがやっとでした。そのようなときに、主人は仕事でイタリアに単身で行くことになりました。イタリアの主人とはひんぱんに手紙をやりとりしていましたが、やがて主人はその中に聖書のみことばを書いてくるようになったのです。

主人の証しの中にある一月一日付の手紙に対して、私はこう返事を書きました。

「あなたからお手紙をいただいて一週間、返事をと思いながらなかなか書けませんでした。あんなに素敵な手紙にどう返事を書けばいいのか…。泣きながら読みました。吉祥寺キリスト集会に行き始めてから一年半になりますが、神様を信じイエス様を受け入れたときから、受洗して集会で証しをするまで、神様からの一方的な愛を受けることだけを喜んでいました。でも自分の罪の意識がなかったのです。集会で証しをするように言われたとき、ベックさんに『私は罪についてのはっきりした自覚がありません』と言いました。罪についてよくわかってもいないのに、神様はこの一年間に今まで知らなかった大きな喜びをつぎつぎとくださいました。あ

なたとこうして別れて生活していることはとても寂しいのですが、それ以上にあなたからの手紙でいつも子供たち、そして私を愛していてくださることがわかります。そしてあの手紙で私の罪がわかりました。あなたに対して、子供に対して、罪ばかりの私でした。覚えていますか？　初めてベックさんと会った去年の十月、ベックさんからあなたに『私はイエス様を信じることにしました。今までの私は良い妻、良い母ではありませんでしたが、これからは、あなたや子供たちの良い妻、良い母になりたいと思います』と言いなさいと教えられました。そのときあなたは『熱でもあるんじゃないの？』と言いました。教わったとおりに言ってはみたものの、私の態度はちっとも改まっていませんでした。本当にごめんなさい。そして私にそのことを教えてくださってありがとう。

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」（ヨハネ　15・16）

本当にこんなに思いがけないことが起こると、イエス様がじかにあなたや私に働いていてくださると確信します。あなたといつまでも一緒にいたいから。子供たちと一緒に天国まで。

もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。（ローマ　10・9）

主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。（ローマ　10・13）」

## イエス様のもとに

この手紙の直後、主人から様子のおかしい電話がかかり始めました。神様が主人を一人遠くに置き、弱くしてくださって、神様を求めるようにしてくださったのです。ある朝、「自分は何もできない。神様に助けてもらいたい。祈りたいけれど、どうやって祈ったらいいの」と電話がかかりました。「神様、ありがとうございます」。ふるえながら感謝しました。主人からは毎日のようにノイローゼの苦しみを訴える電話がかかってきましたが、私は不思議に平安でいられました。すべて神様がしてくださっているという確信があったからです。ともかく日本に帰れるようにと祈り、主人はイタリアから救いだけを求めて帰国してきました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。（Ⅰヨハネ　5・14、15）

主人が救われたのはびっくりするほど早い期間でした。一カ月の休職の間、毎夜聖書を読み、

賛美し、共に感謝して祈る生活が始まりました。ベックさんはメッセージの中でよく「救われるとすべてが変わる」とおっしゃいますが、本当にそれまでの私たち夫婦の生活とは一変して、とげとげした雰囲気は完全にどこかへ行ってしまいました。しかし私は主人があまりに早く救われたので、イエス様を見ることを忘れ、主人ばかりを見るようになり、主人が喜べば私も喜び、主人が信仰に苦しめば私も落ち込み、そしてそういう主人を責めるようになってしまいました。これは救われる前の家庭生活で夫としての主人を責めていた以上に罪深い行ないでした。信仰の上で、こういう夫、ああいう夫になってもらいたいと、自分から見ての理想的な夫像を作りあげ、それに合わない夫を責めるようになっていたのです。

だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。おのおの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。

（ガラテヤ　6・3、4）

「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。」

（マタイ　7・1、2）

「神様、どうしたらいいのでしょう。主人を責めてしまうのです」と祈りながら、主人があん

な風だから、私が主人を責めてばかりいるのもしかたがないのでは、などと言いわけをしていました。ところが集会に行くたびにみことばが与えられるのです。

私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるのではありません。私をさばく方は主です。ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。（Ⅰコリント　4・4、5）

いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。（Ⅰコリント　4・7）

肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。（ガラテヤ　5・17）

「神様、ごめんなさい。自分の愚かさがわかりました。これが私の自我なのですね…」。今まで自分の中にあった硬い性質がはっきりと見え、イエス様が私の自我と共に十字架で死んでくださったことがこのとき確信できました。その夜すぐに主人に今までの私の傲慢をあやまり、翌日病院へ行き、そこで母との冒頭の会話と祈りができたのです。神様の愛を知ってから、イエス様

に愛される者にふさわしくなりたいと思ってきましたが、それは自分の力により頼む人間的な思いであって、本当の意味でのイエス様とのつながりがなかったのです。それでもイエス様は忍耐をもって導いてくださり、私の状態に関係なく、一方的に愛し続けてくださったのです。

信仰をもつ前は、家庭生活の中に多少の不満はあるものの、世の中の夫婦はみなこんなものだろう、主人は夜は遅いし家の事を何もしてくれないけれど、まあまあうまくやっている方ではないかと思っていましたが、主人と共にイエス様を信じた今、すべてにおいてイエス様の存在を感じ、育児、家事、主人とのこと、小さな一つ一つにイエス様がともにいて最善をなしてくださっていると感じることができます。

その上、イエス様はわが家で家庭集会をも開かせてくださり、神様を求める方、また多くの集会の方々を通して、主のみ栄えをこの家で現わしてくださいました。今まで神様が私たちに与えてくださった一つ一つの恵みに、心から感謝いたします。

神、主よ。私がいったい何者であり、私の家が何であるからというので、あなたはここまで私を導いてくださったのですか。神、主よ。この私はあなたの御目には取るに足りない者でしたのに、あなたは、このしもべの家にも、はるか先のことまで告げてくださいました。

（Ⅱサムエル　7・18、19）

# 主は与え、主は取られる

## 檜垣　烈

一九三六年広島市に生まれる。市立幟町小卒業後、修道中を経て杉並区立高円寺中、都立日比谷高卒業。立教大学社会学部中退。建材会社勤務などを経て、現在有限会社檜垣建装を経営。家族は妻智津子さん、長男長生さん、次男水成さん。趣味は音楽、スポーツ。・日曜礼拝　毎週朝十時半・祈り会　毎週水曜朝十一時・住所　広島市南区向洋新町一―三―七〒七三四・電　〇八二―二八七―二四八八

▼長男・長生さんの結婚式で。烈さんと智津子さん。





◀広島家庭集会のみなさんと。

ガチャン！　鈍く重々しい鉄格子の扉が閉められる音を背中で聞きながら、私は振り返る気力もなく、布団の上に倒れ込みました。「眠りたい」。ただそれだけでした。まる一カ月もの間何も食べず、ひたすら酒を飲み続け、立ち上がる体力すら残っていない餓死寸前の状態で、妻と長男によって山口県のアルコール依存症専門病院にかつぎ込まれたのでした。翌日の昼過ぎ、朦朧としたまま目覚め、しばらくの間は何が何だか分かりませんでした。やがて「やはりまた来るべき所へ連れて来られたな」と思いながら部屋の中を見回しました。保護室と呼ばれる独房でした。板の間に布団が敷かれている外は何もない、がらんとした小部屋です。床の片隅には長方形に切った穴があり、それに便器が取り付けられ、時折自動的に流されるのでしょう、水洗の水の音がやけに耳ざわりに聞こえていました。高い天井の中央にはモニターカメラがついていて、監視されているようでした。前夜のことを思い出そうとしても全く記憶がありません。院長先生の顔も、自分が何を喋ったのかも、妻や息子とどのようにして別れたのかも全く思い出せません。「もうこれで最後なんだな、きっとここから出ることはできないだろうな」。そんなふうに思いました。三回目の、そして最後の精神病院入院。一九八六年四月十六日のことでした。

## アルコール依存症

アルコール依存症の患者の状態は、この病気とかかわったことのない人たちが想像している、ぐうたらな酒好きの横着者とか意志薄弱の小心者といったイメージとは程遠いものです。この病気は極めて恐ろしい、しかも進行性の不可解な病気なのです。自らを死に向かってばく進させる

だけでなく、幻覚によって自殺、殺人すら犯すことも往々にしてあるのです。私と同じ時期に入院していたある患者は、耳もとで「指を切れ、指を切れ」とはっきりとした口調で囁く幻聴に悩まされ、自分の左手小指を切り落としてしまいました。またある人は建設中の瀬戸大橋の工事現場から三度投身を図り、最後に死亡しました。私が退院する少し前に入ってきたある患者は、院内で行なわれた体験発表の席で、禁断症状による被害妄想から殺人を犯したと告白しました。

このように恐るべき病に侵されているアルコール依存症患者の数は、最近とみに急増している女性のキッチンドリンカーなども含めると、三百万人にものぼるといわれ、しかも回復率は一パーセントないし二パーセント程度のものだそうです。そして最も恐ろしいのは、この病気について現代の医学がその原因も治療法も解明することができない点なのです。多量の飲酒を繰り返していると必ずなる病気でもありません。酒好きで意志が弱いからなる訳でもありません。もともと肉体的に強く意志も強い人の方がなりやすいのです。身体が強くなければ依存症に至るまでに内臓疾患によって飲酒できなくなります。意志が弱ければ物事になげやりになりますから、強度のストレス状態になることはありません。遺伝も、体質も関係がありません。私の見てきた範囲で考えてみますと、好むと好まざるとにかかわらず、アルコールを受けつける体質で、肉体的に強く、かなりの精神的重圧に耐え得る、むしろ意志の強い人、そして自分を偽って生きることのできない無器用な人が多いように思います。このようなタイプの人が、長期にわたって精神的圧迫を受けながら内攻していき、その解決をアルコールに求めていった時、極限状態で陥る落とし穴のようなものなのです。そしてひとたびこの底なし沼に落ち込んでしまうと、自力で這い出

すことは絶対に不可能ですし、医学的にも決定的な治療法はないのです。それはアルコール依存症に侵された者が、私も含めて何回となく入退院を繰り返しており、やがて他の病気を併発して死亡していく事実が物語っています。

ぶどう酒が赤く、杯の中で輝き、なめらかにこぼれるとき、それを見てはならない。あとでは、これが蛇のようにかみつき、まむしのように刺す。（箴言　23・31、32）

私はなぐられたが、痛くなかった。私はたたかれたが、知らなかった。いつ、私はさめるだろうか。もっと飲みたいものだ。（箴言　23・35）

聖書は鋭くアルコール依存症患者の存在と心理を記しています。私も全くこのような者であり、十年間もの長い間、入退院を繰り返し、苦しみもがいていました。

## 青年期の曲がり角

私の少年期から青年期にかけては、すべてが順調でした。中学まで首席で通し、広島の学校では満足できず、単身上京して杉並区の高円寺中学へ転校、都立日比谷高校に入りました。当時の日比谷高校は他の高校と比べると桁はずれにレベルが高く、私たちの時代には、毎年東大合格者数一三〇名前後を誇る、最高の進学校でした。「外務省か貿易商社に入って、国際的な舞台で仕事がしてみたい」。それが私の将来の夢でした。青春時代のさまざまな楽しみには見向きもせず、

懸命な努力を勉強だけに注ぎました。その甲斐あって、受験四カ月前の十月の期末テストでは現役合格圏内に入っていました。後は仕上げだけ、私は得意の絶頂にいました。

あなたは心の中で言った。「私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。」しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。（イザヤ　14・13～15）

まさに私は自分を神とする者だったのです。この世から受ける栄光こそ私の究極の理想であり、これを追求してやまない熱心な野心家だったのです。しかし神様はこの高慢を赦されるはずがなく、懲らしめをもって私を打たれました。ふとしたことからその必要もないのに健康診断を受けたところ、結核と診断され、勉強も運動も登校も禁止されたのです。卒業のための出席日数だけは何とか足りたものの、私の長年の夢は一瞬にして粉々に飛び散ってしまったのでした。

そのすべての刻んだ像は打ち砕かれ、その儲けはみな、火で焼かれる。わたしはそのすべての偶像を荒廃させる。（ミカ　1・7）

## アルコール依存症を通して信仰へ

敗北感と挫折感に打ちひしがれて、籍だけ置いた大学も卒業する気になれず中退し、帰郷、就職、結婚。子供も二人もうけましたが、過去の亡霊をひきずったままの人生は空しく、苦痛なものでした。仕事に疲れ、家庭では妻との喧嘩が絶えず、この世に身の置き所がない思いでした。

そんな私の中にいつの間にか悪魔が入り込み、私はアルコール依存症への道をまっしぐらに進んでいったのです。付き合いや接待の酒がいつしか自分の慰めのための酒となり、現実逃避の酒となっていきました。精神病院入院の第一回目は一九七五年、第二回目は十年後の一九八五年、その間に内科へも三回入院しました。年を経るごとにひどい状態になっていきました。しかしいずれの場合も一カ月の入院ですみましたので、私は自分がアルコール依存症だなどとは一度も考えたことがありませんでした。ただ心の隅に酒を止めたいと願う気持ちがあったことも事実でした。

一九八五年の冬、田中さんに誘われて初めて妻と一緒に集会に出席し、ベックさんとお会いしました。若山さんのお宅で開かれた倉敷集会でした。皆さんは私たちをとても暖かく迎えてくださいました。集会の皆さんのお顔が輝いて見えました。なぜこんなに平安でにこにこしていられるのだろう。不思議でした。

ベックさんとお話した時、

「烈は神様を信じますか」と聞かれました。

「神様の存在は信じられますが、私はまだ神様の前に出られるような者ではありません。もっと努力して自分を清めてからでないと神様を冒瀆することになります。私は酒を飲みますし、たばこも吸います。下品なことも言いますし、嘘もつきます。まだまだ駄目です」

「そんなことちっぽけな問題だよ。イエス様を信じれば、自分で努力しなくてもイエス様がお酒なんか必要なければ取り上げてくださる。なんにも心配することないよ。イエス様に頼る者はぜんぶイエス様が解決してくださるんだよ。イエス様にお願いすれば自分ではなんにもしな

くていいんだよ」

ベックさんは私の目をじっと見て、手を握ってくださいました。大きくて分厚い手が、暖かく、がっちりと私を摑まえて離さなかったような気がしたのを覚えています。ベックさんはその後で一緒に祈ってくださいました。何を祈ったのかは記憶していませんが、重い荷物を下ろした時のような解放感がありました。

頑固者の私は、ベックさんのお話に驚きましたが、素直に信じることができませんでした。「私がこんなに懸命に戦っている酒との死闘をそんなに簡単に神様が取り上げてくださるなんて冗談じゃない、そんななまやさしいものじゃないよ」。帰りの新幹線の中でぼんやりとそんなことを考えていました。

その年の四月、二回目に精神科に入院しました。第一回目の入院から十年目でした。この入院が内科を含めると五回目を数えるのに、私はまだ頑なに自分はアルコール依存症ではないと思っていました。というより絶対に認めたくなかったのです。忌まわしいその汚名を着せられたくない気持ちがあり、またアルコールという悪魔の誘惑を断ち切ることができなかったのでした。

一カ月の入院の後、再び岡山の集会へ集わせていただくようになりました。若山さんご夫妻をはじめ、皆さんが私のような碌でなしをいつも優しく見守ってくださっていました。その頃、岡山集会は伯備線で北に入った美袋という所の斉藤さんのお宅で開かれるようになっていました。季節の花々が美しく咲き誇る中で、いつもイエス様を賛美している光景に、心洗われる思いで自然の中に身を任せていました。酒はもう止めており、「本当に神様が取り上げてくださったのか

な」とさえ思っていました。毎月一度、泊まりがけで行く岡山集会は楽しみで、田中さん、平さんたちと二時、三時までお話をしたものでした。

その年、つまり一九八五年九月の集会の時、若山さんのお宅へ泊めていただくことになり、美袋から倉敷へ向かう車の中で、突然若山さんに、

「檜垣さん、そろそろ洗礼を受けられたらどうですか」と言われてびっくりしました。私はそれまで受洗のことなど考えてみたこともありませんでした。あまりにも突然で、しかも翌日高松集会の人と一緒に受けたらどうかというのですから、考える暇もありません。神様につながれていないと自分は駄目かもしれない、まず、自分の態度をはっきりと洗礼によって表わすことだ。だからこの際、洗礼を受けてみよう、と決心しました。私は知りませんでしたが、主イエス様はすべてのことをご存知であり、この時すでに何から何まで一分のすきもないご計画を進められていたのでした。

一九八五年九月十六日、高梁川の清流で、私は妻と一緒に受洗しました。若山さんがみことばを読んでくださいました。

私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。（ヘブル　4・16）

このみことばに、私は本当に勇気づけられました。一生イエス様とともに歩んで行きたいと思いました。

## 主イエス様がみ心をあらわしてくださった

多くの場合、証しはこんなところで終わるものなのですが、私の場合はどうしたことでしょうか。人が考える筋書きのようにはいかなかったのです。受洗から半年たった一九八六年三月、私は大した理由もないのに無茶苦茶に酒を飲み始めたのです。約一カ月間、暗い奥座敷にこもったまま、夜となく昼となく飲み続けました。飲むまいとすると禁断症状が出て、止めることができないのです。苦しくて、悲しくて、泣きながら飲み続けました。飲んでは三、四時間眠り、酒が切れると目が覚めてまた飲むのです。食物は全く受けつけず、衰弱と脱水症状で立ち上がることもできず、ほとんど仮死状態にまでなりました。そしてとうとう冒頭に書いた通り、妻と長男に病院にかつぎ込まれたのでした。どうしてこのようなことになったのか未だに分かりません。主イエス様が何か私には分からないご計画があってされたこととしか考えようがないのです。三回目の精神科入院でしたが、過去二回の時の病院とは違う、ほとんどアルコール依存症患者だけのための病院でした。イエス様が最後の一撃をもって頑なな私の魂を打ち砕いてくださるみわざだったのです。

点滴を一日一〇〇〇cc打たれ、意識が回復するにつれて、妻や長男に対する恨みが湧いてきました。過去二回の入院の時もそうでしたが、騙されて連れてこられたこと、自分の意志で立ち直ってみせると言う私の言葉を信じてくれなかったこと、刑務所よりもっと屈辱的な監禁病棟に入れられたこと。後で考えてみれば当然の処置なのですが、狂乱状態にあるその時の私には、すべてのことの責任が家族の者たちの無理解にあるのだという、屈折した被害者意識しか持てなかっ

たのです。その思いは段々と心の中で膨らんでいき、憎しみすら抱くようになりました。

入院後十日間くらい不眠が続き、ぼんやりした意識の中で、ある夜はっきりと目が覚め、心の中で何かが動いたような気がしました。眠られぬままに、「どうして自分は今ここにいるのだろう、なぜ？　よし時間はたっぷりあるのだから思い出せる限りのことを遡って思い出してみよう」と考えました。子供の頃からの出来事などを前後しながら考えているうちに、突然背中から冷水を浴びせられたような戦慄をおぼえました。自分が今まで正しいとしていたこと、当然だとしていたことすべてが、神様から見たら全く間違いだったとしたらどういうことになるんだろうか。私が善だと思っていたことが悪で、正だと考えていたことが実は誤だったとしたら、私が考えていたことは……私がやってきたことはとんでもない罪を犯してきたことになる。心の奥底にしっかりふたをしてしまいこんでいた罪の意識が、どっと溢れ出しました。私の目の前に、今まで自分が犯してきた罪がはっきりと一つ一つ示されていきました。涙が止めどなく流れ、嗚咽する自分を抑えることができません。「神様赦してください、神様助けてください」「家族の者を助けてください。彼らには何の罪もありません。私だけが悪いのです。神様、お願いです。助けてください」。叫びとも祈りともつかない言葉を繰り返していました。この私の声をイエス様は聞いてくださいました。窓の向こうの空が白んでくる頃、次第に心の中に安らぎが与えられ、私は、入院以来初めて眠りに落ちることができました。

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。
（詩篇　34・18）

病院内には一切の宗教的色彩のあるもの、特定の信仰に関する本や録音テープの持ち込みは禁じられていて、厳しいチェックが行なわれていました。ですから妻が荷物の中に忍ばせてくれた聖書が私の手もとに届いたことは奇跡でした。一度神様についた者が罪を犯した。洗礼まで受けた者が神様を裏切った。この罪は決して赦されない。そう思いながらも一縷の望みを抱いて、必死になって聖書を調べました。どこかに救いはないのだろうか、主よ、赦してはいただけないのですか……。そしてとうとう、みことばを見つけることができました。

そのときペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度までですか。」イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」（マタイ　18・21、22）

イエス様は赦してくださる。私は赦された。喜びが全身を走り抜けました。この私の罪のために、イエス様が死をもってとりなしてくださった。十字架のみわざをはっきりと見せてくださったのです。初めて心から悔い改めることができ、初めて赦されたという実感が心の底から溢れ出てきました。自己中心の塊、高慢、むさぼり、様々な罪にまみれた自我をこのような形で砕いてくださった神様、この日のために五十年間の私の歩みを備えてくださった神様。イエス様の愛の深さを体験しました。祈ることの素晴らしさを教えられました。みことばが自分のために書かれているように思え、びんびんと心の中に響いてきました。

それにしても、どうしてこんなに突如として私は一八〇度変えられたのだろう。初めは気が付

きませんでしたが、主は私だけの願いを聞かれたのではなかったのです。広島集会の皆さん、岡山集会の皆さん、吉祥寺キリスト集会の皆さん、大勢の方々が心を一つにして私のために祈っていてくださったのです。その祈りに主は応えてくださったのでした。本当にみことばは真理です。イエス様のお約束は現実です。退院直後、七月の軽井沢キャンプに参加させていただいた時、初めてお会いする大勢の方々が私たちのことをよくご存知でした。いつも祈っていてくださったからでした。あふれんばかりの感謝でした。ベックさんが最初にお会いした時言われた、「神様が取り上げてくださる」というのはこういうことだったのです。人知を遙かに越えた、予想もできない方法で、イエス様は私からアルコールを完全に取り上げてくださったのです。

## アルコール依存症からの脱出の道はイエス様の所へ行く道だった

アルコール依存症患者の病気の治療というのは、肉体的には点滴やその他の投薬で一カ月余りでほぼ回復をみるのですが、心の病には特効薬はありません。そのため断酒会とかA・A（Alcoholic Anonymous の略称。無名のアルコール依存症者たちの意。アルコール依存症者・薬物依存症者たちが自発的に集ってミーティングを中心に行なう回復のための集団療法）という集会に参加するという方法で、色々な人たちの経験談やノウハウを学んでいくのです。入院中も退院後も治療の延長として継続していかなければなりません。断酒会は依存症者が一人だけでいると再発の危険があるため、二日に一度は集ってお互いに監視しあう会です。A・Aは染野さんや大塚さんが「光よあれ」の中で証しされているのでご存知の方も多いと思います。この会では、

自分はアルコールに対して無力である（罪に対して何の抵抗力ももっていない）、何か知らない偉大な力にすべてを委ねていかなければ回復はない、と結論づけています。ただ、A・Aの問題は、その信仰の対象を特定しないで、それぞれ自分の信じられる神（一般的な神観念という意味ですから、仏でもいわしの頭でもいいのです）を信じなさい、といっている点で混乱が生じるということです。しかし幸いなことに、私は何か知らない偉大な力とはイエス様であることにすぐ気付くことができましたから、退院後もキリスト集会と聖書だけに頼って、迷わずに真の救いへと導かれることができました。

## 神様からのプレゼント

アルコール依存症という病気は厳密にいえば治癒という診断書が書かれません。証明できないからです。従っていつ退院できるか分からないのです。すべて院長先生の診断しだいですから、三カ月の禁固なのか一年なのか、あるいは無期なのか、患者には分かりません。期待することも、諦めることもできない不安な状況におかれるのです。しかし私には主イエス様が約束していてくださいました、試練とともに脱出の道も備えていてくださると。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

（詩篇　119・71）

この病を通して、神様は私に多くのことを学ばせてくださいました。アルコール依存症という

病に侵され、人間が理性を失う時、心の中に潜む罪の数々がくっきりと浮き彫りにされるのです。自己愛、ねたみ、そしり、むさぼり……。

自らもイエス様と共に十字架にかけられたこと。イエス様以外に救いの道はないこと。何十年アルコールを断っていても突然酒を飲み出す可能性があるように、今信仰生活を送っているからといって一生神様に背かないとは言いきれないこと。そしてどんな苛酷な状況に置かれていてもイエス様の愛が注がれていること。実際に体験することによって、私は身をもってこれらのことを知りました。アルコールからの脱出の道は信仰の道そのものなのです。私は感謝します。アルコール依存症という病を与えることによって私を砕き、救いへと導いてくださった主イエス様の深い愛を。この体験を通して主イエス様の素晴らしさを証しできる幸せを。

現在広島の家庭集会を私の家で開かせていただいています。イエス様は私たちのような者でさえ用いてくださり、一人一人救いの中に入れてくださいました。その不思議なみわざを目の当たりに見させていただき、感謝の毎日です。主のみ名はほむべきかな。み栄えと誉れは主イエス様だけが受けられますように。

「あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。――神である主の御告げ。――だから、悔い改めて、生きよ。」

（エゼキエル　18・31、32）



吉祥寺キリスト集会の田中▶
正子さん(右)と智津子さん。

# かえれや、と主は呼びたもう

檜垣智津子

一九三七年広島市に生まれる。広島市立仁保小、私立比治山女子中、私立比治山女子高卒。一九五九年夫烈さんと結婚。長男長生さん、次男水成さん。趣味はダンス。

私は三人兄妹の末っ子の一人娘として生まれ、可愛がられて育ちました。特に長兄が中学生の時病死したために両親から溺愛され、我がままな自分中心の生き方をしてきました。実家は農家でしたので、両親や兄は朝早くから夕方遅くまで畑で仕事をしており、学生の頃から、誰もいない家に一人ぼっちで寂しい思いをしていました。私が高校生ぐらいの頃から、土地ブームで、畑が宅地として高騰し始めましたので、経済的には割合に豊かでした。両親は自分たちが一日中家にいないので、可哀相に思ったのでしょう、お金だけは人並み以上に与えてくれました。その頃の私は、虚しさをまぎらわすため、友人たちと食べ歩きや観劇にうつつをぬかしてばかりいる幼稚な遊び好きの女の子でした。

二十五歳の時、見合いをして現在の夫と結婚、二人の男児の母となりました。全くの世間知らずで、いなかっぺお嬢さんで育った私は、苦労というものを知らず、嫁に来て初めて結婚生活の現実に直面しました。夫と私の生いたちの違いや世間の常識について行けず、ずいぶん寂しい思いをしました。義母も義姉も厳しい方で、私の一挙手一投足に注意を受けることもしばしばあり、

それまで何の教育もしつけも受けてこなかった私にはたいへんつらく感じられました。また、義母も義姉も睡眠薬を常用しており、そのせいか時々神経質になってひどく叱られたりすることがありました。そのうちに私自身もだんだんと神経過敏になり、義母や義姉の顔色をうかがいながら、息をひそめるようにして暮らすようになりました。

そんなことから、次第に実家へ帰りたい、帰りたい、と思うようになりました。主人だけがそんな私の心の支えだったのですが、仕事で夜遅く帰って来るのをじっと待っていることは辛く、いつも自分中心だった以前の生活を思い出しては、今自分が置かれている立場に切なくなって一人で泣いていました。

長男が二歳になる頃、二人目の子ができましたが流産でした。次の子もまた流産、私は体も心もズタズタになりました。主人がそんな私を気づかってくれ、日曜日や休日にはよく気晴らしに山や海に連れて行ってくれるのが唯一の慰めでした。あの頃の私は幸せと不幸せの間を行ったり来たりしていたように思います。

そのうちにようやく五歳違いで次男を授かりました。長男の方は元気過ぎるくらい元気で、私の手におえないほどでしたので、次男は落ち着きのある子供に育てようと思っていました。その次男が、幼稚園に上がって三日目に、家の前で自動車にはねられ、八メートルぐらいはね飛ばされました。外傷はたいしたことはなかったようですが、重傷でした。首が僅かに動かせる程度で、全身麻痺状態になりました。意識はありましたが身体は全く動かせないので、昼も夜もつきっきりで看護しなければなりません。後遺症の心配とか加害者への怒りどころではありません。「と

にかく命を助けてほしい」と、ただそれだけを願っていました。

主人はもうその頃からお酒を手から離せなくなっていたようです。私が、

「子供が事故で苦しんでいるのに、お酒なんか飲まないで」と言っても、

「こんな時だから、飲まずにいられないんだ」と、お酒を止めようとはしません。今思うと、すでにアルコール依存症の徴候が現われ始めていて、主人の心の中にも精神的変化があったのかもしれません。

次男はなんとか命は取り留めたものの、入院して一カ月近く経っても手足はもちろん首も回らず、赤ちゃん同様の状態でした。ところが事故から二十九日目に突然体を少し動かしました。首も手足もです。本当に奇跡を見た気がしました。それからの回復ぶりは目を見張るばかりでした。つたい歩きから始めて、四、五日のうちにほとんど元の状態に回復した時には、嬉しいのはもちろんですが、正直に言って驚きの方が大きかったように思います。まだその頃は、私はイエス様のことを全く知りませんでしたが、今考えてみると、その時すでに神様は私たちに目を留めておられ、すべてのことをご計画通りに運んでいらっしゃったのだと確信しています。

次男はそれからしばらくして元気になり、幼稚園へも通えるようになりました。何の後遺症も見受けられず、ほっといたしました。

私はその後、夫に対する不満や、心の空虚さをまぎらわせたいという気持ちも手伝い、幼稚園の役員を引き受けることにしました。私は特に社交的な性格というわけではありませんが、外に出るのは好きでした。というより家の中で家事万端を取りしきることが苦手で、いつも賑やかな

所にいるのが好きだったのです。それに少しでも家庭の中の嫌なことから逃げていたい気持ちもあったのかもしれません。幼稚園の先生方も、次男の入院中はよくお見舞いにきてくださったので、役員としてお役に立てれば、ご恩返しになるとも思いました。それがきっかけで、田中さんと出会いました。役員同士ということで親しくなり、家に遊びに行ったり、一緒にケーキを作ったりしてお付き合いさせていただくようになりました。そのうちに、悩みを打ち明けあったり色々なお話をするようになりましたが、彼女がクリスチャンであることをその時初めて知りました。田中さんは神様のこと、信仰のことなどを親切に話してくださいましたが、私はその時には神様を知ろうとはしませんでした。目に見えない神様のことより、現実の生活の苦労の方に目を奪われていたのでした。

主人と私との間には共通点がなく、お互いに育った環境も違い、趣味も考え方もまるっきり違っていました。嫁姑の関係もしっくりしたものではなく、そのため家の中に喧嘩が絶えず、私は神経がまいりかかっていました。私にはよくは分かりませんでしたが、主人は何か満たされないものがあるらしく、いつも不機嫌そうでお酒に逃げているようでした。

そんなある日、突然警察から電話がかかってきました。中学に上がったばかりの長男が警察に補導されているというのです。驚いて行ってみると、友人三人と一緒に保護されていました。奥の部屋にぽつんとつっ立っている長男の顔を見た時、私は胸が熱くなり、かけ寄って息子を抱きしめました。可哀相で、いとおしくて、ぽろぽろ涙を流して泣きました。私の責任なんだ、私が悪かったんだ。自分が罪人のように思えました。夫婦関係のひずみや嫁、姑のしがらみに、心の

中に嵐が吹き荒れるようにすさんでいた私の生活が長男を非行に追いやってしまったのです。自分のことで精一杯の私は、子供のことなど考えている余裕もなく、愛情を注いであげるどころか、責任もない子供たちにまで当たり散らしていたのでした。そして自分の愚かさにも気が付かず、人ばかり恨んでいました。

警察の方は軽い説諭の後で、

「友達の親御さん達も来ておられましたが、子供をひどくしかっておられました。でも檜垣さんのお母さんは一緒に泣いてあげられるほど、子供さんの気持ちが分かっていらっしゃる。大丈夫、二度と警察に来られるようなことはないと思いますよ」と言ってくださいました。

警察を出て家に帰る道すがら、私はこれから先の日々がたまらなく不安になり、思わず長男に「一緒に死のう」と言ってしまいました。すると、思いがけず長男は、

「ばあちゃん（姑）が、人間は生きていれば必ずいいことがあるっていつか言ってた。僕はまだ死なないよ。死にたかったら母ちゃん一人で死ぬといいよ。僕が見ててあげるから」

と言うのです。私はびっくり仰天しました。この子がこんなにしっかりしたことを言うとは……。息子が頼もしくもあり、そのぶん自分が腑甲斐なくもあり、二人で顔を見合わせて苦笑しました。

主人のお酒は止みそうもなく、おまけに賭け事にも手を出すようになりました。当然のことながら経済的破綻に追い込まれていきました。実家に帰っては内緒で両親に援助してもらったり、友達に借金したりもしました。初めて借用書を書かされた時は、生まれてこの方そんなことを経験したこともないので手が震えました。田中さんにもお願いしました。田中さんは何も聞かずに、

「返してくれなくてもいいのよ。負担に思わないで使ってちょうだい」と言って、お金を渡してくださいました。初めてするお金の苦労、世の中の厳しさの中で、こんな優しい思いやりを受けたのは初めてでした。神様と巡り合ったように思えました。クリスチャンというのはこんな人達なのかとびっくりしました。

「でも、こんなことしてたら、いつまでたってもご主人は救われないわ。神様に頼りなさい」。田中さんにそう言われて、私は初めて集会に導かれました。それは今私たちが集っている集会ではなく、もう一つの別の集まりでした。戸を開けて会場に入った時、正面に墨で書かれた額縁の文字が目に飛び込んできました。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

（マタイ　11・28）

このみことばが私を捕え、身動きができなくなりました。そのままその場に座り込んで、何度も何度もみことばを読みかえしているうちに、涙が止めどなく出てきました。神様が私のために書いてくださったのではないかと思いました。

こうして私は少しずつ集会へ行くようになりました。読書が苦手な私は、なかなか聖書を読むことができず、一生懸命読んでみても内容はちっとも分かりませんでした。でも、そうしているうちにだんだんと週に一度の婦人の集いに行きたいと強く願うように変えられていきました。聖歌四〇四番が大好きでした。「重き荷をばおろして、やすきえよやと、かえれや、かえれや……」

のところに来ると涙が出て仕方がありませんでした。

それでもまだ自分中心の我がままな性質は捨てられず、主人と母や姉のことでしょっちゅう言い争いをしていました。

主人に「それでもお前はクリスチャンなのか、汝の敵を愛せよ、右のほほを叩かれたら左も出せっていうのがクリスチャンだろうが。お前たちは偽善者だよ」などと言われると、私は、私だけでなく集会のみなさんや、みことばまで汚されたような気がしました。反論しようかとも思いましたが、理屈では主人にかないません。「聖書があるから集会に行きたくなる、聖書がなければ集会へ行きたくなくなるだろう」と変な理屈を思い付き、泣きながら聖書を焼き、心の中で、「神様赦してください。私のような者のために、神様や集会の皆さんをも汚してしまいました」とあやまりました。それから少しの間、神様から離れようとしてみましたが、寂しくて寂しくて、やはりまた集会へ行かずにはいられなくなりました。

それから数年後のある日、洗礼式に立ち会った時、私は自分も洗礼を受けたいという気持ちにかられました。そのことを口に出して言いましたが、その集会ではあまり突然のことで許されませんでした。少しがっかりはしましたが、自己中心的な私を自分自身でも認めていましたから、まだ神様の備えられた時が来ないのだろう、いつかは受洗できるだろうと思って諦めました。

主人のお酒は年々ひどくなり、入退院を繰り返していました。こんな私達の生活を見て、その頃倉敷の集会に集うようになっていた田中さんが、「一緒に倉敷の集会へ行きませんか」と声をかけてくださり、私も主人を神様に助けていただきたいと思い、連れて行っていただくことにし

ました。初めて若山さんご夫妻に出会い、ベックさんやたくさんの集会の方々とお話することができ、とてもなごやかな集いの中で、私は重荷が軽くなっていくのを感じました。初めてベックさんとお話させていただいた主人は、神様を信じたようでした。

私は酒に溺れていく主人を見て、いつも「神様、主人を助けてください。いつも人からよく見られたい、優等生でありたいばかりに疲れていく主人を楽にしてあげてください」と祈り続けていました。よくお風呂で祈りながら泣きました。湯船の中で水でバシャバシャ顔を洗いながら泣き声に気付かれないように……。気ままで自分中心にしか物事を考えられない私でしたが、主人の救いを願う心は真剣そのものでした。「本当に神様、主人を助けて」と一心に祈りました。その一方で相変わらず現実を見ると気持ちがくじけ、主人を恨んでしまうこともありました。何度も実家へ逃げ帰り、思い直しては帰って来ました。

主人のアルコール依存症最後の入院の前には、思いあまって染野さんのところに電話をしました。染野さんならきっとこんな不幸な私の痛みを分かってくださる、慰めてくださると思っていました。ところが期待に反して染野さんは、「私に頼るの、神様に頼るの?」と言われたのです。人間的に考えれば冷たいと思えるご返事でした。でも染野さんの言われたことは本当でした。私はその時、目には見えないけれども確かな神様の愛に包まれていたにもかかわらず、依然として目に見える人間の愛に頼っていたのです。人に頼るのではなく、神様に頼る時、初めて神様は働いてくださる。この時になってようやくそのことを教えていただきました。感謝でした。それ以来実家にも頼りませんでした。神様だけに頼って行こうと決心しました。

月に一度ではありましたが、倉敷の集会に集わせていただくことが私の喜びでした。その後集会は場所を美袋の斉藤さんのお宅に移し、広島からも、転勤してこられた平さんご夫妻が集われるようになり、少しずつ人数が多くなっていきました。主人もお酒を止めきってはいませんでしたが、集会には欠かさずいっしょに行ってくれました。神様が少しずつ働いていてくださっていたのです。そして一九八五年九月十六日、私は主人と一緒に受洗することができました。この時になって、以前の集会で洗礼を受けられなかったのは主のご計画だった、神様はこの日のために私を待たされ、主人も一緒に大きな救いのみ手に入れようとして時をそなえていてくださったのだと気付かされました。イエス様の深い愛をただただ感謝いたしました。

二人が救われてから私は、「神様、母に優しくできるようにさせてください」と懸命に祈りました。母を恐れる気持ちもまだ残ってはいましたが、母を愛したい、優しくしたい、と心から願っていました。こんな情けない私を神様はあわれんで恐れを取り上げてくださり、私はだんだんと平安な心で母に接することができるようになりました。一緒にお風呂に入って体を洗ってあげることができた時には、母と二人で喜び合いました。母は原爆の後遺症や色々な病気が重なり、十年近くも不自由な入院生活を送っていたのです。そしてこの時、母はすでに乳がんに侵されていました。お風呂で私が体を洗ってあげようとすると、母は、

「チーちゃん、私の体は汚いから洗ってくれなくていいよ。付き添いさんだって嫌がるから言わないでいるのよ。それでもいいの?」私は、

「病気だもの仕方ないでしょ。汚いことなんかないですよ、お母さん」と言って体を洗ってあ

げることができました。母はとても喜んでくれました。私も神様に感謝しました。

その後、母はがんの手術を受けましたが、転移が見られ、ほとんど回復の希望は持てない見通しとなりました。目が悪くて聖書を読むことができませんでしたが、それでも時々集会に出たいと言って、主人に負われて来てくれるようになりました。その頃は広島でも平さんのお宅で集会をするようになっていました。母は時折集会でいただいたお菓子を「ドンドン婆ちゃん（母の実母）に持って行ってあげよう」と言ってバッグにしまったりしていました。おばあちゃんはずっと昔に他界しているのに……。少しずつ、ぼけが始まっていたのでした。母にぼけの様子が見えだした時、私はそのことによって神様が母の痛み、苦しみを和らげてくださっているのだと思いました。

ぼけが進行するにつれて母は子供のようになり、私がお見舞いに行くと、とても喜んで迎えてくれました。いちじくが大好きだった母に、実家でとれた新鮮ないちじくを持って行って、皮をむいて小さく切って、口に運んであげると「美味しい」と言ってたくさん食べてくれました。そのころにはもうあまり食欲もなく、付き添いさんが、「あら、よくお上がりになりますね」と感心しておられました。神様が私に最後の最後になってやっと親孝行をさせてくださったのだと涙が出るほど感謝しました。

それから半年後、母は神様を信じて天国に召されました。主人の話ですと、意識が薄らいでいく直前に「イエス様が見える」と言っていたそうです。今は悲しみも苦痛もない、素晴らしい天国で私達を待っていてくれると確信しています。

広島の集会は、一九八六年頃からメンバーがふえ始めました。最初は平さんのお宅で家庭集会をしていましたが、それもつかの間、平さんの転勤や田中さんの上京で、私の家しか集会を開く場所がなくなりました。よちよち歩きの信者ばかりがとり残され、私たちが立たされなければならなくなりました。お掃除や整理整頓の苦手な私には、とても集会の準備やお世話をすることなど無理だと思われました。できない。どうしよう。そんな思いが心の中で大きな重荷となり、思い煩いが昂じて、とうとう入院することになりました。一カ月間病名のない病気で入院していましたが、祈っても祈っても神様は答えてくださいません。自分の家で集会を開くのは不安だし、かといって礼拝はしたいし、皆さんとのお付き合いの場も欲しい。あれこれと迷った揚げ句、ついに決心しました。「神様が助けてくださる。本当に頼りない私たちだからこそ神様が助けてくださる」。そう思うと勇気が出てきました。たった一人だけど、男の仕え手として、主人がいる。だからこそ神様は主人からお酒を取り上げられたのだ。神様に仕える者として用いられるために。そして皆で心を一つにしてイエス様を賛美していこう。そう思った途端、病気がなおりました。

イエス様は私たちをお見捨てになりませんでした。牛の歩みよりものろまな信仰生活ですが、神様が一人一人をあわれんで恵んでくださり、お導きにより集会に集う方々を増し加えていってくださっています。私の思いでなく、イエス様のみ心だけがなりますように。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（Ⅰテサロニケ　5・16～18）



# み力の大空で

佐藤鳩士
日本航空パイロット
東京都出身／戸山小／早稲田中／早稲田高／慶應義塾大卒／妻　和子／子供　二男二女

操縦席の窓を通して一万メートルの空から見る地球は限りなく美しく、また私たちのために周到な計画によって準備された素晴らしい存在であることを感じます。ときには飛行の障害となる激しい気象現象さえも私たちの生存に不可欠なものであることを知るとき、この宇宙は決して偶然によってできたものではなく、偉大なる創造主の手によってできたものであると確信できます。「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」（詩篇19・1）

このように神の壮大なスケールの前に人間の力は本当に小さなものです。パイロットはいつも生と死を身近に感じている職業ですが、私は主なる神様の御前に立たされたとき、それまでの自分の力だけで生きようとしていた自分の愚かさと平安の無さを痛切に感じました。そして神に背を向け自分勝手に生きてきた罪をも主イエス・キリストの十字架のみわざによって赦してくださり、ほかのなにものによっても得られない本当の救いと平安が用意されていたことに心から感謝し喜ぶことができました。

「御力の大空で、神をほめたたえよ」（詩篇150・1）

# 命の道を知らされて

佐藤和子
東京都出身／桜町小／玉川中／都立第一商業高／共立女子短大英文科二部卒／夫　鳩士／子供　二男二女

「自分はどこから来て、どこへ行くのだろうか？」この思いは子どもの頃から心の奥にいつもあり、大人になって結婚をし、子どもが生まれて忙しい日々を送るようになっても暗雲のように広がる不安を抑えることができませんでした。形あるもの、いのちあるものが朽ちていく様を見ると、この世の空しさを感じて動揺してしまいました。主イエス様が初めて私を吉祥寺キリスト集会へ導いてくださったときに、笹川郁夫さんの証しをお聞きしました。そのとき笹川さんはがんの末期にあり、痛々しいお姿でしたが、主イエスと共にある喜びと平安を語る口元はほほえみ、顔は輝いていました。そして主は、このことを通して私にも天に用意してくださっている永遠の住まいがあることを教えてくださいました。主は深い愛によって、主に背を向けて生きてきた高慢な私を赦してくださり、主の道を歩ませてくださいますから心から感謝します。「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」（ヨハネ5・24）

「私たちの国籍は天にあります」（ピリピ3・20）

# 国籍は天にあり

故 園浦良春（長男）

埼玉県出身／大幡小／大原中／熊谷西高卒／岩手大在学中に召天

私は、周囲の方々の導きもありましたが、正直いって何が何だか分からないままに救われました。今振り返ってみると、十代後半のあの陰鬱な暗い日々のことが思い浮かびます。人間社会への反感、自我と独自性の追求、それに伴う孤独願望、そして自然への憧憬。また自分は絶対者で、自分の内部で自分以外のものは受け付けず、この世界に起こることは全て自分のための演出だと思い、本当の自分とは一体何者だろうか、と自分自身を理解しようと「自分は…自分は…」と必死でした。やがて全てに絶望し、無力感、不安感、罪悪感が湧いてきて、押しつぶされそうになることもたびたびありました。それらから逃れるために、「安住の地」に行かなければ、と思い、脳裏に浮かぶ地図上を自分の知識で捜し求めたりもしましたが、そのような所はこの地上のどこにもありませんでした。

しかし、主イエス様に出会った今、自分は主によって造られ、主のご計画の下に今まで導かれ、自分の罪が赦され、「安住の地は天にある」ことを知りました。

ですから今は、自分が肉の世にいて様々な欲望のために傲慢にならないように祈りながら、ただ主のみに仕える者となりたいと思っています。永遠のいのちを与えてくださり、真の希望と平安を与えていただき、ただただ主イエス様に感謝しています。

---

園浦良春さんはこの証しを書かれた後、1990年8月24日に交通事故にあわれ、翌25日天に召されました。ご家族の住所と家庭集会のご案内は次の通りです。

園浦勁造　住所　埼玉県熊谷市柿沼950-6 〒360

電0485-23-6365　家庭集会　不定期

# イエスは主です

園浦洋二（次男）

埼玉県出身／大幡小／大幡中／熊谷西高卒／信州大農学部在学中

私は小さい頃から臆病で、絶えず他人の目を気にして生きていました。強く生きたいと思えば思うほどかえって自信がなくなり、高校三年頃から精神的に不安定になりました。しかしイエス様は私を憐れんでくださり、私を聖書のみことばを通して造り変えてくださいました。天地万物を創造された神が存在し、その神が私を愛してくださるという事実は、この世のあらゆることに勝る喜びです。天に召された兄とも、いずれ天のみ国で再会することができます。このようにすべてのできごとがイエス様のみ手の内にあるということこそ、大きな平安であり真の慰めです。

# み手の中で

園浦貴子（長女）

埼玉県出身／大幡小卒／大幡中在学中

「摩訶般若波羅蜜多……」今日も聞こえる母の読経。こんなもの読んで何かいいことでもあるのかなあと思っていた小学校5年の頃。そんなある日のこと、突然母の手には数珠の代わりに聖書が……。でも、なんかぴんとこない、と思い始めた矢先「義人はいない。ひとりもいない」（ローマ3・10）というみことば。これは！と思って私の人生最大のカルチュア・ショックだった。ああそうなんだ、私は間違っていたと気付いた。投げやりで自分勝手できれいごと嫌いの私にこれは非常に嬉しかった。自分の中の壁が破壊されたのだ。そして兄のこと。イエス様、あなたに感謝します！




▲園浦さんご一家。左から勁造さん、慶子さん、長女・貴子さん、次男・洋二さん。

## 神と出会って

園浦勁造（父）

東京三洋電機㈱勤務
大阪府出身／布施第一小／八尾中
／高津高／大阪大電気工学科卒

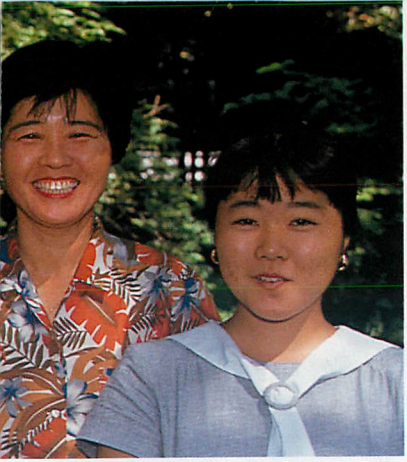
妻に勧められて初めて軽井沢のバイブルキャンプに参加した時は逃げて帰りたい気持ちを抑えて忍の一字で話を聞いていました。ベックさん始め皆さんを通して少しずつ信仰というものが分かってきました。傲慢で独善的な私ですが、自分の心一つ思い通りにならず、やはり自分は生かされているのだと実感するようになりました。道端の一輪の花を見ても、その創造の絶妙さに打たれます。この万物の創造主である神と出会ったことに感謝します。このほど長男の良春が事故により天に召されましたが、主を信じて天に召されていったことを心から感謝しています。「わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」（ヨハネ11・25）

## 家族が救われて

園浦慶子（母）

神奈川県出身／南太田小／蒔田中
／市立南高卒

かつては「なぜ、私は労苦と苦悩に会うために胎を出たのか」（エレミヤ20・18）と思い惑い、無気力になり、子供達をこんな世界に連れてきてしまって…と責任感のみで生きていた所、「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう」（詩篇50・15）という聖書のみことばに導かれ救われました。神様に背いていたために「死の谷」に迷い込んでいた私達家族をイエス様は救いにきてくださり、「永遠の天国への切符」をくださったのです。その後長男良春が天に召されましたが、天国での再会を約束してくださり、また葬儀に際して主がご臨在になられ、全てを器として用い種蒔きをしてくださり、本当に感謝です。



◀ 黒津さんご一家。左から泰宏さん、長女・郷美さん、君子さん、次女・暁美さん。

# みことばに支えられて

黒津郷美（長女）
千葉県出身／流山市立東小／茗渓学園中、高卒／お茶の水女子大理学部在学中

小さな頃から教会へは時々行っていました。しかし、何かもの足りないものを感じるようになって足が遠のいていた頃、母の知人の紹介で吉祥寺集会に集うことができました。その日から1カ月も経たないうちに母のがんが発見され、入院と手術が行なわれたのですが、これも神様のご計画だったと思うと、そのはかり知れない力と恵みに驚かされます。そして去年のクリスマスの日、家族4人で洗礼を受けました。私はすぐに人間的な思いにとらわれてしまいます。集会に出るといかに自分の心が神様から離れていたのか気づかされます。恥ずかしいと思うと同時に集うことの大切さと喜びを感じます。この社会で生活していると、やはり苦しいことやつらいことなど自分ではどうにもならない壁に突き当たります。そんな時私は「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい」（マタイ11・28）というみことばを思い出し、心が安らかになるのを感じます。「あなたの道を主にゆだねよ」（詩篇37・5） 主は最善をなしてくださると信じています。これからも祈りによって支えられ、喜びに満ちた人生を歩みたいと思っています。

# 心の扉を開ける

黒津暁美（次女）
千葉県出身／流山市立東小／茗渓学園中、高卒／東京成徳短大英文科在学中

「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです」（ヨハネ16・24） この聖句によって私はイエス様のもとへ導かれました。特に悩みのない私にとって、とても親しみのあるみことばでした。実は、私は今まで心から真剣にイエス様にお願いをしたことはありませんでした。いつも、すべてが順調に運び、そのうえ私は呑気で無頓着な性格なので「悲痛」などという言葉とはおよそ縁がありませんでした。

しかし、最近になってほんの少しですが、心配事や本当の願い事が頭に浮かぶようになってきました。今までは何が起きても、「これはイエス様のみこころだ」とあまり深く考えていませんでしたが、この聖句に出会った瞬間から、「自分のほうから心の扉を開けてみよう。イエス様に、みこころならば叶えてくださいと願ってみよう。いや心から祈るべきだ」と思うようになりました。

この聖句に出会えたのもイエス様のお導きと、心から深く感謝しています。



# 信じる者は永遠に

黒津泰宏（父）

公務員
東京都出身／亀青小／聖学院中、
高／明治学院大卒／妻　君子／子
供　二女

「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」（ローマ10・10）「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」（ローマ10・13）

私が信仰に導かれましたきっかけは妻の病気でした。再起不能と思われた病気も、神のみ手にゆだね、信じて手術をし、治りました。私自身はクリスチャンの家庭に育ち、学生時代から教会や聖書を通し説教を聞いていましたが、真実の信仰を持って人生における問題や悩みを解決するには至りませんでした。なぜなら私は聖書を学問的に理解したり、理論的に結論づけることだけに熱心だったからです。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」（ヨハネ３・16）子供のように神にすべてをゆだね、病気が治ることを信じることが私の信仰だったのです。神は私のように信仰の薄い者の願いさえも聞いてくださいました。なんと寛大な愛でしょうか。

今では妻もすっかり元気になり、神様のご用をさせていただいております。

# イエス様に出会えて

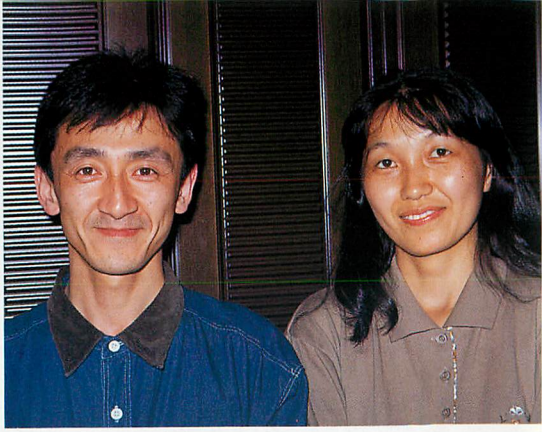
黒津君子（母）

千葉県出身／野田中央小／野田二
中／東葛飾高／青山学院大卒／夫
泰宏／子供　二女

私が本当の意味でイエス様に出会えましたのは、自分の病ががんであると知らされた時でした。心配のあまり悲しそうな目で見つめる主人や子供達に心の内を見せることはとてもできませんでした。すべてをご存知で私を愛していてくださるイエス様になら本音を言えると思いました。がんという病名のもつ恐ろしさ、未来への絶望、死への恐怖などの心からの叫びをイエス様はしっかりと受け止めてくださり、そして解決もしてくださいました。手術当日にも多くの人々が祈ってくださり、担当医が不思議に思われるほどの平安の内に手術を受けることができました。

信仰と言えるものは何もないが、イエス様に従って行きたいと思い、ありのままの罪に汚れたままの姿でみもとに行けばいいと知り、すべてをお委ねする決心ができました。主のあわれみにより罪の悔い改めができ、イエス様の十字架の死により私の罪が赦されていることを確信することができました。「わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」（ヨハネ11・25）

12月24日のクリスマスの洗礼式にみなさまの祝福の内に家族４人が揃って受洗いたしました。



# 変わらない安らぎ

室田勝美
調理師（西友岩見沢店）
北海道出身／岩見沢小／東光中／
岩見沢市立緑陵高卒／妻　恵子／
子供　一男二女
住所　北海道岩見沢市９条東５丁目
1-15-303　〒068　電0126-22-8048
家庭集会　不定期

中学の頃から本当のこと、真実を求める心が強く出てきました。しかしそれが自分をどんどん高ぶらせることになり、放蕩の生活に入っていきました。自分は人と違う、私には何かあるという特別な意識が常にあり、妻子を与えられても自分の求めることだけを中心に生活してきました。真実の神を知るまでの10年間、その放蕩生活はひどいものになっていきました。いろいろな薬物を使い、働くことができないので家族の生活を維持することができず、何が正しく何が悪いのか、さっぱりわからなくなりました。すり切れた心は変わらない安らぎを求めていました。そんな時イエス様は聖書を通し語ってくださいました。「だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます」（マタイ23・12）　こんな私が打ち砕かれることはみ心でした。みことばによって罪にまみれた自分の姿を、自分はどのような者かを示されて、口答えなどできませんでした。私のような者をあわれみ、愛し赦して、罪と死の暗闇から救い出してくれたイエス様。真実の愛によってのみ人は変えられます。変わらない安らぎを与えてくださった主イエスに感謝しています。

# イエス様にある新しい喜び

室田恵子
北海道出身／美流渡小／美流渡中
／岩見沢市立緑陵高卒／夫　勝美
／子供　一男二女

私は聖書を読んだこともなく、神様についても無関心に生きてきました。何年か前から生活上のいろいろな問題によって、人はなぜ生まれ、生きているのかと考えるようになりました。現実の生活は自分の望むものとはかけ離れていて、心は満たされず不満はつのるばかり。頼るものもなく、自分さえも信じられず、ここから逃れたいとばかり考えていました。そんな時、友人を通して、イエス・キリストがすべての人の罪を負って十字架について死なれ、三日目によみがえり、死をも克服されたこと、そしてそれが私のためでもあったことを知らされました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ11・28）　大きな愛をもって私を待っていてくれたお方を知り、帰るべき所がやっと見つかった思いがしました。神の愛に触れて、今まで抱えていた悩みは消え、主イエス様にある新しい永遠の喜び、希望を与えられました。とこしえまでも守ってくださる主の限りない愛と恵みに感謝します。「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません」（ヨハネ６・37）



# 主の導きにゆだねて

宮崎敏雄
NTT 別府支店勤務
熊本県出身／当尾小／西部中／松
橋高卒／妻　瞳／子供　一男一女

「召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい」（エペソ４・１） 30年の信仰生活は、感謝の積み重ねにほかなりません。イエス様との出会いに至る道程も、私に最もふさわしい形で準備された導きであったと信じています。世間的には特別悩みもない私でしたが、イエス様は適切な時と場所を用意してくださり、必要な方々と次々に引き合わせてくださいました。別府での３年間の生活は何であったのかと、その意味を模索している時に、ベックさんと出会いました。それまでの信仰生活に何となく空しさを覚えている時でした。最初は家内がベックさんと家庭集会で出会い、何か心が燃やされるものがあったと言っていましたが、教会生活の長い私にはいささか抵抗がありました。しかし吉祥寺集会の内容を知るにつれ、みことばを実践されている方々の群れの中で私も主に仕えたいと決心し、家庭集会や宮崎キャンプに参加し、主のみわざを体験させていただき感謝しています。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」（マルコ８・34）

# 生ける救い主イエス様

宮崎　瞳
福岡県出身／二日市小／福岡女学院中、高／西南学院短大卒、日本女子大通信教育部卒／夫　敏雄／子供　一男一女

主イエス様を私の救い主として受け入れ40年が過ぎました。その間の失意や挫折の日々に主は私を慰め、癒し、共に今日まで導いてくださいました。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり……」（イザヤ43・１、２）

しかし、私の信仰は自己満足の域を出ない自分本位のものだと気づかされました。管理面ばかりが強調される元の教会にイエス様のご臨在を感じることができず、永遠なるお方、生ける現実としての主イエス様を、もっと深く知りたいという渇きをいつも持っていました。また再臨についても確信が欲しいと思っていました。そんな時「光よあれ」に導かれてベックさんにお会いしました。ベックさんの主イエスに対する深い確信、明快な聖書のお話、主の再臨へのゆるぎない希望、これら一つ一つによって、漠然としていた内なるものが明確にされていきました。

主イエスこそ、ただ一人の真実なお方です。再び来りたまう主を心から待ち望んでいます。



# 理性を超えて

青木　清
元新潟大学理学部長・現名誉教授
長野県出身／高島小／諏訪中／物理学校／東北大理学部数学科卒／
妻　夏野／子供　二人

生涯無神論者を決めこんでいた私が、1985年７月に、思いがけないことから軽井沢のバイブル・キャンプに参加しました。初めて経験した４日間のキャンプは、私が今までに出会ったこともない素晴らしい率直さと平安な喜びに満ちあふれていて、私はすっかりその雰囲気にひきこまれてしまいました。翌８月のキャンプで初めてお会いしたベックさんを通して「死」と「罪」について神の啓示が与えられました。そして９月１日には妻と一緒に吉祥寺キリスト集会で洗礼を受けました。

1966年に起こった学園紛争で、私の大学でも「統合移転」をめぐる長期にわたる救いのない混乱が続きました。それまで比較的平穏に見えた私の生活も厳しい挫折におそわれ、学園が平穏を取り戻した頃には、率先して移転を決定していた学部の責任者だった私は身も心も疲れ果て、虚無と暗黒の中で自分の存在すら信じられなくなっていました。

神のみ救いをいただいた今は次の聖句に励まされ、慰められています。「神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた」（創世記１・３）神様のまことの愛に感謝しています。

# 孤独から解放されて

青木夏野
栃木県出身／田沼小／佐野高女卒
／夫　清／子供　二人

「初めに、神が天と地を創造した」（創世記１・１）私にはこの聖句が激しい感動を伴う神の啓示にも思われました。私が抱え続けてきた疑問の答えがすべてここにあったと知り、神様の存在を信じ、主人と共に洗礼を受けました。ベックさんとの初対面の折、私が子のないことを嘆きましたら、ベックさんは「天に召された時にはそのことも神様に感謝するようになるでしょう」と言われました。その一言で神様のみ恵みの深さを教えられました。ずっと以前から、神様のご計画が私にも及んでいたのだ、終戦直後、主人と２人で里親になり、17歳の戦争浮浪少年の更正のために尽力したことも、また２人の養子を育ててきたことも、すべて神様のご計画の一部だったのだと気付きました。経済的には恵まれていたものの、４歳で母を亡くし、次々と家族の死に会い、１人家にとり残され、嫁して子もない身が、孤独から解放されたことも知りました。終戦時に胸を患い、５年前に開腹の大手術も受けましたが、私は今も無事に生かされ、神様の大きな恵みを覚えて感謝の晩年を過ごしております。「恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ」（イザヤ43・５）



# 真の神との出会い


## 須崎隆則

福岡県大牟田市出身／第二小／三池中（現三池高）／熊本工業専門学校採鉱学科（現熊本大工学部）卒／妻　和子／子供　一男一女
住所　福岡県大牟田市草木747
〒837　電0944-53-7266
礼拝　毎週日曜朝10時半
家庭集会　不定期


三井鉱山から鉱業労災防止協会に出向し、退職後は意義ある人生をと考えていましたが、実際には無味乾燥な日々でした。時々長女が送ってくれた福音の本を拾い読みしていました。ある時聖書を読んでいると「罪」や「罪人」という文字がやたらと目につき、自分が責められているような気がしました。自分は罪など犯していないと思いながらも何か気になり、手元にあった「光よあれ」を一気に読みました。私はこの時初めて人間は生まれながらに罪人なのだということが分かりました。そう思って振り返ってみると、今までの自分の行動は自己中心的で傲慢であり、また多くの人々を傷つけていたことに思い当たりました。今さらながら自分の罪深さに愕然とし、どうやってこの罪をつぐなったらいいのかと悩みました。

「今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」（ローマ８・１）　このみことばに出会って、両肩から一瞬のうちに重荷が取り去られたような気がして、私はキリストの十字架上の死と復活を歴史的な事実として信じようと決心しました。真の神に出会えたことは大きな喜びでした。

# 日々を主にゆだねる


## 須崎和子

福岡県出身／大牟田四小／大牟田市高女／福岡青年師範（現福岡教大）卒／夫　隆則／子供一男一女


私は中学校の教員として戦後の激しく社会が変化する時代も含めて30余年間、生徒たちと共に一喜一憂する生活をしてきました。また家庭では２人の子供の母として、自分を省みるひまもない生活でした。退職後は家庭からも仕事からも解放されて茶道や書道などの趣味に明け暮れる毎日でした。しかしその満足感は長続きせず、しだいに心の中に空しさが広がっていきました。そんな時、以前から娘が送ってくれていた聖書や福音の本やテープが私の心をとらえました。私は一度吉祥寺集会に行ってみたいと思い、上京しました。ベックさんや集会のみなさんとのお話し合いを通して、私はイエス様を信じ、イエス様を主としてこれからの人生を送りたいと思うようになりました。

1988年10月に主人の母が91歳で召されました。母がイエス様を信じ、「ありがとう」とイエス様に感謝して召されましたことは本当に感謝でした。

「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです」（Ⅰペテロ５・７）「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい」（Ⅰテサロニケ５・16、17）

# 私の耳は開かれました

吉田　浩
埼玉県立越谷西高教諭（倫理）
滋賀県出身／高宮小／高宮中／彦根東高／滋賀大経済学部卒／妻和子／子供　三男二女
住所　埼玉県春日部市南3-15-7
〒344　電048-736-9723
家庭集会　毎週木曜



▲吉田さんご一家。左から和子さん、次男・信夫さん、長女・結実子さん、長男・直一郎さん、次女・喜美子さん、三男・満さん、浩さん。

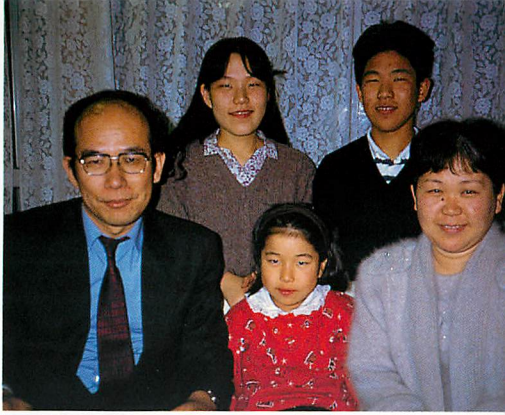
主の憐れみと祝福の内に、教会生活を過ごさせていただきました。しかし、その20年目、気がついてみたら私は集っていた教会を辞め、吉祥寺キリスト集会の集いの中に加わっていたのです。バイブル・キャンプに出席し、ベックさんをはじめ多くの方々のお話をお聞きしたり、証しを聞くたびに流れ出てくるのは涙でした。悔い改めの涙です。「あなたは、イエス様を愛していますか？」と問われるたびに、私の心の中で自己中心の思いが砕かれていくのでした。それまでは「礼拝に出席し、教会行事に精一杯の奉仕をしていればそれで十分だ」というような律法的な生活に満足し、そのくせ心はボロボロになり、親族や友人の救いのために祈らなくなっていた私でした。

思えば全能の主は、十代の悩み多い私に、さまざまな方法を通して語りかけてくださいました。しかし私は、神様の聖い目を恐れて逃げ、やっと神様のみもとに立ち返ることができたのは27歳の時でした。創世記15章の1から6節を通して主を信じました。そして20年目の今、詩篇40篇の6節を通して私の鈍い耳は開かれたのです。主のみ名を心から賛美します。

# 主を賛美して

吉田和子
滋賀県出身／甲良東小／甲良中／彦根東高／滋賀県立短大卒／夫浩／子供　三男二女

小学校4年の頃、結核性関節炎で病床生活をしました時、私は伯父から「アンクルトムの小屋」の本をもらい深い感銘を受けました。イエス様との出会いはその時でした。環境には恵まれていたのに、私はいつも不平不満で、何かを求めて心は満たされず、成長するにつれて人生のはかなさばかりが目につくようになりました。青春時代は失恋や職場での人間関係で悩み、毎日何のために生きているのかと焦燥感に苦しみました。養護施設の保母に憧れて入ったのですが、自分の内には寛容な愛、犠牲の愛が全くないことに悩みました。そんな時、イエス様は「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい」（マタイ11・28）と呼びかけてくださったのです。イエス様が十字架にかけられたのは、私の自己中心からくる罪のためだったことを知らされ、お赦しをいただきました。それからは主の愛の中で平安と喜びを与えられております。また主の導きにより、イエス様が生き生きと働かれるこの集会に加えていただきまして、さらに主のみことばのすばらしさ、聖霊が満ち溢れる深い愛の集いの喜びを味わわせていただいております。



▲ 藤井さんご一家。右から槇子さん、長男・嘉也さん、次女・真奈さん、長女・奈生子さん、保夫さん。

# 主を恐れる者として

藤井保夫

テスコ㈱勤務
名古屋出身／矢田小／川名中／向陽高／南山大卒／妻　槇子／子供一男二女

追い詰められないと何もしない臆病な私は逃げ回った末はじめて「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません」（ヨハネ13・8）という聖書の箇所によって、救い主イエス様を心に受け入れました。これは、足を洗おうとなさるイエス様に対し「決して私の足をお洗いにならないでください」と恐縮したペテロに対して言われた言葉です。私はペテロのこの恐れる気持ちがよく分かりました。しかし、イエス様の方から足を洗おうとしておられる……。私はとてもこれを拒むわけにはゆきませんでした。私を洗い清めて、一緒にいることをイエス様の方で願っていてくださることの恵みがはっきりと分かりました。それ以来、イエス様は私がいつもイエス様と近い関係にあるようにと導いてきてくださいました。集会に導かれるとき、「汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる」（Ⅱコリント6・17、18）との約束をいただきました。ただ主を恐れる者でありたいと心から願っています。

# よい牧場に導かれ

藤井槇子

岐阜県出身／御嵩小／向陽中／加納高／東京芸術大卒／夫　保夫／子供　一男二女

確かなもの、真実なものを得て、一回限りの人生を最高のものにしたいと、自分の力でがんばってもがきながら33歳になっていました。主人が救われても、互いに干渉はしない、と割り切っていたつもりでしたが、主人が洗礼式の朝高熱を出したので、心配でついて行きました。足を踏み入れた以上神様への態度をはっきりしなければと思い、本気で聖書を読み始めました。それから半年は神との格闘に明け暮れ、次第に私の自我は砕かれ、「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです」（ヨハネ9・41）というイエス様のみことばにより、完全に降服しました。わき道にそれていた私を主は真理へと導いてくださったのです。それから10年、詩篇63篇1節のように渇ききっていた私に、主はあわれんで乳がんという病を与えてくださり、不思議な方法で吉祥寺集会へと導いてくださいました。今「罪人の私をあわれんでください」と心から祈れる者に変えられ、感謝の日々を送っています。

# わが救い 主なるイエス様



安藤正和
朝日印刷勤務
鹿児島県出身／浮辺小／中央中／知覧高卒／妻　貴美子／子供　一男一女
住所　鹿児島市田上3-28-11
〒890　電0992-57-8994
礼拝　毎週日曜朝10時半

「もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです」（マタイ5・30）私は仕事中の事故で右手の指を3本失いました。まさか自分がそんなことになるとは夢にも思っていませんでした。最初の手術の夜、その時はまだ神様を知らなかった私ですが「神様助けてください。どうか私の手を元に戻してください」と願っていました。しかし手術は失敗でした。それから2年後、私は妻を通して神様を知り、信仰を持つようになりました。自分の罪が赦され、永遠のいのちをいただいていることを知って、指を失ったこともすべて神様の恵みに満ちたご計画だったのだと心から感謝しました。しかし教会生活はだんだんと喜びも平安もないものとなり、妻と共に祈りながら神様の導きを求めるようになりました。そのうちに吉祥寺キリスト集会の存在を知りました。みなさんの証しやメッセージを通して、ここが神様が生きて働いている集会であると確信しました。今は共に祈り、賛美するお仲間を与えられ、集会に導いてくださった神様に心から感謝しています。

# 神様、見つけた

安藤貴美子
鹿児島県出身／西紫原小／紫原中／錦江湾高／鹿児島純心女子短大卒／夫　正和／子供　一男一女

イエス様を信じる前、私は「人間は死ぬために生きている。死ですべてが終わるなら、何てむなしい人生だろう」と思っていました。イエス様に出会って、この方に永遠のいのち、愛、喜び、平安があることを知った時は嬉しくて嬉しくてしかたがありませんでした。しかしやがて奉仕や会合に明け暮れる教会生活に疲れ、喜びもなくなって「あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう」（エレミヤ29・13）というみことばを信じて、本当に神様が生きて働かれる所へ導いてくださるように捜し求めました。2年間求め続けた時「光よあれ」にめぐり合いました。証しを書いている方々が、神様と共にあることを心から喜んでいることが伝わってきました。私が長い間忘れていた喜びです。やっと捜し求めていたものを見つけた…。私の小さな祈りを聞いてくださった神様に感謝しました。今は生き生きとした主イエス様とのつながりのある集会に加えていただき、主人と共に喜びと感謝にあふれる毎日を過ごしています。

「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」（ピリピ4・4）



# 新しい人生

## 内田厚純

タイヤセンター㈱専務取締役
香川県出身／香大付属小／同付属中／坂出商高／明治大法学部卒／
妻　美津子／子供　二男

全身的なショックを受け、過去の全てが崩壊し去っていくことを感じました。福音に初めて接した時のことでした。それまでは、自分の能力を過信し、自己中心の思いで他人を裁き、傷つけてきた私でした。酒を飲んでは自分を叱咤激励しつづけて生きてきたあの頃の日々は一体何だったのでしょうか。いつしかアルコール依存症になり、ついには鉄格子の中にまで住むようにさえなっていたのです。

そんな私でも、主は土佐山田のバイブルキャンプに導いてくださり、救ってくださいました。それまでの私は神を信じず、逆に冒瀆さえし続けてきた者でしたのに。イエス様は十字架を背負われ、尊い血を流されることにより、私のような罪深い者の大罪をも贖ってくださいました。主は私を、幼子の心に戻って流した一粒一粒の涙を通して、本当の自分に帰らせてくださいました。その一瞬から主を信じ従い続けることのできる新しい人生が始まりました。祈ることの幸せ、また清々しい気持ちとともに自然を素直に愛でる喜びの心までもいただくことができました。

イエス様、あなたを心から賛美申し上げます。

# 主は生きておられる

## 内田美津子

タイヤセンター㈱役員
香川県出身／香大付属坂出小／同坂出中／坂出高卒／夫　厚純／子供　二男

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ11・28）坂出集会に時々参加するようになった頃、この聖句がとても快く心に響きました。聖書の世界には、もしかしたら私の心の故郷があるかもしれないと思いました。それから1年、主は罪深い私を主人の病気を通して打ち砕き、呼びかけ導いてくださいました。その時主がなさったみわざは本当にすばらしいものでした。主は私達の前に立ち、また後から押して、何としても「光の中へ」と導いてくださいました。このことを通して、私は主のご臨在を確信することができました。そして今は、心から「主よ、お赦しください」とみ前にひざまずくことができます。

「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない」（イザヤ43・1、2）主に心からの感謝を捧げ、主に従って歩むことが最大の喜びです。



# 主と共にいる喜び

小ノ澤初男
ヤマハ発動機㈱広報室勤務
埼玉県出身／大東東小／大東中／
川越高／上智大外国語学部卒／妻
美根子／子供　一男二女
住所　静岡県磐田市明ケ島1121-35
〒438　電0538-35-4938
日曜礼拝　隔週10時半

イエス様を妻とともに主として受け入れたのは、1982年の11月、もう８年になろうとしています。我々は静岡に住んでいますので、洗礼を受けるまで、数カ月に一度の割合で吉祥寺集会に集い、また年に１～２回軽井沢のキャンプに参加していましたが、その都度集会の皆さんは暖かく迎えてくださいました。洗礼を受けてからすぐに仕事でドイツに駐在することになりました。信仰上多少の不安もありましたが、ドイツ、そしてその後のオランダでの生活も、神様は我々のことをお忘れにならず、あるときは喜びを、あるときは試練を与えてくださり、主により頼むこと、そして神様が一番であることを学ばせていただきました。帰国して４年が経ちますが、神様は吉祥寺集会の皆さまを通して、静岡の地にも福音を伝えてくださっています。我々は取るに足らないものですが、主に生かされていること、どこにいてもいつも主がともにいてくださることを覚えて感謝しています。「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、……すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです」（エペソ４・５、６）

# イエス様と共にある平安

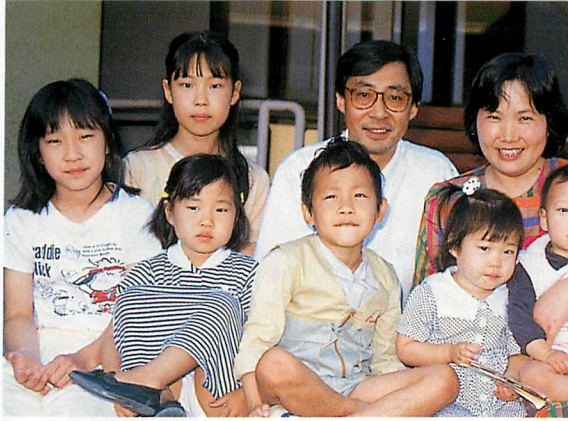
小ノ澤美根子
北海道出身／愛山小／愛山中／上
川高／桜美林短大卒／夫　初男／
子供　一男二女

北海道の美しい自然の中で、苦労ということをほとんど知らずに生きてきました。親元を離れて生活している時も、学校、勤め先の方々の庇護の中にいました。ですから私には信念というものがなく、自分自身がよく分かりませんでした。そのような時、友人に誘われて吉祥寺キリスト集会に行き、自分勝手でわがままな私の罪を示され、その罪のためにイエス様が十字架にかかって死んでくださったことを心から信じ、悔い改めました。「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」（詩篇37・５）確かなもの、私のよりどころを見つけることができ、平安になりました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）このみことばのお約束通り、やがて主人も救われることができ、1982年の11月に主人といっしょに洗礼を受けることができ感謝でした。これからも一人でも多くの方々、子供、両親、友人などが救われて心からの平安をいただけるように祈っていきたいと思います。

「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」（ローマ10・10）

# 主にある喜び

鈴木克男
㈱津田営業部勤務
新潟県出身／新潟小／寄居中／明訓高卒／妻　三枝子／子供　一男五女
住所　徳島市北沖洲1-1-50-307
〒770　電0886-64-3956
日曜学校　毎週日曜朝９時半
礼拝　毎週日曜朝10時
家庭集会　不定期



▲鈴木さんご一家。左から次女・実穂さん、長女・あかりさん、三女・まどかさん、長男・道一さん、克男さん、四女・泉さん、三枝子さん、五女・あゆみさん。

私の人生の中で一番嬉しかったことは、妻や子供たちといっしょにイエス様のことを話し合うことができるようになったことです。かつての私は自己中心の生活をしており、家族とイエス様の話などしたことはありませんでした。しかしイエス様は、交通事故で足を骨折して８カ月入院生活をすることによって、私から仕事と家庭生活のすべてを取り上げて私を砕き、自分の大きな罪に気付かせてくださいました。

「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた」（イザヤ53・６）イエス様はたしかに私のような者をも愛していてくださいました。今では毎週日曜日にはわが家で徳島集会のみなさんと共に礼拝をさせていただくようになり、心からイエス様に感謝しています。またイエス様は家庭においても８人の家族の上にいつも働いていてくださり、仕事の上でも導いてくださいますから、毎日が感謝と希望に満ちています。

「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ」（哀歌３・22）

# わたしのところに来る者を決して捨てません

鈴木三枝子
徳島県出身／大井小／加茂谷中／小松島西高／四国女子短大卒／夫克男／子供　一男五女

幼い頃、夜になって床に入ると言いようのない孤独を感じ、果てしない暗闇の中にたった１人とり残されたような気がして、よく涙したものでした。思春期になると、自分は何者で、何のために存在するのかと考えるようになりました。成人してからも生と死の問題が未解決のまま胸の奥にくすぶっていて、自分のことさえどうにもできない私には、結婚や子育ては恐ろしいことに思えました。すべてが死で終わると思うと、ただ虚しく、自暴自棄になっていました。神様はそんな私をあわれんでくださり、結婚直前になって聖書を通して私に、自分が神様に愛され生かされていること、私の過去の罪やこれからの罪のすべてがイエス様の十字架によって赦されていること、そして死で終わりではなく、すばらしい天の住まいでイエス様と共に光と喜びのうちに生きられることを示してくださいました。神様はまた、私だけでなく主人をも救ってくださり、今は主人と心を合わせて６人の子供達のことを祈りつつ、平安と感謝のうちに日々を送らせていただいています。数々の試練の時にも、イエス様はみことばにある通りに私たちを見捨てることはありませんでした。



# 解放、平安そして感謝

清水紀雅
三井東圧化学㈱名古屋支店勤務
福岡県出身／銀水小／橘中／三池高／慶應義塾大法学部卒／妻　偕子／子供　二男
住所　名古屋市北区矢田町1-3-1
三井大曽根ハイツ1003
〒462　電 052-911-7554
家庭集会　不定期

今は亡き母は、陸軍大将の娘として「大和撫子から軍国の母へ」の教育を受けてきたために、大変気丈夫で良妻賢母の典型でした。特に、長男である私に対するしつけは厳しくて、常に我慢と緊張の連続でした。そのため、子供の頃から世のしきたりに気を配る習慣が身にしみこみ、些細なことに思い煩い、心休まるときがありませんでした。その反動もあってか結婚後は、自由放任主義に徹し、子供のしつけや世のお付合いには一切口出しをしなかったために、「あなたは何を考えているのか分からない」「思いやりがない」という言葉が家内の口から発せられて、唖然としました。このようなとき、親子４人が初めて軽井沢のバイブル・キャンプに導かれました。聖書に接し、集会のみなさんとお話をするときが与えられ、ホッとした心の安らぎを覚えました。それ以来、我が家でも聖書を土台とした生活が始まりました。今は不安とむなしさから解放されて平安が与えられ、感謝です。「何も思い煩わないで」（ピリピ４・６）「信仰の量りに応じて、慎み深い」（ローマ12・３）「神とともに歩む」（ミカ６・８）特権が与えられましたことを感謝しています。

# ことばは神とともに

清水偕子
福岡県出身／区立麻布小／東洋英和女学院中等部／同高等部／同短大卒／夫　紀雅／子供　二男

親切で心の美しい人でいたいと精いっぱい生きてきたつもりでしたが、人は環境しだいで妬みも嫌悪も時には憎しみさえも抱くことを知り、自分の心の中を見て恐ろしいと思いました。正しく生きようと思えば思うほど人を見て裁くことも多くなり、後から考えると世の中の常識に従った自分の判断が自分や家族など周囲の人々を苦しめる結果となっていました。また、人の言葉で心が傷つき、自分の言葉で人を傷つけていないだろうかと思うと人とのお付き合いも心を閉ざしがちでした。表面では何気なく装って過ごしていましたが、心の中では毎日本音と建て前とが葛藤していました。近くに住む方から「実を結ぶ命」という本を頂き吉祥寺集会に行くようになりました。集会の多くの方の口を通して聖書のみことばを知り、それがどんどん心にしみ込みました。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」（マタイ４・４）私の全部を受け入れ、私の心を素直にしてくださるイエス様といつも一緒にいられることが感謝です。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」（ヨハネ14・６）

# 神様の家族にしてもらって

山科一雄
藤木農機製作所勤務
大阪府出身／八尾小／成法中／山本高／近畿大農学部卒／妻　理永子／子供　一男
住所　奈良県生駒市俵口町623-6
〒630-02　電 07437-5-0096
家庭集会　不定期

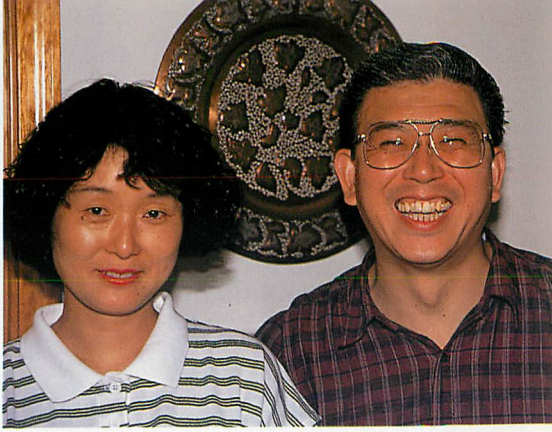


人生に何の疑問も持たず、毎日楽しく暮らせばよいと夏はダイビング、冬はスキー、またジープ、バイクと夫婦で遊びまわり楽しみを次々と追いかけていました。ですから妻の心の中の悩みなど理解できるはずはありませんでした。私は母を16歳の時に亡くしていたため父の病気の看病をめぐり妻と争うようになった時、今まで考えてもみなかった寂しさがわいてきました。この世に1人になってしまう。「嫁さん言うても他人やし」と。しかし聖書のメッセージを通して、妻との関係が最も大切であること、そして主を受け入れた者は神様の家族にしていただけると知り、本当に嬉しくなり、平安が与えられました。今まで仲がよかっただけでしたが、今は心を合わせて生活できるようになったと思います。また結婚後7年間、子供がなかったのですが、主のみことばの啓示（創世記17・21）とともに実際に子供が与えられ、主は全能者で約束を必ず守られる方であると体験しました。自分のように、神に背を向け、救いを求めることもせず、自分の楽しみだけを求めてきた者を、主を礼拝する者と変えてくださったのは、本当に感謝で、主の憐れみです。

# やみから光へ

山科理永子
大阪府出身／布施第一小／俊徳中／山本高／大阪デザイナー学院卒／夫　一雄／子供　一男

幼い頃から家族のもめ事で悩み、よく心の中で祈っていました。でも成長するにつれてそんな気持ちからは離れ、自問自答の日々が続きました。結婚して長い間子供がなく、よく夫婦で遊んでいましたが、心の底でいつも「私はこんなことをしていて、どこに流れていくのだろう」と思っていました。ある時本当に自分の前には壁がある、この壁を打ち破らなければ私は一歩も進めないという気持ちになり、苦しい思いで「神といわれる方が本当におられるのなら教えてください」と心で叫びました。その後英会話を通して聖書を知り、「救われる」という言葉を見た時、私は救われたいと強く思いました。そして、「イエス様、救ってください」とお祈りしました。「あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです」（Ⅰペテロ2・9）私はこのみことばにより、はじめてかつての自分は闇の中でもがいていたものだったことが分かりました。今は人生という川をふわふわ流れている浮き草ではなく、主のみ手の中にしっかり握られている幸せを感謝しています。



# 神からの賜物

岩崎洋二
住友商事㈱勤務
神奈川県出身／玉川小／玉川中／
川崎高／東京工大電子工学科卒／
妻　直美／子供　一女

それは1986年3月でした。主は私を不思議な方法で吉祥寺集会に導いてくださいました。聖書についてのお話をしていたのは、自分と同じサラリーマンで牧師でもなんでもない方でした。話の内容は聖書のみことばを他のみことばでわかりやすく説明してくれるものでした。礼拝も人々が考えて演出したものではなく、ただ導かれるままに主を仰ぎ、賛美し、感謝するものでした。19歳の時に自宅の近くの教会で受洗はしたものの、その後ずっと主から離れて罪の中で生活し闇の中をさまよい歩いていた私は、この礼拝と集会に出て、とても懐かしい思いをしました。吉祥寺集会に通って半年ほどするうちに、私はだんだんと自分に正直になり、今まで分からなかった自分の中の罪に気がつき始め、さらにその罪が自分ではどうすることもできないということも分かるようになりました。主イエス様の十字架の清い血だけが、二千年の時間を超越して、私の血を洗い清めてくださることが初めて分かり、主に従う者に変えられました。この瞬間から、今までの人生において経験したことのない平安をいただき、光の中を歩めるようになりました。

# イエス様のすばらしさを知って

岩崎直美
東京都出身／駒込小／駒込中／文
京高／東京女子大短大部英語科卒
／夫　洋二／子供　一女

私は長い間、日曜日には教会へ行き、家でもよく聖書を読み、いわゆる模範的なクリスチャン生活を送っていましたが、イエス様との生き生きとした交流のようなものを経験したことがありませんでした。そのためいつも満たされない思いがあり、生きている間は完全な主との平和を持つことはできないのだろうかと、なかば諦めていました。そのような私を主は憐れんで、吉祥寺集会の存在を知らせてくださいました。「光よあれ」で証しされている方々が主の身近におられるのを知り、「私も主を身近に感じたい」と思いました。やがて主は、私が願う以上のことをしてくださいました。我が家は見せかけのクリスチャンホームで、主の喜ばれる家庭ではないという思いがずっとありました。私自身、いつも相手の非ばかりを責めていました。しかし、いつのまにか、互いの自我をぶつけあって争うことの多かった家庭が、共に祈り主を賛美する家庭へと変えられていたのです。このように日々、主のすばらしさを喜ぶように変えてくださったことを心から感謝しています。「彼（イエス様）に信頼する者は、失望させられることがない」（ローマ10・11）



# 新しい命を

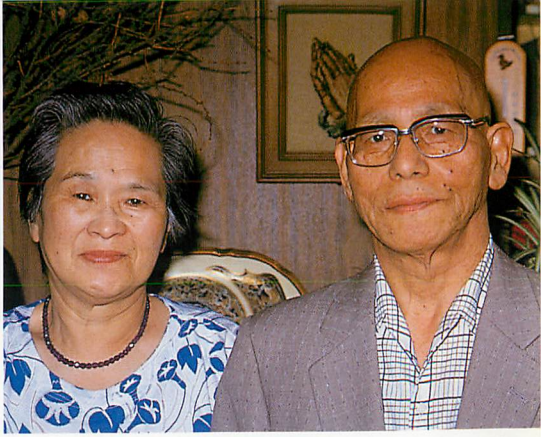
森下　茂
富士メンテニール㈱勤務
北海道出身／紅葉山小卒／妻　ちゑ／子供　二女／孫　四人

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ11・28）癒える見込みの全くないアルコール依存症者として入院中に、初めて小金井家庭集会を訪れた時、私を圧倒したあの感動は今でも忘れることができません。集会に集う方々全員が、穏やかな中にも豊かさに満ちあふれているようでした。気がつくと、集会の楽しさの中に引き込まれていました。これが私のイエス・キリストとの初めての出会いでした。主は、染野さんご夫妻の導きや「光よあれ」第2集、また看護婦だった野口さんの助けを用意してくださり、今まで逃れることのできなかったアルコール依存症の固い縄目から解放してくださったのです。これはまさしく神の愛であり、新しい命へと移された甦りの第一歩でした。この神に全てを委ねる。すると主は、悩みと苦しみを喜びと平安に変えてくださる…。小さなからし種ほどもない信仰ですが、それでも主は私を決して見放されないという確信をもって、これからも十字架を見上げ、主の憐れみと恵みをいただき、主の栄光を賛美して生きていきたいと思います。

# すべてを主に委ねたとき

森下ちゑ
新宿区立戸山小学校勤務
北海道出身／旧満州奉天平安小／奉天長沼高女卒／夫　茂／子供　二女／孫　四人

1985年の暑い夏の日、その時本当に奇跡が起こったのだと今でも信じています。当時主人は強度のアルコール依存症でした。私が次女の出産の手伝いから帰ってくると、主人は妄想と幻覚で荒れ狂い、家中が目茶苦茶になっていました。私は絶望感で体の力が抜け、「神様、助けてください」と心の中で叫びました。夢中で染野さんに電話すると、待子さんが来てくださり、2人で主人に入院を勧めましたが、凄い剣幕で聞き入れません。その時、待子さんが静かに祈り始めました。主の憐れみを願う真剣な祈りでした。待子さんのご主人の茂夫さんにも電話し、主人を説得してもらいました。受話器を耳に当てて聞いていた主人の目から涙が溢れ、一言「入院する」と言って立ち上がってくれました。これが、依存症からの脱出の始まりでした。主は茂夫さんの言葉によって、主人の頑なな心を打ち砕かれたのです。「神にとって不可能なことは一つもありません」（ルカ1・37）あれから早くも5年以上経ちましたが、あれほど苦しみ悩みぬいた依存症は再発しておりません。今は家族5人で礼拝に、家庭集会にと集っています。主に頼り、委ねた毎日です。



# み国をめざして

故　望月元一

茨城県出身／日暮里四小／巣鴨中／東京高等師範学校体育科卒／妻恵子／子供　一男

1983年春、突然血尿が出て驚きました。診断の結果は更年期障害とのことで、間もなく平常に戻り安心していたところ、84年夏に再び血尿が出、精密検査の結果は左の腎臓が完全に不能になっていました。腎臓がんだったのです。至急入院し、切除しました。その後は転移するたびにほぼ1年ごとにS字結腸、膀胱、左肺上葉、右肺下葉と5つの臓器を切除し、我ながらよく頑張ったものだと感無量です。その後の検査でさらに左肺下葉にもおよんでいることが分かりました。昨年は抗がん剤点滴のため12回の入退院をしました。今年はもう6回の入退院です。術後の苦しみのたびごとにイエス様の救いのみ手の偉大な力を感じています。

最近ではいつお召しいただいても平然と天国へ行きたいという心境です。皆様の精神的なご援助と祈りに支えられて、私は生かされているのです。一日一日を感謝してイエス様のみことばに学びつつ、肉体的には苦しくても、心は平穏に生活しています。

「私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます」（ピリピ3・20）

# 主の祝福に感謝して

望月恵子

茨城県出身／根岸小／跡見高女／東京第一師範卒／夫　元一／子供　一男

終戦直前には谷中小の子供を引き連れ東山温泉に疎開し、戦後は筑波の北条小に勤務中に主人と知り合い結婚しました。ところが舅、姑、義弟と3人もの病人を抱えて窮乏し、私は乳脚気、息子は山羊の乳で育てました。娘はアメリカ人と結婚し子供にも恵まれ元気でしたが、肝臓がんで召されました。葬儀を済ませて帰国しましたら、今度は主人ががんになり、腎臓、腸、肺臓と転移するたびに6年間に30回以上入院し、そのたびに吉祥寺集会のみなさまのお祈りに支えられて今日に至っております。抗がん剤のために次第に衰える主人の姿は、イエス様の苦しみにあずからせていただいているようで、頭が下がります。主を賛美しつつ、祈りながら主人と共に病気と闘っております。

あの体の弱かった息子は結婚し、今では一男一女の父親として元気に暮らしております。

この広大な宇宙を創造された神のみ子イエス様に愛され守られてきた私。姉、弟、いとこと心不全で逝き、そろそろお召しも近いと感じるこの頃です。振り返ってみますと、今まであったことは全てが神の祝福であったと心から感謝しております。



# 神は愛です

武田　稔
城南信用金庫調査役
東京都出身／第二延山小／上田市立併設中／港工業高／中央大卒／
妻　和子／子供　三男一女

「私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます」（Ⅰヨハネ４・16）私は42歳のとき、妻が胃がんになり、大きな衝撃を受けました。それ以来、恐れと不安の中で暗い日々を送っておりました。たまたま妻の両親から送られてきた教会の週報で、ある方の「神は愛です」という証しを読んでとても感動し、私が求めていた神はイエス・キリスト以外にはないという確信を得ました。それまでは妻の病に対する再発の不安の中で、この世の名声や富などを求めて自分勝手な生活を送ってきた私に、神は大きな転機を与えてくださいました。「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」（ヨハネ７・38）というみことばの通り、聖霊の満たしを体験し、今までの不安や思い煩いから全く解放され、神の平安と喜びで満たされました。永遠の命と平安を与えてくださった神の深い愛と恵みを心から感謝しております。「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです」（ローマ８・14）

# 私ではなくキリスト

武田和子
長野県出身／小諸坂の上小／小諸市立中／茅野高卒／夫　稔／子供
三男一女

私は、初孫として祖父母に溺愛されたためか、とてもわがままで、自己中心的でした。でもそれを罪とも思わず、自分を知らない者でした。８年ほど前に、三男の進学問題で大きな困難に直面し、自分ではどうすることもできない状況に追い込まれ、深刻に悩んで苦しんでいたとき、幼い頃母親から聞かされていた聖書のみことばの「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです」（ガラテヤ２・20）が、突然降り注ぐ光のように私をつつみ、すべての問題から解放され、喜びの涙がとめどもなく流れ、そのときから私の人生は180度転換しました。子供達が幼い時に、私は胃がんになり、胃を全部摘出しましたが、神の憐れみにより健康を保たれ、主によって生かされ、このように証しできる幸いを心から感謝しております。多くの悩める魂が神に立ち返り、心から喜びと平安を得られますよう、お祈りしております。



# 私は幸せな羊

長見有時
広島林業㈱勤務
京都市出身／緑小／千歳中／札幌北高／創形美術学校卒
連絡先　北海道千歳市春日町2-1-51
〒066　電0123-23-4346

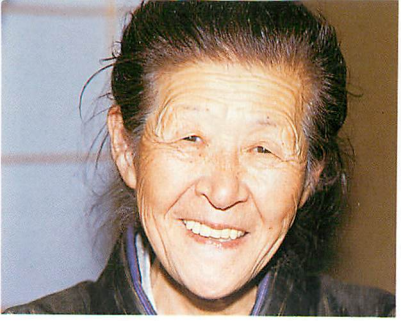
自分の心の底には隠された深淵があるといつも思っていました。大酒を飲むようになり、その結果分裂症を発病しました。私は希望を捜しました。その後聖書に出会い、また失恋と人間関係の苦しみ、憎しみを通し、心の底の自分を知りました。「内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです」（マルコ７・21～23）私は身勝手で、極悪で、偽善者でした。解決はありませんでした。イエス様は私に明瞭に語ってくださり、「私」は終わりました。罪深い私の身代わりとなって、イエス様はただ黙ってなだめの血を流してくださいました。それはこの地上にはない、真実の愛と権威でした。主は測り知れない、深いあわれみのお方でした。私は跪き、感謝し、愚かなまま赦されました。主が共にいてくださることのすばらしさを知って、私は新しい血に潤され、喜びと希望に満たされました。大宇宙の全ての被造物の生命が拠り頼み、礼拝し、喜び歌っている神様の懐に、私も帰りました。



# 主よ、どうしたらよいのですか

綾　公子
香川県出身／高木小、上甲子園小／甲南女子中／甲南女子高／善通寺第一高／甲南女子大中退／夫正二郎／子供　一男一女

「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる」（エペソ５・14）救われてからしばらく信仰的に眠っていた私に主は「目を覚ませ」と声をかけてくださいました。寝ぼけ眼で、訳の分からない中で、気がついたら「主よ、助けてください」と叫んでいました。その時からいろいろな問題を通して、主は教え導いてくださるようになりました。それまでは、分からなければ「主よ、どうしたらよいのですか？」と尋ねることさえ知らない、ひどい状態の私でした。尋ねればよいのだと分かった時から、日々の小さなことも大きなことも、「主よ、どうしたらよいのですか。教えてください、助けてください」と叫びながら信仰の道を歩ませていただき、本当に感謝しております。信仰的に眠っていた１年半は、自分自身が実はみじめな者であり、何も知らない者であることを教えていただくために必要だった期間でしたが、このことを通して主がどんなに憐れみ深いお方であるかを知ることができました。まだ何も分かっていない者ですが、このような私をも愛してくださる主に心から感謝します。



# 天のみ国を思い見て

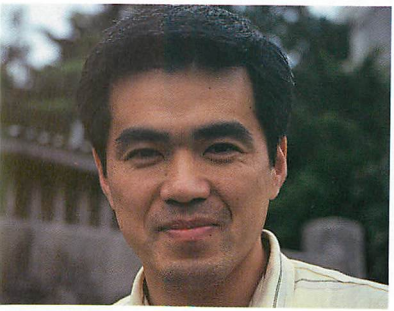
尾関ふさ

山形県出身／屋代小／山形第一高女卒／夫　故文二郎／子供　二男二女

住所　山形市鉄砲町2-14-34　〒990

電0236-23-0696　家庭集会　不定期

私は若い頃から自然界のすばらしさを見るにつけ、これらを造られた神様が必ずおられるに違いないと確信していました。私は主人のたびたびのうつ病を通して悩み苦しみ、主人を救ってもらいたい一心でいろいろな宗教を渡り歩きました。しかし主人はそうした宗教を嫌うばかりか、私自身も宗教に救いを見出せず悶々としていました。5、6年前に東京で暮らしている末娘が山形に来たとき、イエス様を信じるように勧めてくれました。私はもうこの方以外に救ってくださる方はないと思い、必死でイエス様にしがみつきました。念願の主人の救いも道が整えられ、2年前の夏、病気再発の苦しみの中で主人は「イエス様、助けてください」と叫び、入院生活を通してイエス様が働いてくださり、去年の暮れに私が洗礼を受けたいと言いましたら「私も受けたい」と言っていました。主人は次の日天に召されましたが、最期のときは顔全体が輝き、気持ちよさそうに召されていきました。それを見て私も、もういつ天国に召されてもよいと思うようになりました。今は病から解放されて天国にいる主人と再会できることを思うと、うれしくて仕方がありません。



# 私の宝キリスト

湧川博文

食料品、雑貨店自営

沖縄県出身／名護小／名護中／名護高／立命館大法学部二部中退

私は今から7年前の1983年に洗礼を受け、3年前に沖縄キリスト集会へ導かれました。イエス・キリストに従っていく歩みを始めてから私が何よりも感謝していることは、私の罪が赦されたことを確信することができ、いつ死が来ても天国へ行ける備えができたことです。たとえ今晩、死が来ても天国で永遠に暮らせること、死後の恐ろしい刑罰を受けずに済む者とされたことは、私の心に大きな平安をもたらしています。私がこの平安をいただいたことは、主イエス様に感謝しても感謝し足りません。なぜなら、そこには大きな犠牲があったからです。私達が罪の刑罰のための永遠の火に投げ込まれないように、イエス様は人間の持つ多くの罪を、十字架のみわざを通して聖めてくださったのです。しかも、イエス様は死後3日目に栄光のみ姿に復活され、今も生きておられます。私はイエス様の内に、輝くようなすばらしい人生の喜びを見出し、全知全能なる神の御子イエス様に、人生のすべての解決を見出すことができたことを、何ものにも代えることのできない宝だと思っています。



# わが思いを越えて

宮城昭代
長野県出身／大久保小／飯田東中／飯田風越高／自由学園生活学校卒／子供　二女
住所　長野県伊那市御園中部5
〒396　電0265-78-2284
家庭集会　不定期

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇119・71）　結婚18年目に夫ががんで逝き、私はこの世の幸せというものがいつ壊れるか分からないというはかなさにおののきました。それから私は、永遠に続くものを求めないではいられなくなり、信仰を与えられました。10年間教会に通っていたのですが心の喜びがなく、「イエス様、私はどうすればよいのでしょうか。わからないのです」と必死に祈り求めました。やがて主はベックさんとの出会いを通して本当のイエス様の愛と救い、永遠のいのちをはっきりと示してくださいました。「イエス様、あなたを信じるということはこういうことだったのですか…」こみ上げる喜びは尽きることがなく、みことばが自分のいのちとなって脈打つのを感じています。「1人でも多くの方にこのイエス様をお伝えしたい」と祈ると、主は伊那の地にも集会を備えてくださいました。「私はあらゆる時に主をほめたたえる。私の口には、いつも、主への賛美がある」（詩篇34・1）



西軽井沢福音の家（ゲストハウス）。



▲1989年9月17日能勢川キャンプで、受洗の喜びを記念して。
正光さん（後列左から2人目）をはさんで立っているのが、旧友の和田芳明さん、ヒロ子さんご夫妻。

# 平安を与えられて

加藤正光

一九四五年名古屋市に生まれる。吹上小、北山中、大阪府立高津高校卒。慶応大学中退。現在京都中央卸売市場青果問屋㈱万浅に勤務。家族は妻宏子さん、長男和彦さん、次男育穂さん。京都市に在住。

▼高砂を舞う正光さん。1970年名古屋市熱田神宮能楽殿にて。



私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。（Ⅰテモテ　1・12）

私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。（Ⅰテモテ　1・13）

このみことばは、私が今年初めていただいた聖句です。このみことばについて、妻と二人で話し合い、いつも家族四人がそろって日曜礼拝やバイブルキャンプ、家庭集会に集うことができる幸せを感謝していましたが、いただいた聖句の中に「私をこの務めに任命して」とあるのはいったいどのような務めかな、と期待と不安を抱いていました。それが「光よあれ」に証しを書くことだと分かり、非常な驚きと戸惑いを覚えましたが、自分に頼らずすべてをイエス様におゆだねして、つたない証しですが書かせていただきます。

冒頭の二つ目のみことばにありますように、「私は以前は神をけがす者、暴力をふるう者」でした。このような者でも、神様の一方的なあわれみとみ恵みを受けて、新しく生まれ変わることができました。今では神様の愛に包まれて、喜びと希望のうちに感謝の日々をすごしております。

私の祖母は、生前に謡曲の先生をしていました。その後継者にと中学二年の時に話が決まり、私はこの世界で自分の一生を送るつもりでいました。中学三年で初舞台を踏み、中学を卒業と同

時に大阪の師のもとで高校に通学しながら内弟子修業に入り、高校卒業後には、東京の師のもとで大学に通いながら内弟子修業をしておりました。ところが東京と大阪の師との間で私の独立に関することが話しあわれ、その内容が、祖母の耳に入ってきました。それは、前途を塞がれ、希望がなくなるような内容のものでした。ちょうどその頃、私は名古屋の自宅で療養をしていました。祖母と私は話し合いの結果、断腸の思いで謡曲の世界で生きて行くことを断念しました。自分の生涯の設計がすべて崩れ去ってしまい、私は身体の中に大きな空洞ができた感じでした。

今思いかえしてみますと、この事は神様のご計画の一部であり、謡曲という仏教思想や偶像崇拝に満ちた世界からイエス様が、

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」（ヨハネ 14・6）

と、私に呼びかけてくださり、救い出してくださった大きな恵みであったことが分かります。

## いらいらとすぐに怒っていた私

さて、イエス様に出会う以前の私は、自己中心そのもので高慢で、その上傲慢で、まったくどうしようもない人間でした。そのために仕事や人間関係がまずくなったり、自分の気に入らないことがあると、すべてを人のせいにして、なぜ自分がこのようなつまらない仕事をしなければならないのかとひねくれた思いを持ち、転職や転宅を度々しました。そして家族に対してはワンマンで横暴に振るまい、妻や子供達は私の顔色をうかがいながら生活をしていました。それでも一

歩家の外に出れば仲のいい夫婦、親子を装い、見せかけだけの家庭生活をしていました。私自身は短気で、いつもいらいらして心が落ち着かず、すぐにトラブルを起こし、平安な心というより平安という文字そのものをまったく忘れ去ったような生き方をしていました。

一九八五年の秋に、突然心臓に針を刺すような痛みを感じ、身体の調子が悪くなり、あわてて医者で検査を受けたところ、極度の過労と軽い不整脈という診断でした。そのため四十日ほど仕事を休み、静養することができました。その間に妻は私の心の状態をみて気嫌のよい時に、「いらいらしたり、子供達も大きくなってきたからすぐに怒ったりしないように……」と諭してくれました。私も子供達のことを考え、すぐに怒らず冷静にしていようと思いましたが、自分で自分の心を押さえるのは大変な忍耐と努力を要し、爆発した時はひどい状況です。やがて病気もよくなり、仕事もその年の暮れにある人の紹介で今の勤務先に移ることができました。勤務時間も以前より短かく、身体も楽になりましたが、短気な心は直らず、相変わらず家ではワンマンで、亭主や父親の権威を振り回してばかりいました。

このような家庭でしたが、休日には家族単位で行動することが多く、親子ともに日本の歴史が好きで、特にお城に興味が一致して、遠近にかかわらずお城巡りにたびたび出かけては家中で楽しんでおりました。

一九八九年の春のこと、大学時代からの友人の和田さんから、久し振りに電話があり、我が家で楽しい再会をすることになりました。彼は日本航空に勤めていて、フライト先からたびたびす

てきな絵葉書を送ってくれていましたが、だんだんとその絵葉書に、聖書の一部が書き込まれていることが多くなりました。

妻は十年ぶりにお目にかかった和田さんの顔がものすごくおだやかで、そして輝いて見えたことに何があったのだろうと驚きました。私も彼とひさしぶりにゆっくりと話すことができ、肩のこらない大らかな気持ちになり、楽しいひとときをすごすことができました。私達夫婦は、彼が顔を輝かせて話してくれる、この世で唯一の主なる神様とイエス様のことを、何の抵抗もなく素直な気持ちで聞くことができました。帰り際には、山川千秋さんの「死は終りではない」とリンデさんの「実を結ぶ命」という二冊の本をいただきました。妻は早速読み始めました。私はそのような本は苦手で、読まずに遠ざけていました。ある日、テレビで山川千秋さんのドキュメント番組があり、妻はビデオに録画して私にすすめてくれましたが、それにも見向きもしませんでした。妻がある日、「和田さんたちが写っているのよ。山川さんのビデオを見たらどう」と勧めるので、初めはいやいやながら見始めたのですが、途中からは夢中になって見てしまいました。

その年の七月十五日に和田さんご夫妻と私達夫婦が大阪でお会いすることになりました。和田さんの奥さんとは実に十四年ぶりの再会で、ご夫婦そろってイエス様のこと、吉祥寺キリスト集会のこと、山川千秋さんのこと、自分達夫婦や家族のことなどを喜々として話されるので時間が経つのも忘れてしまい、駅にきて気がつくと私達が自宅に帰るＪＲや阪急の京都行の終電が無くなってしまっていました。思案の末、京都方面の最終であるＪＲの高槻行に切符も買わずに飛び乗り、高槻からタクシーで見知らぬ人達と相乗りで京都まで無事に帰ることができました。神様

は未信者の私達をも守ってくださり、そのおかげで家まで帰ることができたのだと思いました。

## 初めて神戸集会を訪れて

翌十六日の日曜日には、和田さんからお誘いのあった神戸の集会に、家族四人そろって出かけました。集会場の玄関にある案内の看板に、「キリスト集会」の文字を見た瞬間、私は嫌な所へきてしまった、という後悔の念が起こりました。

その時、どなたかが中から「さあ、どうぞ」と声をかけてくださいました。その声に引張られて何もわからぬまま、中に入ってしまいました。中では礼拝が行なわれていましたが、その人の多さに、まず驚きました。

ベックさんのお話は退屈で、居眠りをしては横に座っている息子に起こされるありさまでした。お話の内容は私にはよくわかりませんでしたが、「信仰は、赤ちゃんが母親の腕の中ですべてをゆだねて眠るように、イエス様にすべてをゆだねなさい」という言葉が印象に残りました。

お話が終わって昼食会の時、まず、目がやさしく顔もさわやかな人達が多いことを感じました。「光よあれ」の第四集に証しが載っているという、笹川さんを紹介されました。笹川さんが「主人はイエス様の所へ召されました」と、明るく話してくださるその不思議さに、その時はショックを受けましたが、今は天に召されたご主人の郁夫さんはこの地球上では想像することもできない、とても素晴らしい場所におられることを確信しています。

昼食会の終わりごろ、私達家族四人はベックさんとお話をすることができました。私はそれま

で、正月は神社へ初詣、葬儀は仏式、日本人は神道と仏教があればそれで十分だと考えていました。キリスト教などは外国の宗教だと思っていました。まして聖書は読んだこともなく、読む気もまったくありませんでした。ずいぶん前に、書店で一度聖書を開けてみた時にはさっぱり訳がわからず、キリスト教の坊さんのお経はこれにどんな節を付けて唱えるのかなと思ったほど、無知な人間でした。

ベックさんのお話をお聞きしているうちに、このお話は真剣に、素直に聞かなければいけないと思われてきました。「主なる神、イエス・キリスト、聖霊を三位一体ということ」、「人間は原罪を持っていること」、「この世にあるいわゆる宗教と真の信仰との違い」などを教えていただきました。今まで自己中心に考え、行なってきた生き方の大きな間違いに気が付き、それと同時に将来への不安、自己の死の問題など、ずっと心に抱いていた心配や不安が不思議になくなっていました。その後で、ベックさんの後に付いて悔い改めのお祈りをすることができました。お祈りを終えた瞬間から、今まで味わったこともなく、また口では言い表わすことのできない深い喜びで心が満たされました。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」（ヘブル　10・17）

（ローマ　8・1）

このようにして私は、今まで真の神を知らず、そむいていた私の罪を赦してくださり、すべての罪を洗い流してくださる方、イエス様に出会うことができました。

その後、何日かが過ぎましたが、私には不思議にいらいらする気持ちや横暴でわがままな心がなくなっており、妻から心配そうに「この頃、いらいらしないし、怒らないけれど、我慢をしているの?」と尋ねられるほどでした。それで初めて、自分自身は我慢も努力も何もしていないのに平安な心で日々が過ぎていることに気が付きました。神様は私の心を変えてしまわれたのです。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

(Ⅱコリント　5・17)

集会に導かれて以来、私は聖書や「光よあれ」をむさぼるように読み出しました。今まで通勤の車の中で聴いていたラジオ放送や音楽テープなどは急に魅力のないものになってしまい、その代わりに車の中では聖書のメッセージのテープを聞くようになりました。また、イエス様は一週間を聖日を中心に整えてくださり、日曜礼拝、家庭集会、バイブルキャンプにと、いつも家族四人が一緒に参加することができる喜びを味わわせていただいております。

初めて神戸の集会に導かれてから二カ月後の九月、私達家族四人は神戸集会の能勢川キャンプで、そろって洗礼を受けることができました。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

(Ⅰペテロ　5・7)

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

右の二つのみことばにありますように、イエス様は私の信仰がぐらついたり、自分だけの思いで歩む時には、やさしく、そして力強く語りかけて私を守ってくださいます。これからの日々を自分に頼らず、今は私の眼では見ることはできませんが、生きて働いておられるイエス様にすべてをゆだねて歩むことができればと思っています。

日々の生活を、喜びと感謝と希望をもって暮らしていけることは、私自身が聖書を研究したり、一生懸命に努力をしたからではなく、ただ、イエス様の一方的なお導きによるものです。イエス様は今も生きておられます。人間の知恵ではおしはかることのできない素晴らしいお方に家族そろって出会えたことを、心から感謝いたします。

私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。

（ユダ　25）

# 主がついていれば

加藤育穂

一九七七年京都に生まれる。岩倉北小卒。現在洛北中に在学中。
趣味は音楽。

ぼくは、お母さんと血液型不適合で皆を心配させたけれど、一九七七年六月十五日に京都府立病院で無事に生まれてこられました。

三歳で、今住んでいる京都市の郊外の岩倉に引っこしました。ここは緑が多く、ぼくは元気に育っていきました。お父さんは、なにかと短気でした。そんじょそこらの短気でなく、町のまん中でバスの運転手さんと口げんかをするのです。このようなときぼくはまだイエス様を知らなかったけれど、「たすけてください」と自然に祈ることがなんどかありました。体も弱く、月一回は休んでいました。

小学校六年生の春に、横浜の和田さんが初めて家にこられました。その前こられたときぼくは赤ちゃんだったので覚えていませんでした。ぼく達は家で遊んでいましたが、食事に行った大人達は長いこと帰ってきませんでした。

こんどは七月に和田さんが夫婦でこられ、お父さんとお母さんが大阪に会いにいきました。和田さんたちにさそわれて、翌日神戸集会に家族四人でいきました。最初はとてもたいくつで、ほとんど外にいました。四時半ごろに、ベックさんがぼくら四人とお話をしてくださることになり

ました。

最初に「神様はいると思う?」と聞かれたとき、お兄ちゃんは「いると思う」といいました。けどぼくは、「いない」と言いました。それでまたぼくに質問なさいました。「この世界は誰が造ったのかな? 山や木や花やすべてのものは……」と言われ、こんなものは人が作れないし、やっぱり神様は「いると思う」と返事をしました。それから、三位一体などの話をしてくださいました。最後にベックさんといっしょに祈りました。どれくらいの時間かわからなかったけれど、だいぶ長いこと、話してくださったと思います。ベックさんが、何枚か、写真をとってくださいました。和田さんに帰りの電車の中で「あなたは生まれ変わったのよ」と言われて、びっくりしました。お母さんはずっと泣いていました。人前ではずかしかったです。それからお父さんの顔が、少しずつこわくなくなっていきました。

七月二十日に和田さんが大阪へこられた時、ぼくの家にきてくれて、家でいっしょに食事をたべました。その日に初めて、自分自身の聖書をもらいました。次の週は何もしなかったけれど、お兄ちゃんとけんかしたり、おちつきのない日曜日になりました。次の日曜日に学校でソフトボール大会がありましたが、雨で中止になりかけました。ぼくは、お父さんが毎日夕方練習してくれたし、小学校最後でキャプテンだったから、どうしても試合をやりたかったから、初めて、一人で祈りました。

「神様、どうか一試合でもいいからやらしてください」と祈りました。そしたら雨がやんできて、決行という電話が入ってきたときは、とてもうれしかったです。急いでみんなを集めて、学

校に行きました。ぼくらの一試合目の三回めのとき、雨がまた降ってきたので、ぼくらが勝っていたのでコールド勝ちになりました。二試合目からはじゃんけんになったけれど、勝ちすすんでいきました。そして、とうとう優勝してしまいました。ぼくらの団地はまだ優勝がなく、ぼくがキャプテンのときはじめて優勝して、とてもうれしかったです。そして祈りがきいてもらえたので、とてもよかったです。そのときからぼくは、神様はいるという確信ができました。

一九八九年九月の能勢川バイブルキャンプで、初めて和田宗勝君と周作君に会いました。和田さんから「洗礼を受ける人達は、六時に起きないといけないから、早く寝なさい」といわれていたけれど、ぼくと周作君は話をしたりしながら一時近くまで起きていて、周作君はそれからすぐ寝たけれど、ぼくはなかなか眠れなくて、三時ぐらいまで起きてしまいました。

洗礼のときは周作君がお祈りをしてくれ、ぼくたちは「主にある兄弟になった」といいました。奥田健次さんが、みことばを読んでくれました。

「わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多くの実を結ぶために、刈り込みをなさいます。あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまって

いるなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」（ヨハネ　15・1～5）

しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。（イザヤ　40・31）

水から上った時、みんなが次々に「おめでとう」とあく手してくださった時は、うれしくて涙が止まりませんでした。

次の週には軽井沢のバイブルキャンプに行きました。その前日、お父さんが仕事から帰ってきてから夜中まで寝て、それから車で走りました。イエス様が車を押してくださって、思っていたより早くつきました。今までよく行っていた旅行のふんいきとはぜんぜんちがっていたけれど、テニスをしたりして楽しかったです。次の週には、生駒の家庭集会に初めていきました。三週間も続けて週末に家にいないなんて、イエス様を知らなかったときは考えられないことだけれど、ぜんぜん疲れなくてとても楽しく過ごしました。ぼくは集会へ行くのが待ちどおしくなり、毎週日曜日と家庭集会のある土曜日が楽しみになりました。

はじめて、集会の婚約式に出席させてもらいました。何だか楽しかったです。その晩の西宮の家庭集会で、お父さんが初めてみんなの前でお話をしました。十二月十六日には、生駒の家庭集会で、お母さんがお話をしました。それまで元旦は、初詣に行って、二日は祖父母の家へいって、

三日は朝暗い内から遠くのお寺へおまいりに行っていました。帰りにデパートに行ってプラモデルを買うのが楽しみで、早起きもがまんしていました。今年からは、クリスマス、元旦のすごし方がすっかり変わりました。

一月十五日の連休の時、はじめて吉祥寺キリスト集会に家族そろって集いました。中高生会にも初めて出て緊張したけれど、そのとき次のみことばを学びました。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。（伝道者　12・1）

結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。（伝道者　12・13、14）

吉祥寺キリスト集会も見られたし、ベックさんたちの家にも行けたからとてもよかったです。

二月の家庭集会の帰りに、ぼくはベックさんに手紙を書くことにしました。親にないしょにしていることがあって、言うべきか、言わないでいるべきか、迷っていました。言って叱られるのがこわかったからです。ぼくはバスと電車に乗って祖父母の近くの公文教室に通っていますが、お母さんがいそがしいとき、バス代をもらうときよぶんにだまってもらって、途中のスーパーでガムかケシゴムのおもちゃを買っていました。お母さんは全然知らなかったけれど、「親はごま

かせても、神様は、いつも見ておられるよ」と言われて、ないしょにしているのが苦しくなってきて、お祈りしても平安がなくて、それでベックさんに手紙で相談したのです。

二月十八日の上田さんと上山さんの結婚式のときにベックさんに会ったら、やさしい顔で「叱られないから、正直に親に言いなさい」と言われました。そして「お金はどれだけとっても、いっしょだよ。一円とっても、一億円とっても、同じだよ」と言われました。そしてぼくが書いた手紙をぼくに渡して「これを親に見せなさい」と言われました。心がとても軽くなりました。

そのことで夜にお父さんが祈ってくれました。とてもうれしかったです。お母さんも「自分も悪かった」とかばってくれて、ぼくといっしょにあやまってくれてとてもうれしかったです。神様を恐れることができて、ありがとうございますと、感謝の祈りをしてくれました。

三月の軽井沢バイブルキャンプには、お兄ちゃんと二人で行きました。宗勝君、周作君らといっしょの旅は楽しかったです。横浜でも、ボーリングをしたり、おそくまで話したり、とても楽しかったです。

五月の軽井沢バイブルキャンプには、お兄ちゃんは最初から行ったけれど、ぼくら三人は四日の夜中に車で走りました。和田さん一家とは入れちがいだったけれど、池田洋介さんや羽石真二さんらがいっしょに遊んでくださって、とてもよかったです。

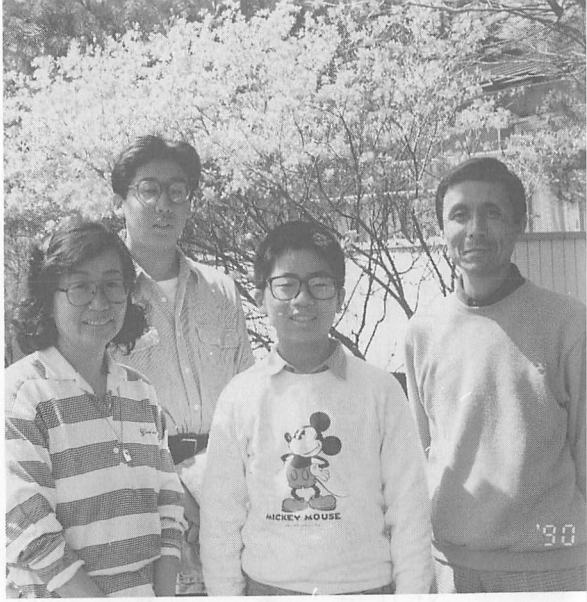
次の家庭集会で、お兄ちゃんがみなさんの前でお話をしました。

困った時も、おなかが痛い時も、助けてくださいと祈ったら、イエス様はすぐに聞いてくださいます。イエス様は、どこへ行くにもいっしょにいてくださいますから、心から感謝です。

ぼくの好きなみことばです。

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。（Ⅰヨハネ　4・10）

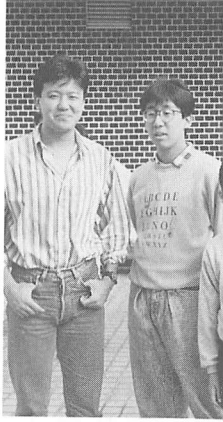
まことに、主のほかにだれが神であろうか。私たちの神を除いて、だれが岩であろうか。（詩篇　18・31）




▲家族そろって軽井沢バイブルキャンプに。
左から宏子さん、長男・和彦さん、次男・育穂さん、正光さん。



▲お友達に囲まれて。1990年5月の軽井沢バイブルキャンプ。
前列左から2人目が育穂さん。



浜名湖キャンプで古田雅一さん(左)と▶
和彦さん(中)、育穂さん(右)。

# ただ主を

加藤和彦

一九七三年大阪に生まれる。京都在住。
岩倉北小、洛北中卒。現在北稜高校在学中。

現在、僕は高校二年生の十七歳です。主を知ったのは、一九八九年七月十六日でした。初めに、それまでの生い立ちを記させていただきます。

私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。(Ⅰテモテ　1・13)

中学二年生の時ある本を読みました。そこには救世主キリストは一体何をまねいたのだろうかということが書いてありました。キリスト教が全世界にひろまっていく時、迫害によってどれだけの血が流されたか。また、暴君ネロの迫害、異教徒との対立、中世の魔女狩り、宗教戦争、ユダヤ人虐殺など、救世主キリストをめぐってどのようなことが行なわれてきたか。それを考えてみれば、救世主キリストは悪の根源だったのではないだろうか、と思っていました。

幼稚園は、キリスト教系だったらしいのですが、全くおぼえていません。しかし、毎日のように自然の中で遊んでいたのはおぼえています。このころ、父が母に対してどなりちらしているのを聞き、父に対する恐怖心が出てきました。

小学校の高学年では、いじめられていて、しかも、毎日のようにけんかばかりする日々でした。

中学校での三年間は、お調子乗りで、自分のことしか考えないために、嫌われ者でした。家では、父の顔色をいつもうかがっていて、母に「落ち着く場所はどこ?」と聞かれた時は「トイレ」と言ったことがあるほどでした。母に対しては、小学生のころはよく「言うことを聞かないと、戸塚ヨットスクールに入れる」とおどかされたり、中学生のころは、くどくどごごとや父のぐちを言われ、うんざりしていました。短気な父に対しては、こわいより、あきれて、しまいには憎しみになりました。こういうことが毎日続き、「平安」ということが一日もありませんでした。

彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。（ローマ　1・29～31）

中学三年のころから、父があまり子供には怒らなくなったのをいいことに、僕は、このみことばどおりの人間になっていきました。一度、ちょっとばかにした態度を友人がとったので、なぐりかかり、大げんかしたこともありました。でも、けんかの後は、なにかむなしく悲しいものがありました。集会へ導かれる前で、ねたみと殺意と争いと欺きで、いっぱいの僕でした。

そしてそのようなおろかな者でも、主は、七月十六日に父の大学時代の友達の和田さんを通して家族四人を神戸集会に導いてくださいました。その時は、集会など初めてだったので、何もわ

からず、あっという間に時間が過ぎていきました。この時の第一印象は、「ここの人たちは、何か違っていて、一度会ったことのある人たちばかりだ……」というものでした。不思議でした。

食事の後ベックさんが、僕たち家族四人と話してくださり、ていねいに三位一体のことや、自分の罪のことを教えてくださいました。罪については、法律で言われている罪しか考えたことのない僕には衝撃的でした。

お話を聞いてから、僕が前に考えていたキリストが悪の根源だったという誤解は解けました。しかし、まだ心の奥の方では疑いをもっていました。急に変わった両親へのとまどいもありました。それから夏休みの後半は、生活が荒れました。夜、遊びに出て早い時でも十時ごろ、遅い時には午前一時ごろ帰ることが重なりました。友達同士で遅くまで話しこんだり、母の信頼を裏切るような事をしたりしていました。そのためかどうかは分かりませんが、家に帰ったり集会へ行くことがだんだんと苦痛になりだしました。

しかし、不思議なことがあってからは、心の底から主を信じ、このような荒れた生活はすっかりなくなりました。その一つは、深夜に帰ってきた次の日、母から「この録音テープを聞いてほしい」と言われ、しぶしぶ聞き始めました。すると、次のような聖句が与えられました。

イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまずくことはありません。この世の光を見ているからです。しかし、夜歩けばつまずきます。光がその人のうちにないからです。」

（ヨハネ　11・9、10）

イエスは彼らに言われた。「まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。」（ヨハネ　12・35）

僕は、荒れていた自分の姿に「はっ」としました。こんな僕でも注意してくださるなんて、主はすばらしい方だと思いました。実は母はA面を聞いてほしかったらしいのに、僕はB面を聞いていたのです。聞き終わったあと、母に「ごめん」と言ってテープを返しました。

もう一つは、親に反抗し、自分のことしか考えていない時に聖書を開いて見つけた聖句です。

見よ。あなたがたはみな、火をともし、燃えさしを身に帯びている。あなたがたは自分たちの火のあかりを持ち、火をつけた燃えさしを持って歩くがよい。このことはわたしの手によってあなたがたに起こり、あなたがたは、苦しみのうちに伏し倒れる。（イザヤ　50・11）

このみことばによって、主は僕に注意してくださったのです。僕は我にかえり、くいあらためて祈りました。すると、

「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。」（イザヤ　54・7、8）

というみことばを与えてくださり、自分の愚かさ、傲慢さに気づくことができました。主はほんとうにいつも一緒におられるということを実感しました。このようなことがあってから、百パーセント、主に信頼をよせることができました。

僕は洗礼を受けますと集会で言いましたが、なにか不安を感じ、隣の公園で断わろうかどうしようか迷っていましたが、ある方が僕の所まで来て、話をしてくださいました。どんな内容だったかはおぼえていませんが、洗礼を受ける不安はいつの間にかなくなっていました。そして九月十七日の能勢川バイブルキャンプで、家族そろって洗礼をうけることができて、うれしくて感激でした。

高校一年の二学期の後半の頃、剣道クラブのことで先輩との衝突があり、悩み始めました。

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。（ヤコブ　1・12）

ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。（ヤコブ　4・7）

このようなみことばを母がくれました。

やがて、クラブで大会のメンバーを決める予選があった時、僕はいつも負けてばかりいた先輩に勝つことができました。するとその先輩は竹刀を投げ、「なんで、お前なんかに負けなきゃな

らないんだ」と言ってくやし泣きしていました。そして他の先輩も、「やっぱり、あいつのためにお前は負けた方がよかったな」などと言うのです。この時、僕はものすごくショックを受けました。でもこのことがきっかけとなってなにかふっきれたものがあり、試合がある日が日曜日なので、クラブをやめて主につかえる決心がつきました。そのときも主はこのようなみことばを与えてくださいました。

主は、いと高き所から御手を伸べて私を捕え、私を大水から引き上げられた。主は私の強い敵と、私を憎む者とから私を救い出された。彼らは私より強かったから。彼らは私のわざわいの日に私に立ち向かった。だが、主は私のささえであった。主は私を広い所に連れ出し、私を助け出された。主が私を喜びとされたから。（詩篇 18・16～19）

主はこういう方法で僕を助け出し、ひきよせてくださいました。ただ感謝です。

しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりつかまえられました。あなたは、私をさとして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいましょう。（詩篇 73・23、24）

やがて高校二年の四月の下旬になると、僕は自分の進路について不安をいだきました。それでいらいらして両親を怒らせたり、「自分はこの家にはあわないんだ。必要ないんだ」とすてばちなことを言ったりして、自分の不安を正当化しようとしたりしていました。でも、生駒の家庭集

会から神戸の集会へ向かう途中、ある方からみことばをいただきました。

主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。（箴言　1・7）

主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟りである。（箴言　9・10）

僕が進みたい大学はものすごくランクが上で、いまの成績では全くだめな時でした。その方が「イエス・キリストを信じるという信仰の土台があるから、あせることはないし、急ぐことはないし、いらいらすることもない」と言ってくださったので、進路への不安もなくなり、安心することができました。このように僕は、いろいろなことを教えはげましてくださるたくさんの方にめぐまれているので感謝しています。

毎日いろいろなことがあり、つい主から離れてしまう者ですが、困った時には主により頼み、すべてをゆだねるようにしています。くじけそうな時には、

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

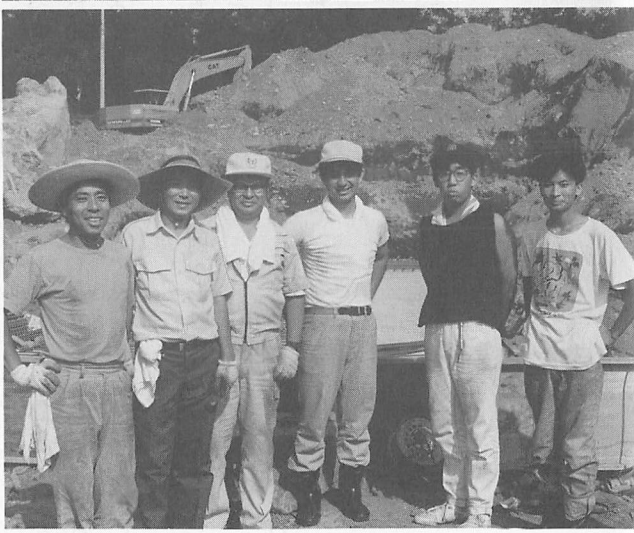
というみことばで、主はいつも助けてくださるから、心から感謝しています。

ただ主を、心から賛美します。

日曜の朝、集会のみなさんと一緒に。

▼神戸集会・森島左武郎さん宅前（兵庫県西宮市）にて。





▲西軽井沢福音センター建設工事の現場で
集会の方々とともに働く和彦さん（右から2人目）。

私のたましいがあなたをほめ歌い、黙っていることがないために。私の神、主よ。私はとこしえまでも、あなたに感謝します。

（詩篇　30・12）



# 幸いなことよ

加藤宏子

京都に生まれる。葵小、下鴨中、府立洛北高校卒。
ご主人の正光さんとは、一九七一年に結婚。長男和彦さん、次男育穂さん。高校時代弓道をやる。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。（エペソ　2・8）

私達家族四人は、少々緊張気味に、椅子に座りました。

はじめて来た神戸キリスト集会で、はじめてお目にかかるベックさんのお話。一九八九年七月十六日、この日、主の一方的な恵みにより、私達はイエス・キリストを真の神と信じました。

## イエス様に引きよせられて

夫の学生時代からの友人の和田さんから、みことばの入った絵はがきがしきりと届くようになっていましたが、四月末に、やっと十年ぶりでお目にかかることができました。和田さんは昔の精悍さが取れ、暖かい気持ちでお話することができました。彼から「神様」のことを聞くなんて、不思議な思いがしました。その時、「死は終りではない」と、「実を結ぶ命」の本をいただき、私

はその夜から引きこまれるように読み出しました。

七月には、大阪で和田ご夫妻とゆっくりお話する機会がありました。親しい人の前では、主人は決して怒らないことを知っていましたから、私は今まで人には言えなかったいろいろな悩みごとを和田さんにお話しました。すると、うらやましいほど仲がいいと思っていたご夫妻の間にも、いろいろなことがあったことが分かり、「しかし、神様を受け入れてから私たちはすっかり変わった」と、ご夫妻でむつまじく話をしてくださいました。お二人によって、神様のことをもっと知りたいという思いにかられました。

翌日の神戸集会のお誘いを受け、主人にぜひ連れていってほしいと頼みました。ねむれないまま次の朝早く、めずらしく電車で岡本にある集会へ向かいました。

それまで私は、子供の幼稚園はなぜかキリスト教系がいいと思っていました。長男が幼稚園の時、保護者として園の礼拝に出る機会もありましたが、その時は別に何も感じることなく、卒園時にいただいた新約聖書も、ずっと本箱の隅に入れたまま、開いたこともありませんでした。住居がかわり、次男の時は近くにふさわしい園がなく、公立に入りましたので、そういう場からはまったく遠のいてしまっていました。でもこの時、「どうしても行ってみたい」という思いが強く起こったのです。

聖歌が聞こえる中を、どきどきしながら集会場に入りました。そこには十字架もなく、みことばを書いた掛軸が下がっているだけでした。集会とはおかしな所だなあ、と興味本位で席に着きました。よく外国映画に出てくるような正装した人々の集まる教会のイメージとは違って、クリ

スチャンらしからぬ普通のおじさんやつっぱり風のおにいさん達が次々と立って感謝の祈りをなさっているのに驚きました。前に立つ牧師さんもいないし、まさかあの掛軸に向かって祈っているわけではなかろうにと、そっとあたりを見まわしていました。その時はまだ、目に見えない主のご臨在がまったく分かっていなかったのです。そんな中で、座席から振り向いて握手してくださったベックさんの大きな手、やさしい笑顔になぜかほっとしました。

聖書についてのお話、メッセージを聞くのも初めての経験で、聞いたあとからすぐに忘れてしまいましたが、終わりに聖歌が歌われたとき、胸があつくなりました。

礼拝が終わった後で、和田さんの奥様からいろいろな方々を紹介していただきました。それぞれに悩みごとや苦しみを持っていられることをうかがいましたが、まったくそういうことを感じさせない晴れやかな表情は、いったいどこからくるのかと、不思議に思い、頭の中が混乱してしまいました。ご主人をがんでなくされた笹川さんの奥様が、小さな子供さんを抱っこしながらにこにこと「主人は喜んで天に召されました」とおっしゃった時には、妻や母親の立場で大きなショックを受けました。帰宅して、早速笹川ご夫妻が載っている「光よあれ第四集」を読ませていただきました。その笹川さんは、今ではたよりない信仰の私の大きな助け手になってくださり、親しくおつきあいをさせていただいているのは大きな喜びです。

子供達は集会での初めての体験に面くらっている様子でしたが、礼拝、メッセージの後の昼食はとてもおいしく、急に元気になりました。子供達にも次々と皆さまが話かけてくださいました。

集会の皆さまとは初対面でしたが、どの方も住所と名前をおっしゃるだけで、肩書きなどは何

も触れられず、知らず知らずの内に暖かいふんいきの中に入っていくことができました。

ある方が「ようこそ」とことばをかけてくださった時、なぜかとてもなつかしい人に出会ったみたいで、涙があふれて言葉が続きませんでした。初対面の知らない方なのに、何ということかと、恥ずかしくなりました。このご夫妻も、今では私がつまずいた時にみことばによってはげまし、力づけてくださる、「主にある兄弟姉妹」です。そして現在は、ほかにもたくさんの主だけを見上げた方々にかこまれ、集会の中で、あるいは長距離電話を通し、共によろこびの中に加えられていることに心から感謝しております。

さて、集会の後片付けがはじまる頃、ベックさんとお話することになりました。どうしたらいいか分からずに座っている四人を前にして、ちょっと考えられたベックさんは、「神様はいると思うか?」という質問を、子供達になさいました。その、うちとけたふんいきに、緊張もとけ、気持ちが楽になりました。そして三位一体、信仰と宗教のちがいなどをやさしく教えていただき、今まで考えていたキリスト教と真の信仰はまったく違うことも分かりました。本当の神様というものを、はじめて知りました。

いい機会でしたので、私は心の中で今まで疑問に思っていたこと、「悩みや苦しみがなければ信仰には入れないのではないか」とか、「今さしあたって何の必要も感じていないのにここへきた」ことなどをお話してみました。ベックさんは、「信仰は『入る』ものではないよ。悩みや苦しみが何もないのに神様の恵みをいただけるなんて、それはどんなにすばらしいことか」ということを教えてくださいました。目の前がすーっと明るくなったように思いました。

実は私は、十歳ぐらいの頃からずっと毎晩、よくは分からないけれど神様と思われるものにお祈りをして寝る習慣がついていました。その方は、私が困ったときは助け、お願いに耳を傾け、優しく声をかけてくれるのでした。でもそれが一体どなたなのかが分からず、神社、仏閣に詣でた時、つい目に見えるものに惑わされてそれらを拝んでいたのです。京都に住んでいる関係で、そのような場所は一杯ありました。

しかし、ベックさんとお話をして、真の神は、この天地を創造なさった方おひとりだけであり、しかもそのお方は目に見えないお方であることが分かりました。私ははっとしました。知らずにしたこととはいえ、この真の神に背をむけて人間が作り出した偶像を拝んでいた罪に気が付いたのです。しかも創造主である神のひとり子であるイエス様は、何の罪もないのに、私の罪を贖うために十字架にかかって死んでくださったのです。私は真の神であるイエス様のことを知らず、人間が作った神々を拝んでいたのに、イエス様はじっと怒らず、私を待っていてくださった……こんな愚かな私のために、尊い血を流してくださった……。私は自分の罪深さにただ申し訳なく、涙があふれました。本当にごめんなさい。そのときどこからか、「やっと気が付いたか」と、やさしい声が聞こえてきたように思われました。

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。（詩篇　32・1）

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。（Ⅱコリント　5・21）

ベックさんのあとに続いて、はじめて皆でお祈りをしました。夫や子供達が祈る声が聞こえました。私はこのように家族そろって悔い改め、お祈りができることがうれしくて、また子供達が初めて知った神様が「真の神」であったことがうれしくて、満ち足りたよろこびの泉があとからあとから溢れて止まりません。涙がこんなにも出るものだとは知りませんでした。

私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。

（詩篇　139・14）

## すっかり変わった生活

次の集会に集うまで、いろいろと予定が入っていたので、一カ月ほど間があきました。その間も神様は数々のめぐみを与えてくださいました。初めて自分の聖書を手にしたよろこび、そして福音テープを聞いたり、「光よあれ」を次々に読んでいく喜び……。祈ってみことばが与えられる不思議も体験しました。家の中の空気が変わっていくのが分かりました。その間子供達にはとまどいがあったと思いますが、小さな奇蹟をおこしてくださり、「神様は本当におられるのだ」と、少しずつ子供達に確信を持たせていただいたようです。

神戸集会は名神高速を使っても二時間余り、続けて通えるだろうかと初めは心配していましたが、いつの間にか、聖日中心に一週間が整えられ、毎週欠かすことなく通うことができ、しかも集うことが待ち遠しくなり、生活のすべてが変わっていきました。

九月の能勢川キャンプでは、家族そろって受洗させていただきました。主との出会いも、洗礼

も家族一緒という、あり余る祝福をいただきました。そして、この喜びの背後には、名前も顔も存じあげない集会の多くの皆さま方の祈りがあったことを知り、心からうれしく、感謝しております。そして今は、知らない方々の救いを主に祈らせていただける私達の幸せを、いっそう感謝しております。

その後、各地で行なわれるバイブルキャンプにも参加させていただき、普段はお会いできない方々にお目にかかることを楽しみにしています。子供達だけでキャンプにやっても、私たちは何の心配もありません。主が中心にいてくださり、主にある皆さまがたの中で過ごすのですから。子供達も満ち足りて、帰ってきたらもう次のキャンプを心待ちにしています。観光向けに人の手を加えた京都の庭のようではなく、自然が息づいている軽井沢の風景は、どの季節も心をなごませてくれるものがあります。

主を知る前の私達は、表面的にはまずまずの家庭だと思っていました。

夫は、祖母の能楽の道を継ぐべく、大阪、ついで東京と、師の元で十年余り修業しました。しかしもろもろの事情から能楽の道を断念し、一からやり直すことになりました。独立すれば結婚する予定で、私は四年間待っていたのですが、このようなことになり、まったく予期せぬ状態のまま、結婚生活がスタートしました。夫は二十六歳になっていましたが、それまで普通の世間並みの生活をしたことがありませんでした。跡継ぎだ、先生だとちやほやされてきたその主人が、突然人に頭を下げる仕事に一転したのです。主人はプライドだけは昔のままで、自分の思うようにことが運ばなかったり、ちょっと不本意なことがあったりすると、私や子供達に当たり、いつ

になったら現実を見つめてくれるのかと悲しい思いをすることも幾度かありました。父親のきげんが悪い時には、子供達がふびんでした。でも、色々なことがあってここまできたのだし、子供や私に対する愛情は深く、本当はとてもやさしい人なのに、心の表わし方がへたなのだと、かわいそうに思いました。それにこれ位のことは、どこの家庭でも多かれ少なかれあるものだと思っていましたし、私は主人の顔色を見て、適当にその場その場を波風を立てないようにやり過ごしていたのです。ふり返ってみると、身体をこわして医者にほどほどにしなさいと止められるまで、夫の気に入るようにつくしてきましたが、すべてそれは本当の従順ではなく、あのままずるく適当に過ごしていたら、愛のないむなしい夫婦になっていたと思います。その主人とも、今は「主にある兄弟」としていっそう絆が強くなり、感謝の日々を過ごしています。

子供二人は、私とは血液型がRh型不適合で生まれましたので、赤ん坊の頃から神経質に育ててきたようです。二人とも親の言うことをよく聞き、育てやすいいい子供達でした。でも、主を知り、我が身をふり返ってみると、すべて私の都合のいいようにしつけてきたことに気付かされ、取り返しのつかない年月に、ただただ申し訳ない思いです。世間の人に「いい子だ」と言ってもらえるように、笑われないようにと、たえず人の目を気にしてくどくどと先まわりして指示し、枠から外れないようにと言葉でおどして従わせたり、その時その時は「子供のためにそれが一番よい、正しい」と確信を持ってやっていたことが、すべて大きな過ちでした。

長男が集会で皆さまの前で話すのを聞いた時、親が知らなかったいろいろなことを知り、子供に苦しい思いをさせていたことを悔いました。長男は皆さまの前では悪いことばかりを証しして

いましたが、小学生の頃から弱いいじめられっ子をかばって一緒にいじめられたり、けがをさせられても自分がやったことのように親に言い、相手が謝りにきて初めて真相が分かったというようなやさしい面もいっぱい持っています。主はその頃から私達をあわれんでくださり、おろかな親の元で育てられた子供達を暖かく見守ってくださり、真理から離れることなく、今、このようなよろこびの中に置いてくださっているのです。

次男は、つい甘やかしてしまいましたが、イエス様を知ってからはみんな神様がしてくださっているのだからと言ってわがままを言わなくなりました。「親はごまかせても神様はすべてを知っておられるから」と、うそをつくこともなくなり、不安な時や困った時にはすぐ主にお祈りし、必ず助けていただける確信を持って安心して毎日を過ごしています。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。

（伝道者　12・1）

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

（イザヤ　63・9）

## 二つのできごとを通して

私自身も二つのできごとを通して、生きておられる主のすばらしさを知りました。その一つは、

私の健康のことでした。

私は身体の不調から不眠が続き、血液検査を受けたところ白血球に異常がみつかり、すぐに京大病院で精密検査を受けるようにと言われました。長い検査入院をされた方を知っていましたので、病院の検査に対する恐怖があり、もし結果が悪かったらどうしようと思うと、子供達のことが心配で、検査を受けるのをためらっていました。内科のお医者様をされているある集会の方に、「日をおいて、もう一度血液検査を受けてみては」とアドバイスしていただき、毎日主に「臆病な私をあわれんで、どうすればよいか教えてください。すべておゆだねします。みこころのままになりますように」と祈りました。やがて、眠れない時にはイヤホーンでメッセージテープを聞くという知恵をいただき、聞いているうちにいつしか眠ってしまい、不眠でいらいらとあせることもなくなりました。腰痛や足のひどいだるさもやわらぎました。

しばらくして別の病院で、思いがけなく受けた別の科での診断により、ある病気が見つかりました。それもさし当たって心配するほどのこともなく、やがてそこから血液の専門医に回されて診断を受けることになりました。再検査の結果、血液の異常は認められず、数値もほぼ正常に戻っていたのです。何の治療も受けていなかったのに、不思議でした。おかげで血液のみの専門的な検査を受けずに済み、鉄剤を飲みながら様子を見ることになりました。

また私は、不調の時、やさしくしてくれた夫に対する私のわがままに気が付き、心から謝ることができました。そして家族の暖かさを知り、日々健康に暮らせる喜びを心からかみしめ、感謝して祈ることができるようになりました。私の不調の原因はまだ見つかっていませんが、今は、

主が私にとって一番よいようにしてくださることを信じ、すべてをおゆだねしています。いつの間にか「死」に対する恐怖もなくなっていました。

もう一つは、私の忘れ物騒動です。私はイエス様に出会ったことが嬉しくて、子供の春休みにぜひ東京の吉祥寺キリスト集会の学び会に出たくて、夫に頼んで行かせてもらいました。夫は家のことは何ひとつできませんでしたので、結婚、出産以来初めて家を留守にしたのです。横浜の和田さんのお宅で軽井沢のキャンプから帰ってきた子供達と落ち合い、和田さんの奥様に連れられて学び会や八王子の家庭集会に出席させていただきました。

身体は不調でしたが、聖霊に満たされ、守られて、喜びの日々を過ごさせていただきました。神様を知ってから、見るもの、感じるもの、すべてが違ってくるのです。おりしも桜が満開でしたが、こんなに美しい桜は生まれて初めてでした。道端の草花さえ、いとおしくて感謝でした。あれやこれや夫に話したいことがいっぱいで、嬉しさに足が地に着かないまま帰路に着きました。

何台かの電車を乗り継ぎ、「ひかり」に乗ってほっとしたとたん、私はボストンバッグがないことに気が付き、あわてて車中から横浜へ電話し、手配をお願いしました。バッグの中には聖歌、お借りした福音の本、念のために持っていった保険証、鍵、時計、現金、衣類などがいっぱい詰まっています。まず保険証の悪用を怖れ、まったく平安がなくなりました。

長男は「思い煩いをいっさい神にゆだねなさいというみことばしか言ってあげられないけれど、神様に祈るしか何もできないよ」と言ってくれました。

次男は「だいじょうぶ。イエス様は絶対見つけてくださるから心配しないで。それより僕の軽

井沢の話を聞いて…」と、楽しかったことを色々と話してくれました。うろたえる私に比べ、心から主を信頼している子供達に驚き、また車中で一緒に祈ってくれて心強く、嬉しかったです。

駅には早く仕事が終わった主人が車で迎えにきてくれ、「ありがとう」のつもりが「ごめんなさい」で帰ることになってしまいました。夫は怒りをおさえて、警察などの手続きを帰り道に済ませてくれました。車の中で待っていた子供達は「以前のお父さんだったら、とてもこの程度では済まなかったのに、変わったなあ……」と話し合っていたことを後で知り夫と苦笑いしました。

久しぶりに家族四人がそろった夕食の時、夫がすべてのできごとに感謝する祈りをしてくれました。長男が私を気遣って、「バッグを拾った人が中の本やテープからイエス様を知ることができたらすごいね」と言ってくれました。皆であれこれ話がはずみ、楽しい食事になりました。

夜十時過ぎ、和田さんへのお礼の電話を済ませた後、すぐベルが鳴り、六浦の駅前の時計店の奥様から「バッグをあずかっています」との電話をいただきました。「もし電車の中だったらおそらくは……」と、半ばあきらめの気持ちが起こりかけていた私は、祈ってはいても心からゆだねきってはいなかったのです。だのに主はこんなに早く、しかもすべての品々をそのまま返してくださいました。子供達の主への思いに対して、夫の感謝に対して、私は恥ずかしかったです。

このように私は、身体の不調を通し、バッグをなくしたことを通し、何がいちばん本当に大切なのかを知りました。主がなしてくださらなければ、人間なんて何もできないものだということ。苦しい時に心の底から祈り、主におゆだねすることがいかに大切であるかということ。そしてこんなに気持ちを楽にしてくださり、すべてを益にしてくださる主を知ったこと、これ以上にすば

らしいことはありません。子供達は高校二年、中学一年と多感な年齢になっていますが、私達は何の心配もしていません。イエス様を恐れ、イエス様がいつもそばに付いていてくださっていることを信じ、助けてくださると信頼し、たより切っていますから。たとえつらいことがあっても、主のご計画には失望することが何もなく、すべてを神がくださった愛として受けとめてくれることと確信しています。

私達は、聖書も何も知りませんでした。でも、多くの集会の方々の口を通してみことばを次々にいただき、それがすべての「道しるべ」となり、ただ主を信じ、感謝して祈り、みことばにたよるという生活に変えていただくことができました。

信仰も幼く、弱いものですが、家族一緒に喜び、平安な毎日を過ごさせていただいております。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（Ⅰテサロニケ　5・16～18）

あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。

（詩篇　16・11）

# 今日まで灯し続けた信仰の灯

## 大城紀美子

一九一五年沖縄県国頭村奥に生まれる。奥高小を卒業後那覇に出、善興堂助産婦学校を卒業、翌年国家試験合格。当山助産院に勤める。大城鉄一さんと結婚。一九六七年鉄一さん天に召される。長男鉄也さん、長女仲里喬子さん、次女高橋久美子さん、三女杉山るみ子さん、四女宇久田恵美子さん、五女松本明美さん、現在孫十一人。

集会の出村さんの結婚式で娘さんたちに囲まれて。右から長女・仲里喬子さん、
▼五女・松本明美さん、紀美子さん、四女・宇久田恵美子さん、孫・仲里いずみさん。1989年6月、ハーバービューホテルにて。



私は沖縄県北部の国頭村奥という小さな村で生まれました。

私とイエス様との初めての出会いは、幼い頃、いとこに教わった聖歌四二四番で、その歌詞は「十字架にかかりたる救い主を見よや」というものでした。その後成長して勤めた産院の院長がクリスチャンでしたから、職場では礼拝に集うことを義務づけられ、そのために教会へ行くようになったのです。

やがて四十歳になった頃、アメリカ人のボードマン宣教師を通して、イエス様を自分の救い主として受け入れることができました。

結婚して後、八人の子供が与えられましたが、二人は幼くして病で天国に召されました。主人も五十六歳でがんを患いましたが、救われておりましたので、平安のうちに天に召されていきました。

沖縄は先祖崇拝の強い所で、この地でイエス・キリストを唯一、真の神として信仰生活を歩むことは容易ではありませんでした。しかし、思えば今日までの長い年月、イエス様は深いご愛をもって私を助け、守り、導いてくださったのです。

## 突然の電話

一九八二年の五月に、東京にいる次女の久美子から突然電話があり、「お母さん、私はイエス様を受け入れて洗礼を受けます」と言うのです。私はびっくりしました。娘たちには常々、どこにいても、どんな状況の中にあっても、教会には必ず行くようにと言い聞かせておりましたが、

洗礼を受けるとはあまりに突然のことなので、教会名と場所を聞きますと、「吉祥寺集会」との答えでした。「聞いたことのない教会だね」と言いますと、「教会ではなく集会だ」と言いますので、またびっくりしました。吉祥「寺」集会なんて、名前も何だかお寺さんのような気がして、これはてっきり最近流行の新興宗教の一種ではないかと思って不安になり、とにかく私が上京するまで洗礼は絶対待ってもらいたい、と返事して、さっそく上京しました。

娘の久美子の話では、その集会は牧師さんはいないし、月定献金もなく、会員の名簿もないとのことで、私の教会とはあまりに違い過ぎることばかりで、とても不安になりました。一九八二年六月六日、久美子の洗礼式の日に、私は初めて吉祥寺キリスト集会に行きました。

私はその時のベックさんのメッセージについて行けず、聖書をめくるのもとまどいがちで、メッセージの内容もよく理解できませんでした。しかし洗礼については、

「洗礼を受けるということは、これから私はイエス様だけに従っていくということをはっきりと世の中に表すことです。これからあなたはイエス様のためにだけ生きるのです。

誇る者は主にあって誇れ。　（Ⅰコリント　1・31）

と聖書にあるように、何一つ持たない私たちは、主の十字架以外に誇るものはありません。悔い改めとはイエス様の前に白い旗を掲げて降参することです」。

そのような意味のことをおっしゃったのを、断片的に覚えています。

ベックさんのメッセージは私の鈍い耳を開き、目を開き、心に染み込んできて、知らず知らず

のうちに胸のときめきを覚えました。教会に行きさえすればクリスチャンだと思っていた今までの自分が恥ずかしくなりました。娘の久美子の洗礼式のお祈りをしながらも胸がつまって声にならず、涙があふれて仕方がありませんでした。

それから東京滞在中は、家庭集会、祈り会と次々に集いに参加させていただき、これが度重なるごとに、イエス様からの霊の糧と恵みが豊かに与えられ、感謝でした。そして集会を通して、「形骸的な宗教」と「生きている信仰」の違いをはっきりと学ぶことができました。吉祥寺キリスト集会の集いの中には、いつも生きて働いておられるイエス様のご臨在がひしひしと感じられました。集会は、神の愛の満ち満ちた場所、安らぎの場所であり、とても初めてお仲間に入れていただいたとは思えないほど平安と喜びがあって、ずっとこの場にいさせていただきたいと思いました。そして、数えきれないほどの恵みと祝福に包まれて沖縄に帰りますと、高橋艶子さんから聖書の一節が電話で送られてきていて、私を待っていました。

「家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。」（ルカ　8・39）

このみことばを通して、イエス様は取るに足りない小さな者である私に目を留め、語りかけてくださいました。みことばを通して私は何をなさねばならないかを考えさせられ、今まで通っていた教会と吉祥寺キリスト集会の違いをまわりの人々に話して聞かせました。

それから私は上京するたびごとに、吉祥寺キリスト集会に集いました。集会のみなさま方との

深いおつきあいを通して、生きて働いていらっしゃるイエス様との出会いを体験し、聖書を開く時はこれまでと違ってほんとに新鮮な気持ちでみことばの一つ一つが心の中に飛び込んでくるようになりました。聖書を生きたみことばとして受け止めることができるようになったのです。この地上にある限り、みことばに従う者としてください、と日々お祈りしました。

## 信仰の灯を沖縄に

初めて吉祥寺キリスト集会に行ってから三年目、一九八五年の五月に上京した時、ベックさんが沖縄に来てくださることをご計画中だと久美子から聞かされていましたが、まさかそんなことが、と思って、ほんとうかどうか私から尋ねることをさけていました。それは、もし、「行きますからよろしく」とおっしゃったら私はどうやって人を集めたらいいのか、との恐れからでした。日曜日の礼拝のとき、ふとベックさんの伝道予定表が目に入り、そこにははっきりと「五月二十四日沖縄」と記入してありましたので、そのような恐れを持った不信仰な自分を恥ずかしく思い、主のご計画にひれ伏す思いでした。思い切って「ベックさん、本当に沖縄にいらっしゃるんですね」と尋ねましたらベックさんは「なぜですか？　予定表を見たから信じたのですか？」とおっしゃいました。その時私は聖書にある「見ないで信じる者になりなさい」というみことばを示された思いでした。

主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」

（創世記　12・1）

このみことばは、ドイツを出てはるばる東京へ、そして今また沖縄へと主のために駆け巡られるベックさんへの啓示でもあったのです。不信仰な私にはこのような信仰は驚きであり、何の準備も備えもできていない沖縄にベックさんが来られたら一体どうしたらいいのか、私の家族にどのようにこのことを話してよいのか、またどのように呼びかけて人々を呼び集めたらいいのかなどと思い煩い、娘たちともどうしたらいいのかを話し合いました。

そんな時、側にあった聖書カレンダーに、次のみことばが書かれているのを見つけたのです。

「さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。」

（出エジプト　4・12）

このみことばを見つけたとたん、私の心は平安に満たされました。「そうだ、私がやるのではないんだ。神様がちゃんと面倒を見てくださるんだ」と思い、安心して沖縄へ帰りました。ベックさんが二十四日に沖縄へいらっしゃることを家族に話し、ともかく初めてのことだから我が家で集会を開かせてほしいと、家族の了解も得ました。

一九八五年五月二十四日、いよいよ当日が来て、ベックさんご夫妻をはじめ、飯守さん、高橋さん、金子さんなど吉祥寺キリスト集会の皆様方をはじめ、全員で三十五名ほどの方々を我が家にお迎えすることができました。その日が沖縄集会の始まりでした。

神様はこのように沖縄に目を留めてくださり、迷える沖縄の魂の救いのため、度々、ベックさんをはじめ、吉祥寺キリスト集会の皆様を次々に遣わしてくださいまして、弱い私たちの信仰の

助け手として備えてくださいました。集会の場所さえないこの沖縄の地ですが、神の愛の大きさ、すばらしさを痛感いたしました。沖縄で集会を開くたびに、会場をどうするかなど、いろいろと心を痛めることもありましたが、それも集会の皆様と力を合わせて駆け回り、懸命に会場を与えてくださいと祈ることによって、不思議とすべてがととのえられるのでした。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。（伝道者　3・11）

神にとって不可能なことは一つもありません。（ルカ　1・37）

一方、私は二十年もの長い間お世話になった元の教会を去るには忍びがたい思いもあり、しばらくの間元の教会と沖縄集会との間を行ったり来たりして、二股をかけているような状態の中にいました。しかし私は、日曜日ごとに礼拝をただ形式的に行なうだけの元の教会に、もはや何の喜びも見出せなくなっていました。いつまでもこのような状態の中で二股をかけていることを思うと心が重く、主に対して罪を犯しているのではないかとの思いが強まってきました。このことを一生懸命祈っているうちにみことばが与えられまして、元の教会を去る決断をすることができました。でも元の教会を出ることは、私にとって、ほんとに多くの困難がありました。

「それでも、あなたが行くと言われるのなら、そうしなさい。雄々しく戦いなさい。神は敵の前にあなたをつまずかせられます。神には、助ける力があり、つまずかせる力もあるからです。」アマツヤは神の人に言った。「では、イスラエルの軍勢に与えた百タラント

はどうしたらよいのか。」神の人は答えた。「主はそれよりも多くのものをあなたに与えることがおできになります。」（Ⅱ歴代　25・8、9）

二日後に親しい方からもみことばが送られ、主は私を励ましてくださいました。ほんとに感謝でした。

主よ。どうかみこころによって私を救い出してください。（詩篇　40・13）

私は、神に信頼しています。それゆえ、恐れません。人が、私に何をなしえましょう。（詩篇　56・11）

多くの困難の末に元の教会を出たものの、これからどうすればよいのかまったく分からず、「主よ、みことばに従いますからご計画によって導いてください」と懸命に祈りました。いつかベックさんが「教会でなくても二、三人でよいから家庭集会を持ちなさい」と話されたことを思い出し、二、三人の婦人方に声をかけてささやかな集まりを始めました。

「ふたりでも三人でも、わたし（イエス様）の名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」（マタイ　18・20）

「小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなた

がたに御国をお与えになるからです。」（ルカ　12・32）

このようなみことばに支えられ、日曜日ごとに集会を続けてきました。場所も定まらない、人数もほんの数名と、それこそ小さな小さな群れでしたが、主は私たちを愛してくださり、必要としてくださったのです。このような集まりでしたから、みんなで賛美と祈りを主に捧げ、メッセージをする男の方がいませんから聖書を輪読していました。当初は男性は一人もいず、四、五名の婦人方だけの集まりでした。その内、祈りによって男の方も群れの中に加えられ、場所もその方の知人の幼稚園を日曜ごとに借りることができるようになりました。婦人の方々も、一人、また一人と次々に増えてきて、とうとう群れが二十名ほどになりましたので、ベックさんから「パンさき」が許され、聖日礼拝がこの沖縄で守られるようになりました。

このような状態が一年近く続きましたが、その後いろいろなことがあって、ベックさんは「しばらく礼拝を止めて家庭集会に切り換えるように」とおっしゃいました。集会はしばらく解散状態になりましたが、それでも私たちは信仰の灯を消すことなく、ある方の職場の事務所で、五、六名の方たちだけで集会を続けていました。しかしそこも八カ月位で立ち退くことになり、ある方のお家で家庭集会を開くことになりました。私たちは懸命に、集会の場所が与えられますように、集会のために奉仕してくださる男の方が与えられますように、と祈りました。「主よ、助けてください。私たちは行く場所がないのです」と心から主に呼びかけました。

「見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あな

たをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

（創世記　28・15）

## 広がる群れ

やがて、私たちの祈りは聞き届けられました。主はまず、一人の男性の働き手をこの小さな群れにお加えになられました。そして、集会の場所として、現在の首里の家を備えてくださったのです。イエス様は、沖縄集会の一人一人をこよなく愛してくださり、必要としてくださり、憐んでくださったのです。私たちは力を合わせて、この新しい集会所をきれいに整えました。

一九八八年四月十日。私たちがあれほど祈り、待望していた「沖縄首里集会」の第一回目の日曜礼拝が、ベックさんを迎えて行なわれました。心を一つにした祈りと感動的な賛美の歌声……ベックさんのメッセージが始まると、もう私は涙があふれてあふれて、聖書の文字を読むことができませんでした。

主を恐れる者たちよ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。主はわれらを御心に留められた。主は祝福してくださる。イスラエルの家を祝福し、アロンの家を祝福し、主を恐れる者を祝福してくださる。小さな者も、大いなる者も、主があなたがたをふやしてくださるように。あなたがたと、あなたがたの子孫とを。あなたがたが主によって祝福されるように。主は、天と地を造られた方である。

（詩篇　115・11～15）

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、
ただあなたの御名にのみ帰してください。　（詩篇　115・1）

主はこのように祝福してくださいました。もはや私たちは、小さな群れではありません。今では五名の主にある兄弟方をも与えてくださり、私たち自身では何一つできない小さな弱い者の集まりではありますが、神様の一方的な恵みによって、必要なことはすべて満たされてまいりました。現在では早くもこの集会所が手狭になり、駐車場のことなどもありまして、主のみこころに適った場所が与えられますようにと皆様と心を合わせて祈っております。

ところで沖縄集会で特筆すべきことは、八七年四月十五日、がんで天に召された笹川郁夫さんがこの世の思い出としてご家族といっしょに沖縄にいらっしゃったことです。あのようなお体の状態で私たちの集会で証しをしてくださったことは、神様が笹川さんの信仰を通し、ご自身の栄光を現わし、弱い私たちを励ましてくださいましたみこころであることを覚え、忘れることのできない霊的なプレゼントとして受け止めて、心から感謝しております。（笹川さんの証しは、「光よあれ」第4集をご覧ください）

それから、一九九〇年四月二十一日と二十二日、沖縄で初めて、バイブルキャンプと洗礼式が行なわれたことはほんとに嬉しいことでした。当日空港で皆様をお迎えした時は、涙が出るほど嬉しくて、感謝で胸がいっぱいでした。まさか沖縄でバイブルキャンプとは……。思えば一九八五年の五月二十四日、ベックさんが沖縄に信仰の灯をかかげて来てくださったその聖霊の灯は、

キャンドルの灯のように静かにチョロチョロと燃え続け、今では人の思いをはるかに超えた、主のみわざとなって実を結んだのです。何という神様のご恩寵でしょうか。

神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現われによって明らかにされたのです。キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。（Ⅱテモテ　1・9、10）

あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛をもって、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。（Ⅱテモテ　1・13、14）

私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない。（詩篇　62・1、2）

イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。（ヘブル　13・8）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

次女・高橋久美子さん（左）の洗礼式の日。▶
吉祥寺キリスト集会の屋上で。



思えば私の家族は、この聖書のお約束の通り、六人の子供たちのうち、五人はすでにイエス様を救い主として受け入れ、信仰の生活を歩んでおります。

今の私には、もはや老いの寂しさや、孤独感、そしてやがて訪れる死の恐怖はありません。生活のすべてをイエス様に委ねて過ごすことができて、本当によかった、と心からそう思います。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」

（ヨハネ　11・25）

先に召された主人や子供たちとの天国での再会が楽しみです。

今日まで小さな信仰の灯を消さずに保ってくださった主に、心から感謝いたします。



▲東京からペックさん（後列右端）を迎えての
集会に集われたみなさんと。前列中央が紀美子さん。




▲沖縄首里キリスト集会のみなさんと集会所の前で。
後列右から2人目が紀美子さん。



▲1989年6月、懐かしい初めての教え子たちに囲まれる清子さん(中列右)。

# 恩寵のもとで

## 江草清子

一九一五年高知市に生まれる。追手前小、鎌倉高等女学校、津田英学塾本科卒。一九五四～五五年カリフォルニア大、ミシガン大に留学。高知大学名誉教授、高知医科大学名誉教授、元高知県教育委員。夫江草隆繁戦死。息子二人、娘一人、孫四人。

西軽井沢福音の家(ゲストハウス)でのキャンプ最後の日、
▼福音の家の玄関で。左端が清子さん。





◀ご自宅での家庭集会に集われたみなさんと。

## はじめに

七十五歳の私がいま過ぎ去った日々を振り返ってみる時、本当に心に深く刻まれている事というものはそう多くはないものだということを知ります。いえ、人間の生涯で本当に大切なことはただ一つであり、それに関連した事柄が深い思い出となって心の中にとどまっているのだということを思い知らされます。

第二次世界大戦で夫を失った時、私は二十八歳のまったく世間知らずの人間でした。荒れ狂う大海に投げ出された孤児のような思いでしたが、幼い子供が親に訴えるように「神様！　私は何をして生きていけばよろしいのでしょうか？」と、お祈りした時、神様は「信仰と教育」というお言葉を二度くり返されて私の祈りに答えてくださいました。それは終戦の翌年の一九四六年二月、まだ肌寒い川べりでの出来事でした。私は即座に仰せに従い、以来、今日まで教職の道を歩いてまいりました。当時、三歳、二歳、半歳であった三人の子供を育てあげ、また両眼の視力を失っていた母を最後まで世話することができましたことは、ただただ主イエス・キリストの憐れみとご愛によるものでありましたことを確信し、それを皆さまに知っていただきたいと願うのでございます。

「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。」（ヨハネ　14・18）

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ　6・33）

## 生いたち

幼かった頃をふり返ってみて、一体私はどんな子供だったのだろうかと考えてみますに、第一には、神様が大好きな子供であったということができましょう。

その頃私はイエス様のことは知りませんでしたし、私にとっての神様というのは、目には見えないけれど、宇宙を支配していらっしゃる一番えらいお方でした。私にはそのお方が大そう慕わしくて畏れ多いお方に思われました。

生来、私はおしゃべりは上手ではなく、また気がきく方でもなく、どちらかといえば、いつまでも親ばなれしない、外見はぼーっとしているような子供でした。勉強もあまりしたような記憶はありません。内面的には恥ずかしがりやで感受性がきわめて強く、「番町皿屋敷」の歌舞伎を見に連れられていった夜などお菊の幽霊におびえて四十度の熱を出すやら、また「福は内、鬼は外」と豆まきをする節分の夜には鬼が来ていると言ってはまた四十度近い熱を出しお医者を迎えねばならぬというような、まことに臆病な子供でした。

ほかにも記憶に残る自分の姿として思い出されるのは、幼い日、川の流れをじっと眺めていてとてもはかない気持ちに襲われたことです。「この水は一体どこへ行くのだろう？　何のために流れているのだろう？」といった大人には理解してもらえないような疑問で幼い心を悩ませたり、あるいはまた、日暮れどきの町並を黙々と忙しげに行き交う大人たちを見て、異様な気持ちに落ちこんだことを思い出します。

誰に誘われたわけでもなく教会の日曜学校に行き始めたのは、小学校三年生の頃でした。とは

いえ、イエス様というお名前は覚えたものの、日曜学校での思い出があまりはっきりしないのは、その後私たちが高知を離れたからでしょうか。やがて、私は女学校へ進みました。

日本ではその頃からすでに軍国主義時代に入っていたのですが、一般の人、ことに「女、子供ら」と呼ばれていた私どもには、そうした事実はほとんど知らされていませんでした。けれども、私の家は神道であり、軍人であった兄がユダヤ人を批判するようになり、そんな折りに「耶蘇」とか「よその国の神」といった言葉でキリスト教を非難するようになりました。私は日曜日に教会に出かけるたびに兄が恐ろしく、母にだけそのことを話し、友人の家へでも行くふりをして出かけたものでした。

当時の日本の家庭では長幼の序が重んじられ、ことに私の家庭では長兄が絶対的な権限を持っていました。どういうわけか、私は幼い時からこうしたことについて漠然と矛盾を感じ、「これはおかしい。兄弟はみな平等なはずなのに」と心の中でいつも思っていました。

精神的には幸せだったとは言えない女学校時代に終わりをつげ、私は津田英学塾（現在は津田塾大学）へ入学しました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）

あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。（Ⅰペテロ　1・5）

入学した津田英学塾は、東京の麹町から郊外の小平へ移転したばかりの時で、鎌倉からの通学は無理だということで、私は津田の校内にある寮へ入ることになりました。津田に入学し、寮生活を送ったことは、その後の私の人格形成の上で、極めて重要だったことを、いまさらながら痛感する次第です。

私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。（詩篇　139・14）

津田英学塾は、一八七一年（明治四年）に七歳で米国に留学し厳しくキリスト教の教育を受けた津田梅子先生によって創立されたキリスト教に基づいた学校でしたので、寮でも毎夕同好者が集って礼拝や聖書研究をいたしました。また日曜日には、牧師さんを迎えての夕拝もありました。寮生活にもだいぶ慣れてきた私は、日曜日には渋谷の美竹教会に通うようになりました。そして礼拝の本質についても少しずつ分かるようになりました。

「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」（ヨハネ　4・24）

津田英学塾に入学して四年目の夏、私は御殿場での修養会に参加し、そしてその年、一九三五年（昭和十年）のクリスマスに受洗いたしました。このことを知っていたのは母だけでした。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」（イザヤ　43・1）

死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。（黙示　2・10）

御殿場の修養会から鎌倉に帰ってきた私に、長兄が突然、「神はどこにいる?」と尋ねました。「ここにもいらっしゃいます。宇宙に充満していらっしゃいます」という言葉が自然に口から出てきましたが、それはその時の私のありのままの心境でした。その頃はまだ聖霊について何も分かっていなかったのですが、私が知らないだけで、聖霊は私を包んでいてくださったのだと思います。長兄はそれ以上なにも言いませんでした。

津田英学塾を卒業した私は、花嫁修業に日々を過ごし、やがて江草隆繁と結婚することになりました。彼は私の次兄の友人で海軍大尉でした。彼は、神を畏れ、神の前にきわめて謙虚に己れを明け渡している人で、ことに子供や老人には優しい人でした。それで私は「この人こそ、神様が私に選んでくださった配偶者だ」と確信しました。結婚生活は五年足らずで終わり、冒頭で述べましたように彼は三人の幼児を遺して南方洋上で戦死いたしましたが、私は彼から多くの大切

なことを教えられました。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」（マタイ　5・3）

## 教育への道

それから私の苦難の道が始まりました。私は三人の幼児と老母を連れて戦火をのがれ、終戦と共に無一物で郷里の高知市へ帰ってまいりました。いばらの道でないわけがありません。しかし私自身は「いばらの道」などと深刻に思ったことはなく、また誰にもぐちをこぼすこともなく、ただ毎日をひたすらに生きてまいりました。戦争未亡人だというのに、いつも明るい顔をしているそんな私を見て、まわりの多くの人たちは、私には何の悲しみも問題もなく、幸せ一杯の人だと思っていたようです。ところが実際の私には、語りきれないほどの苦労がこれでもか、これでもかというふうに襲いかかってくるのでした。しかし本当に助けてくださり、解決策を与えてくださるのは、ただ主イエス様のみということが私にはよく分かっていましたので、試練のたびにただ祈るのみでした。また、同じ信仰の方々が陰で私のために祈っていてくださったことは、まことに心の支えでありました。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ　8・18）

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、

あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

私は、主から示された「信仰と教育」というお言葉に従い、ただちに教職の道を歩み始め、高等女学校に三年、新制高等学校に三年の勤務の後、七年目に国立高知大学に迎えられて、そこで定年まで勤務。同日付で新設の国立高知医科大学に移籍となって、七十歳まで現職の教授として活動いたしました。退官してやれやれと思った途端に知事から県の教育委員の任命を受けて、一期の四年間を教育行政にかかわりました。現在は県下でただ一つのクリスチャンスクールである清和学園の評議員として、同学園がいっそう神の栄光を現わす場として用いられるように心を尽くしています。

このような職歴を歩むなかで、いかに主が守り、導き、与えてくださったか、そのご恩寵を数えあげ、それをここに記そうとしましても記しきれるものではありません。奇蹟的なご恩寵の例を二、三あとで記しますが、そんなわけで、私が二つの国立大学から名誉教授の称号を与えられていたり、また昨春、勲三等宝冠章を贈られたことを、もしこの世の人が少しでも価値あるものと思われるのなら、それはすべて主イエス・キリストに帰されねばならないものでございます。私は家庭と教職の二つを抱え、そのいずれをも満足に果たせず、その上、医者に言わせれば「蒲柳の質」という体質で、絶えず大小の病気をくり返しながらようやくやってきたのですから、私

の生涯の九九パーセントは主がなさってくださったのであり、僅か一パーセントだけを私が何とか果たしたにすぎません。

終戦後、初めて教壇に立つようになってから間もなく、私は生死の境をさまよう大病をいたしました。まだ薬も十分に入手できない時期に、重症の腸チフスにかかったのです。意識不明の状態が長く続き、誰一人として助かると思った者はいませんでした。「三人の幼い児と老母を残して、いま死ぬことはできない」と、あるか無しかの意識の中であがきまわっている私の心に、

「安心していなさい」

というお言葉が夢の中で示されました。そうです。生きても死んでも一切を主にゆだねて、私は安心していたらよいのです。

「あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。」（マタイ　6・27）

主イエス様は私共の肉眼には見えませんけれど、こんなに小さな私をも愛してくださり、苦しみの中で共にいてくださったのです。夢の中のこのお言葉を境にして、私の病状は少しずつ好転いたしました。

その後、東大病院で大きな手術をした時も、また続いて胃がんだと言われて数カ月の間療養をした時も、数えあげればきりのないほど、その時その時の必要に応じて、主イエス様は聖霊を送って私を励まし守ってくださいました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

一九五四年、私はフルブライト奨学生としてカリフォルニア大学で勉強をしていました。帰国を前にして、私はミシガン大学でもう少し勉強する必要を感じました。当時、ミシガン大学は外国語としての英語教育の最高峰と言われていたのです。「これからの日本の学生のために、どうしても、もっと勉強して帰らなくちゃ」という、それは必死の思いでした。私は当座の学資を作るため、まず持っていた指輪、ネックレスなどの宝石類をすべて売りました。本物でしたので宝石店が私の思う以上の値で買い取ってくれました。

帰国を延期して、こうしてミシガン大学での勉強を始めましたが、学資もそろそろ心細くなってきたある日のことです。学校から帰るといつものように履いていた靴下を洗って、寝台のすその枠にぶら下げました。それまで別に何も考えていたわけではないのに、私は突然その場にすわり、寝台のすそにぶら下げたストッキングを見ながら、謙虚な思いで頭を下げ、まるで子供のように次のようなお祈りをいたしました。

「神さま、私はミシガン大学でもっと勉強をしたいと思います。もう少しお金が必要です。もしこのことがみこころにかなうことでしたら、どうかこのストッキングにお金をいっぱい入れてくださいませ」と。それはクリスマス前夜の子供の祈りのような単純で素朴なものでした。

ところが、数日たったある日、まったく未知のアメリカの婦人から手紙に添えて、小切手が届きました。私はこの不思議なできごとを隠さなかったので、このことは友人の間でも有名な話になりました。

目的の論文も出来上がって、いよいよアメリカを去るに当たり、恩人となるこの未知の婦人にお礼を申すべくサンフランシスコにまいりました。そして感謝の言葉と共にお尋ねしました。

「あなたはどうして私がお金を必要とすることが分かられたのですか?」と。すると夫人は、にっこりほほえんで、

「私は大学在学の途中で父が急死し、退学をしなければならないと思った時がありました。その時、多くの友人に助けられて学業を続けることができ、今日の私があるのです。私は誰かをお助けできるようにと、いつもイエス様にお祈りをしていました。多分、あなたの祈りと私の祈りを神様はばったり合わせてくださったのでしょうね」と、おっしゃいました。奇しい主のみ業に心うたれつつ、共に深い感謝の祈りを捧げ、私はアメリカを去りました。

「家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。」そこで彼は出て行って、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、町中に言い広めた。（ルカ　8・39）

## 信仰と教育

アメリカ留学から帰国した私を待ちうけていたものは、前代未聞ともいえるほどの学内紛争で

あり、続いて日米安保条約をめぐる全国的規模の学生運動でした。アメリカで最先端の知識を吸収しつつ、日本の学生のために祈りと感謝を捧げて暮らしたあの平安な日々とは、まるで正反対の厳しい学内情況でした。多くの学生が悩んでいることも分かりました。

私は水曜日の午後には少し時間の余裕がありましたので、その日は私の家で学生たちと夕食を共にし、彼らの持っている問題に対して、その解答を聖書から得ようという会をスタートいたしました。そのうちに、牧師にご指導をお願いして聖書の学び会をしたり、あるいは全国的な規模を持つ「キリスト者学生会」の主事が高知に来られた折りには私の家に泊り、集会や個人指導をされるようになりました。そうした中で学生たちも次第に強められ、学内に「聖書研究会」を持つことを学生課に認めてもらって大いに学内活動をするようになりました。「荒野」と題する証しの本を彼らが出版したのもその頃です。その当時の学生たちは真剣で、かつ燃えていたと言えるでしょう。その中から現在、牧師夫人、あるいは執事として活躍している方々が何人かいらっしゃいます。

私が六十歳になった頃のある朝、地方新聞を開いてみますと、近く開設予定の高知医科大学の学長予定者の方の開学趣意が大きく載っていました。それには、「敬天愛人」を建学の精神とする、と述べられていましたので、私は本当に驚きました。当時の多くの大学人は無神論者か、あるいは神を憎む人たちで占められていましたので、私にはかなり苦しい職場環境でした。国公立大学ならどこでも似たりよったりの実情でありましょうに、建学の精神に「敬天愛人」を堂々と掲げられるとは、ああ、なんと勇気ある学長さんだろう、と私は思いました。そしてこのような

職場で思う存分に働いてみたい、と考えたのです。

私は早速、これまで訪ねたこともない学長室に行き、新設予定の高知医科大学の建学の精神「敬天愛人」に心ひかれるので、そちらへ移りたい旨を申しあげました。しばらく黙っておられた学長はにっこりほほえまれると、

「高知医大が開学されるのはまだ二年先です。ちょうどあなたがここを定年退職される時です。よいと思いますよ」と、言われました。

このような会話が交わされ、私は「敬天愛人」に憧れただけで、その二年後には高知大学から高知医科大学へ同日付で移籍となり、定年退職はしないままで草創期の医大をわが職場とするようになりました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。　（伝道者　3・11）

高知医大では何の遠慮もなく、私の研究室ですぐに聖書研究会を始めました。牧師の助けもいただきました。二年目には学生活動の中の一つの部として認めていただき、他の部と同じく、建物その他の使用や集会が許され、また部としての予算化もされました。医学生にとって信仰の問題は一般の学生よりももっと切実なものがあるのか、受洗者も数名出ました。

医大での私の後任者にはぜひともクリスチャンをということが、口にこそ出しませんが私の切なる願いでした。その願いは叶えられて、いま学生たちはその後任教授と共に熱心に聖書の学びを続けています。

さて、医学生たちの間での聖書研究会のことが、看護婦さんやその他の付属病院で働いておられる方々の間にも伝わったのでしょうか。ある日、病院に勤務しておられる一人の女性の方が私の研究室へ訪ねてこられ、

「土佐山田の歯医者さんのお家に、月に一回、ドイツからの宣教師ご夫妻がきてくださっています。とてもすばらしい集会で、その上、ケーキの会では奥さまがおいしいケーキ作りを教えてくださいます。ぜひ一度いらっしゃいませんか」

と、誘ってくださいました。でも、私はケーキを食べてこれ以上肥ってはいけないと思ったし、また宣教師といわれる方々に少し抵抗を感じている時でもありましたので、折角のお誘いにすぐには応じる気持ちになれませんでした。

しかし、その方は辛抱強く私にお声をかけ続けてくださいました。ついに私は一度だけと思って、土佐山田集会にまいり、そこでベックさんご夫妻にお目にかかる機会を与えられました。一度は三度となり、三度は十度となって軽井沢キャンプにもたびたび参加させていただきました。こんなに小さな器の私をも神様がご計画の中に入れてくださり、高齢となった現在の私に、今、本当に何が必要なのか、またどうすればよいのかを導いてくださろうとしているのを感じます。主と、辛抱強く誘ってくださった方に感謝いたします。

かえりみて、人間の一生のうちには、その人の人生に大きな影響を与える出会いというものがいくつかあるものだと思います。主イエス・キリストとの出会いは、最高にして最大のものであることはもちろんですが、そこに至るためにも、神様は私たちに幾つかの出会いをさせてくださ

います。ベックさんや集会のみなさまとの私の出会いにも、そこには主が臨在しておられたことを覚えます。

私の人生には、ここでは書き尽くせなかった、実に多くの患難や試練がありました。今もあります。けれども愛なる主イエス様が、これまで私にしてくださったことを思い起こせば、これからもどうしてよくしてくださらないことがありましょうか。イエス様の私への愛は十分すぎる位です。それはこの世的な考えですべてが自分に都合よくなることではありません。私は主に在る愛によって今の患難を耐え忍び、ついに神のご栄光が現われることを謙虚に待ち望むのみです。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

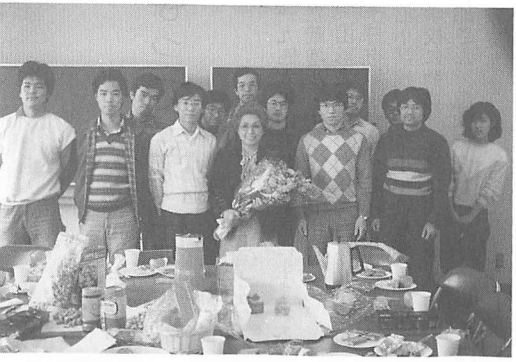
（詩篇　119・71）

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。

（Ⅰヨハネ　3・16）

こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。

（Ⅰペテロ　4・2）



▲「聖研」の学生たちに贈られた花束を胸に。
1985年3月、高知医科大学退官の時。




圭子さんの洗礼の日。左から染野茂夫さん、毅さん、圭子さん、広江敦子さん、平井和子さん、染野待子さん、平井正彦さん。

# 喜びをもって主に仕えよ

神澤圭子

一九四六年山形県天童市に生まれる。市立蔵増小・中学、県立山形北高等学校、山形大学卒業。一九六八年横浜市立十日市場小学校へ赴任、相模原市立大沼小学校、若草小学校を経て、中央小学校に勤務。家族は夫毅さん、長男哲郎さん。趣味は読書。

・家庭集会　月一回土夜七時
・住所　神奈川県相模原市御園一―一八―五五　〒二二八・電　〇四二七―四三―六七三一

海に来て大満足。
珠生さん小学校4年の春、江ノ島で。





◀家族そろって多摩動物園へ。
左から圭子さん、長女・珠生さん、長男・哲郎さん。

## 思い出の中の珠生（たまき）

今は夏の真盛り、夏休みです。机に向かっていると、天に召された娘の珠生が生きていた頃の夏の日々が思い出されます。

まだ朝早く、親子で仲良く近くの森に出かけ、夫と娘は虫を追い花を摘み、私の吹くフルートに合わせて二人がスキップしていた時の姿…。緑の木々が茂る中、真赤なワンピース姿で踊る娘は、私にはまるで妖精のように可愛く見えました。

春の日のこと、珠生はよく「ママ、天使さんの声、きいてくるね」と言って近くの公園に出かけては、幸せいっぱいの笑顔で帰ってくると、天使が話してくれたという言葉を紙切れに書いて見せてくれるのでした。

珠生は月は満ちていたのに未熟児で生まれたものですから、私たちにはいとしくて、片時も離れられない思いで育てていたのです。しかし私にはお勤めがありますから、いつもいっしょにいられるわけではありません。ですから、娘と私の貴重な交流の場は、自転車に乗って保育園へ送り迎えする途上でした。夕暮れには珠生はいつも後ろの席で「一番星みいつけ」と声をはり上げます。今日こそは私が見つけようと思って必死に空を探すのですが、いつもあっという間に珠生が見つけてしまうのです。空にはまだ太陽が残っている白い空ですのに。

また雨の日は、背中におぶって保育園へ行くのでした。珠生は私の背中から手の平を出して「雨、雨ふれふれ、もっとふれ……」と歌うのでした。つられて私も歌います。それは、ほんとに、楽しいひとときでした。

珠生は、デパートで着るものやおもちゃを買ってもらうよりは、近くの公園で遊んでいることの方がずっと幸せな娘でした。特に虫や動物、植物が好きで、蟻が一匹歩いているのも見過ごさずに立ち止まって見つめている目は、私に向けるまなざしと同じでした。私が「世界で一番好きなのはだあれ」と聞くと、やっと虫から目を離して「ママよ」と言ってくれるのです。

このような珠生を見ていると、私はふと、この娘は自分の子供ではなくて神様からの預かりものではないかと思うのでした。夫も珠生を深く愛していましたから、どんなに疲れていてもいやな顔一つ見せずに、珠生といっしょに絵を描いたり、工作したり、散歩したり、二人ですばらしい時を過ごしていました。そして私たちは、珠生の将来に大きな虹色の夢を見ていたのです。こんな道に進むのがいい、いや、こんな道もあるぞとか……。今思いますに、叶えられることのない夢だからこそ、一生懸命夢を追って話していたのかもしれません。この娘は、本当に大きく元気で育つのだろうかと、いつも心の奥底に不安をしまい込んでいたのです。

## 発病から迷信遍歴へ

保育園最後の年の夏のある日のこと、お風呂から上がった娘の体を拭いてやっていると、腕に三つの斑点が並んでいました。その頃少しずつ鼻血も出るようになっていたので、ふと胸騒ぎを覚え、病院に行きました。しかし診察の結果は異状なしということで、そのまま様子を見ることになりました。しかしそれから半年後、突然発熱し、熱が下がらず入院し、四十一度の熱が二週間も続き、白血球がぐんぐん減って一時は千三百位まで落ちてしまったのです。私は、この娘の

ためなら、いいといわれることを何でもしようと思いました。

私の実家は山形にあり、八坂神社を祭っていて、私は物心ついて以来いつもその前で手を合わせて拝んできました。そして今までの半生を、この神道の神を信心し、その神に守られてきていると確信していました。珠生が病気になると、私は毎日のように実家に電話して、両親に拝んでくれるように頼みました。信心深い母は、八坂神社にお参りに行った後、いつも確信を持って「大丈夫」と言い切ってくれ、その言葉が大きな励ましでした。

私が住んでいる近くにも神社があり、毎日朝晩、勤めの行き帰りにお参りしました。それは雪の多い年で、境内は雪が積もって道もなく、一歩一歩雪を踏みしめながらのお参りは、ただ娘を治したい一心からのものでした。

やがて小金井に「奇蹟の湯」というものがあり、そこではがんの人も治ったと聞き、半信半疑ながら様子を見に出かけてみました。その「奇蹟の湯」には何か特別な成分が含まれていて、その湯に浸かった後、体を理に適う方法でこすると、大抵の病気は治ってしまうというのです。私はすがるような思いでさっそく娘を連れていきました。

珠生はまず五十度近い熱い湯に浸けられ、それからたわしで二時間あまりも全身をこすられます。珠生は「ママ、助けてー」と叫びます。しかし私は心を鬼にして、その治療をしてくださる「おばあちゃん先生」にすべてを委ねました。この治療法は娘の身体に合っていたのでしょうか。やがて娘の状態は良くなってきました。小学校に入って二学期からは休むこともなく健康そのものといった調子になり、他の子供さんたちが疲れて休むことの多い運動会の練習や冬のインフル

エンザの時期も平気で乗り切りました。その頃いただいた通信簿には、「やさしく思いやりがあり、だれからも好かれ、絵や創造的なことに優れている」と、すてきなことが書かれてあります。「おばあちゃん先生」にこのことを知らせますと、涙を流して喜んでくれました。そして他の患者さんに珠生の自慢話をするので、嬉しく、恥ずかしい思いをいたしました。

この「おばあちゃん先生」は、「この湯があるから百四歳まで生きるんだ」と豪語していましたが、珠生が治療に通うようになって八カ月ほど経った頃、あっけなく亡くなってしまいました。病院のベッドでも「珠ちゃんを治すんだ」と言い続けていたのだそうです。

私はショックを受けました。神道の神が私にはついていて、きっと良い道が開かれ、前進あるのみだと思っていたのに……。

やがて近所の親しい方から「日本一ノ神サマ」というのを勧められ、連れていってもらいました。「何でも治る」ので有名なのだそうです。そこでは神サマのお告げによっていろいろな祟りがあることが示され、それらの祟りをお払いによって追い払ってくれるのでした。その神サマは「絶対治る」と、強い語調で約束してくれました。私は「おばあちゃん先生」が亡くなって呆然としていた時でもあり、何といっても「日本一ノ神サマ」がついているのだから鬼に金棒、これでもう安心だとすっかり信じこんでしまいました。

## イエス様に愛された娘

珠生が発病してから召されるまでの四年間の中で、娘の人生にとって最大の事が起こりました。

イエス様に出会ったのです。

ある日、教会に行っている知人の方から、教会に田原米子さんという方が来られるからいっしょに行こうと誘われました。田原米子さんは、昔鉄道自殺をはかったけれども助かって、その後クリスチャンになって懸命に生きていられる方だそうで、私も行ってみたくなり、参加しました。といっても、別にその方がクリスチャンだという所に興味を抱いたわけではなく、不自由な身体で一生懸命生きていられるという所に惹かれたのです。美を求め、人生を追求して懸命に生きていた私にとって、それが魅力でした。

当日はお話や映画があり、充実した内容でしたが、私はイエス様について語られた所は全部カットして聞いていました。田原さんが不自由な身体にもかかわらず生き生きと活躍なさっている姿に、また一つ美しく生きる指針を見た思いでした。感動して帰る途上で、知人から教会へ来ないかと誘われましたが、私は全く関心がなく、意外にも娘の方が「次の日曜日から行きたい」と言いだしました。

娘は、それから熱心に教会の日曜学校に通うようになりました。娘がその頃持っていたノートを見ると、幼い文字で次のようなことが記されています。

・一番好きな聖句

よろこびをもって主につかえよ。

（詩篇　100・2）

・ノアが周りの人から、からかわれた時、あなたがノアだったらどうしますか？

「神さまを信じてください」という。（娘の答え）

でも、私はというと、このような娘の変化には気付かず、愚かにも依然として「日本一ノ神サマ」の方を信じ、崇りのお払いをしてもらうために熱心に通っていたのでした。

## 最後の夏休みの日々

珠生は四年生になるとめっきり体力が衰え、登校できる日が少なくなっていきました。習っていたバレエもほとんど行けなくなり、朝目が覚めると「ママ、気持ちが悪い」と言うのが常でした。それでも日曜学校に行く時だけは元気になりました。

そんな状態で迎えた最後の夏休み。珠生はいくつかの楽しい思い出を残してくれています。

夏休みに入ってすぐ、子供たちのバイブルキャンプが奥多摩で開かれました。娘はとても行けるような状態ではないし、本人が行きたがっても何とか止めなければいけないと思い、教会の中のお友達も行く人が少ないことを理由に、参加することを止めるように言い聞かせたところ、意外な返事が返ってきました。「たまにはパパとママから離れたいんだ」と言うのです。いつも肌を寄せあって過ごしてきた娘の言葉とはとても思えませんでした。あまり行きたがるので、「熱が出なかったら行ってもよい」ということにして、申し込みだけは済ませました。

キャンプの当日、心配していた通り熱が出てきました。娘は諦めきっていましたが、翌日になると考えられないことに熱が下がり、どうしても行きたいと言いはるので、私が電車で送っていくことにしました。キャンプ場に娘を置いて別れてくる時も、娘は少しも淋しげではありません

でした。今思うと、イエス様の温かいご愛のふところに入れられていたのだろうと、感慨深く思い出されます。その頃は知る由もありませんでしたが、娘は「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません」（マタイ10・37）というイエス様のみことばに、それとは知らずに従っていたのかもしれません。

夏休みの半ば頃には、ミュージカル「レ・ミゼラブル」を鑑賞しました。大好きだった斉藤由貴が見られるというので、娘の胸の高鳴りが聞こえてくるようでした。「ママ、本当に見られるの」と、劇場に向かう電車の中で何回も聞くのでした。いよいよ幕が開き、本物の斉藤由貴が登場するともう夢中で目を輝かせ、まばたき一つせずに幕が下りるまで微笑んで舞台に見入っていた横顔が忘れられません。

また田舎へも私の母を見舞いに行きましたが（このことは後でくわしく述べます）、帰ってくる早々、「約束した海へ連れていって」と、泣き叫んで珍しくわがままを通しました。すぐ手配しましたが夏休みのこととてどこの旅館も空いていず、やっと民宿がとれたので、お昼過ぎから真鶴半島へ出かけました。着いた時は夕方近くで、人気もなく静まり返った磯に打ち寄せる波のしぶきの怖さも忘れて大喜びでした。宿に帰ると娘の大好物ばかりの海の幸。娘は時々大きな生の魚を丸ごと食べたいと言っていましたが、一人前に出されたお膳の料理をおいしそうに、うれしそうに一口食べては「ママ、ありがとう」と感動していました。

やがて二学期が始まりました。体調は思わしくなく、学校もほとんど休むようになりました。間もなく秋の運動会です。練習にもほとんど出られなかったのに、当日は何とか参加できました。

入場行進中やラジオ体操中など、私を探しては手を振ってお互いに合図し合っていました。お昼にはお弁当をよく食べて、すっかり満足していました。

次は遠足です。学校は休んでいたのですが、前の日にはてるてる坊主を沢山ぶら下げました。当日「大丈夫?」と聞くと、「珠ちゃんは元気でーす」と大きい声で返事しました。弁当箱には沢山のおかずを入れて持たせてやりました。幸いなことに皆様にご迷惑をかけることもなく、弁当もすっかり食べて元気に帰ってきたのでした。

次の日からは、娘はほとんど学校に出られなくなってしまいました。娘のことを気に掛けながら学校で仕事をしている私に、「ママ、助けて!」と電話してくることもしばしばでした。あわてて家に帰ってみると、鼻血を拭いたティッシュペーパーが山になっているのでした。

珠生が最後に元気な様子を見せたのは、入院する前々日、病院で検査を受けた日の午後のことでした。数カ月ぶりに元気になり、バレエのクリスマスの練習を見にいくことができたのです。ワインカラーのタイツに身を包んだ娘はとても可愛く、練習をうっとりと見ていました。私は、このままの姿で時が流れてほしい、病気などないのではないかと、娘の肉体の表面を見ていてそう願うのでした。

## 召されるまでの日々

バレエの練習を見にいった翌々日の月曜日、検査の結果が出ました。病院から帰った夫の顔は苦渋に満ちていました。私は覚悟していましたが、心のどこかに、絶対に治るという「日本一ノ

神サマ」がついているのだから大丈夫だ、という気がありました。病院はすぐ東京の病院に変えました。

いよいよ、再検査の結果次第では即入院になろうという日のことでした。娘が可愛がっていた犬のコロが、娘の後ろ姿を見送りながら今まで聴いたこともないような長く伸ばす声で悲しげに鳴くのです。私は気になりましたが、余計な心配を皆にかけてもと思い、黙っていました。病院では、やはり、即入院と決まりました。娘はポケットからくしゃくしゃの紙を取り出して何事かを書くと「コロに渡して」と私に手渡しました。私がさり気なく「コロが鳴いていたよ」と言いますと、「そうだよ、忠犬ハチ公と同じだよ」と、何かを予期したようなことを言います。手紙には「コロ、珠ちゃんは淋しいよ。元気でね」と書いてありました。

私は、今こそしっかりしなくてはと思い、九州にいる「日本一ノ神サマ」に事態の進展を逐一電話で報告し、指導を受けました。薬草を捜し、煎じ薬を作り、勤めから帰ると寸暇を惜しんで般若心経の写経、家族いっしょに千羽鶴折り、寝る前にはお経を読み、祟りを払う儀式をし、午前二時には起きて丑の刻参りの読経……。翌日には仕事に出かけ午後は早退し、一目散に家に帰って煎じ薬一式を袋につめ込んで病院へ。病院の門の前ではだれからも見られないようにして拍手を二つ。病棟の前でまた一つ。エレベーターの中でも一つ。何度も何度も今日は無事でありますようにと拝んでばかりいました。娘はある時には熱が高く、ある時には鼻血が止まらず切なく泣いていたりしました。病院ではさし入れが禁じられているのですが、その中を人目を盗んで何種類かの薬草を飲ませるのは大変でした。面会時間の半分は煎じ薬を飲む時間に費やしました。

娘はママと遊ぶ時間がない、どうして私ばっかりこんなことをと悲しく泣いたりもしました。娘の容態はいっこうに良くならず、やがて熱が上がり、しかもずっと続くようになり、おまけに咳がでるようになりました。私の神頼みも必死です。時間も体もすべて投げうって。しかしでてくるのは夫婦してため息ばかり。言葉もありません。

十二月十七日のこと、昼近く大きな地震がありました。目の前の子供たちに気を配りながらも、私は点滴を受けて寝ている娘のことが心配でした。どんなにか心細く淋しい思いをしているだろうと。午後から面会に行きました。「怖かった?」と聞きますと「ううん、看護婦さんがいたから」と答えます。後で看護婦さんに聞いてみると、ちょうど治療中だったということで、娘よりもむしろ看護婦さんの方が心配してあわてていられたということも分かって、私にも少しばかり笑顔がもどりました。幸いなことにその日は熱も下がり咳も落ち着いてきたことでもあり、私はいよいよ「日本一ノ神サマ」の言う通りに効果が現われてきたんだなと思い、力が湧き、身も心も軽くなったような気持ちでいたことを覚えています。帰る前に娘の顔をのぞきこみ、「バイバイ」と言いました。しかし娘は私の気持ちや表情とはうらはらに、にこりともせずにただ黙って何かを訴えるように静かなまなざしで私を見つめていました。

## 天に召される（娘の結婚式）

翌日、急変したと学校に電話がありました。

夜中から咳き込んで酸素入りのビニールの中に入り、ようやく楽になって休んだ後、珠生は本

を読んでいたらしいのです。「痰をとろうね」と看護婦さんに話しかけられながらあっという間に……。不安も恐れも淋しさもまだなかっただろうと思います。急なこととて死の苦痛を見ることなく天国へ移されたのではないだろうかと思います。入院して一カ月ちょっと。張りつめていた太い糸が切れました。もう幕は下りたのです。私は不思議に落ち着いていました。十二月十八日のことでした。

解剖されて霊安室に戻った珠ちゃんの顔には白いガーゼがかけてありました。そっとはずしてみました。「なんてかわいいの」「なんて美しいの」というのが私の最初の叫びでした。この顔がお葬式が済むまでの三日間をしっかり支えてくれました。涙もぬぐい去ってくれたのでした。どこかは知らないが、この世とは比べものにならないもっともっといい所に行っているんだという強い確信が与えられました。柩に入れる時、最後に最愛の子をしっかり抱きしめました。万感を込めて抱きかかえた時、「ママ、ありがとう。珠ちゃんはもう大丈夫……」という珠生の声が、私の耳に、心に飛び込んできました。そしてにっこりと微笑んだように見えました。私の気持ちも救われました。

お葬式の日、冬だというのにぽかぽかした陽気。会場の自治会館はスポットライトをあびた舞台のように思えました。私の母から作ってもらったふりそでをかけられ、きれいなお花に囲まれた娘の顔は、少々大人っぽくなり輝いていました。まるで結婚式のように思えました。式が始まる数時間前、思いもかけず野球少年達もやってきて、野辺送りをしてくれました。

## イエス様との出会い

式が終わって一週間は、仏教の本、霊界の本を読みまくりました。珠ちゃんはどこへ行ったのだろうと知りたくて。しかしみじめになるばかりでした。仏壇にだんごを作ってお供えしたり、毎朝ご飯を供えることが娘とのただ一つの交流の場であり安らぎでした。それは虚しい自己満足の慰めでもありました。

そんなある日のこと、妹の知り合いの平井さんという方が「光よあれ」「実を結ぶ命」を携えて訪ねてきてくださったのでした。その時初めて、我が家に十年ほど前に一時住んでいたことのある妹が平井さんご夫婦と聖書の勉強をしたり、礼拝をしていたことが分かったのです。「光よあれ」「実を結ぶ命」を一気に読み終えた時、私は仏教の本とは違って何か明るい希望のような一筋の光がさしてきたような気持ちになりました。もっともっと知りたくてうずうずしていた時、吉祥寺キリスト集会へのお誘いがありました。おまけにベックさんといろいろとお話ができるというのです。

お葬式が終わって二週間目の一月三日のこと、その年の初めての礼拝の日のようでした。私は初めて聴く聖歌を、所々真似て歌いながらも、悲しくて泣いてばかりいました。礼拝の後で、涙でくしゃくしゃになった顔でベックさんとお会いしました。こんなみすぼらしい私をベックさんはにこにこしながら「圭子……」と言って迎えてくださいました。

つらい思いを吐き出し終わると、ベックさんは開口一番「天国に行った子はもう安心だよ。イエス様に預ってもらっている子は心配ないよ。むしろ生きている子の方が心配だよ」とやさしく

温かい声でしかも確信をもって言われました。それを聞いたとたん、私の悲しみの思いや価値観が基本からゆらぎ、やがて大きくゆっくりと変わっていくようでした。そして心が明るく、大らかになるのが分かりました。ベックさんはその後、三位一体についてお話をしてくださいました。イエス様は人間ではなく、神の子だということが分かった時、仏教とはまったく次元が違うということをはっきり認識することができ、急に釈迦や日蓮が遠い遠い存在になって色褪せていきました。さらに、

初めに、神が天と地を創造した。　（創世記　1・1）

と、聖書の初めにはっきりと書かれてある神様こそが、唯一で絶対の神であることが確信できました。この天地の創造主の前では、もはや「日本一ノ神サマ」などすっかり色褪せたものになってしまいました。そして「絶対治る」と、できもしないことを売り物にした迷信や民間療法に翻弄された後だけに、この聖書の神様、天地を創造した神様との出会いは衝撃的でもあり、大きな安らぎと強い確信を与えられました。

娘の死顔を見て直感した、何か大きな大きなものの存在、そして娘がその大きなものに抱き取られたのだという思い、その源は、真の神の存在だったのです。

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。　（ヨブ　1・21）

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与

えられた。　（伝道者　3・11）

聖書というものを知る前は、イエス様について、ぼんやりとした認識しかありませんでした。娘の遺志を継ぐのには何が一番よいのだろうと思い始めた時、私の目の前に大きく立ち現われてこられたのはイエス様でした。しかし最初は、聖書というものは「学習」するものだと誤って思いこんでいましたから、あれだけ大部の本を学ぶのは大変だから、娘の使った聖書をせめて何回か開いてあげましょうという気持ちでした。

聖書を少しずつ読み始めた私は、天国がある、ということを初めて知り、驚きました。いつかは私も天に召され、珠生と再会できるのだと知った時、私にはこれしかない、イエス様は私の今日のこの悲しみのために備えていてくださったんだと感謝の思いでいっぱいでした。そしてイエス様を信じる者は永遠に生きる、というみことばが、私の大きな支えになりました。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」　（ヨハネ　11・25）

そして罪深い私。神に背いて自己中心に欲望追求のためだけに生きてきた私。ヒューマニズムに生きることが正義の生き方だと自分を神としていた私。求めて学習すればするほど高慢になって他人を軽蔑していた私。まだまだ数限りない私の罪を赦してくださっているイエス様でした。

「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」

（ヘブル　10・17）

「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」（ヨハネ　9・2、3）

私はようやく娘に申し訳ないことをしたという罪の思いの過去から解放されました。神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。（創世記　45・5）

私たちのいのちを救うため、神は娘を先に天国へ行って待っているように遣わしてくださったことを示され、勇気づけられました。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。（Ⅱコリント　4・17）

主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。（ヘブル　12・6）

## 救われて天に召された母

話は少し遡りますが、娘の死の半年ほど前のこと、私の母が結腸がんになり、入院することになりました。そして検査のために飲んだバリウムが固まっておなかが大きく膨れ上がってしまい、まずその手術をし、人工肛門をつけました。結腸がんの方はもう手術ができない末期状態とのことでしたが、開腹手術の結果まだ手術できる可能性があることが分かり、第二次手術をすることになりました。

いよいよ第二次手術の日になり、手術室に連れられていく母を見送りながら、私は虚しさにとらえられていました。まだ聖書もイエス様も知らない頃のことですから、母の一生を思い出しながら「人の一生って何とはかないのだろう……もしかしたらこれで終わりかもしれない」と思い、いいようのない切なさと悲しさの中でじっと耐えていました。

この手術は成功で、母はその後痛みもなく、顔色もよく、小康状態になりました。とりあえず、母の方はこれで一安心です。私は気がかりな珠生のもとへと急いで帰るのでした。

それからというもの、私は毎週土曜日ごとに山形の実家へと看病に出かけました。娘の珠生は週末には遊んでくれるものと楽しみにしていた私がいなくなってしまうので、しまいには「ママ、珠ちゃんとばあちゃんと、どっちが大事なの」と泣きじゃくってすがりつきます。私は涙ながらに「珠ちゃんとはずっといっしょでしょ。おばあちゃんは病気なの」と娘の手を振り切って山形へと向かうのでした。私は娘の病状を楽観していましたし、まさかそれから一カ月の後に娘が入院し、そしてやがて天に召されることになろうなどとは考えてもいませんでした。母の方は、そ

の後いくつもの危機をくぐり抜け、順調に回復していきました。

娘の死を通して、私はイエス様に救われました。そしてその平安と喜びを母に伝えたくて、その後も頻繁に母のもとへと通いました。お忙しいベックさんにも足を運んでいただきました。しかし、脳軟化症も始まっている母は、ベックさんとお話しても、その日の内に忘れてしまう有様で、いかにも心もとなく、私は母に福音を伝えることに疲れ果ててしまうのでした。そんな母ですが、一番肝心な所だけははっきりしていて、話がイエス様のことになるといつも「お前たちはキリストでいいが、私には八坂神社がある」と言い張り、頑として私の願いを聞き入れません。なまじ八坂神社への信心が人並以上に厚いだけに頑固そのものでした。

いつしか二年半という歳月が流れ、私は母を救ってくださるのはイエス様しかいない、いつ、どんな方法で救ってくださるのか、ただ主のお約束のみを頼りにして祈りながら待っていました。私にとっては、聖書の中のみことばだけが希望でした。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

そんなある日のこと、同じ山形出身で親しくしていただいている集会の海野さんから、山形のお父様が天に召され、その葬儀のためベックさんが行かれることをお聞きし、私の胸は高鳴りました。すぐ山形の父に電話して、この機会にベックさんにお願いして、母にいろいろとお話していただきたいのだが、と相談してみました。しかし父は、「もう弱り果てている母に余分な刺激

を与えたくないから、そっとしておいてほしい」と懇願するのです。これには従うしかありません。しかしせっかくの機会を諦めきれず、私は夫と二人で懸命に祈りました。やがて次のみことばが与えられました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。（ピリピ　4・6）

すると次の朝早く、何とベックさんご夫妻から電話がありました。「お母さんの所へ行ってもいいですか」と言ってくださるのです。驚きと嬉しさで、「ぜひお願いします」と答えました。

翌日、山形での海野さんのお父様の葬儀に出かけました。悲しみの中にも明るい希望がある、すばらしい召天式でした。その帰りに、集会の方々とベックさんが母を訪ねてくださったのです。母はベックさんに手を握っていただくとその手を振りながら、涙が溢れて止まりません。そして「ありがとう、ありがとう、あとをよろしく頼みます」「私はもうすぐこの世ともお別れだ」と言い、あの気丈な母がベックさんには本音、弱音でいろいろと訴えるのです。私は主のご配慮に、ただただ感謝する思いでした。

やがて皆様を駅まで送らなければならない時間がきました。いつもなら「私は心配ないから早く帰りなさい」と私たちをうながす母でしたが、その日に限って私に「今日はここにいてくれ」と言います。私はその夜は泊ることにして、ベックさんたちを駅まで送りに行きました。そろそろ電車が入ってくるという時、呼び出しの場内放送がありました。私の名を呼んでいます。「す

ぐ帰れ」の電話があったのです。「母が危ないんです」と、皆様に別れを告げて、早々に家に帰りました。母はすでに昏睡状態でした。親戚にも連絡し集まっていただき、一晩中まんじりともせず見守りました。このまま逝くのではないかと、誰もが思いましたがその夜は持ちこたえました。私は山形に向かっているであろう夫と息子が何とか間に合ってくれることを祈りました。一目、孫の顔を見れば、母はどんなにか喜ぶことでしょう。

翌日の午後のこと、母は突然大きく目を見開きました。その時、いあわせた姪が叫びました。「来たー！」。夫と息子が駆け込んできました。母は私の息子の手をしっかりと握りしめ、じっと見続けていました。その側で、夫もイエス様に祈りました。私は「イエス様ありがとうございます」と泣くだけでした。二人の姪たちが、静かにピアノを奏でます。母は涙を流して聴き入っているようでした。そしてまた目を閉じてしまいました。あたりには主のご臨在がひしひしと感じられました。

私は、もうこれで十分、母はイエス様に救われることができたと確信しました。欲ばりな私はさらに主に祈ったのでした。「母の救いの確信を私にお見せください、お示しください」と。

次の日のお昼過ぎ、母と二人だけの静けさの中で祈っていると、母はまた大きくゆっくりと目を開けました。私は母に話しかけました。

「お母さん、幸せだね」

「うん」

「お母さん、平安だね」

「うん」
「イエス様、信じてるもんね」
「うん」
そして母はしっかりとうなずきました。ややあって私はまた話しかけました。
「ベックさんに会えて、よかったね」
すると母は首を縦に振りかけたのを止めてすぐ横に振り直して、
「ちがう、イエスさまだ。イエスさま……」
と消え入りそうだがはっきりと言って、目を閉じました。
そのとき母はきっと心の中で、はっきりとイエス様にお会いしていたのです。私は涙の中で祈りました。「イエス様、ありがとうございます。欲ばりで不信仰な私のために確信を与えてくださいまして、本当に感謝いたします」。
夜中の十二時頃から息づかいが急に激しくなり、いよいよ、という感じが強くなってきました。昼過ぎから閉じていた目が再び大きく開きました。仙台にいる私の弟が駆けつけてきて、母の側に立ったまま母を見つめています。母もまばたきせず弟を見つめています。呼吸も消え入りそうに小さく小さく、音もなく数回。そして最後には全身全霊を込めて、目に涙をいっぱいためて悲しそうに「これでお別れね、さようなら」というようにかすかに身を動かし、大きく声を出し息を吸いこんで静かに目を閉じました。呼吸も絶えました。あまりにも自然に、見事に……。午前一時十五分、母はつながりのある人たち全員に見守られて天に召されました。妹と二人で聖歌を

歌って母を送りました。母の部屋は主の平安と恵みで満ちていました。家族水入らずで母のベッドの傍らで静かに主を賛美し、母の思い出を語り合って明け方を待ちました。私は何度も何度も、「イエス様、最期まで母を心配し、励まして守り続けてくださってありがとうございました。主のみ名を賛美し感謝いたします」とイエス様に感謝のお祈りをしました。死んだ母の顔は、口元だけでなく目元までがおだやかにほほえんでいて、弔問に来る人たちを驚かせました。

思えば二年半前元気で母の見舞いに行っていた娘が先に召されて、二年ちょっと。娘の残してくれた信仰の種子が、今、大きく確かに実を結んだのです。神様の深いご愛に感謝いたします。

## 苦しみにあったことは幸せでした

このようにいろいろな苦しみの中でイエス様に出会った私ですが、霊的に鈍感な私に主はその後も次から次へと試練を与えてくださいます。特に高校を卒業してぶらりと遊んでいる息子を通して私を砕かれます。なかなか自我を捨てきれない私は、口では神に委ねますといいながら、一方では息子に勉強しなさい勉強しなさいとこの世の価値観を押しつけて怒っているような有様で、なさけないことに信仰と現実の間で二心の祈りを捧げているのです。この私の苦しみの叫びに、主は答えてくださいました。

「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」（マタイ　7・13、14）

集会の皆様との親しいおつきあいの中で、また皆様のお祈りに支えられて、ようやく、み国に入るための教育こそが本当の教育であり、子供の幸せにつながることが分かりかけてきています。

また、試練の一方で、主の恵みは日々数え切れません。私の妹は十年ほど前に、昔通っていた教会に疑問を抱いて離れてしまい、山形の地に嫁いでますます生きた信仰から遠のいていましたが、ベックさんとお話することによって抱いていた疑問がすべて解決され、心が解放され、七月の仙台、山形のキャンプで心から喜んで受洗しました。今妹は、主をいつも身近に感じ、主を求める気持ちが強くなったのを、自分ながら不思議だと感謝し、喜んでいます。またあれほど八坂神社の崇拝が強かった実家で、イエス様を中心にした記念会を開くことができたことも、考えられないすばらしいことであり、神のご計画の力強さを、ただただ賛美するのみです。また、娘の記念会を通して、我が家に家庭集会が開かれる恵みにもあずかりました。これらすべてのことには人間の思いや計画によるものが何もなく、ただ主のお働きだけがどんどんと進んでいくのです。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。（詩篇 119・71）

また、かつて迷信とか、民間療法とかといった偶像崇拝の遍歴をしていた頃の私は、満たされるものは何もなく、渇きが増すばかりでした。しかし、今は次のみことばの通り、心の奥底からいのちの水がわき出るのです。

「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、

永遠のいのちへの水がわき出ます。」（ヨハネ　4・13、14）

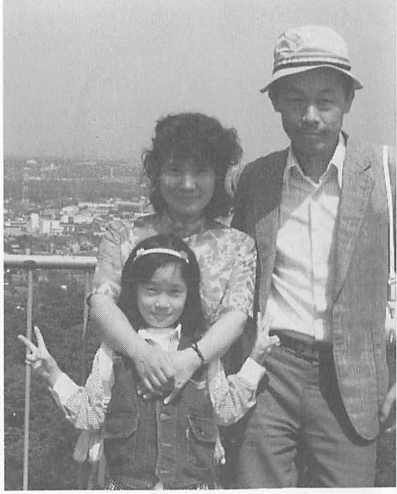
いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。（Ⅰコリント　13・13）

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（Ⅱコリント　4・18）

主を仰ぎ、より頼み、祈って、感謝し、主に栄光を帰す一日一日は本当にすばらしい日々だと思います。いつまでもイエス様に従って生きていくことこそが、今の私の最大の喜びです。最後に、娘の残していったみことばを大事に、かみしめていきたいと思っています。

喜びをもって主に仕えよ。（詩篇　100・2）

「一粒の麦（主イエス）がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」（ヨハネ　12・24）



3人で遠足。▶

# 天地創造の神様に出会って

神澤　毅

一九四〇年東京都に生まれる。群馬県に転居後、吉井町立岩平小、中学校、県立高崎工高、中央大学法学部卒。㈱テレビ朝日、八王子市立第五小勤務を経て現在町田市立つくし野小勤務。家族は妻圭子さん、長男哲郎さん。趣味は旅行、絵画。

長女珠生（たまき）が天国に召されて三年。娘は当時小学校四年生、骨髄異形成症（白血病の一種）という何十万人に一人という病気でした。

一九八七年十二月十八日、娘が入院してから三十八日目に病院から電話で連絡がありました。「娘さんがたいへんだからすぐ来てください」。看護婦さんから話を聞いた時、私はあまりにも急な知らせなので、すっかり動転してしまいました。

昨日は面会日で、元気な顔をしたわが子と別れたばかりなのに……。電車に乗って三軒茶屋まで行く途中、時間が長く感じられ、いつになっても着かないような気がしました。何度か、気が遠くなりそうになりました。

やっとの思いで私が病院に着いた時、娘はもう息をしていませんでした。私は茫然としてその

場に立ちつくしてしまいました。

私たち両親も、今は高校生になった息子も、娘をこよなく愛していました。

娘は小学校二年生の時から、近所にある麻溝台教会の日曜学校に集っていました。私はよく車で娘を送り迎えしていました。しかし、教会や教会の人たちとかかわりたくないので、少し離れた場所で娘を車に乗り降りさせ、逃げるように帰ってくるのでした。

娘は四年生の二学期から熱を出すことが多くなり、週に二日ぐらいしか学校へ行けなくなりました。しかし、日曜日になると朝から生き生きとして元気になり、教会の日曜学校に行くので不思議に思っていました。

そのうちに、いよいよ学校を休んでも熱が下がらなくなりました。かかりつけの北里大学病院で診ていただいたら、「すぐ入院しなさい」と言われました。近所の人たちの勧めもあり、念のため世田谷の国立小児病院でもう一度診察を受けてみました。その結果やはりすぐ入院が必要だということで、初診だったにもかかわらず運よく国立小児病院に入院できることになりました。

娘の入院中、麻溝台教会の後藤牧師と田中さんが三度見舞ってくださり、お祈りをしたり讃美歌を歌ったりしてくださったのだそうです。私はあとからこのことを知り、本当に驚きました。面会日や面会時間でもない時、どのようにして娘と面会していたかも不思議でした。実はこれもあとで分かったことですが、小児病院の看護婦さんの中に吉祥寺キリスト集会の扇柳さんがおられたのです。

「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。」（マタイ　5・8）

娘は洗礼こそ受けていませんでしたが、牧師さんは、

「神様の話を聞く時の真剣な目つきからして、完全にイエス様を信じていました」とおっしゃっていました。私と妻はこの言葉を聞いて感動してしまいました。

神様を知らない時の私は傲慢であり、自分さえしっかりしていればどんな困難なことでも自分一人で解決できると思っていました。事実、そのようにして生きてきました。しかし、娘の死を通して、そのような生き方は間違いであることに気づかされました。

その頃私は「なぜ自分の娘にかぎって親より早く逝ってしまったのか。どうしたらこの悲しい、やり場のない気持ちを取り去ることができるのか。娘の分までがんばらなければ！」という気持ちで一杯でした。娘はおもちゃ屋さんやお菓子屋さんにあこがれていました。花を育てたり、絵を描いたりすることが大好きでした。「私たちが娘の夢をかなえる道を歩めばよいのだろうか」と思いました。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」（ヨハネ　16・33）

妻は平井さんご夫妻のお誘いで吉祥寺キリスト集会に集うようになり、娘が天国に召された二カ月後の二月に洗礼を受けました。

一方私はどうかといえば、妻が平井さんたちと礼拝や集会に行く時、何回となく誘いを受けましたが、行くのがいやでその都度理由を見つけて断っていました。しかし妻の洗礼式の日に、「洗礼を受けることはとても大切なことだから、ぜひ出席してください」と言われて渋々出席しました。

私は妻が洗礼を受けることには別に異論はありませんでした。信仰を持つことで、妻が悲しみや苦しみから解放されるなら、私にとっても願ってもないことだったからです。しかし、自分のこととなるとまた別でした。私はその頃まだイエス様のことを知らず、「キリスト教」という一つの宗教としてとらえていましたから、自分の意志を強く持っていれば宗教に頼る必要などないと信じていました。それまでの人生において、私は、神はいないと思い、また、いても信じない者でした。

世の中のすべてのものは物質が基本であるという唯物論の立場で世間を見て、生きてきました。また、自由（資本）主義社会は悪で、社会（共産）主義社会のみが、自由、平等、平和が築ける社会だと信じていました。

私は、全知全能であり唯一の神様であるイエス様を信仰することを、多くの宗教の中の一つ、「キリスト教」としてとらえていました。そしてキリスト教信者とは自分たちに都合のよい神を他人に押しつけて他人の言うことは聞かず、自己主張し、精神的にも肉体的にも弱い人間の集団

だと思い込んでいました。そもそも宗教は、時間と金の浪費であり、非科学的なものであり、全くこの世の悪だと考えていました。しかし、天地万物を創造した神様を信じることは、私が考えていた「宗教」などとは全く関係がなかったのです。イエス様は私たちが罪を悔い改め、「自分はだめな人間です。助けてください」と言えば、それだけで救われるとおっしゃっています。

しかし、今までずっと自分の力に頼って、目に見えるものがすべてであると信じて生きてきた私にとって、目に見えない神様を信じることは容易なことではありませんでした。

「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」（ヨハネ　3・3）

三月の軽井沢バイブルキャンプで、ベックさんから聖書の神（天地万物を創造した神）について、また三位一体（父なる神、神のみ子イエス、聖霊）について説明していただいた時にも、何が何やら分かりませんでした。

「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」（ヨハネ　13・7）

これまでに、聖書を見たことはあっても、中を読んだことはありませんでした。最初に創世記を読んで驚いたことがたくさんあります。

初めに、神が天と地を創造した。（創世記　1・1）

「大空よ。水の間にあれ。」　（創世記　1・6）

神は、その種類にしたがって野の獣、その種類にしたがって家畜、その種類にしたがって地のすべてのはうものを造られた。　（創世記　1・25）

アダムは全部で九百三十年生きた。こうして彼は死んだ。　（創世記　5・5）

これまで受けてきた教育から、私は、地球上のすべての動物や植物は、大昔から少しずつ進化して、現在の姿に至ったのだというダーウィンの進化論を当然のこととして受け入れてきました。しかし聖書には、すべてのものはこの天地の創造主である神によって造られたと書いてあります。私は、この二つの内のいずれが真理であるのかに戸惑いました。

その当時、私は、次のようなことを考えたことを覚えています。

まず、進化論については、地球上の動物や植物は、周囲の環境の変化に少しは適応したり対応したりすることはでき、一見進化しているように見えますが、はたして本当に進化した動物や植物があるのだろうかと疑ってみました。たとえば、生きた化石と言われるシーラカンスは、三億年前に海で栄え、五千年前に絶滅したと信じられていたのが、最近マダガスカル島で捕獲された実物を見ると、全く進化の跡は見られなかったと言われています。また、動物や植物が環境の変化に適応するのに、いかにひ弱な一面を持っていることでしょうか。日本でもトキは絶滅寸前、

ヤンバルクイナ、イリオモテヤマネコなどは種の減少が大きな問題になっています。

また、聖書にあるアダムが九百三十年生きたという記述は、当時の私には信じ難いことでしたが、私は、当時は時間の計算方法や暦法が今と全く違っていたかもしれないと思い、また、アダムの時代には、「霧が地から立ち上り……」とあるから、現代のように有害な宇宙線や紫外線が地上に届きにくく、人間の身体を形造っている細胞も老化が遅く、そのために長生きできたのではないか、などと考えたりもしました。

聖書の黙示録には、世の終わりの状況が書いてあります。このことも、私には信じ難く思われました。しかし、この地球は未来永劫に存在し続けるものでしょうか。天文学の本によりますと、太陽は原子核融合反応により、水素を燃やして輝いていますが、水素が減少してくると中心にはヘリウムがたまり、水素燃焼殻より外側の領域が急激に広がって地球を呑み込んでしまうのだそうです。このように考えますと、私は、聖書に書かれている一見荒唐無稽に思えることも案外本当の真理を示しているのかもしれない、人間の知識なんて神の前ではたかが知れたものではないだろうか、と思い始めました。

「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。」
（黙示録　22・13）

また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。
（黙示録　21・1）

このようなみことばが、だんだんと私の心の中に入ってきて、私は少しずつ天地創造の神様を信じることができるようになっていきました。

神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。（ローマ　8・14）

しかし、実生活はといえば、日曜礼拝に妻から誘われると、「学校の仕事があるから」とか「出かける所があるから」などと理由をつけては断り続けていました。

けれども、娘の死については一日として頭の中から離れません。「なぜ、なぜ逝ってしまったのだ。こんなに早く」。

そんな時、平井さんが三ツ境（横浜）の集会でメッセージをするから聞きに行こうと妻が熱心に誘うので、近くだし、ちょっとだけ顔を出してすぐ帰ればよいと思って一緒に行きました。集会の後、横浜集会の皆さん方に招かれ、食事をしながらお話をしました。夜は、平井さんの誘いで八王子の古田さんのお宅の家庭集会に集うことになりました。集会の暖かく心のふれあう雰囲気を体験し、主にある人たちの大きく暖かい愛を感じ、感銘する一日を過ごしました。

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。（Ⅰコリント　13・4）

こうして主と共にある生活を体験することを通して、私は急速に信仰生活に引きつけられるようになりました。また娘が天に召された理由を知りたくて、もっと聖書を読みたくなりました。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」

（ヨハネ　11・25、26）

神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。

（エペソ　1・5）

今、私はこの天地万物を創造した唯一の全知全能の神様に導かれたことにより、本当に神様に感謝しています。

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。

（ヨブ　1・21）

人は必ず死ぬのです。しかし今では、一足先に天国へ行った娘と、再び天国で会える喜びがわいてきました。その日を毎日毎日待ち遠しい思いで楽しみに待っています。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

（Ⅰテサロニケ　4・16、17）

神様のことを知り、信じるようになってから、私はこの世の出来事や問題を見る目が変わり、動揺することも少なくなりました。社会生活や家庭生活の中でもいつも神様を中心に置くようになり、迷いや問題にぶつかった時にもみことばに頼り、神様に祈ることができる特権を与えられ、また、主にある皆さん方とのお付き合いの機会を与えられたことを本当に神様に感謝しています。

あなたこそ、私の巌、私のとりでです。
（詩篇　31・3）

信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。
（ヘブル　11・3）

主イエス様のみ名を心から賛美申しあげます。

▼相模大野家庭集会(神沢さん宅)にて。

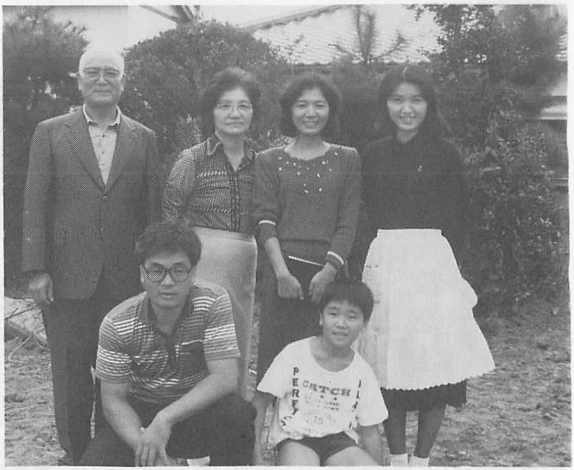


# 主はすべてをご存じです

田中和子

悩みから解放され、主にあって喜ぶ和子さん。
▼1988年10月ご自宅の玄関で。





▲後列左から父・太郎さん、母・ヨシ子さん、和子さん、妹・前田真佐子さん。
前列左から真佐子さんの夫・幸則さん、真佐子さんの息子・将臣さん。
幸則さんのお宅の起工式で。

一九四七年宮崎市に生まれる。住吉小、住吉中、宮崎高、東洋大学短期大学部国語科卒。会社勤務の後、一九七三年結婚して大阪へ。一九七六年一月より透析を始め、同年六月離婚。以後、宮崎に在住。家族は父太郎さん、母ヨシ子さん、弟英輔さん。

## 弟の失明

私達は五人兄弟で、弟はただ一人の男の子として四番目に生まれました。ですから、弟の誕生は両親にとっては大変な喜びだったと思われます。

一九六六年のある春の日、私はなぜだか分かりませんが母に「お母さん、子供を五人も産んで一人も障害者がいなくってよかったわね」と言ったことがありました。その後、弟も私も障害者になったことを思うと、今でもあの春の幸せな一日のことが心に鮮明に焼きついており、忘れられない一日となっています。

父は製材業を営んでおり、その頃は年も若く仕事も順調で何事にも意欲的でした。家族も皆健康で、たいした心配事もなく暮らしていました。しかし、それが突然くずれ去ったのです。

一九六九年、弟は高校二年生になっていました。ある日、弟はその年頃の少年の誰もが憧れるバイクの免許を取るために自動車学校へ行ったのですが、そこで思いがけないことを知らされたのです。試験官に目の異常を指摘されたのです。驚いた両親は、弟を連れて宮崎市内の眼科を次々と回りましたがなかなか病名が分からず、最後に訪れた病院でようやくその病気は網膜色素変性症という難病であることが分かったのです。その病気は少しずつ視野が狭くなり、最後には失明するという恐ろしいものでした。私達はあまりの予期せぬ出来事に奈落の底に突き落された思いでした。やがて両親は気を取り直すと、全財産をなげうってでも弟の目を治してやりたいという一心で、最後の望みを託し東大病院へと弟を連れて行きました。しかし、検査と診断の結果は絶望的でした。今の医学では、有効な治療法はなく、ただ気休め程度の注射と薬の服用位しか

ありませんでした。

本人の不安と恐怖はもとより、両親の苦しみと悲しみは深く、その日を境として母は暗く沈みこみ、心から笑うことがなくなりました。母は取り返しのつかない事態に、弟に申し訳ないという気持ちで自分を責めていました。なぜもっと早く弟の目の異常に気がつかなかったのかと、悔やみと絶望の日々を送っていました。そんな中で、母は以前倉庫の中で冬眠していたつがいの蛇を人に頼んで殺してもらったことをひどく後悔していました。弟の目の病気はそのたたりではないかと、ことあるごとに口にしていました。私達はそんなことがあるはずはないと思いながらも、心のどこかで気になっていました。

弟はその頃はまださほど目が不自由ではなく、自転車で登校できるほどでした。そのうち大学進学という岐路に立ち、その進路についていろいろと悩み、家族や主治医と相談しあった後、主治医の「目が見えているうちに、日本の首都である東京を見ていろいろなことを経験しておくのもいいのではないか」という意見に励まされ、東京の大学に進学することを決意したのでした。弟は、一九七一年の春に上京しました。私はそのとき短大を卒業したので、弟と入れ違いに東京での生活を引き上げ、帰郷しました。弟の東京での生活は、二人の妹たち（弟にとっては姉）の手にゆだねられました。

その後、大学二年の冬休みまで東京での学生生活を送りましたが、やがて少しずつ視野が狭くなり、勉強にも生活にも不便をきたすようになり、とうとう大学を辞めたいと言い出しました。父はしばらく考えた後に、「そうか。やむを得ない」と短く答えました。家中の誰もが押し黙り、

暗い不安だけがみんなの心の中に広がっていきました。

そんな頃のある晩、私は夢でうなされました。弟が白い杖をつきながら歩いている姿でした……私は全身冷や汗をかき、心臓がどきどきして目が覚めたのですが、暗い闇の中でじっと目を見開いて、そんなことがあるはずがないと必死で打ち消しました。しかし今やその夢は現実のものとなって、私達の目の前に立ちはだかってきているのでした。

主治医の診断によると、弟は四十歳位になって髪に白いものがそろそろ出てくる頃に目が見えなくなるかもしれない、と聞かされていましたので、予想と違って、あまりに早い進行に大きなショックを受けました。弟が四十歳位になる頃には何かよい治療法でも発見されているのではないかというかすかな希望をもっていましたが、現実は厳しいものでした。

弟が少しずつ進行していく病気に怯えながら生きていたかと思うと、あの時本当に弟の気持ちになって何一つしてやれなかったことが、いまさらのように悔まれます。その後、弟は自分の部屋に閉じ籠る生活が多くなりましたが、一人で失明の不安に耐えながら、これから先のこと、自分の人生について思い悩んでいたことと思います。それから後の弟の謙虚な様子を見ますと、私達には分からない苦しみの中で、何かを見出したように私には思えます。

一九七三年一月、私はかねてから婚約中だった男性と結婚し、大阪で暮らすようになりました。私が大阪での生活に慣れた頃、弟は大阪にある盲人の訓練施設であるライトハウスに入所したいと言ってきました。中途失明者は歩くことはもとより、掃除、洗濯、電話のかけかたなど日常生活のすべてのことについて、一からやりなおさなければならず、弟にもそれが必要だったのです。

それまで弟は、実家で妹の真佐子の助けを借りて盲人福祉館で点字を習い始め、そこの職員に励まされ、少しずつ自分の生きる道が見えてきたようでした。そしてその頃から妹は弟の目となり足となって弟の自立を助け、以後今日まで励まし続けるようになりました。このことも主のご計画だったのでしょうか、妹もこのことを通して後に導かれました。

その年の九月、弟はライトハウスに入所するために大阪に出てきました。母と妹は弟の肌着に「手で触って分かるように」と糸を丸めて縫いつけました。二人がどんな思いでその作業をしたのかと思うと切なくてたまりません。母親にとって、これから小学校へ入る子供のために名前を書くことは嬉しいことでしょうが、背を丸め、一針一針糸を丸めて縫いつけていたであろうこの時の母の心情を思うと、心が痛みます。

弟はやがてライトハウスに入所しました。母はますます弟を不憫がり、暗い表情で食事も喉を通らないようすでした。弟をこのまま大阪の地に残して、帰らなければならなかった母の気持ちはどのようなものでしたでしょうか。反面、弟はこれからの生活に希望を持ち始め、表情にも明るいものが見られました。

ライトハウスでの半年間の訓練も、楽なことばかりではなかったようですが、杖をついて歩くことも、日常生活も、なんとかできるようになり、弟は次の目標へと進んだのです。それは鍼、マッサージの資格を取るための大阪府立盲学校への入学でした。当初、この仕事を選ぶことについて、弟も私達家族もややためらいがありましたが、弟は真剣に考えた末、この仕事が一番堅実であるということを知ったのでした。ここでの三年間は得がたいものがあったようで、弟は生き

生きと生活していました。同じ境遇の者同士が励ましあい助けあいながら、勉強に運動に遊びにと充実した日々を送っていました。そんな弟を見て私達家族はほっとしていましたが、しかしそれもつかの間でした。

## 私の病気

一九七四年の十一月の寒い朝、私は口の中が異常にべとつくのを感じ目覚めました。洗面所で吐いたところ、真っ赤な血が飛び散ったのです。あまり医学知識のない私は、とっさに胃がんか結核ではないかと全身から血の気が引く思いでした。すぐ病院に行き何回かの検査を受けたところ、腎不全という思いもかけない診断がくだされたのです。それまで健康だけが取り柄だと思っていたものですから、そんな病気になっているなどとは信じられない思いがしました。腎臓は沈黙の臓器といわれ、自覚症状もあまりなく、私の場合も時計の針が少しずつ狂っていくように、長い年月を経て悪くなっていたのでした。医師からは絶対安静を命じられ、病状は次第に悪くなっていったのです。

翌一九七五年一月、薬の副作用も加わって、緊急入院となりました。味もそっけもない厳しい食事療法に、なぜこんな病気になったのかと恨めしく思いましたが、なによりも私が恐れたのは、一度悪くなった腎臓は回復が思わしくない、という医師の言葉でした。私はその言葉に打ちひしがれ、腎不全という病名が、私の気持ちを暗い方へ暗い方へと押しやりました。主治医は私を慰めるように遠慮がちに、「あなたの場合は腎機能が健康な人の三分の一ぐらいに低下しているの

で、いつかは透析を始める必要があるが、今は透析の技術も随分進んでいるし、透析をやっている人でも立派に社会で活躍している人も大勢いるから心配はいらない」と言ってくださいました。しかし、当時透析というものに十分な知識を持っていなかった私には、体内の臓器機能を機械のようなもので代用するというのは恐怖でしかありませんでした。そんなことは絶対したくない、何が何でも努力をしてそれを避けなければならないと思いました。

二カ月あまりの入院生活の末退院しましたが、いつもいつかは透析を始めることになるという言葉が重く心にのしかかり、暗い毎日を送っていました。厳しい食事制限の中で、これ以上悪くなったらどうしようという思いでおそるおそる暮らし、何も手につかなくなる日が多くなり、夜になるのが怖く、時計の針の音が心臓を突き刺すようで家中の時計を止めてしまうほどでした。眠り薬に頼ることもたびたびで、病気への不安と眠れないという苛立ちで神経が疲れきっていました。そんな私に夫は夏の間だけでも実家で療養するようにと勧めてくれましたので、その言葉に従うことにしました。実家に帰っても私の病状は相変わらずで、ぼんやりと横になってばかりいる毎日でした。

両親はそんな私を見て、こんな悪いことが続くのは家に何かたたりでもあるのではないかと心配し、家相を見てもらったのですが、見立ての結果は散々なものでした。浄化槽の場所、水まわり、いずれも悪く、池の場所が鬼門だと悪いところを次から次へと並べたてられたものですから、元来そういうことをあまり気にしないで生きてきた父は激怒しました。今考えると馬鹿馬鹿しいことなのですが、当時、神も知らず健康に不安を抱いていた私にとっては、その見立てのどれも

が気にかかることでした。中でも特に、私は池のことが気にかかっていました。池で泳いでいる鯉が度々、酸欠状態で白い腹を見せては死んで浮いていたからでした。この死んでいる鯉の姿が不吉なものに思え、早く何とかしてほしいと思っていました。

一九七六年一月十六日、年末から引いていた風邪がもとでますます腎機能が低下し、全身に内出血の跡が見え、嘔吐、むくみが始まり、腎臓病特有のどす黒い顔になりました。私は半ば覚悟して病院へ行きましたが、主治医は私のようすを聞くとすぐ、「透析をしないといけないね」と言われました。私が最も恐れていた「透析」という言葉でしたが、なぜかその時は、冷静にその言葉を受け止めることができました。発病から一年あまり、「透析」という言葉にいつも怯えながら暮らしていた私は、その時、もうこれ以上悪くなることはないのだという居直った気持ちになっていました。まるで他人の病状を聞いているように落ち着いていました。その日のうちに、紹介された透析病院へ入院し、すぐ血液検査が行なわれましたが、予想以上に尿毒症が進んでおり、翌十七日から第一回目の透析が始められました。家族も誰も側にいず、心細い中での透析でした。太い針が動脈に刺され、細い回路を伝わって流れ出る自分の血液を見た時、初めて泣きました。その涙は、こんな機械の助けを借りないと生きていけない自分への情なさと、いままで育ててくれた両親に対して申し訳ないという思いの涙でした。結婚してこれからという時に、自分の力では何一つできない無力な自分に腹が立ち、情なく、本当につまらない人間だと思いました。

弟の失明に次ぐ私の病気で心は打ちひしがれ、どうして私達だけがこんな目に遭わなければならないのか、私が何をしたというのだろうかと恨みがましく思いました。母が気にしていた蛇の

ことや、白い腹を見せて死んでいた鯉のことが不吉なものとして頭をよぎり、これから先、まだ悪いことが起こるのではないかと不安ばかりが広がっていくのでした。

しばらくして通院治療となりましたが、透析は本当につらい治療でした。ふとん針のような大きい針を刺され、一度で血管に入らないと何度も痛い思いをしなければなりません。針が血管に入らないということは、透析ができないということです。それは、とりも直さず死を意味するものですから、医者も患者も必死でした。また透析後の疲労感は激しく、言葉ではとても言い表わすことはできません。透析による気分の悪さは健康な人には分かってもらえるはずもなく、横になっていると身体が地の底に引きずり込まれるように重くだるく、家事をするのもやっとのことでした。この辛さを人に分かってもらえない寂しさで、心がいらいらとし、いつも満たされることがありませんでした。食事制限も辛く、特に水分の制限は耐え難いものでした。イスラエルの民も水を求めてさ迷ったとありますが、私のまわりには有り余るほどの水がありながら、それを飲み過ぎると命とりにもなりかねません。厳しく制限されればされるほど喉の渇きは強く、コップ一杯の水もままならない生活がこのまま死ぬまで続くのかと思うと、いっそひと思いに死んだほうがましだとさえ思いました。

これから死ぬまで病院へ通わなければ生きていけない私。地震だろうが、台風だろうが、家族が死のうが、私は自分の命をつないでいくために透析を受けなければならないのです。私は自分の命がそんなにしてまで生きていくほどの値打ちがあるのだろうかと悩みました。しかし、生きたいという思いは本能ですし、人は結局、自分が一番可愛いのだと強く思いました。本当に自己

中心そのものだと思いました。

夫は一生病院へ通わなければならない私との生活に希望をなくし、夫の親、親類、友人の意見に少しずつ態度を変え始めていました。私は私で、これから先どのくらい生きられるのか分からない残された時間のことを思い、夫やまわりの人に気がねして、小さくなって生きていくことに疑問を持ち始めていました。透析によってかろうじて生かされている私は、社会復帰することがまず大事だという主治医の言葉が心にあり、今の状態に悩んでいました。

夫と私は口論することなく、冷静に将来について話しあいましたが、これから先の長い人生を思うと、私という存在は夫にとって、大きな妨げ以外の何ものでもなかったのです。夫は目の前にある大きな試練を私と共に歩いてくれる意志を持っていませんでした。やはり夫もまた、自分が一番可愛いのです。

やがて五月のある日、私は夫にも告げず、透析が終わるとすぐその足で大阪空港から宮崎へと向かっていました。その時の私の頭の中には、とにかく宮崎に帰って透析病院を探さなければいけないということしかありませんでした。その日は土曜日で、飛行機の中は誰もが楽しそうで華やいだ雰囲気に包まれており、ただ私の席だけが暗く沈んでいました。さすがにその時の帰郷は気が重く、玄関から入ることがためらわれ、裏口からそうっとしか入ることができませんでした。

突然の帰郷に両親は驚いたようでしたが、透析を始めた直後に医師から娘さんは五年位の命だと言われていて、いつかは連れ帰らなければならないと思っていたそうです。ただ夫との間を生木を裂くようなことをするのは親としても耐えがたく、気をもんでいたということでした。しか

し私は自分の命があとそんなに短いとは知らず、自己管理さえしっかりやれば、長生きできる、という医師の言葉を信じていましたので、両親のそんな思いもゆめゆめ知らなかったのでした。私は少し落ち着くと、また大阪に帰りました。

六月に入り、両親が荷造りのため大阪に来てくれましたが、両親が急に老けたようで、自分の親不孝をすまないと思いました。結婚する時、新生活のため、と思ってせっかく心をこめて用意をしてくれた家具や道具類を、またその手で送り返さなければならない母の気持ちを思うと、辛くてたまりませんでした。その頃、真の神様を知らなかった私ですが、神様と思えるものに向かって心からお願いせずにはいられませんでした。「神様、どうか今の時を早く過ぎ去らせてください。そしてこの苦しみを早く忘れさせてください」。その頃、私の体調は透析にも慣れず、最悪の状態でしたから、母はそんな私を見て私の命は長くないだろうとひそかに覚悟していたと、だいぶ後になって私に話してくれました。

一九七六年六月に帰郷し、宮崎での透析人生が始まりました。故郷の自然はやさしく私を迎えてくれ、咲く花、吹く風に慰められました。健康を失って初めて、四季の移り変わりに感動し、今日も生きていることを心から感謝する気持ちになりました。咲く花の花びら一枚一枚に、よく分からないながらも神を見る心地でした。

その内、体調も次第に回復し、私はなるべく家族の負担にならないように努めていました。家事も少しずつこなすことができるようになると嬉しくなり、家族のために少しでも役に立つということは、間接的ではありますが、少しは社会に復帰していることになるんだと自己満足してい

ました。そんな毎日の暮らしの中で、私の悩みは表面的には癒されたように見えていましたが、しかし、心の中はいつも別れた夫やそのまわりの人達への恨みや憎しみでいっぱいで、私はあの人達を絶対に許さないと、固く決心していました。一番辛く、支えてもらいたい時に私を厄介もの扱いにした夫や、あの人達を見返すためにも、絶対に死ぬものかと思いつめていました。

今ではイエス様を知り、そういう気持ちが大きな罪であるということを知らされていますが、その頃はあの人達に対するこの意地だけが、主イエス様に出会うまでの十数年の私を支えていたのです。絶対にあの人達には負けられないという思いでいつも肩を張って生きていました。

考えてみると、私はそれまでの人生を、たいした苦労もなく、人生について深く悩むでもなく、普通に幸せに暮らしていました。ところがある日突然、病気になり、その歩みが狂ってしまったのです。不安と絶望の中で生まれて初めて真剣に生きることについて考えました。本当に人生は、自分の思うようにはいかないものだと、つくづく思いました。病気とはいえ結婚にも失敗した私は、ますますみじめで情なく、この年になっても親の力を借りないと生きていけない我が身を恥ずかしく思いました。まわりを見ても皆、自分の人生を自分の力で堂々と歩いているではないか、それに比べてこの私はなんと駄目な人間かと、いつも心の中で卑下していました。

だいたい、私は子供の頃から内向的で競争心に乏しく、何をするにも自信がなく、劣等感の強い人間でした。いつも楽な道へ楽な道へと歩いてきていましたから、いつもそんな自分を内心卑下し恥ずかしく思っていました。今考えれば、こんな病気が与えられ、今度こそは人に頼ることも、逃げ出すこともできない絶体絶命の淵に立たされたのも、神様が臆病だった私に、新しい人

生への第一歩を踏み出させようとされたのだと思います。

そして私は病気が与えられ、死と隣合わせの毎日の中で、いつしか今までは深く考えることのなかった死について考えるようになりました。一週間に三日の透析を、死ぬまで続けなければならない治療です。この十四年間に多くの療友を見送りました。そのたびに今度は誰の番かしら、私かしらと、誰もが口にこそ出しませんがそう思っているのです。そして暗く沈む透析室です。私は、いつも通夜の席で掲げてある遺影を見ながら自然に自分が死んだ時の通夜と重ね合わせているのです。あまりにも多くの死に会い、悲しむことよりもこの人達はどこに行ったのかと、そんなことばかり考えていました。

ふと夜中に目が覚め、死について思うと恐ろしく虚しく、死にたくないと大声で叫びたくなるのです。いつかは死ななければならない、それは明日かもしれないし、一カ月後かもしれない、一年後の今頃はもうこの世にはいないのではないかと思うと虚しく悔しくなるのです。皆に忘れられたくない、まして幼い甥や姪にとっては私のことなど跡形もなく消え去るのかと思うと、私が生きていたあかしを彼等の心に刻み込んでおきたいという思いが強く湧いてくるのです。新聞を開いては最初に死亡欄に目が行き、いつも死を意識して暮らしているのです。

誰もが逃れることのできない死を思うとき、以前、腎不全と言われただけで大きく動揺し、家族に大きな心配をかけた私ですから、死ぬ時はとり乱さず立派な死に方をしたいと、いつもそのことが頭にありました。立派な死に方とはどんな死に方か真剣に考えましたが、そんなことが分かるはずもなく、いつも最終的にたどり着く答えは、私にとっては今のこの時を一生懸命生きる

ことしかないということでした。

人は死をどういう過程を通って受け入れるのか、そしてその瞬間の気持ちはどういうものかを知りたいと強く思うようになり、本屋に行くと、どうしてもそういった本ばかりが目に留まってしまうのです。「死ぬ瞬間」（E・キューブラー・ロス）、「死の医学への序章」（柳田邦男）、「死について考える」（遠藤周作）など、また多くの闘病記を興味深く読みました。どの本も死を直視し、最後の最後まで自分の仕事や研究に没頭して静かに亡くなる様子が綴られており、その姿に感動し、私にはとてもそんなことはできないと思うばかりでした。しかしそこからは、私が期待していたような死にゆく人の孤独、恐怖、無念さは伝わってこず、しょせんその死は他人のものでしかありませんでした。

しかし一冊だけ、深く心に残るものがありました。ある一人のクリスチャンの女性が若くしてがんに侵され、讃美歌に送られながら静かに喜んで召されたことが記されているものでした。その時はこういう死に方って美しくってロマンチックで素敵だなと単純に思いましたが、なぜかしらこのシーンが、自分もその場にいたかのように心に残っていました。残念ながらこの本を貸してくれた友も亡くなり、本の題名すら忘れてしまいましたが、後日、妹の真佐子がクリスチャンになりたいと言った時なんの抵抗も感じなかったのは、このことも一因になっているのではないかと思います。

一九七八年一月、妹の真佐子は前田幸則さんと結婚しました。そしてその年の十二月に男の子に恵まれました。ところが、不幸にもその子は未熟児網膜症にかかり、私達は目の前が真っ暗に

なり、心の凍る思いがしました。弟のことよりも自分のことよりも、もっともっと身を切られるように辛く、そしてまた、あの白い腹を見せて浮いていた鯉のことが頭をよぎりました。

しかし幸いなことに、発見が早く医学の進歩もあり大事には至らずにすみました。今、六年生になったその子が元気に飛び回っているようすを見ると、それだけで感謝の心で胸がいっぱいになります。

## 家の倒産

父はこれまでの人生を、私達子供の病気を除けば、自分の努力と知恵でなんとか思うように歩いてきたと思います。

一九八三年頃の材木業は不景気で、父の会社も多少なりともその影響を受けていました。そんな時、父が保証人になっていた会社が倒産したのです。その会社は親戚の人のものであり、社会に対する父の責任は重大なものがありました。連日のように債権者が押しかけ、まるで犯罪人のような扱いを受け、毎日が不穏な空気に包まれていました。うっかりすると連鎖倒産にもなりかねず、両親は苦労して築き上げてきた会社を守るために必死でした。売れる土地や建物は売り、あらゆる方法でお金をつくりましたが、そんなことで乗り切れるはずもなく、毎日がお金との戦いで、緊張の連続でした。当然のことのように両親の間に争いが繰り返され、家族中がぎすぎすとした気持ちに覆われていました。あまりのお金の苦しさの中で、人間にとって何が一番大事か、ということさえも分からなくなっていました。

お金の問題で始まったことが次第に人間関係をも壊し始めたのでした。父と母、父と子供達、父と従業員、父と取り引き先の人々とが互いに信頼することができなくなり、少しずつ歯車が狂ってきたのでした。いままで私達一家に起こった試練はそのことを通して家族の絆をいっそう強くしましたが、今度のことは家族の気持ちを乱し、誰もが飢え渇いていました。こんな状態に追い込んだ相手を恨み、許すことができませんでした。

そんな中で、父は次第に無口になり、孤独でますます頑固になり、人の意見に耳を貸そうとはしなくなりました。思うようにいかない状態に、父はあせって眠れなくなり、お酒や薬に頼るようになり、その影響で翌日足がもつれたり口が思うようにきけなかったりして、大変辛そうなようすでした。そんな父を見るのは私も悲しいのですが、どうしても優しい言葉をかけられず、かえって父を非難するようなことばかり言って愛のない態度になっていました。かつては自信に満ち行動的な父でしたが、今は別人のようでした。それでも父は仕事に逃げ込むように黙々と働いていました。そんな父を見るのが家族にとってはまた辛いのです。

必死で金策に走り回る両親を見ていると、名誉も地位も財産もなにもいらない、貧しくてもお互いにいたわりあい、些細なことに喜びを見出せる暮らしがしたい、と心から思いました。そして富や地位は心の安らぎにつながらないということも強く感じました。

このような暮らしが数年続き、その中で私達はいつも不平不満を言い、すべてをまわりの環境や人のせいにしていました。だいたい、いままで私達に起こった不幸なことを思う時、どうして、という思いが起こります。人の力ではどうすることもできないことばかりで、希望がありません。

人間は本当に弱い者で、自分達の力でどうすることもできなくなると、苦しい時の神頼みという言葉がありますが、何かにすがりたい一心で偶像や迷信へと走ってしまうのです。ある新興宗教へも行きましたが、やがてすべてが人の力とお金とから成り立っていることが見えてきて、どうしても信じることができませんでした。家相を見てもらい、悪いと言われた所を直したり、蛇の神様、目の神様にも参って、霊を慰めたり、冬の寒い朝家族中で海へ行き、海にお酒を流して清めたりもしました。名前を見てもらうと、私と弟の名前は大凶で良くないと言われる始末で、どこを向いても救いはありませんでした。

しかし、なんとかしてこの泥沼から抜け出したい一心で、人が良いというものを、何でもかんでも拝みました。本当に私達は弱り果てていました。

## 導かれるままに

一九八七年十一月、山下むつみさんという方に、宮崎のキリスト集会という所に来てみないかと誘われました。その頃毎日新聞に、「宗教は心を満たすのか」という記事が連載されており、心の満たされぬ空しい日々を送っていた私は何かを求めるように読みました。また、妹と「クリスチャンになりたいね」と話していた時期でしたので、不思議なものを感じました。むつみさんから「光よあれ」や「実を結ぶ命」そしてテープなどを借りましたが、心のどこかにためらう思いがありました。借りた本の中に、「がんに打ち勝ったドイツ少女」と書いてあるのが目をひきました。この本もよくある一連の闘病記だと思いパラパラとページをめくったのですが、その時

一つのみことばが目に飛び込んできたのでした。

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。

（Ⅱコリント　4・8、9）

このみことばに出会った時、なぜだか心の奥の方から嬉しさが込み上げてきて、自然に涙が出てきたのでした。強い味方を得たようで嬉しく感激しました。その頃の私達の状態は、まさに、このみことばのように八方ふさがりの時だったのです。このみことばのなんとも言えない優しさに、急に希望が湧き、勇気が出てきたのです。

同年の十二月、初めて宮崎の熊谷さん宅での家庭集会に導かれ、ベックさんとお会いしました。前夜は緊張してあまり眠れず、なんとかしてこの状態から脱したいという思いだけで、意を決して行きました。ベックさんに、

「和子よく来たね、嬉しい」

と握手されただけで、何か温かいものに包まれたように涙が込み上げてきました。そしてこの時の「よく来たね、嬉しい」という言葉には、後に聖書に触れて初めてただの挨拶ではなく深い意味がこもっていたのだと気づいたのでした。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

（マタイ　11・28）

その日初めて、ベックさんからイエス様のお話を伺いました。あまりよく理解はできなかったのですが、なぜか涙だけが出てくるのでした。最後にベックさんとご一緒に祈りましたが、私はアーメンの意味を知らず、ベックさんに聞きましたら、

「私もそう思います、ということだよ」

と、やさしく教えていただきました。私はこの日のお話の中で愛を強く感じました。本当に神は愛だと思いました。

翌一九八八年一月、母と妹がベックさんとお話し、二人共ただただ涙の中で救われたのでした。それまでの私達は、出口の見えない暗いトンネルの中で、三人寄れば不平不満ばかり言っていたのですが、主イエス様を知り、イエス様の話をするのが嬉しく、そのみことばに励まされ少しずつ変えられていきました。多くのみことばが示され、乾いた砂が水を吸いこむように心に染みました。人を慰め励まし、希望を与える方はイエス様以外にはないと確信しました。

「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

（マタイ　18・20）

お正月にこのみことばが与えられ、私達の所にはいつも神様がいてくださり、共に苦しみ、心配していてくださると思うと、嬉しくて心が平安になっていくのでした。

一九八八年八月二十一日、えびの高原のバイブルキャンプで、私、両親、妹の四人で受洗いたしました。私達の古い人は今や主イエス様の十字架と共に死に、イエス様の復活にあずかって新

しく生まれ変わったのです。このことは私のいままでの人生の中で、最大の喜びでした。

## 人生のあらしが過ぎて

人生の海の嵐に揉まれきしこの身も、不思議なる神の手により命拾いしぬ。
いと静けき港に着き、われはいま安らう。救い主イエスの手にある身はいとも安し。

（聖歌　472）

主イエス様を救い主として受け入れ、この聖歌を賛美する時、ようやく辿り着くべきところに着いたという深い安堵の思いと喜びに心が満たされます。確かに私達には多くの試練が与えられましたが、今思えば、いつもそこに何か、私達には分からないような不思議な力が働いていたのです。長い間、どうしても乗り越えることのできなかった高い壁、それを乗り越えることのできるはしご、それを与えてくださったのがイエス様でした。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」

（エレミヤ　29・11）

聖書に触れていくうちに、私達の苦しい二十年間の始まりともいえる弟の失明も、神様がそのことを通して私達家族を導こうとされていたのだと分かってきたのです。

「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」（ヨハネ　9・2、3）

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。（イザヤ　42・16）

というみことばに出会い、弟の失明が、むかし母が人に殺してもらった蛇のたたりであるという意味のない心の重荷からやっと解放され、どんなにか心が慰められたか分かりません。そして何よりも、弟が失明という大きな試練を与えられたのは、弟も神から愛され、常に主に守られながら真の平安に導かれるためであったということを知り、本当に嬉しくて心から感謝しました。

私自身もまた、透析開始直後は五年といわれた命でしたが、十四年という歳月を生き永らえ、今、主イエス様に導かれたのです。あの苦しい闘病の日々がなかったら、主を知ることもなく、この喜びもなかったと思うと、感謝の気持ちで胸がいっぱいになります。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。（詩篇　119・71）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべて

のことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

主は、誰からも認められないこんな小さな私のような者まで覚えていてくださったのでした。私が主に導かれ、本当の喜びを知るためには、どうしてもこの闘病という試練が必要だったと知りました。主は病気という棘を通して導いてくださったのでした。

そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。

（Ⅱコリント　12・7）

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

（Ⅱコリント　12・9）

子供の頃からずっと劣等感に悩まされ、安易な道ばかり選んでしまう自分の弱さを恥じていた私にとって、このみことばは意外なものでした。いまだかつて弱さを誇りましょう、というような励ましに会ったことはなく、心から嬉しくなりました。もうこれからは頑張らなくてもいいのだと思うと、長い間背負っていた重い荷物を取り除いてもらったように急に気持ちが軽くなり、穏やかになりました。

さらに、主を知ったことで、別れた夫や夫の周辺の人々への恨みや憎しみが恐ろしい罪であったことにも気づかされました。私は過去ばかり見て、前へ進めなかったのでした。心から悔い改めました。初めて肩の力がすっと抜け、心が不思議に満たされ、優しい気持ちに包まれました。私は人を恨み続けていたため、自分のみじめな思いで心が疲れきってしまい、生きることに前向きになれなかったのだと思います。私が知らず知らずのうちに犯していた罪も含めて、すべての罪は、主イエス様の十字架の贖いにより赦されていたのです。それが分かった今、初めてあの人達を心から許すことができました。

互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。

（コロサイ　3・13）

愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。……「復讐はわたしのすることである。」

（ローマ　12・19）

そして何よりも、あれほど私を苦しめ悩ませ続けていた「死」というものへの恐怖も、聖書を読み、またベックさんとのお話の中から与えられたみことばで解決されていったのでした。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」

（ヨハネ　5・24）

「あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。」

（マタイ　6・27）

生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。

（伝道者　3・2）

このように多くのみことばに導かれて歩むようになったことで、死ぬ時のことなどをあれこれ考えるのは、聖書にある「思い煩い」だと気がつきました。すべてが主のみ手の中にあり、神様の思いと人の思いは違うのだと知ったのです。もう、一人で恐れることは何もないのです。大きな平安に満たされました。気がつくと、死についての本を読む必要など、まったくなくなっていました。嵐が過ぎ去ったようでした。

彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。（黙示　21・4）

私達はこのようにイエス様のもとに引き上げられ、永遠のいのちにあずかることが約束されているのです。さらに、愛する家族との別れも一時的であり、天国でまた再会できることが確証されているのです。なんとすばらしい恵みでしょうか。私にとってイエス・キリストを信じる信仰が与えられたことは何ものにも代えがたい幸せであり、心から深く深く感謝しています。

## 感謝の日々へ

こうして私は、私達が味わった労苦は神への導きであり、神の恵みが約束されていたことを知りました。

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

（ヘブル　12・11）

けれども救われたからと言っても、私達を取り巻く状況はそう変わるはずはありません。しかし、ものの考え方、価値観が変えられ、主にすべて委ねることにより、いままで持っていた不安や心配事が次々と平安に変えられていきました。

そして私は、毎日のように知らず知らずのうちに高慢、妬み、悪口などの罪を犯してしまいますが、それらの罪もいつも神に立ち返ることで赦していただけるのです。また、日常生活においても、昔は迷信、因習にとらわれ、心の中にいつも戸惑うものがありましたが、いまではそういう戸惑いからも解放され、すっかり楽になりました。

私達は、まだ多くの問題を持っています。残っている借金、弟の結婚、私の腎臓移植と、ちょっと考えると気持ちが暗くなることばかりですが、主を信頼し、自分の思いではなく主のみこころだけが行なわれますようにと祈る毎日です。主はどんな時にも私達の心の隅々まで知っていてくださっています。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。

（マタイ　6・8）

最後に、まだ救われていない弟や家族が主を知り、共に天のみ国に入れるように、また私のまわりの神を知らない多くの方々が一日も早く救われますようにお祈りいたします。人生を、万能なる唯一の神イエス・キリストを道しるべとし、祈りながら生きていくことこそ、真の幸せです。

えびの高原キャンプでの洗礼の日。
▼山下むつみさん（右）と和子さん。

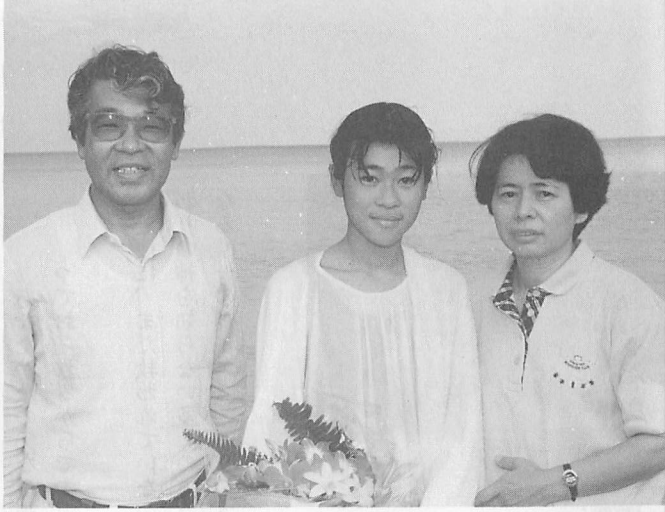




▲母・ヨシ子さん（前列左）と妹・真佐子さん（後列左）が主を受け入れた記念の日。
前列右は真佐子さんの息子・将臣さん。



写真集「パイヌカジ」で第
回木村伊兵衛賞受賞、
この世の栄誉に高ぶりの
心を起して(318頁参照)。
祝賀会で妻・芳子さんと。



▲長女・昌子さんの洗礼の日、ご家族そろって。

# 主のあわれみによって救われ、今喜びにあふれる

## 平良孝七（たいら）

一九三九年沖縄大宜味村に生まれる。喜如嘉小、同中、辺土名高卒業後、琉球新報写真部、琉球放送テレビ報道部勤務を経て現在は沖縄県庁コザ渉外労務管理事務所勤務。写真集「沖縄」、「パイヌカジ」（第二回木村伊兵衛賞受賞）、「カンカラ三線」などを出版。家族は妻芳子さん、長女昌子さん。

- 家庭集会　不定期
- 住所　沖縄県読谷村字楚辺一四〇〇―四八〒九〇四―〇三・電〇九八九五―六―〇七三六

映画「グリーン・ベレー」の撮影のため沖縄を訪れたアメリカの映画俳優ジョン・ウェイン氏
を取材中。右奥、カメラ(アイモ)を回しているのが孝七さん。



一九九〇年五月二十八日の午後、庭のカニステールの木の枝を通して窓から射してくる陽の光が、机の上にまだら模様を描いています。その机の上には三、四枚のメモ用紙に聖句が書いてあるのですが、陽の光は、外で風にゆれている木の枝のそよぎをつたえて、のどかな昼さがりの雰囲気なのです。

あわれみは、さばきに向かって勝ち誇るのです。（ヤコブ　2・13）

最も私の目を引き、いつも主のなぐさめを受け、はげまされているのがこのみことばなのです。

## 神をおそれないウーマクー（傍若無人な男）

七年前、主イエス様の救いの中に入れられるまでの私は、どこででも、誰にでも、「神などいるものか」と豪語し、自分以外に信じ頼れるものはいない、という態度でした。特に、イエス・キリストの話をしたり信じたりしている人に対しては、感情をまる出しにして、悪意をもって罵る者でした。現に救われる三カ月前に、「イエス・キリストを信じて救われてください」と私に近づいて声を掛けてくれた若い女の人に罵声を浴びせて、憎々しい目つきでにらみつけたのです。

一九八三年四月下旬のある日のことです。私は朝日ジャーナル編集部からの写真原稿の依頼があり、その取材を終えて渡嘉敷島から帰りの途中、大きなカメラバッグを肩にかけて泊港のバス停留所に一人で立っていました。すると、か細い十七、八歳くらいの女性が私の側に来て、いきなり、

「イエス・キリスト様を信じてください。イエス・キリスト様に救われてください……」と言ったのです。よりによって私にそれを言うとは、と思いながら、

「なに？　イエス・キリスト？　冗談を言うなよ！　なにがイエス・キリストか、イエス・キリストだけが神か、イエス・キリストだけが人を救うのか。馬鹿なことを言わないでくれよ！　人間の骸骨だって神と思えば神だし、木も石も神になるではないか！」と口調も荒くまくしたてたのです。その女性は、一言も返さずに私の所から離れて行きました。

私は幼い頃から、なぜかイエス・キリストとか、クリスチャンといわれている人たちに、いい感情を持っていませんでした。なんだ、外国の宗教じゃないか、という思いもありましたが、今考えてみますと、次のようなことも理由のひとつになっていたようです。

私が喜如嘉の小学校に通っていた頃に、「土曜日に礼拝をするためには仕事も学校も休んで教会へ行く」というある教派のキリスト教が宣教をはじめたのです。その時まで、私はキリスト教については何も聞いたことがなかったのですが、喜如嘉の小学校ではわりと家柄がよくて学校で目だった生徒たちが教会という所へ行っている、ということを知った時、はじめてキリスト教とか、教会という言葉を意識したのです。勉強が好きでなかった私は、その教会へ行っている生徒たちとのつきあいはほとんどありませんでした。ところが学校の運動会の日に、徒競走の選手に選ばれた私は、選手の慰労夕食会で教会に行っている生徒たちと同席することになったのです。夕食会といっても、自分たちでメリケン粉をこねてつくったそばをゆでて、ただそれを食べるという会だったのですが、そばを食べた後で、暗いランプの下で、二十五人くらいが丸く座って、

自慢の歌を披露することになったのです。私の番になった時、日頃から学校で習う歌よりも歌謡曲が好きだった私は、自分の歌のうまさを皆に聞かせてやろうと張り切って、自信満々で歌謡曲を歌いました。ところが、向かいに座っていた村の獣医の娘たちが、

「品の悪い汚れた流行歌は聞きたくないから歌うのをやめてほしい……」と、いかにも自分たちは教会へ行っていて清い者であるといわんばかりの態度で非難したのです。私はその時、かっとなって彼女たちにどんな言葉で言い返したか忘れましたが、その時以来、特にクリスチャンに対してよい思いを抱かなくなったように思います。

幼い頃の私は、テント造りの便所の窓から小便を噴水のように上げて女生徒にひっかけ、先生にふらふらになるまで殴られたり、身体検査の時に手足にこびりついた垢を小石で血の滲むほどにこすって叱られたり、卒業記念の写真に前ボタンが一つもついていない上着を着ていって、わざと腹を出してにやにや笑って写され、「恥さらし」と言われたりする向こう見ずな子供でした。中、高校へ進むにつれて、劣等感が強くあらわれてきて、学校では特に人前に出ると自分を目立たせる態度をとり、一人になると感傷的になり、ドラマの主人公に自分をなぞらえる不良文学青年のような者になりました。辺土名高校在学中は、教科書はほとんど持たず、学生帽もかぶらず、あまり読みもしない文学書を小脇に抱えて気取っていました。先生方の言うことにも素直な態度で応えたことがなく、いつも反抗的でした。朝夕海辺に一人で座って海原を見つめているのが好きでした。とりとめもなく人生を考えたり、生きることを憂えたり。

学校の帰り、一人で白い道を歩いていると、太陽の光が道に私の影を描いていて、背丈の伸びたとてもカッコいい自分の影に「中身はなにもないじゃないか」とつぶやき、また、ある時は海辺を歩いていて、蟹が私の前を急いで逃げて行くと「蟹も僕をいやがっている」とやたらに自分を責めたりするのでした。

自分の気持ちがむしゃくしゃしてどうすることもできない時のある日、まだ小学校にも行っていない甥が友だちと遊んでいるのを見て、誰もいない浜辺に連れて行って、理由もなく、ただ自分のうっぷん晴らしに、思いきり何回も何回も殴りつけたことがありました。甥はどんなに殴られてもじっとがまんして、涙一滴流しませんでした。（その時のことを思うたびに、私の心は甥に対して悪いことをしたという思いで痛みます。）

三年生の秋のこと、あわや退学になるという問題が起きました。大学進学担当の先生と自分をモデルにした「曲った窓」という短編小説を学校の文芸誌に掲載したのです。その小説の内容は、進学担当の先生が生徒個人の意見を何も聞かずに勝手に各生徒を進学コースと職業コースに分けてクラスの編成をしたことに対しての反感から非行に走った生徒Tが、数名のグループをつくって学校へのいやがらせや先生へのいやがらせをくりかえし、ついには先生の奥さんとの肉体的な行為にまで及び、最後には「もう僕の人生はめちゃくちゃになった、どうしようもなくなった、これで終わりだ」と先生に詰め寄り、ナイフで刺し殺し、生徒Tも海に身を投げる、といったものでした。

なんとか高校を卒業して、二年ほど東京での生活をした後、沖縄に帰り、琉球新報社の写真部に勤め、それから琉球放送のテレビ報道部の報道記者として働くようになりました。その頃の沖縄は、祖国復帰運動や、ベトナム戦争との直接的なかかわりの中で毎日のように米軍基地撤去闘争、反戦平和闘争がくりひろげられ、大きく揺れ動いていました。

## カメラを通して沖縄の実情を！

太平洋戦争で長男、次男、三男と三人の兄たちを亡くした私は、よく母が夜になると私の寝ている枕元で息子たちが帰って来るのを待っているかのように思いにふけったり、悲しい歌（琉歌）を小声で歌っている姿を見ていました。また、私の親戚や、となり近所には、夫、息子、娘を戦争で亡くした人たちがたくさんいて、幼い時からその悲しみを見ていた私は、大人へと成長するにつれて、沖縄に建設された広大な米軍基地と、それを認めた日本政府への怒りと憎しみをつのらせていました。「鉄の暴風」といわれた沖縄戦は、日本本土への米軍の上陸を防ぐために、日本で唯一の地上戦が行なわれ、「捨て石作戦」となって二十余万の命が悲惨な戦火に消えただけでなく、かろうじて生き残った多くの住民が焼け野原、戦争の傷跡の深い路頭に迷った本当に凄惨な戦いでした。しかもそればかりではなく、「対日講和条約」によってその沖縄を本土から分離し、極東の要石として広大な米軍基地の島にするとは……。私は怒りに燃えていました。ですから、カメラを通して沖縄の実情を内外に訴えるのだ、と意気込んでいたのです。

当時私は、「キリスト教」と「コカ・コーラ」はアメリカの世界戦略の先鋒だ、と本気で思い

込んでいました。いつどこででも、キリスト教の話やそれに関わる話題が出ると、得意になって、

「キリスト教？　あれはコカ・コーラと同じアメリカの侵略の道具ではないか。それが証拠に、イギリスからアメリカ大陸に移民が入った時もクリスチャンが先頭だったし、アフリカのジャングルの中にもコカ・コーラと一緒にキリスト教が入り込んでいるではないか」と、いかにも自分が真理の発見者だと言わんばかりに容赦なく言い放っていたのです。イエス・キリストなどは自分とは全く関係がないと、歯牙にもかけない者だったのです。キリスト教はアメリカの沖縄支配のための懐柔策であり、なだめ役だと思い込んでいたといった方が、正確な表現かもしれません。

そのうち私は体調をくずし、不眠症になり、夜眠っているときなにものかに押さえつけられるような症状や幻覚を覚えたりするようになりました。病院で診てもらったところ、自律神経失調症だということでした。自分の感情が自制できずに上司にたてつくことが多くなり、会社は私を退職するように追い込んでいきました。「休みなさい」と言われて休暇を取っているうちに、とうとう退職になりました。

その時ちょうど沖縄では、アメリカ軍政の任命主席から公選主席に移行するための選挙が行なわれることになり、激しい選挙戦に突入していました。私は、革新側の選挙運動に関わるようになりました。選挙は沖縄の本土復帰を主張した革新側が勝ちましたので、私は琉球政府（現在の沖縄県庁）の広報課へ就職することになったのです。

病は続き、夜は安定剤に頼り、どこへ行くにも安定剤を欠かせませんでした。職場でも人を人

とも思わず、言いたいほうだい、やりたいほうだいで、上司にも自分の思っていることを見さかいもなく言ってしまうような傲慢なふるまいを続けていました。誰に対してもその人を傷つけているという自覚が全くなかったのです。

同じ職場に女性のクリスチャンがいるということが、ある日職場で話題になりました。私が仕事をしていた職場は、知事公室の中に広報課と文書学事課が同居していて、約四十人くらいの職員がいましたが、その女性は文書学事課の仕事をしていて、私の後方十五メートル位の所に腰掛けていました。彼女の話が出たとたんに、私は彼女の方に向かって立ち上がり、大きな声で、

「へえー、クリスチャン？　なにがクリスチャンだというんだ。ふん、アーメン、ソーメンか……」とわざと悪意をもって言い放ったことがありました。

罪は悪者の心の中に語りかける。
彼の目の前には、神に対する恐れがない。
（詩篇　36・1）

「彼らののどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」
「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」
「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」
「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲惨がある。
また、彼らは平和の道を知らない。」
「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」
（ローマ　3・13～18）

まさに私の言動は聖書にあるみことばのとおりだったのです。

県庁に勤めて五年目になった一九七五年の年でした。私の横柄なふるまいはさらに目にあまるほどになりました。沖縄の島々を撮ってまとめた私の二冊目の写真集「パイヌカジ」が、朝日新聞社の設けた木村伊兵衛賞（第二回）を受賞したのです。今思いますと、愚かさまるだしの言葉や行動が恥ずかしくてならないのですが、その時は、天下を我がものにしたような錯覚を起こし、上司に対しても、

「課長は文章もろくに書けないではないか」

「部長ができないことをなぜ僕にやれというか。それは部長がやればいい」といった調子で、言いつけられたことにも無愛想に言葉を返すのでした。

知恵のある者は誉れを受け継ぎ、愚かな者は恥を得る。（箴言　3・35）

愚かな者の口は愚かさを吐き出す。（箴言　15・2）

人は自分の愚かさによってその生活を滅ぼす。しかもその心は主に向かって激しく怒る。（箴言　19・3）

もともと、結婚してもあまり家にいつかない私でしたが、受賞後は雑誌社からの写真原稿依頼

がわりと多くなり、ますます家庭をかえりみることを忘れ、土曜や日曜、祝祭日になるとカメラバッグを担いで撮影に出かけ、家庭サービスといったものはほとんどしたことがありませんでした。たまに家にいる時は、雑誌に掲載された自分の写真を、

「見ろ、見ろ」と妻の芳子に突きつけ、自慢気にページをめくっては見せびらかしていました。芳子は時々そのことに怒って、

「何よ。自分の写真のことだけ自慢して……」と吐き捨てるように言うことがありました。

## 妻と娘の家出

そのうち、芳子もこのような生活に疲れて、私に愛想がつきたのでしょう。三歳になったばかりの昌子を連れて家を出て行ってしまいました。ある日私が家に帰ったところ台所用品が目に見えて少なくなっていて、芳子や昌子の衣類が持ち出されている様子なので、「家を出たな」、と思いました。私はそんな家の中のありさまを見ても、なんとも思いませんでした。「出て行きたい者は出て行けばいい。かえって一人でのんびりできる。自分は何も悪いことをしたわけではない」。そう思うだけでした。家族を心配するような心はその頃は持ちあわせていませんでした。どこへ行ったか確かめる気持ちもありませんでした。帰ってこなければ帰ってこなくてもいい、と本気で思っていたのです。しかし、一カ月ほどたってからだったでしょうか、一度は芳子と会って「帰ってこないか」と言ってみようという思いになり、芳子の職場へ電話をかけて沖縄市の喫茶店にきてもらい話しあったのですが、「帰る気はない」という返事だけでした。相当な決意

であることを知りました。私はおおよその予想はしていましたが、何も言わないで、何も聞かないでそのまま別れるよりは、一応会ってみようという気持ちでしたので、返事を聞くと長居は無用とばかりに椅子をけるようにして喫茶店を出てしまったのです。もう芳子との生活も終わりだ、と確信に近い思いを持ちました。それからますます、自分の写真取材にほとんどの時間を費やし、遊び歩くことも多くなりました。

先に述べたように、私にとって写真を撮るということは、沖縄の置かれている現状の問題を写真を通して内外に訴え、平和な社会をつくる一助にするのだという思いでしたので、妻や娘への思いやりはほんとに薄く、私の内には家族に対する愛もなく、平和な心も全くなかったのです。ほんとの愛も平和も知らない者が「社会の平和をつくる働きをしよう」と思いあがっていたのですから、今になって思うと恥ずかしい限りです。

芳子、昌子と別居してから半年ほど過ぎた頃に、私の母が亡くなりました。数え年で九十二歳でしたが、頭は死ぬまで明晰でした。私が東京に行っていた頃に目蓋が開かなくなる病気になり、二十三年間目が見えない生活をしていましたが、いつも私に「他人に後ろ指をさされないようにしなさいよ」と方言で言っていました。私は母が他人の悪口や陰口を言うのを一度も聞いたことがありませんでした。私が芳子と別居していることもちゃんと知っていたのでしょう、死ぬまで「なぜ芳子と昌子はこの頃来ないのか」「芳子と昌子はどうしているのか」などと一言も聞こうとはしなかったのです。それは、母の私への思いやりでした。

それから一年ほど経った頃、名護の兄の家にいる父から「生きている間に昌子を見たいので、

連れてきてほしい」との電話がありました。私は難しいことを頼まれたな、とちょっと困ってしまいました。しかし、母も昌子に会いたかったはずなのに、母に昌子を会わせずにいた自分の親不孝を思わずにはいられませんでした。それで、ずいぶんためらいもありましたが、芳子の友人に電話番号を教えてもらって、土曜日の夕方に芳子に電話をかけ、

「おじいが、あっちゃんに会いたいから明日名護に連れてきてほしいと言っているんだが、連れていっていいかな……」と言いました。ダイヤルを回している時に、どんな声でどんな返事をするのかと思いをめぐらせていたのですが、芳子の声は今までに聞いたことのない、想像もつかない優しい声でした。

「いいよ。あっちゃん連れていっておじいに会わせるといいよ。明日、朝行くように準備しておくから、お父さんきてね……」。その声を聞いた時、私は、なにがあってそんなに優しくなったのだろうとふしぎに思いました。

日曜日の朝、芳子と昌子が住んでいる具志川市のアパートの二階を訪ねて、またふしぎに思いました。これまでとは打って変わって、その雰囲気のすべてが優しく感じられるのです。食卓を見ると朝食が用意されていました。いかにも「歓迎しています」という様子なのです。昌子はかわいいワンピースを着けて顔と体で嬉しさを表わし、安心した、落ち着いた表情が体全体に感じられるのです。部屋の片隅に置かれたラジオカセットからは、なんの曲かは知らないのですが静かなパイプオルガンの音楽が流れていました。聞いたことのない曲でしたが、教会の音楽であることは分かりました。久しぶりに三人で朝食をし、芳子に見送られて昌子と二人で山原（名護）

のおじいの家へ行きました。一年半ぶりに会った昌子は三歳になったばかりで、なんの不自然さもなく親子であることを感じさせ、楽しそうに話しかけてくれました。私の胸は熱くなりました。

昌子を見たおじいはとても喜んで、

「おいで、あっ子、おいで……」と両手をひろげて抱きました。「お母さんは元気ねー」などと話しかけるおじいに、昌子は笑顔でうなずいていました。久しぶりに会う昌子との一日がとても満足そうな私の父でした。

夕方、具志川のアパートに帰ると、朝も流れていたパイプオルガンの曲が流れていました。私たちの帰りを待っていた芳子は、昌子におじいの様子を聞いたり、お父さんといっしょで楽しかったかと話しかけながら私を家の中へ招き入れました。小さな食卓いっぱいに、特別な料理がつくられて並べてありました。三人で食卓を囲むようなことはおそらく二度とないと思っていた私は、その情況に引き込まれるように、食卓の前に座りました。無邪気な小さい顔に笑みを浮かべている昌子と、おだやかな表情の芳子の中にいて、少々ぎこちなさを覚えている私でしたが、すすめられるままに食事をしました。お互いに会話の口数は少なかったのですが、そこには平安があり、なにか今まで知らなかった新しい雰囲気がただよっているのが強く感じられました。食事を食べ終わろうとした時、芳子が面持ちを変えて私を見つめながら、

「おとうさん、私が悪かった。私はおとうさんを許すことができるようになった。私が我がままだった……」と言ったのです。私は何をどのように言えばいいかが分からず、内心とまどっていましたが、表面では落ち着いたふりをして、

「いやあ、僕が悪かったんだよ。自分勝手なことばかりして……。自分のことばかりしか考えないからな……」と、適当な言葉を並べて取りつくろってはみたものの、その言葉は実際に自分の本心からのものではありませんでした。妻と娘が優しくなっているのはその様子からよく分かるのですが、あまりに思いがけない言葉を聞いたので、私には理解する能力と時間がなかったのです。これまでの会話の中に、教会とか、イエス・キリストとかのことは一言も出なかったのですが、私は「教会へ行っているな……」と思いました。それは、教会の音楽らしいものがずっと鳴り続けているのと、芳子の仕種からそれ以外に考えられなかったからです。また、

「私たち読谷のお家に帰ってもいいかね……」と芳子がほとんど間を置かずにそう言うものですから、あまりにも優しくなったその態度に、

「うん、いいよ。いつでも帰りたい時に家に帰ったらいいさ……僕もその方がいいと思っている」と私は言いました。それは素直な思いでした。

「おとうさん、きょうかいにいって信じてください」

二、三日して芳子と昌子が読谷の家に帰ってきました。一年半ぶりに夫婦と娘との生活がまたはじまったのです。家に帰った昌子は嬉しそうにはしゃいでいました。三歳の幼い娘の心の内に、彼女なりの淋しさと悲しさがあっただろうと思うと、勝手な行動によって幼児を傷つけた自分の愚かさを覚えずにはいられませんでした。

朝夕、食事をする時に、芳子と昌子が、

「お祈りしよう」と言ってテーブルにおかれた食べ物を前に頭をたれて、

「イエス様、いつも私たちを守ってくださり、導いてくださってありがとうございます。今日も守ってください。おとうさんも守ってください。このお食事もくださって感謝します。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン」とやっているのを見ながら、それがどんな意味のあるものかは知らないのですが、これまでに映画やテレビ、書物などでは見たり読んだりしたことがありますので、芳子と昌子の祈る姿をただ見ているわけにもいかず、私も頭を軽く下げて、

「アーメン……」と四、五日やっていたのです。そのうち昌子が、ジュースの空き缶に漫画のキャラクターの絵を印刷した包装紙を巻いて、飾りを付けた鉛筆立てをプレゼントしてくれました。それには「神は愛なり」「おとうさんへ、きょうかいにいって信じてください。あっこ」と書いてありました。娘がそれを私に渡してくれた時は、かわいらしいなごやかな儀式のようになにげなく演出されていました。プレゼントに書かれていた言葉は、芳子が考えたものであることは一目瞭然だったのですが、それは全く気にならず、かわいい娘からのプレゼントなので心から喜んで受け取りました。（その鉛筆立ては、今も私の机の上に大切に置かれています。）

家に芳子たちが帰ってから最初の日曜日の朝でした。食事をしようとして椅子に腰を掛けると、芳子が、

「おとうさんも教会へ行かない？　一緒に行った方がいいよ」と言います。私は今まで、教会へ行くなどといったことは全く考えたこともありませんでした。結婚式の写真撮影や新聞のための撮影、放送取材のため以外に教会へ行ったことはこれまでに一度もなかったし、この私が教会

に縁があるとは全く考えてもみなかったものですから、そう言われても即座に喜んで、あるいはなにかを期待して行ってみたい、という訳にはいかなかったのです。しかし、芳子の変わりようと、優しさには逆らいようがなく、

「うん、行ってみるよ」と返事はしたものの、もう、これから日曜日のたびに教会へのお付き合いをしなければならないのかなあと、ちょっと気持ちが重くなりました。

その頃私は、本を出版する予定で三つの取材を同時に進めていました。去る太平洋戦争の時に沖縄戦で従軍看護婦として従事した沖縄女子師範学校と沖縄第一高等女学校のいわゆる「ひめゆり部隊」をはじめ、同じ看護隊として従軍し、多くの戦争犠牲者を出した七つの女学校の生存者からの聴き書きと写真撮影。また一九三六年頃炭坑夫周旋業者たちの甘言にのせられて西表島に渡り、奴隷のように地底で酷使され、悲劇の中からかろうじて生き残っている生存者と現在の西表島の住民の写真取材、それに大宜味村塩屋の「ウンガミ」（古式行事）の撮影。それらはいずれも六割方取材を終えた状態で、残りの取材と撮影に力を入れようとしていた時でした。それで私は芳子に、

「教会へなるべく行くようにするが、今、進めている三つの取材は続けるようにしたい。だから、それができないような拘束はしないでほしい」と、条件をつけたのです。芳子もそれに同意してくれました。

教会へ行って三週間してからでした。この教会では金曜日の夜に、洗礼を受けた人たちだけが集って代表牧会者の説教を聞くという集会をやっていました。教会は勤め先の県庁と自宅との中

間にあり、私はバスに乗っていて、途中までは教会に行こうなどとは思いもしなかったのですが、バスが教会の近くまで来た時、ふと今日は芳子も教会へ行く日なんだと思い出し、バスを降りてその集会へ出席してみました。

教会はセメントの床にじゅうたんが敷かれていて、その上に集ってきた信徒たちが跪いて、何かを鼓舞するように聖歌を歌います。その後、代表牧会者の説教を聞くのですが、牧会者は説教の中で、

「この中によそ者が入りこんでいる。次からは入口で入ってくる者をチェックする」と言いました。私は白い上着にジーパン風の白いズボンをはき、しかも大きなバックルをつけた派手なベルトをしめていて特に目立ったようでしたので、これはあきらかに私のことを言っているのだな、と思いました。そして、どうしようかな、出ようかな、と考えながらこの集まりには私は出るべきではなかったのだなと、一人で苦しんでいました。

信徒たちは両手を合わせて床につけ、頭を手の上にのせるようにして、牧会者が大声で言う言葉をくりかえしながら何回も何回も同じ言葉で祈っていました。その間二時間ばかりでしょうか、硬い床に跪いたことのない私は、足は痺れ、腹はベルトに挟まれて痛くなり、いつまで続くかも分からないので、何度も「もう出よう」と思いました。しかし、芳子がいることもあって、今ここを出ると余計に目立つと思い、終わりまでなんとかがまんにがまんを重ねていました。

家に帰る車の中で芳子が、

「どうだった?」と私の反応を聞きました。複雑な思いでただ黙っていた私は、

「教会というのはえらく苦労して鍛えられるものなんだな」とだけ答えました。家で両太腿を見ると、クラゲに刺されたような六本の水膨れの筋ができていました。

でも、その後も教会へは芳子、昌子と一緒に通い、聖書を読んでいるうちに、自分のこれまで歩んできた生活がまちがっていたことに気づきはじめました。特に自分の傲慢さ、ほんとの愛、ほんとの平和の意味、また自分の日頃の行動について、次第次第に本当のことに気づかされるようになってきました。自分が犯してきた罪に対しても、今まで考えてみたこともなかったのですが、聖書を通してはっきりと示されるようになったのです。

いつしか私は、夜になると屋上にあがって跪いて祈るようになっていました。祈るたびに、これまで私がいかに自分勝手で、多くの人たちを苦しませ、悩ませ、悲しませてきたかが分かるようになってきました。聖書に書いてある「私はその罪人のかしらです」というその「私」とは、自分のことなんだな、と考えるようになりました。

教会へ通いだして三カ月たった頃でした。教会の人々が「平良さん、バプテスマを受けた方がいいよ」「平良さん、今度バプテスマを受けるようだね」と言いだしました。バプテスマという意味さえ知らない私は、それはまだ自分が受けられるようなものではないという思いがあり、周りの人々の言葉を聞き流していました。ところが、教会の帰りの車の中で芳子が、

「お父さん、明後日バプテスマがあるけど受けない?」と言うのです。私はそのつもりは全くなかったし、それよりも自分の罪の深さを知るにつれ、「僕のような罪人をイエス様はまだ赦されるはずがない」と考えていましたから、

「いや、イエス様は僕のような者をまだ赦されないよ。もっと清められてからでないと……」と素直に答えたのです。そう言う私に芳子は、

「イエス様と一緒に十字架にかかった一人の犯罪人は、死ぬ五分前に救われたのよ」と言いました。聖書に書いてあるその話は聞いたことがあったので、芳子が言っている意味は分かったのですが、その教会では、バプテスマを受ける前に、これまで犯した罪を書き出して牧会者の前で告白するのだと聞いていましたから、

「とても明後日までに罪を告白する準備はできないよ」と言いますと、

「今日から準備したらいいよ」と言うのです。なんとかバプテスマを受けてほしいとの願いがこもった口調でしたので、私はそれ以上なにも言えませんでした。しかし、その日の夜中に寝床から出て屋上にあがり、イエス様に助けてもらおうとお祈りをしたのです。午前三時頃だったと思います。しばらく祈っていますと、幼い頃母が那覇に遊びに行かせてくれないので、畑仕事をしていた母の顔に怒って砂を投げつけ、目にいっぱい砂を入れて困らせたことや、女性関係で犯した罪、また、私の一方的な感情やわがままな行ないによって先妻と離婚をし苦しませたこと、人をなぐったり、言葉で傷つけたり、商品を買ってお金を払わなかったことなど、罪の数々が頭の中に次々に浮び出てきました。それらの罪を数枚の紙に箇条書きにして、バプテスマの前夜一人で教会へ行って、牧会者の前で主に告白しました。恥ずかしい思いはありませんでした。ただ主にお詫びしました。

バプテスマを受けた時は、涙があふれて止めようもないほど泣いていました。子供のようにし

ゃくりあげて泣いていました。周りの風景が一段といつもより美しく見えました。

そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ　23・34）

私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりつかまえられました。（詩篇　73・21～23）

私は、以前私が拠り頼んでいた自分の欲望や、自分は何でもできるという思いあがった思い、また自分本位の考えなどから離れることができるように祈るようになりました。それができるようになったのは、主の愛の内を歩む者とされ、主の真理を見る者とされたからです。これまでの私が何一つ知らない者であったことを心の底から知らされ、自分の弱さ愚かさを知る幸いを主から与えられたからです。

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。（箴言　14・12）

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（Ⅱコリント　5・17）

琉球放送に勤めていた時に、那覇市内のある書店から「名曲解説全集」全十八巻を後で払うからと言って品物を受け取り、そのまま二十年間も払っていませんでしたが、主に救われてから代金を払い、お詫びすることができました。また、知人から借りたカメラを売って使い込んでいた代金、ズボンの行商にきた知人に支払っていなかった代金、「払ったはずだ」と言い張って使い込んでいた石垣島行きの航空券の代金などを、それぞれ当事者をさがし出して支払いに行き、イエス・キリストに救われた証しをさせていただきました。また、私の言葉や行動によって傷つけ苦しませ、悩ませ悲しませた人たちを思い出すたびに、その人の所へ行ったり、会う機会があった時にその頃のことをお詫びし、主イエスに救われている喜び、平安を伝えさせていただいています。主イエスの救いがなかったら、私はゲヘナ（地獄）へ投げ入れられても文句の言いようのない者でしたが、主のあわれみによってあふれるばかりの恵みをいただき、天地万物の造り主である唯一の神のみ腕の内に入れていただいたことは、口では言い表わせない喜びです。

話は少し戻りますが、妻芳子と別居していた頃のこと、一人で眠っていると、夜中にとてもふしぎな経験をしたことが二、三度ありました。眠りはじめてから一時間くらい後に目が覚めてきて、なんと表現すればいいのか分かりませんが、めまいのような状態になるのです。それは体調とは全然関係ないのです。その中で、今までイエス様を信じる人を罵ったこと、また、「神などいるものか」と言ったこと、イエス様の悪口を言ったことなどが次々と思い出されてくるのです。私は何も分からないままに夢中で、「イエス様、すみません。ごめんなさい。あなたの悪口を言いました。赦してください」と心の内で言ったのです。すると、めまいはすぐ消えていきました。

彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞いた。彼が、「主よ。あなたはどなたですか。」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」（使徒　9・4、5）

信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。（ヤコブ　5・15）

## 教会生活に疑問を持って

私は、主イエス様を信じ救われてからも、これまで七年の間に紆余曲折の道を歩みました。どんな時でも主から離れるようなことはありませんでしたが、教会（教理）のことではいろいろな悩みがありました。

最初に行った教会は、「悪霊」のことをとても強調したり、「主に打たれる」ということをよく言う所でした。集会で証しをする人が自分の犯したいろいろな罪の告白をしますと、悪霊にとりつかれた人がいるというわけで、教会の男の人たちが立ってその人を取り囲み、「イエスのみ名で命じる。悪霊よ、出ていけ！」と手を振りながら叫ぶのです。私はよく分からないながらも、こんなこともあるのか、と思ってそれを見ていました。私はイエス様の十字架の贖いにどういう意味があるのか、救いとは何か、罪からの解放とはどんなものであるのかなどについては、一年余りの間に聖書を読んでおぼろげながら知るようにはなっていましたが、教会の教えには疑問が

多く、教会に行っても平安と喜びは全くありませんでした。芳子もそれを感じていたのでしょう。私には何も言わずにその教会を先に出てしまいました。二週間後には私も行かなくなりました。教会に喜びと平安はなかったのですが、急に行かなくなって人間的な義理人情を無視することはよくないと思いましたので、二週間辛抱したのです。

イエス様に愛され、あわれみを受け、救われた実感を持っていながら、教会生活というものに疑いを持った私たちは、

「今度行く教会は、よく選んで行くようにしなければならないな。一生の問題なんだから……心から喜んでイエス様を礼拝できるところをさがそう」と、二人でよくそんなことを話し、慎重になっていました。そして、そういった教会を見つけることができないまま、二人で家で礼拝したり、海岸に行って車の中で礼拝したりしていましたが、それはもとの教会で礼拝していたよりもっと満たされないものになっていくのが、時がたつにつれて感じられるようになりました。自分たちの感情、都合によって熱心に礼拝したり、またおろそかになったりし、霊的な礼拝の喜びがないことに気づかされました。

教会へ行かなくなってから三カ月ほどしてからでした。娘の昌子の通っている、ある教会に附属した幼稚園で父親参観があり、はじめてそれに出席した時に、園長先生から呼ばれて、

「平良さんたちは教会へ行っていると聞きましたが、今は行っていないんですか？　昌子さんの表情や態度が最近変わってきたものですから……」と言われました。

「はい、行っていません」と答えた私に、

「ちょっとお話したいので明日の夜、牧師とお家へ訪ねていいですか?」と言われます。翌日、二人で訪ねてこられ、他の教会のことや自分たちの教会の話をされ、

「みんな楽しくやっていますよ。今度の日曜日にでもきてみませんか」と誘われたのです。

行ってみた教会は、特に聖霊のバプテスマを強調し、「異言で祈ると力を得る」ということを奨めている教会でした。その教会では、「異言」を語らなければ信仰的に弱くて力がないような考え方がありますので、「私も異言で祈ることができるように……」と一生懸命に祈りました。

やがてそのうち、私は「意識的」に、言葉なのかなんなのか意味も分からない、いわゆる「異言」というものを祈りの中に入れるようになっていました。一時期はそれが習慣のようになり、朝の祈りや、教会での祈祷会でも大声で「異言」らしきものを口走っていました。また、教会を建てあげるのだ、主の弟子となるのだと意気込んで、伝道や奉仕、さらに借金をしてまで献金をしていました。ところが、芳子がまたこの教会を出てしまったのです。私はこの時、芳子に反感を持ち、芳子を非難しました。「信仰をなんだと思っているのだ」という思いでした。私はこのペンテコステ派の教会で、芳子が出た後も二年間「頑張って」いました。

芳子はその頃から、吉祥寺キリスト集会と同じ集会である沖縄キリスト集会に行くようになっていたのです。しかし私は意地になり、ますます「異言らしいこと」を朝の祈りの中で口走り、これまで以上に教会の催し、事業、集会に熱心になりました。芳子はやがてそのような私に口をきかなくなりました。家庭での会話は全くといっていいほどなくなりました。それでも時折、私の信仰や教会生活のことで口を出す芳子に無性に腹が立ち、時には殴りつけたり罵ったりしまし

た。しかし私は、いつの日からか、毎日何回も、次のみことばによって祈りはじめるようになりました。

夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たってはいけません。（コロサイ　3・19）

父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。（コロサイ　3・21）

やがて、私が「異言」だと思って意識的に口走っていた祈りは、いつの間にか口から出なくなっていました。それまでは朝祈っている時、仕事の帰りに教会へ寄って一人で祈っている時、どうしてなのか説明はできませんが、恐怖感に襲われることが度々ありました。ところがそれも全くなくなっていました。（注・このことは決して教会に対する誹謗ではありません。私が体験したことを率直に記しましたので誤解のないようにご了解いただきたいと思います。）これまで礼拝や祈祷会にほとんど欠席したことのない私でしたが、なぜか他へ行って礼拝したいとしきりに思うようになっていました。

## 沖縄キリスト集会に導かれる

そして六カ月たった頃には、私の内には、芳子や昌子と一緒に沖縄キリスト集会に礼拝に行きたいな、という思いがつのってきました。そんな頃のある日の朝、私はいつものようにお風呂場

で洗面をしていましたが、主のささやき声のような思いが私の心に入ってきたのです。「お前が教会でやっていることは、何も特別なことではない。他の誰にでもできることである」「あなたは夫として妻を愛していないではないか。妻につらく当っているではないか……」。私はその場でこれまで自分がやってきたことを示されたのです。教会であれをやり、これをやり、あれに参加し、これに参加して組織活動に多くの時間をさいてきたこと。妻子のことよりも、組織としての教会活動を重視してきたことなどを考えさせられました。自分では主のためだ、主に仕えるのだ、と意気込んで「頑張って」きたのですが、そのことを示されてから、私は、妻の芳子にこれまでやってきたことや、芳子を苦しめてきたことを詫びて、心から芳子と昌子を愛し、主を礼拝しようと決心しました。この決心を、芳子にすぐ言っても信用されないだろうと思いましたので、娘の昌子に先にそのことを話し、芳子に打ち明けるタイミングを二日間ほど待っていました。十二月二十五日の朝、書斎でお祈りをしている私の所へ昌子がきて、

「お父さん、今、お母さんに話したら……」と言ったのです。私はさらに静かに主に祈りました。主は「さあ行って話しなさい。わたしがともにいる。おそれることはない。さあ立ちなさい」と私を導いてくださいました。昌子の部屋にいた芳子の前に私は土下座をしました。涙がこみあげて言葉が出にくかったのですが、

「芳子、これまでのことを詫びる。ほんとうにすまなかった。自分勝手なことばかりしている僕を許してくれ……。僕はほんとに愛のない者であることが分かった……これからはあんたと昌子を心から愛して、どんなことがあっても、どこへでも一緒に行き、一緒に主に仕えるようにす

る……。礼拝も一緒に沖縄キリスト集会に行って、家族で礼拝するようにしよう。とにかく、どんなことがあっても、なんでも一緒にやるようにしよう……」と言いました。涙があふれて、あふれて流れました。芳子と私は泣きながら手を握りあって主に感謝の祈りをささげました。一九八九年十二月二十五日、主からの大きなプレゼントでした。

それまで昌子は、暗い表情で自分の部屋にいることが多かったのですが、その時から、みどり輝く草原に放された小鹿のように喜んで跳びはね、明るく話をするようになりました。それを見ていると、それまでの自分の愚かさを思い知らされました。

私たち家族三人は、年の暮れに上京しました。三十一日に吉祥寺キリスト集会に集った時に、多くの方々が私のために熱心に祈ってくださっておられたことをはじめて知りました。集会のみなさんがたがいに愛しあい、主にある兄弟姉妹として共に重荷を負いあっておられることを知った時に、ほんとの愛のあるところに、ほんとの真心からの祈りのあるところに、主のお働きがあることをまざまざと見せられる思いでした。

このようにして私は、沖縄キリスト集会に導かれましたが、集会の皆様方と共に主を見上げて賛美し、心から礼拝することができますことは、これまでになかった心からの喜びであり、平安であります。また、ベックさんをはじめ、主のみことばをたずさえてこられる方々のメッセージも、ほとんどが聖書のみことばとご自身の体験を通しての証しであり、生きてお働きになっておられる主イエス様のご愛とあわれみと恵みを実感をもって受けることができ、皆で集ってお話している内にも大きな恵みとはげましと信仰の成長が与えられますから、本当に感謝です。

自分がどんなにだめな者であるか、主にすべてを明け渡す信仰こそ主に喜ばれる信仰であり、自我を打ちくだかれて主に拠り頼む信仰こそが真理に至る道、いのちに至る道であることを、日々の祈りの中で知らされています。愚かなゆえに犯す罪もあいかわらず多いのですが、主の前に頭を下げ、主の赦しをいただき、主の語りかけられるみことばに励まされています。

「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。…わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」

（イザヤ　43・1、2、4）

夫婦の間にトラブルがあったとしても、親子の間に通じあえないことがあったとしても、いつでも主がともにいてくださり、主はすべてを良いように導かれて、すべてを益としてくださることを体験することができ、また、それを信じていますから感謝です。

「人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。」

（マルコ　10・27）

いつも芳子と神様の恵みのすばらしさを語りあう時、「主の導きは少しの無駄もなく、私たちを幸せにしてくださる真実なお方だなあ」という感謝の言葉が、お互いの口から申しあわせたよ

うに出てきます。真の平安と喜びを与えられ、ほんとにハレルヤです。沖縄の方言に、「ガージューゥ」（自我が自分の内に住んでいる）という言葉がありますが、その「ガージューゥ」の私をかえりみてくださり、あわれんでくださる主に、なん度くりかえし言っても言いつくせないこの喜びをいただいたことに、ただただ感謝するのみです。主イエス様に救われたこの喜びは、筆でも、どんな言葉をもってしても表現のできないものです。

一九九〇年六月二十三日のこと、ベックさんと大城紀美子さん、それに私は、琉球大学の病院に、大城さんの甥であり私の友人でもある宮城宏光さんの弟さんを訪ねました。脳腫瘍で入院しておられる患者です。主イエス様の救いを伝えるためでした。宮城さんの弟さんは私も以前に何度か会ったことがありましたので、私たちが病室に入ると、私の顔を見るなり、

「アイ、ウーマクーガチョーン、ウリ、デージナウーマクードーゥ」（あれ、傍若無人なふるまいをする者が来た。こいつは大変勝手なふるまいをする者だ）と言ったのです。兄の宏光さんもそれに合わせて、

「孝七は、神をも恐れない、人を人とも思わないウーマクーだったもんなあ。あんなにやりたいほうだいなことをやっていた人が、今は神様を信じてこんなに変わってしまって……」と言いました。まさしくその通りだったのです。主イエス様に救われる前の私を知っている人たちは、誰でも同じことを言います。主のみ業は、人間には測り知れない、ただふしぎなみわざなのです。

主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満た

される。

（詩篇　103・3～5）

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。

（詩篇　23・1～4）

主の導きをいただき、イエス様から信仰を与えられて、主のみ姿、あわれみのみ腕の内に入れられていますこの恵みに、心の底から感謝しております。

あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。自分を知恵のある者と思うな。主を恐れて、悪から離れよ。

（箴言　3・6、7）

今、祈りの生活をさせていただき、聖書に啓示された神様のみことばによって平安と喜びが与えられ、また、聖霊がいつどこにあっても私を守り、助けてくださっていることを心身に現実のものとして覚えることができたことは、何にも代えられない喜びです。聖歌の五二一番に、「キリストには代えられません、世の宝も、また富も。このお方が私に代わって死んだ故です。世の楽しみよ去れ、世の誉れよ行け。キリストには代えられません、世のなにものも」とありますが、

まさにその通りです。

救われた今も私はあい変わらず家庭生活の中でトラブルを起こします。職場においても、弱さのゆえに、至らなさのゆえに、愛のなさのゆえに失敗をします。しかし主イエス様は、私の失敗や苦しみや悩みを通し、試練を通し、主の平安を与えてくださり、まことの喜びを与えてくださり、幸いな道を歩む者とさせてくださいます。主イエス様のご愛に心からの感謝をささげます。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

（Ⅰペテロ　5・7）

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（Ⅱコリント　4・17、18）

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。

（イザヤ　38・17）

# あとがき

もうだいぶ以前のことですが、第二次世界大戦が終わったことを知らないで、フィリピンの山中にひそんでいた元日本軍の兵隊さんがやっと救出され、大変な話題になったのを覚えていらっしゃる方も多いと思います。また、その後、南方のルバング島からも、小野田さんという軍人が救出され、話題になりました。この方々は、日本が戦争に負けたという軍隊からの情報が届かなかったために、また後には、周りからの呼び掛けを信じなかったために、苦しい原始生活を長年にわたって強いられるという悲劇的なことになってしまったのでした。小野田さんは救出された直後、新聞記者のインタビューに、次のように答えておられます。

「嬉しかったことなど何一つありませんでした」

この悲劇は、私たちに、多くのことを示唆します。

その一つは、主イエス様のすばらしい世界、神のみ国が自分の周囲に広がっているのに、その喜ばしい報せや呼び掛けに目と耳を塞いで頑固に拒もうとする方々は、山中にあった元日本軍兵士の状態にどこか似ているということです。「嬉しかったことなど何一つありませんでした」。このような苦しい叫びを、今日、私たちはどれほど多く耳にすることでしょう。

いま一つは、イエス様を信じ受け入れ、救われたクリスチャンの方々の中においても、別の意味で、この元日本軍兵士のような好ましくない状態に自ら閉じこもっておられる方々が決して少なくないということです。主のみ国にある喜びを忘れ、「嬉しかったことは、何一つありません

でした」と言わざるをえないような、かたくなで喜びのない生活を送っている方がいらっしゃることに心を痛めざるをえません。このような方々に欠けているのは、今日現在の、神のみ国の状況の真の認識です。私たちが主の恵みによって救われたのは、主のご栄光を輝かせるためです。私たち救われた者にとって、主なる神のお役に立とうと志している者にとって、今、私たちが生きている時代はどのような時代であるかをはっきり知っておくことこそが重要です。私たちは、神のみ国の離れ小島で、時代に取り残された暗い生活を送るようであってはならないのです。

## 今の時代の特徴1　主イエス様は天のみ国におられる

理解を容易にするために、イエス様が地上に生きておられた時代と現代を、比較してみましょう。今から約二千年前、イエス様が人間の姿をとってこの地上に遣わされた時には、弟子たちもイスラエルの人々も、肉体を持ち地上を歩いておられる神の救い主イエスを目で見ることができお声を直接聞くことができました。長血を患う女はイエス様に触ることさえできたのです。人々はイエス様が行なわれた奇跡を見て信じることができました。しかし今日の私たちは、イエス様をこの目では見ることができません。ただ聖霊によってのみ、主を知り、見ることができます。

今の時代の特徴は、イエス様は天のみ国におられる、ということです。これが、当時の状況と今の状況の基本的な相違です。

イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行ない、ご自分の栄光を現わされた。それで、弟子たちはイエスを信じた。　（ヨハネ　2・11）

イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行なわれたしるしを見て、御名を信じた。
（ヨハネ　2・23）

イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」
（ヨハネ　20・29）

現代では、まだイエス様を信じていない方々は、「見えないものを信じるのはむずかしい」と言われます。しかし見えないものが信じられないのなら、電気や電波、電磁波、音波などの存在は信じられないはずです。また、「私は見たり感じたりしなければ信じられない」という態度はそれが主なる神についての不信の場合、あなたを不幸に追い込んでしまいます。たとえあなたが見ることができず、感じとることができなくても、主イエス様は、あなたを救い、尊い十字架の血潮をもってあなたを贖い出してくださるということを、無条件に信じることが大切です。

主なる神のみ前に静まり、自分の罪を認め、イエス様がその罪を引き受け、ご自分の身を投げうって贖ってくださったことを認め、主なる神のご愛に感謝するなら、その瞬間、私たちはイエス様を個人的に知ることができるようになります。イエス様が私の罪をすべて赦し、永遠のいのちを与えてくださったという確信こそ、全世界を自分のものとした時の喜び以上の喜びです。

このように、「信じる」ことはすばらしい神の栄光を体験することの初めです。私たちは今、イエス様がかかられた十字架も、そこに流された血潮も見ることはできません。しかし信じる時、

その「力」を具体的に体験することができます。

さらに二つの時代の差を、もう少し深く考えてみましょう。イエス様がこの地上におられた時、人々はイエス様を目で見、耳で聞き、奇跡をまのあたりにして信じましたが、その信仰は「瞬間的」な信仰でした。彼らが信じた時、イエス様はただちにみわざを行なわれました。

イエスは、振り向いて彼女を見て言われた。「娘よ。しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを直したのです。」すると、女はその時から全く直った。（マタイ　9・22）

イエスはかわいそうに思って、彼らの目にさわられた。すると、すぐさま彼らは見えるようになり、イエスについて行った。（マタイ　20・34）

イエスは、彼女に近寄り、その手を取って起こされた。すると熱がひき、彼女は彼らをもてなした。（マルコ　1・31）

すると彼の耳が開き、舌のもつれもすぐに解け、はっきりと話せるようになった。（マルコ　7・35）

ところが現代では、このような「瞬間的」な信仰だけでは足りません。さらに「忍耐」が必要です。今日のクリスチャンに必要なのは「忍耐」です。病がすぐにいやされ、苦しみがすぐに終

わり、気に入らない環境がすぐに改善されるといったようなことではなく、病や苦しみによって信仰が試されることこそが大切なのです。

ここで、もし今、イエス様が二千年前のようにこの地上に人の形をとって生きておられる、と仮定してみましょう。きっと二千年前と同じように、大勢の悩みを持つ人々がイエス様の所に押し寄せることでしょう。また、イエス様を指導者に仰ごうとすることでしょう。イエス様が東京におられるとすると、日本全国から新幹線や飛行機に乗って、または車を飛ばして、大勢の人々が殺到するにちがいありません。その人々は、「私の悩みを解決してください、あなたさまを信じます」とイエス様に言い、イエス様は「あなたの信仰のようになれ」と言って解決してくださることでしょう。家庭の問題、職場の問題、結婚の問題、あらゆる問題が打ち明けられ、イエス様は昔なさったように即座に解決してくださることでしょう。

しかし今の時代は、イエス様が天のみ国におられ、当時とは時代の様子が全く変わっているのです。ですから私たちは、二つの時代の根本的な相違をはっきりと認識しておかなければなりません。さもないと、いつも、なぜだろう、なぜだろうという心の戦いが絶えなくなります。なぜ主は、このことを、あのことをおゆるしになるのでしょうか。そのわけは、今の時代は、イエス様は天のみ国におられ、聖霊の世界におられるからです。イエス様は私たちがすぐに消えてしまうような一時的なこの世のものに目を留めないで、永遠に続く目に見えないものにこそ目を留めるように、いろいろなことを通して私たちを教え導いてくださっているのです。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたら

すからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（Ⅱコリント　4・17、18）

イエス様が二千年前この地上におられた時、人々はイエス様が肉体を持っておられるがゆえに、奇跡とみ業を行なわれるゆえに、また一時的な悩みや苦しみを解決してくださるがゆえに、イエス様を知ることができました。しかし今は当時と同じやり方でイエス様を知ることはできません。

私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。

（Ⅱコリント　5・16）

今、イエス様を知るには、「聖霊（御霊）」による以外に方法はありません。聖霊は私たちが、生きておられる神の子どもであることを証しし、イエス様の栄光を現わし、私たちを真理に導いてくださいます。

私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。

（ローマ　8・16）

「御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるか

らです。」

「その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」（ヨハネ　16・13）

（ヨハネ　16・14）

イエス様がこの地上におられた時のご目的は、この地上に神のご栄光を現わされることでした。そして神のご栄光が現わされるために、多くの人々の悩みや苦しみがイエス様のみ手で解決されていったのです。しかし、今の時代はこれとは状況が違います。イエス様は今、完全なみ姿を持っておられ、あらゆる聖霊の恵みに満たされて天のみ座におられるのです。このイエス様こそ、私たちの模範であり、私たちはこの完全なイエス様のみ姿に似たものに変えられていかなければなりません。そしてイエス様がそうであられるように、もっともっと聖霊の満たしのうちに入っていかなければなりません。イエス様は、二千年前この世におられた時、多くの人々の一時的な問題を解決してくださいましたが、今はそれだけでなく、さらにもっともっとすばらしい、あふれるばかりの永遠の栄光を私たちに満たしてくださろうとしておられます。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。（Ⅱコリント　4・17）

だからイエス様は「あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい（マタイ5・48）」と言っておられるのです。パウロも、このイエス様のみ心を、よく知っていました。

喜びなさい。完全な者になりなさい。慰めを受けなさい。一つ心になりなさい。平和を保ちなさい。そうすれば、愛と平和の神はあなたがたとともにいてくださいます。

（Ⅱコリント　13・11）

私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

（エペソ　4・13）

さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。

（ヤコブ　1・2～4）

## 今の時代の特徴2　聖霊が働かれる時代である

イエス様が現代に生きる私たちに望んでおられることは、私たちが「聖霊のいのちにあずかって日々少しずつイエス様のみ姿に似た完全なものに造り変えられていく」ことです。このことは「聖霊の働き」によってのみ可能です。しかしこのような霊的ないのちにあずかっていくという

ことを自分の力でできる人は一人もありません。どのような方法を以てしても、人間の力では不可能なのです。たとえどんなに熱心に集会に出席しても、どのようなメッセージを耳にしたとしても、聖霊の働きがなければ、何の役にもたちません。聖霊の働きがなければ、聖霊の高みに引き上げられることも、イエス様のみ姿に似たものに変えられていくことも不可能なのです。

私たちの集会ではメッセージといって、多くの男性の方々が交代で主のみことばを取り次ぐ役割を担っていますが、たとえばある方が、何カ月もかけて完璧だと思われる準備をしたメッセージでも、それを聞く方々の霊的な前進の助けに全くならない、といった場合があります。パウロもこのことを苦しみながら学んでいきました。

私はあなたがたを……キリストにささげることにしたからです。しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています。（Ⅱコリント　11・2、3）

あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。……そしてこんな語調でなく話せたらと思います。

（ガラテヤ　4・19、20）

どんなにすばらしい主のみことばでも、もしそれを聞く人々が心の用意を整え、聖霊に従順に従っているのでなければ、決して聖霊の満たし、聖霊の高みに到達することはできません。です

からパウロは、次のように人々に忠告し、絶えず聖霊のみ声に聞き従うことのできる心の状態でいなさい、と勧めているのです。

御霊を消してはなりません。

（Ⅰテサロニケ　5・19）

神の聖霊を悲しませてはいけません。

（エペソ　4・30）

人々は、ずっと前に救われた昔からのクリスチャンたちはみな霊的に高い人々である、と考えがちですが、これは誤りです。たとえ何十年前に救われたとしても、その人が聖霊によって造り変えられていなければ、決して霊的に進歩することができないものなのです。

また私たちは、自分自身を霊的にすることはできません。あなたも、自分を自分の力で霊的にすることはできません。沢山の聖書の知識を蓄え、伝道の方法を学んだ人々は主に奉仕するに十分な人だと見られますが、そうとは限りません。

一体、主に対する奉仕とは何でしょうか？　私たちはこのことを、あのことをするのが主に対する奉仕であると考えています。しかしイエス様は、真の奉仕を次のように言っておられます。

イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」

（ヨハネ　6・29）

信じることこそが真の奉仕なのです。しかも信仰とは、見えないものに目を留めることです。

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（Ⅱコリント　4・18）

私たちも目に見えないものを信じているでしょうか？　意識して「見えないものにこそ目を留めて」いるでしょうか？　このみことばのように心から言えるなら、あなたは主に仕える者です。もし言えないなら、あなたは真の奉仕者ではなく、パウロの言う、見栄のため、党派心によって働き、自分のことだけを求める者と言わざるをえません。

また多くのクリスチャンは、残念ながら「見えないものに目を留める」だけではなく、「見えるものにも目を留める」といった状態にあるようです。あらゆる虚栄は、見えるものを得ようとする努力の現われにほかなりません。私たちのあらゆる種類の思い煩いは、「見えるものに目を留めて」歩む結果にほかなりません。パウロは「主は近い。何事も思い煩ってはならない」と言っています。イエス様に奉仕する人の特徴は、ただ「イエス様に喜ばれたい」と願うところにあります。聖霊の働きにより、私たちが目に見えるものによらないで、目に見えないものによりすがって歩むことができるように、全く造り変えていただきたいものです。

## 今の時代の特徴3　患難の時代である

イエス様が地上におられた時代は、「盲人が見、足なえが歩き、らい病人がきよめられ、つんぼの人が聞こえ、死人が生き返り……（マタイ11・5）」というような時代でした。今の時代は

当時とは違います。忠実な主のしもべたちは、苦しんでいます。病に倒れ、休んでいる人々が沢山います。なぜ、そうなのでしょうか。なぜ、主に奉仕していく時、悩みや誤解、病や試みが数多く起こってくるのでしょうか？

霊的な進歩と成長は、悩みと試みの炉を通ることによって初めて達成されます。霊的な進歩を遂げるためには、悩みと苦しみに会う必要があります。ただ、悩みや病、苦しみによってのみ霊的に高められる、ということを私たちはどうしても知っておく必要があります。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（Ⅱコリント　4・17、18）

サタンはクリスチャンを試みようとして次のようにささやきかけます。「なぜ、優れたクリスチャンに悩みがあるのか？　なぜ、有能な働き人が病の床に伏せっているのか？　なぜ、神は全能のはずなのにサタンに活動の余地を与えるのか？……」。しかし主にある人々は、このようなさまざまな試みを通してさらに霊的に進歩させられるのです。ただ悩みと苦しみによってのみ栄光ある主のみ姿に似たものに造り変えられていくのです。そしてこれこそ、イエス様が願っておられることなのです。永遠の世界に入る時、それまでに自分の身に起こったいろいろな試みは、自分を霊の人にし、イエス様に似たものに造り変えられるために主が備えてくださったものであ

ることがよく分かるはずです。パウロのように、もっとも高い霊の水準に引き上げられた人はまた、もっとも苦しんだ人でもあったのです。

私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。……幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渇き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。（Ⅱコリント　11・23～28）

これはまた、何というひどい記録でしょう。なぜ主は、パウロともあろう者にこれだけ多くの災難がふりかかることをゆるされたのでしょうか？　もっとも忠実な神のしもべであるパウロは、なぜ、投獄され、難破し、鞭打たれ、石打たれ、飢え渇き、着るものがないという哀れな状態に陥ったのでしょうか？　別の所にはまた、次のように記されています。

私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度ならず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちを妨げました。（Ⅰテサロニケ　2・18）

なぜ主は、パウロが行こうとしたのに、サタンの妨害をおゆるしになったのでしょうか？　これらの疑問に対する答えは、これらの患難によってパウロが霊的に成熟し、天におられる主のみ

姿に似たものに変えられるためだったのです。

私たちはつい、いろいろな病気やさまざまな悩みを解決していただくために、天のみ国においでのイエス様をこの地上に呼び降ろす、というような間違いをしがちではないでしょうか。すべて順調にいっている時は、イエス様が側にいてくださると喜びはするものの、ひとたび試みの時がくると信仰の目は見えなくなり、真っ暗な気持ちになってしまいがちではないでしょうか？

現代にも、聖書に出てくるヨブの友人のように、因果応報という観点からしかものごとを見られない方々がいます。よく「この人は罪を犯したために病気になった」とか、「この人は神に対して不従順だったためにこのような目にあっている」という方々がいます。しかしもし、今私たちが生きている「時代の特徴」をはっきりとわきまえてさえいるなら、私たちはもはや不必要に苦しんだり悩んだりすることはなくなるでしょう。私たちは、イエス様がこの地上におられた時よりさらに楽な生活を願ってでもいるというのでしょうか？　イエス様の地上における大きな苦しみのありさまを、イザヤ書は優れた筆致で次のように預言しています。

多くの者があなたを見て驚いたように、――その（イエス様の）顔だちは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。――　（イザヤ　52・14）

彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられ

たのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。……しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。

（イザヤ　53・3～5、10）

また私たちは、あのパウロより、さらに楽な生活をしようとでも思っているのでしょうか？

私たちは飢え、渇き、着る物もなく、虐待され、落ち着く先もありません。また、私たちは苦労して自分の手で働いています。はずかしめられるときにも祝福し、迫害されるときにも耐え忍び、ののしられるときには、慰めのことばをかけます。今でも、私たちはこの世のちり、あらゆるもののかすです。

（Ⅰコリント　4・11～13）

ドイツの讃美歌に、「主は苦しみによって、信じる者の心の内にご自分のみ姿を彫り刻んでいかれる」という言葉があります。目に見えるものを見て歩むクリスチャンは、今日恵まれたと喜んでいるかと思うと、明日にはもう試練に会って沈みこんでしまいます。このような人々は、幼児みたいな人々だとパウロは言っています。このような人々は、周囲の誰かが人生の暗い時期にはまりこんでいるような時、その人を助けることができません。色々な苦しみを通り、主のみ恵みをいただくことができないように思われる時もなお、見えないものに拠りすがって信仰生活を生き抜いてきた人々だけが、他の人々の悩みを助けることができるのです。

「苦しみによってのみ、主のみ姿に似たものに造り変えられていく」のですから、主は私たちから苦しみを取り除くどころか、むしろ「苦しみを与えて」くださいます。

今の時の軽い患難に比べ、未来にそなえられているのは、驚くべき重い永遠の栄光です。私たちはこの栄光をのぞみ見て、喜びに満ちあふれているでしょうか。その喜びを持っているなら、あなたはパウロのように「患難をも喜んでいます」と言うことができるはずです。

そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。（使徒　5・41）

何度もむちで打たせてから、ふたりを牢に入れて、看守には厳重に番をするように命じた。……真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。（使徒　16・23、25）

悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。（Ⅱコリント　6・10）

あなたがたは、捕えられている人々を思いやり、また、もっとすぐれた、いつまでも残る財産を持っていることを知っていたので、自分の財産が奪われても、喜んで忍びました。（ヘブル　10・34）

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。

（Ⅰペテロ　4・12、13）

## 今の時代の特徴4　真似ることでなく、神の啓示によって

パウロは、どのようにしてイエス様をよく知るようになっていったのでしょうか。私たちはパウロが書いた書簡集を読んでいくとき、パウロの主を知る知識の実の豊富なのに驚かされます。パウロはこの書簡集を、一室に閉じこもり、キリスト教の教えをよく考えつくして書いていったわけではありません。パウロの書簡集は、研究の成果などではなく、悩みや苦しみを通して身をもって体験したその果実であり、あらゆる戦いから生まれ出た結果なのです。パウロ本人はまさか自分の手紙が新約聖書に加えられるとは夢にも思わなかったのではないでしょうか。

悩みや苦しみの中で、イエス様はご自身を現わされます。その苦しみの中でパウロの書簡集は書きあげられたのであり、パウロはその同じ苦しみによってイエス様のみ姿に似たものに変えられていったのです。すべての霊的な力、イエス様に関する真の知識は、大きな苦しみを経て初めて与えられるものなのです。

では私たちは、一体どのようにして、主をよりよく知ることができるのでしょうか？　どのようにして聖霊に満たされた人になることができるのでしょうか？

聖霊に満たされた人になるには、この世の問題について祈り、それに答えをいただくことによってではなく、行きづまってどうしても逃げ場がないというせっぱつまった苦しみの谷を通ることが必要です。もしイエス様が私たちの幼稚なつまらない祈りにいつもお答えになっていたら、私たちはいつまでたっても霊の大人にはなれないことでしょう。

また、私たちはいくらあれこれと人の真似をやってみたところで、霊的なクリスチャンとは言えません。神からの啓示を受ける者こそ、霊的なクリスチャンです。

私たちの集会が、たとえ初代教会がすばらしかったからといって、それをそのまま真似ても霊的には前進しません。また方々を歩きまわって初代教会のようにすばらしい教会を作ろうと骨を折ってもそれは不可能です。「霊的」なことは、決して真似ることはできないのです。たとえ初代教会の規則をいくら真似して守ってみても、それらが神による啓示でなければ、いつかそれらのものは消え去ってしまいます。

パウロが各地に教会を打ち立てていった様子を見ると、それがよく分かります。パウロは回心してからその働き場所をいままでと違った所には求めず、以前のようにユダヤ教の宮で礼拝し、そこでみことばを宣べ伝えていました。パウロも、また他の使徒たちも、ユダヤ教からまったく離れた所に別のキリスト教を打ち立てようとは考えてはいませんでした。当時、ユダヤ教とイエス様を信じることとのはっきりした区別を、誰一人として理解していなかったのです。しかしあるとき、パウロは神からの啓示により、それまでと同じような方法では続けていくことができなくなったのです。パウロは神からの啓示によって真の教会とは地上的なものではなく、またエル

サレムの宮のように目に見える一時的なものではなく、天のみ国に属する「霊的」なものであることを教えられた時、パウロははっきりとした線を「イエスを信仰すること」と「ユダヤ教」との間に引いたのです。これはパウロが、霊的に一歩前進したことのしるしです。

パウロは人がそう言ったからではなく「神の啓示によって」それを知りました。上から、つまり主から教えられ啓示を受けるということは、今の時代の特徴です。すべてのことは主によって個人的に教えられなければなりません。「これが主のみ心だ」と主に教えられて立たなければなりません。「これが主のみ心だ」という導きを、はっきりと知るようにならなければなりません。

いろいろな問題は、主と私たちの間の霊的な問題として扱われなければなりません。病気も、仕事も、どう証しするかも、何を着るかも、たとえそれが日常の些細なことであっても、すべては「規則」で判断しないで、あくまで「聖霊」の問題として処理されなければなりません。「これが主のお導きだ」と上から啓示され、確信できるところに立たなければなりません。

最後に、一つの問題をみなさまとご一緒に考えてみたいと思います。それは、「なぜ私たちは今、このような場所におかれているか?」という問題です。その解答は、「主なる神のみ心は、私たちが霊的に高められることを望んでおられるから」です。多くの人々は、「もし今いる場所と違う所へ行ったら、霊的に進歩するのだが」とか、「この仕事を辞めて別の仕事につけば、霊的に高められるのだが」とか、「このままの状態では主に対するご奉仕の機会が少なく、思うように力がだせない」などと言います。こういう人々は、目に見えるものに拠り頼んでいる人々で

す。何度も繰り返しますが、パウロは、「私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです」と言っています。

もし私たちが、主なる神の導きに逆らい自分の道を行ったために困難に遭遇すれば、それは自分の罪のせいであった、神に対する不従順のためであったということに気がつきます。しかし、私たちが主を愛し、主の導きを第一のものとして歩んでいったにもかかわらず困難が起きた、というような場合、私たちは理解に苦しみ、わけが分からなくなってしまいます。

パウロは、持っているすべてのすべてを主に捧げた人です。しかしこのパウロになぜ、牢に入れられ、死に直面し、鞭で打たれ、飢え渇き、難破し……といったⅡコリント11章にあるような災難がふりかかってきたのでしょうか。

主にとっては、私たちが何かをすることよりも「霊的に成長すること」の方が大切なのです。私たちクリスチャンにとっては、回心した人の数、忠実に主に従う人の数、作り上げた教会の数などが問題であるかもしれませんが、主のみ心はそうではありません。主のご関心は、「主に属する者が、どれだけ霊の満たしにあずかっているか」にあります。

「誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。……わたしがこれらのことを喜ぶからだ。」（エレミヤ　9・24）

ここでいう主が喜ばれる「わたし（主）を知っていること」は、激しい苦しみの中の学びを通

さなければできないことなのです。主のみ心は私たちの病や問題を解決することではありません。私たちが驚くべき主の栄光に引き入れられるに値する者となることです。このことをよく心得ておくことが大切です。そして主が私たちを、いつも聖霊を悲しませるような状態から、聖霊に満たされた高い所へと引き上げてくだされば幸いです。

主は、私たちが霊的に前進できるような場所に、私たちを置いてくださいます。私たちが主のみ姿に似たものに変えられていくということは、私たちが持っている生まれながらの性質に逆らってなされていきます。もし、生まれつき引っ込み思案の方がおられるなら、聖霊はそれとまったく反対の性格に変えてくださいます。また主は、なんにでもでしゃばる性格の人を、謙虚でほどよい性質に造り変えてくださいます。これらはある場合、苦しみの多い、激しい試練を伴うかもしれません。しかし、上からの聖霊の満たしによってイエス様に似た姿に造り変えられるために、どうしても通らなければならない道なのです。

イエス様を見上げましょう。イエス様はこの地上に人間の形をとってお生まれになった時、ご自身が全宇宙の主だったにもかかわらず、己をむなしくし、従順に父なる神に従い、実に十字架の死にいたるまで己を低くされました。またその反面、イエス様は大変忍耐強く柔和であられたにもかかわらず、宮で鞭をふるわれることもあったのです。このことは、イエス様にとっても大きな苦しみでした。打ち据えられた人の苦しみより、むしろ鞭をふるわれたイエス様の苦しみの方がよほど大きかったと思います。なぜなら、このようなことは、柔和にして心低いイエス様の本来のご性質ではなかったからです。

もし私たちが、イエス様を模範として苦しみの中を耐え抜いていくならば、私たちの行く手には、想像を絶した驚くべき神の栄光が備えられているのです。

今の時代は、キリスト者がイエス様のみ姿に似たものに変えられなければならない時代です。今の時代は、まだ救われていない方々が一秒も早く、主の救いを自分のものにしなければならない時代です。今は恵みの時、今は救いの日です。イエス様は今も次のように呼び掛けておられます。「誰でも渇く者はわたしのところに来て飲みなさい」「わたしのところにきなさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」「わたしのところにすぐきなさい。たとえあなたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる」……。

どうか、イエス様の恵みの誘いに耳を傾けてください。どうか、主なる神の恵みの招待を受け入れてください。イエス・キリストはあなたを罪から完全に救い出し、あなたの望みを完全に満たす力を持っておいでです。

「もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。――主の御告げ。――わたしは、あなたがたの捕われ人を帰らせ、わたしがあなたがたを追い散らした先のすべての国々と、すべての場所から、あなたがたを集める。……」

（エレミヤ　29・13、14）

一九九〇年　クリスマスの日に

ゴットホルド・ベック

# 基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

一　みことばの大切さ
　ヨハネ17・17　エレミヤ15・16　Ⅰヨハネ5・13　Ⅰペテロ1・23　詩篇119・105、160、162

二　悔い改めと信仰
　Ⅰヨハネ1・9　箴言28・13　詩篇32・1～5　イザヤ55・6、7　ヨハネ6・37

三　私たちの身代わりとなられたイエス
　イザヤ53・4～6　Ⅰペテロ2・24　Ⅱコリント5・21

四　血潮の価値

イザヤ1・18　ローマ3・24、25　Ⅰヨハネ1・7　エペソ1・7　Ⅰペテロ1・18、19

黙示12・11

五　確信の根拠

イザヤ43・1、25　イザヤ44・22　ルカ7・48　ヘブル8・12　ヘブル10・17

詩篇103・12　ヘブル13・5、6

六　思いわずらうな

マタイ13・22　マタイ6・25～32　ピリピ4・6、7　Ⅰペテロ5・7～9　詩篇55・22

七　試練の時

ヤコブ1・12　ヤコブ4・7、8　Ⅰコリント10・13　Ⅰペテロ5・8～10

Ⅰペテロ1・5～7　Ⅱコリント12・9、10　ローマ5・3～5　ローマ8・28

イザヤ40・29～31

## 実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇跡であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ　31・3）

リンデの、主に従い通す態度は、吉祥寺キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエスさまに明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。

なおこの本は韓国語版、ドイツ語版が出版されました。さらに病床にあって本の読めない方々のために、ＰＢＡのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ（８本１組）があります。




ゴットホルド・ベック編著

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒１８０武蔵野市吉祥寺本町４―９―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

## 光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズのおすすめ

「光よあれ」を読んだのがきっかけで、新しいクリスチャンがたくさん誕生しました。「私もその中の一人ですが、まるで吸いこまれるように一気に読んだあの時の感激を忘れることはできません。多くの方々の証しに感動し、あとがきのベックさんの言葉に衝撃を受け、気がついてみたらクリスチャンになっていました。まさに『光よあれ』です。それは、あっという間のことでした」と、ある方は証しされています。第1集には、山本孝子さんの「み翼のかげで」、野口広教授の「klein aber mein から klein aber Dein へ」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、また巻末にはベックさんの「神は愛です」というメッセージが収録されています。




光よあれ第1集　吉祥寺キリスト集会編
私たちは主のもの　25人の証し　シリーズ
価三三〇円

第2集には、アルコール依存症との凄惨な闘いの中から主の恵みによって新生を体験した染野茂夫さんの「駆けのぼりし、主の道」。真の神に出逢った感激を語る宮田清枝さんの「偶像から解放されて」。安宅産業崩壊の過中で主を見出した松見敬三さんの「曙からお昼過ぎまで」。愛する一人娘を失い、主にある恵みを証しされる重田定義教授の「主の御名はほむべきかな」など、また巻末にはベックさんの「無限の宇宙にある神」のメッセージが収められています。




## 光よあれ第2集　吉祥寺キリスト集会編

私たちは主のもの　25人の証し　シリーズ

価三五〇円

第3集には、激動する時代の流れの中で少しずつ聖書の福音に目覚めてゆく過程を描いた納富信子さんの「主のご真実に支えられて」、大学紛争のさ中、聖書と出会い、救いを受け入れた蘇畑卓郎さんの「とこしえの磐」、またご夫婦それぞれの立場から信仰に至る道と深い体験を述べられた3組の夫婦による証しなど、また巻末には、ベックさんのメッセージ、「みこころが地でも行なわれますように」が収められています。




## 光よあれ第3集　吉祥寺キリスト集会編

私たちは主のもの　42人の証し　シリーズ

価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

## 光よあれ第4集私たちは主のもの　66人の証しシリーズのおすすめ

フジテレビの有名なニュースキャスターだった故山川千秋さんの奥様の証し「ここに主がおられる」、重症のがんでありながら、軽井沢のキャンプで証しをされた笹川郁夫さんの「もはや私ではなく、キリストが私の中で」、天に召された長女の文枝さんのことを切々と綴った唐沢梅子さんの「天国で楽しい再会を」、薬物中毒の中で主に出会い、救われた体験を率直に語られる大塚二郎助教授の「高慢を砕かれて」など、すばらしい六十六人の方々の証しが満載されています。




**光よあれ**第４集
私たちは主のもの
66人の証しシリーズ
吉祥寺キリスト集会編　価三五〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

## 光よあれ第6集　近刊のおしらせ

光よあれ第5集に続いて、近く光よあれ第6集が刊行されます。日本全国に広がる福音によって救われた多くの方々の感動的な証しが満載されています。1～5集とあわせてお読みください！

## なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）　ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。




なにものも私たちを
**神の愛**から引き離すことはできない（上・下巻）
ゴットホルド・ベック著
各巻とも価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

**主イエスは言われた。**

**見よ。わたしは、世の終わりまで、**
**いつも、あなたがたとともにいます。** マタイ28:20

### 牧師制度がありません

私たちの吉祥寺キリスト集会には、牧師制度がありません。会社員、公務員、教師、医者、経営者、芸術家、弁護士、技術者などさまざまな職業を持つ人々が集まって、自発的に責任を分かちあい、一切強制されることなく、純粋に聖書のみことばによりたのみ、主にある交わりを保つものの集いです。

### 会員制度がありません

もちろん名簿もありません。ですから「会員」になりたくてもなれないのです。いわゆる宗教団体的な制度は一切排除して、主ご自身のみが頭となって働かれ、導かれ、主ご自身が満ち満ちておられることのみを祈り求めている集会です。

### 組織・会則がありません

私たちの集会には、役員会も、総会も、定例会議も、会則も存在しません。みんなが助けあって重荷を分かちあい、全てが自発的に、喜びをもってなされています。

### 献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度がなく、献金は自発的に行なわれ、無記名ですから主のみがご存じです。

### 日曜礼拝と家庭集会

毎日曜日10時半と2時に、主の十字架の血潮をしのんでの礼拝があり、その後の福音集会では兄弟たちが交代でメッセージを伝えます。また、全国には70箇所以上に家庭集会があり、中には礼拝を行なっている所も増えています。

180東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11
TEL0422－22－2016
郵便振替口座番号　東京0-56116

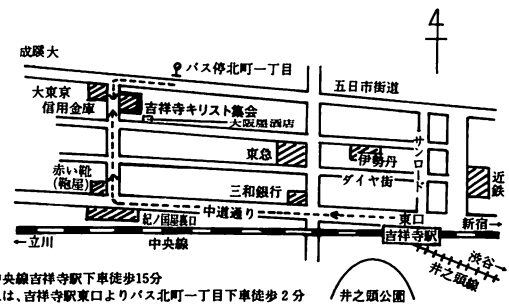
**吉祥寺キリスト集会**

私たちは、純粋に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派、組織にも属していません。この本をお読みになって聖書と福音に関心のある方は、ぜひお気軽においでください。お電話をお待ちします。(住所・電話は1991年3月1日現在のものです)

## 吉祥寺キリスト集会

G.ベック　〒180　東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11……0422−22−2016

| | |
|---|---|
| 日曜礼拝 | 10：30　および14：00 |
| 日曜メッセージ | 12：00　および15：00 |
| 子供日曜学校 | 9：00 |
| 中高生日曜クラス | 9：00 |
| 青年日曜クラス | 14：30 |
| 火曜学び会 | 11：00 |
| 水曜学び会 | 19：30 |
| 木曜祈り会 | 19：30 |
| 春・夏・秋　軽井沢バイブルキャンプ | |




中央線吉祥寺駅下車徒歩15分
又は、吉祥寺駅東口よりバス北町一丁目下車徒歩2分

吉祥寺キリスト集会のご案内

光よあれ
私たちは主のもの
67人の証し
シリーズ第５集

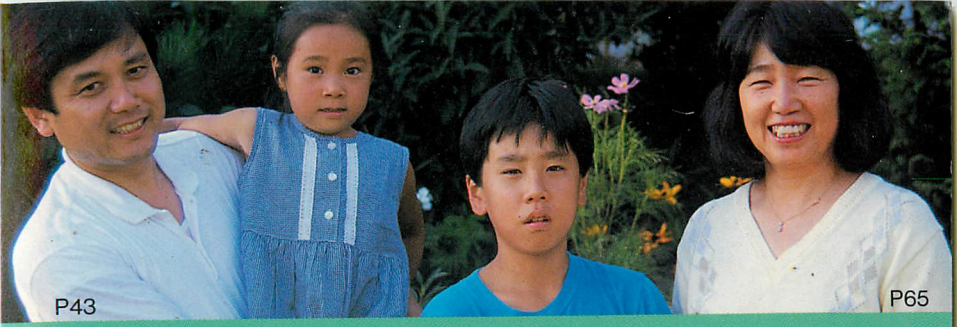
1991年６月20日初版

編　者　ゴットホルド・ベック

装　　幀　飯守恪太郎・上野文子
編　　集　酒井千尋・上野鮎子
編集連絡　飯守節子
印　　刷　新生運動

発行所　吉祥寺キリスト集会
〒180 東京都武蔵野市吉祥寺本町４－９－11
電話　0422-22-2016(ベック宅)
振替 東京０－５６１１６

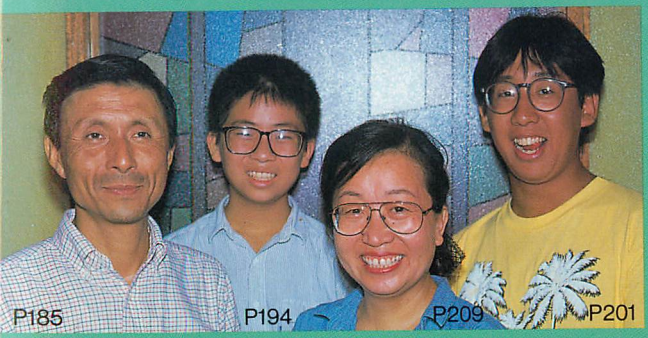
定価380円
（本体369円）
















「光が、やみの中から輝き出よ。」
と言われた神は、私たちの
心を照らし、キリストの御顔にある
神の栄光を知る知識を
輝かせてくださったのです。
(IIコリント 4・6)

定価380円(本体369円)